岩波講座

日本語 4

敬　　語

岩波書店

岩波講座
日本語
月報
6
1977年5月
第4巻付録

目次

岩波書店
東京都千代田区
一ツ橋 2-5-5

単音綴語のアクセント

寺田透

胃と腸。気と木。詩と死。日(陽)と火。身(実)と箕。

僕はギリシャ語をはじめたとき、それまで習って来た現代ヨーロッパ語にはない、単音綴語にアクセントがあるということを知り、何だか奇妙な感じがした。

しかし考えてみると、冒頭書き出した日本語の単音綴語二語ずつのあいだには、少くもわれわれの発音では、アクセントの差異がある。いずれも軽いピッチアクセントで、同じように単音綴の言葉に旋律的なピッチアクセントのある中国語に似たことが認められる。

今挙げたのはイ段の単語だけだが、餌と江。緒と尾。毛と褻。子と弧(乃至個)。瀬と背。語源的には同じなのかも知れないが、種類とか労働力とかいう意味のテと、五体の一つの手。音と根。こういう風に挙げてみると、エ段オ段にもその種のことはあるのが見つかる。

アの段ウの段からは今のところあまり見つからず、田と他、魔と間のあいだには相違はないだろうし、句と苦も同様だろう。ただサ行の鬆と洲、ナ行の名と菜のあいだには顕著な相違があるのが思い出される。

漢字同士の詩と死の場合は、前者の上平声、後者の上声という相違が、鈍いながらに日本語としての二語の発音に影響しているのかも知れないが、こういうことはすべて、日本語が相当古く、かつ身内同士でだけ言われ聞かれ諒解されて来たことばだということを語るものだろう。

言葉を声に出すときの音の高さの一定の水準が、話者同士のあいだで、一方のひとは高く他のひとは低いというような差異はあっても、あらかじめひとりでに諒解されていて、それを上に越えるか下に沈むかで別の単語を言ったし、また言われたと諒解し、まちがいなく言葉の意味がつかめるような言語生活をわれわれは送って来たのだ。

餌は柄、枝と同じ音に発音されるが、こういう単語はエサ、柄、エダという風に別の音が添って区別がつくようになる。区別のつかない藻と喪の場合は、あとの方は文語的な言い方でしか独立した語としては用いられなくなっている。

目と芽と妻と、わかめやあらめのメの音価も同じだろうが、

今時つまをメというひとはないだろうし、食べられる海草をメというのは、御前崎あたりでしか僕は聞いたことがない。

そこで目と芽だが、この発音上まったく差異のない二語が実際使用された場合、意味の点でとりちがえられる危険はまずなく、そんなに寝てばかりいてはメが出ちゃうよという、よく春の季節にきく語呂合せの小言もだからこそ可能だし、意味がある。

同じだということは違うということだ。相違を前提としてはじめて同一ということも言えるというソフィスト的思考原理を『正法眼蔵』の中にはじめて見出したとき、僕は少からず驚いたが、今手近から一例を挙げると次のようなのがある。

道元は伽耶舎多尊者の偈、「諸仏大円鑑。内外無瑕翳。両人同得見。心眼皆相似。」を解いて言う。

心と眼と皆相似といふは、心は心に相似なり、眼は眼に相似なり、相似は心眼〔の相似〕なり。たとへば心眼各相似といはんがごとし。いかならんかこれ心の心に相似せる。いはゆる三祖六祖〔の存在のように各々別個の存在〕なり。いかならんかこれに眼の眼に相似なる、いはゆる道眼被眼礙〔道眼眼に礙えらる、ということのあるように眼々別個〕なり。（古鏡）

禅の語録というのはとかくこの種の語呂合せに富んだものだが、元来同一のものならそれを同じだという必要はなく、違っているからこそ近づけて同じだと言えるというこの考えは、時間的一致についての考えにも、釈迦牟尼仏になるというときのその現成についての考えにも連り、道元論としては非常に重要なことなのだが、今は端折る。

そして元にかえれば、目と芽というこの二つの同音異義語の存在は、生物の生気をはらむ、生きておればこそはたらくその最尖端としての目と芽、という認識を反映しており、かつ眼は、運動する単細胞動物の最尖端が進化してそれになったものという、発生論的生物学の新しい説までを暗黙のうちに提示していて、これにえだのダやえさのサのような分別のための接尾音がつかなかったことを、祝福したく思う。

ではさきの弧と個、別の炉と櫓のような、漢音でしか言わない語にせよともかく同音異義の語の幾組かがあるのは、どういうことか。前の一組は上平声対去声、あとの一組は上平声（辞書によっては下平声という）対上声の組合せなのに、区別がうまくついていない。

これは、一体どうして特にイ段、ついでエ段の単音綴語にアクセントが顕著にみとめられ、ア、ウ、オの段ではそうでないのかという形に置き換えて考えることの出来る問題である。

それに対する答えの一つは、ア、ウ、オという母音は、それを発音するために必要な咽喉や口腔内諸部分の恰好が簡単なのに、イ、エの場合はそれが違うということにあろう。複合母音があったり、単母音文字であっても、その発音のしかたが数多くある、要するに母音の種類の多い諸国語に比べて、数の少い日本語の母音はどれも単純で、発音がやさしい。

しかしそれでもそのうちのイ、エの発音は、それに必要な姿勢を発音器官にとらせる上で少し余計に努力がいる。つまりそれらの母音は不安定の度が大きいということだが、地方的な訛りの問題がここに集約的に現れているのは、それと無関係では

あるまい。
その過程がまた同時に母音のアクセントを生むのに有効に作用、むしろ流用されるのではなかろうか。
日本語の母音の発音をやさしいと言ったが、複雑な母音を母国語の中で操っているひとたちの日本語がおかしく聞える原因のうちの有力な一つは、かれらが簡単な筈の日本語の母音を、アクセントのつけ方まで範めて、日本人流に発音できないということにある。
そうしてみると、結局どこの国のことばの発音も本来的には特別の難易はなく、習熟しているか否かだけの問題だということになるかも知れない。
しかし同一民族に属する人間でも、同じ言葉を誰もが同じに発音するものではなく、外国人数人の同一母国語によるスピーチを次々に聞かされる場合などそれが実によく分り、その音響学的相違に驚くと同時に、あんなもんなんだ、あれでいいんだと安心するが、そういうことのあるのも、こまかく見れば誰も比較的同様に発音できる音とそうでない音が自国語の中にもあるということの証拠とされよう。
ア、ウ、オに対するイ、エは、この観察の中では厄介な発音の部類に入り、前者より幾分長めになると考えられる。ア、ウ、オはいくらでも長く延ばせるが、容易に短くとめることも出来るので、特別の場合でないかぎり手短かに話すように力める人間は、この三音は早く切上げてしまう。それでそこにアクセント乃至アクセント的なものが現れる可能性は乏しくなる。
もっともアクセントと言ってはみても、複合語になると要素語のアクセントが失われたり移動するのが常の日本語では、それはきわめて扱いにくく、現に冒頭書き出したイ段の例でも、真木というときの木や火消しの火は、それぞれ、気、日(陽)の持つアクセントを帯びるようになっている。それをもとのアクセントを守って発音したら、きっとそれを含む句なり文なりの音体系にひびわれが生ずるだろうという不安を、ひとは感じずにはいまい。
思えばことばというのは不安の体系である。こうして書いて来たことも、読者の思わくに対する気遣いはともかくとして、そもそも対象自体不安定である上、さらにそういう対象の属する不確定的世界に対して、自分が強制を加えているのではないかという不安が兆して、落ちつきを失うのである。
(てらだ とおる)

日本語の論理性

井上和子

日本語にはいろんなニュアンスがあるし、おもしろいのですが、哲学とか科学思想とかを表現するのには劣っているようですね。
これはある有名な科学者のことばであるが、日本人の日本語にたいする評価の一つの代表である。西洋の諸言語と較べて、日本語が論理的表現の可能性において劣っているという根強い劣等感の現われとも言えよう。しかし、「日本語には日本語の

論理があるはずだ」と信じている人々も決して少なくない。もちろんそれがどういうものかよく理解できているわけでもないし、手短かに説明できる種類のことがらでもない。そこで、「日本語が論理性に欠ける」という証拠としてよくあげられる点を二つだけ取り上げて、吟味してみることにしよう。

(一) 日本語では主語の省略が多いので、文脈に頼らずに一つの文だけを見ているのでは、何について言っているのか曖昧である。したがって、主語を明示する英語などと較べて論理性に欠ける。

(二) 日本語では、否定・疑問・命令などが、文の最後に来る述語や終助詞によって示される。したがって、文末に至るまで文意がはっきりせず、論理的表現に向かない。

(一)の点から考えてみよう。英語などでは、命令文や日記での特殊な文体の場合を除いて、主語の省略は行われない。しかし、主語が省略されないから、文脈をたどらないでも意味が決定できるかと言うと、決してそうではない。英語でも、始めて話題にのぼる場合を除いては、同じ名詞句が繰り返されることはきわめて少なく、たいてい代名詞または他の代用表現が使われる。そのために、代名詞がどの名詞を指すのかについて曖昧な場合が少なくないのである。日本語の主語や目的語の省略も、英語の代名詞または代用表現とほぼ同じ文脈においておこる。つまり、主語に代名詞を使うにしても、主語の省略を許すにしても、曖昧性が生じるのだから、この点では英語と日本語に差はない。

一方、日本語には主語の省略からくる曖昧性を取り除く仕組がある。その一つは、「思う」「考える」「見る(判断するの意味)」「感じる」など、判断や推量を表わす動詞に関するものである。英語でも、*think*「思う」*realize*「悟る」*understand*「理解する」*see*「理解する」*feel*「感じる」などは、*I-verb*(一人称動詞)とも呼ばれ、多くの場合に*I*—「私」—を主語とすることに注目されている。しかしこれらはこの種の分布上の特色を持つだけで、他の統語上の関わりはない。日本語では、この種の動詞の主語が一人称であれば、「私はこう思う」「私はこう見る」のように単純な現在形を使うことができる。主語が一人称以外の場合は、例文(1)(2)のように、「……ている」を使わなければならない。

(1) 君は問題が複雑だと考えているが、僕はそうは思わない。

(2) 学生たちは一種の気まずさを感じている。

一人称主語の場合は次の例文(3)(4)が示すとおり、単純な現在形でも、「……ている」でもよい。

(3) 私はこの仕事を早く完成しようと思う。

(4) 私はこの仕事を早く完成しようと思っている。

そして、(3)から「私は」を除いても、話者の考えであることは、はっきり表わされている。英語には主語によるアスペクトのこの種の使い分けはない。

次に受動形では、もとの主語はたいてい省略されるが、話者の考えか、一般の人々の考えかは、「……ている」のこの使い分けによって明らかに示される。

(5) 両者の間の交際には、いろいろの摩擦があったことと推測される。

(6)　…………推測されている。

(5)は明らかに話者の推測を表わす。話者が自ら表に出ずに、自然の成りゆきとして表現する、いわゆる「自発」表現である。(6)は一般人の考えを表わしている。主語省略によっておこる曖昧性を防止するメカニズムが、日本語ではこんなところにかくされているのである。

㈠に関してもう一つ、従属節の主語の問題を取り上げよう。

(7)　Mr. Kato does not remember what *he* reported to the committee.

(8)　加藤氏は、{(イ)彼が／(ロ)φ／(ハ)自分が} 委員会で何を報告したか覚えていない。

(7)では、*he* は「加藤氏」とも解釈できるが、他の第三者を指す可能性もあって、曖昧である。日本語では、(7)にたいして(8)に示した三通りの文が考えられる。その中で、(7)と完全に対応する(8)―(イ)は、(7)と同様に曖昧である。それにたいして、(8)―(ロ)のように主語が省略されている(＝φ)場合には、主節の主語「加藤氏」が従属節の主語でもあると一義的に解釈される。(8)―(ハ)では、再帰名詞「自分」を使って、主節と従属節の主語が同一の名詞であることを、顕在的に示している。英語では(9)が示すとおり、従属節の主語として再帰代名詞は使えない(＊は非文法的な文であるとの印)。

(9)　＊Mr. Kato does not remember what *himself* reported to the committee.

英語には、従属節の主語にたいする曖昧な解釈を防止する仕組がないが、日本語には主語の省略・再帰名詞の使用という防止策があるということになる。もし、曖昧な解釈を防止する仕組を持っていることが、論理的表現に適した言語の条件であるとするのならば、日本語もけっこうこの条件を満たしていると言える。

㈡は否定・疑問・命令などの表現法に関する問題である。なるほど、日本語では文末まで読まなければ、話者の発話に対する態度や聞き手への働きかけなどを理解することができない。しかし、どの言語の文にも、このような話者の関わりを表わす部分と、述語と名詞句およびその他の要素を一定の関係に置いて文の基本的な意味を表わす、文核とでも呼ぶべき部分がある。後者に焦点をあてる時に、英語でも文頭に近いところで意味が決るとは言えないのである。

まず、日本語で述語の後に現われうるのは終助詞だけである。主語・目的語・述語(SOV)の基本的語順を厳密に守る言語なのである。

一方、英語は主語・述語・目的語(SVO)の基本的語順を持つ。ところで、英語の述語の後の位置には、目的語の他に前置詞句・副詞・文など、種々の要素が現われる。主語の位置に埋めこまれた文を文末に移す変形もいくつかある。次例の(10)(11)は、下線の部分が文末に移されたものである。

(10)　It is believed that the man will not come.
その男が来ないだろうと信じられている。

(11)　It seems to me that it is obvious that John told a lie.
ジョンがうそをついたことは明らかだと(私には)思わ

れる。

(10)(11)の英文では、下線の部分が文の主な意味を表わし、これらを読まなければ、何を言っているのか分らない。特に(11)では最後の二重下線の部分を読まなければならない。日本語では、これらの部分(点線部)が文頭に来ているのである。

英語にはこの他に、分裂文(12)や、関係節の後置された文(13)など、主要部分を文末に置いたものが多い。

(12) It was Mr. Kato who made a large donation to this school.

本校に莫大な寄附をしたのは加藤氏であった。

(13) A young girl must be selected who can type fast.

早くタイプが打てる若い女の子が選ばれなければならない。

このように、文核の構造を見ると、英語では動詞の後という文末に近い位置に情報が集ることが多く、日本語ではむしろその逆の傾向がある。

㈠㈡ともに日本語の非論理性にたいする証拠にならないことは、すでに明らかであろう。日本語の統語上の仕組や語彙の成り立ちを、詳しく見れば、日本語は英語のみならず、他のあらゆる言語と共通の性質を持つと同時に、すべての言語に許された一定の可能性の範囲内でその個別性を保有していることが分る。基本的語順の違いなどは個別性の一つである。そして、あらゆる言語に論理的表現の可能性が同じ程度にそなわっていると考えられる。したがって日本語の問題はむしろ、日本人にその可能性を駆使して論理的表現をする訓練が欠けているところにあると言えるのである。

（いのうえ かずこ 国際基督教大学教授）

日待ち——翻訳について

杉本秀太郎

ある日、降り立った町の駅前で見わたすと、そんなつもりではなかったのに、目に映るすべての文字が皆目理解できず、すっかりうろたえたという経験を、一度限りだが、味わったことがある。ベルギーのブリュージュという町にいったときのことだ。どこかに何なりと、こちらに分かる横文字が目にとまれば、忽ち安心できたにちがいない。だが、駅の昇降口、待合室、玄関に見える表示が、すでに悉皆フラマン語の単語ひとつきりで、私に分かるフランス語あるいは英語が併置されているということが全くなかった。空腹だったので、物の匂いを頼りにうす暗い構内をすすむと、待合室があった。ドアの向うに食堂が控えていることはすぐ分かった。しかし、見なれた「レストラン」という字はやはり書かれていない。フラマン語の看板を綴り字どおりに低く発音してみると、それは鰐皮のような舌触りで、アルファベットの並び加減もまた、聖書に出てくるあのレヴィアタンという海獣のように尾を突っ立て、牙をむいているような感じがした。レヴィアタンのなかに入って食事を摂る気は消え失せた。

汽車の駅は、終着駅でない限りヨーロッパでは大抵そうであ

るように、ブリュージュの駅も町はずれにあった。ほとんど人影のない駅前で地図を開いて方向を定め、霧と雨のなかを歩いた。しかし、レストランがそうであったように、ホテルもまた「ホテル」という語では表示されていなかった。森の向うに、見るからにホテルらしい建物はやがて出現したが、私はうんと安い宿を捜す必要に迫られていた。町の外まわりに二階建ちの家並がつらなっていて、なかに階下が食堂らしい造りの家があった。フランス語でオーベルジュ(旅人宿)というものだろうと見当をつけて、私はその家に入った。幸いにして、たしかに安価な旅人宿だった。

ブリュージュは北海に近い、古い小さな町である。一五世紀には、良港として最も栄えた。だが一六世紀の末には、すっかり衰弱した町に変っていた。ブリュージュを北海につないでいた入江が、堆積砂のためにふさがってしまったからだ。

私がここへ来てみようと思い付いた一つの動機に『死の都ブリュージュ』という小説があった。ベルギー人、ロダンバックが世紀末の一八九二年にフランス語で書いた小説である。加えて、この町の美術館で、フランドル画派の巨匠、メムリンクの代表作を見たいという動機が、別にあった。その日の朝、三月中旬だったが、私はパリからブリュージュに、汽車で直行した。六時間前に発ったパリの春めいた陽気が嘘のようで、濃い霧が流れ、冷たい雨が横ざまに降っていた。それから両三日、ブリュージュは明けても暮れても霧に閉ざされていた。

察しのつかないフラマン語の表示に取り巻かれ、霧に視界をうばわれたとき、私は字のよめない国にいる心細さというものを初めて悟った。例えば、フランス語を知らない人が単身パリにいって、どういう気分になり易いかということを考えてみる機会を得た。それと対照して、団体の国外観光旅行というものが、いかに安直で気楽で、その上、いかに「物の足し」にならないかということも、あらためて察しがついた。「目に一丁字もない」状態に置かれたときの覚束なさ、不安、もどかしさ、孤絶感……要するに、この一種の内的障碍こそ、そのときわれわれが遭遇し得る唯一の、たしかな対象である。この覚束なさだけは覚束なくはないと、まずは覚悟を決めてかからぬ限り、目にはうろがきて、虚空にまぼろしを追うばかりで、何を見たのやら、さっぱりおぼえていないような始末になる。団体旅行には、こういう危険は無縁である代りに、覚悟を決めたら、あとで約束されている眺望にも、これは縁が薄い。

ブリュージュは、私の解しがたいフラマン語に加えて、冬の霧をそなえていた。さらに加えて、あの有名な鐘楼の奏でる衆鐘楽(カリヨン)と修道院の時鐘をそなえていた。フラマン語と霧の彼方にかすかに見透かし得た一切は、壮大な、不思議な衆鐘楽とともに、つまりは音楽とともに、言葉の世界から、また言葉の彼方の世界に、忽ち飛去してしまうのだ。そして物思いにふさわしい半陰影に掩われた心にひびく修道院の時鐘は、とぎれ勝ちなリズムによって、私のもどかしさを強めることしかしなかった。

もしも堅固な言葉の世界が私のなかに確立されているなら、ブリュージュの霧をおそれることはなかっただろう。私の手持ちの日本語が、私のうちに生起する感覚と印象をあらかじめ取

捨し、一向に埒のあかぬような心の動揺を排除し、いったん受け容れた限りの外的衝撃には、さっそくそれに対応する言葉の種類によって衝撃波を制動するような言葉のシステム、つまりは常套成句集というものを、私の手持ちの日本語がしっかり掌握していたら、私はブリュージュの霧をおそれなくて済んだかもしれない。何故なら、私の意識に上るものと私の見つける言葉は、そのとき釣合を保っただろうから。

ブリュージュというのは、英語のブリッジにかさなる名辞なのだが、言葉の橋さえかけ渡し得たら、落ち込まずに済む深淵が、私を頻りにおびやかしたブリュージュのあの数日間のことが、近頃、翻訳仕事に手古摺っているあいだ、一種なまなましい思い出としてよみがえってきた。翻訳していたのは、ドビュッシーの書いた五七篇の音楽論と新聞雑誌記者による、この音楽家のインターヴュー二〇篇を一冊にまとめた本である。

私はドビュッシーの音楽が好きだ。ああいう音楽を作った人にしか書けない文章なので、彼の音楽論も同じだけ好きである。とはいっても、それの翻訳が、好きだけで片付かないのは、好きだけでドビュッシーのピアノ曲が弾けるわけでないのと同様だ。

翻訳という仕事は、妙な魅力をもっている。もうこれきりで翻訳なんかするものかと、何遍も腹の中で繰り返しながらも、寸暇を惜しむといったふうな精の出し方で励んでしまう。しかも励み方に応じてどしどし仕事が捗るわけではなくて、長いあいだ筆をくわえ、それでもまだ不足なら、柵の中の熊のように部屋を歩きまわったりすることが頻々と起こる。一語の前で一時間どころか二日、三日も頓挫して、動きのとれぬこともある。また逆に、こんなフランス文が日本文になるとは到底思えないな、とつぶやいていて、それでもどうにか訳文にすると、意外にうまく行っていることもある。

翻訳には原文がある。原文には、すでに始めも終りもあるのだから、敷かれた軌道を走ればいいだけで、見通しは明かるい、などと思う人は、翻訳のことを知らない人である。いま訳出しているその一節より先のことは、本当は何も分からない。原文にも、原文に呼応する訳文にも、訳しながらその地点まで行ってみないと見えないような、一種の風景が隠れている。霧はブリュージュで私を悩ませたばかりではない。辞書に載っている訳語はすべて、いわば常套語である。何もかもいっぺん霧のなかに投げ出し、危ない目に会いながら、言葉を見つけ直さなければならない。

やがて霧の晴れる日があるように、翻訳のおわる日がくるだろう、と思いながらつづける翻訳の仕事というものは、日待ちの長夜の孤独な遊芸に似ているといえないことはない。

（すぎもと ひでたろう　京都女子大学教授）

編集室より

▽第4巻「敬語」の刊行が遅れましたことをお詫びいたします。
なお、次回配本（第9巻「語彙と意味」）は、六月八日刊行の予定です。

岩波講座 日本語

4

敬語

岩波書店

まえがき

敬語は、相手との社会的、心理的距離を調節する言語的手段である。この意味では、敬語は世界中のすべての言語にあるはずの普遍的現象である。それがいかにも日本語にしかない特殊な現象と見られることがあるのは、その言語的手段が言語表現としてだけではなく、特定の社会的、心理的距離に対応する特定の言語形式が組織的に整備されているからである。

敬語が絶えずことばの問題として登場するのは、今まで経験しなかった場面に置かれたり、時代の価値観が変わったりして、相手との社会的、心理的距離をどう調節したらいいか、わからなくなるからである。また、話し手の調節のしかたが相手の期待に合わないと、相手に、軽蔑されたとか、疎外されたと思われるからである。

敬語については、人によって広狭さまざまなとらえ方がある。総論として、敬語とは何かを問うことにしたのはそのためである(「敬語の機能と敬語行動」)。そこでは、敬語をもっとも広く考えて、非言語行動まで含めて敬語としているが、以下の各論では必ずしもその範囲は一定していない。敬語をどの範囲のものとして考えるのが妥当かはまだ結論が出ていないのであるから、この巻ではあえてそれを統一しなかったし、統一すべきだとは考えなかった。

敬語がことばの問題となるのは、現代語の敬語についてであるから、敬語の現実認識から入ることにした。特に、敬語の言語形式がいかに組織されているかに焦点を置く(「日本語の敬語の構造と特色」)。その認識を深めるためには過去の敬語を知る必要がある(「敬語の変遷」)。

もし、過去の敬語だけを基準にして現代の敬語を測るならば、現代の敬語は多くの点で「正しくない」ということ

になろう。しかし、過去とはほとんど無関係に、現代の敬語には現代の敬語としての問題がある(「現代敬語の問題点」)。ことばの問題としての敬語は、つまるところ、この問題点が解決すればいいわけである。

敬語は、古くから多くの学者が注目して、その研究の積み重ねも少なくない。その研究史(「敬語の研究史」)は、敬語をどうとらえたらいいかという初めの問題に帰っていく。

冒頭に述べたように、敬語は日本語だけの現象ではない。ここでは、朝鮮語、中国語、英語をとりあげて、それぞれにおける敬語(「朝鮮語における敬語」「中国語における敬語」「英語圏における敬語」)について見ることにした。このうち、朝鮮語は、敬語という言語的手段に対応する特定の言語形式を整えているという点では、日本語に極めて近い。したがって、敬語の定義をいかに狭くしても、敬語が日本語だけのことだとするわけにはいかないのである。

一九七七年四月

編集委員

岩波講座 日本語 4

目次

8 中国語における敬語……輿水優……二七一

9 英語圏における敬語……久野暲……三〇一

1　敬語の機能と敬語行動

南　不　二　男

一　なにを敬語と呼ぶか

常識的な意味での敬語というものを、われわれが日常使っている日本語の中でみつけることは、比較的容易である。

　パーティーの会場はこのつきあたりです。
　それではお先に失礼します。
　ここからはいってよろしゅうございますか。

の「です」「ます」「ございます」、

　もうお出かけになりました。
　九月三〇日までに手続きされたい。

の「お〜になる」「(ら)れる」、

　式場に御案内申上げる。
　いい外科の先生を紹介していただいた。

の「申上げる」「いただく」などは、おそらくだれもが敬語の要素だと考えるであろう。もっとも、どれだけのものを敬語の範囲に含めるかということになると、いろいろの考え方があって、多くの人の意見が一致しているわけではない。一方には、今あげたような、いかにも敬語としか呼べないような要素だけにかぎるという考え方がありうる。他方、それらばかりでなくて、さまざまな人の呼び方、命令・勧誘などの言い方、質問の表現、応答の表現、またあいさつなどの型、話題のえらび方などもあわせて考えるべきだとする意見もある。さらに、おじぎその他の身ぶり、

表情、笑い、服装、作法一般などと敬語との共通性や相互協力の関係も問題にする立場もある。身ぶり、表情、服装その他の非言語的な行動は別として、ことばの世界のものだけについて見ても、敬語と呼ぶものの範囲をせまくとるか、広くとるかの違いがあるわけで、よく「狭義の敬語」「広義の敬語」という表現が使われるのもそのためである(こうした敬語の概念の範囲についての最近の考察としては辻村一九七六がある)。

このような敬語、またはそれに類するものの一般的な性格をどう定義するかということは、そう簡単なことではない。ただ、はじめにあげた常識的な意味での敬語については、それらに共通したいくつかの特徴を指摘することはできそうに思われる。筆者は、今のところそれについてつぎの三つの点を考えている(南一九七四a、b、林四郎・芳賀・南一九七四)。

第一は、言語主体(話し手)の、なんらかの対象についての一種の顧慮があるということである。ここで顧慮[1]ということばを使ったが、つまりなにかを気にするとか、なにかについて気をくばるということである。たとえば、「です」や「ます」を使うのは、もっぱら言語主体の相手(聞き手)に対する顧慮によることが多い。相手の方がなんらかの点で目上だからとか、初対面だからとかいった場合がそれである。動詞に「お〜になる」あるいは「(ら)れる」をつけるのは、その動詞の表す動作を行う人物について気をくばっていることになる。この場合、顧慮の対象となっている動作主は相手とはかぎらない。「あの方もお出かけになりました」「前の市長さんが決められたことで……」のように第三者であってもよい。これは、他人の名前に「様」をつけることについても同様である。なお、ここでは大ざっぱに相手あるいは第三者についての顧慮というような言い方をしたが、その顧慮の対象の内容については、三でまたふれるつもりである。とにかく、このように敬語の使用には、なんらかの人間についての顧慮が働いていることが多いことはたしかである。ところで、敬語の使用に見られるそうした顧慮は単に、言語主体、相手、あるいは話題になっている人物、つまりそのコミュニケーションに参加している人間に関するものだけかというと、そうとはかぎらな

い。ふだんはたがいにそれほどていねいなことばを使わない者どうしであっても、話題の種類によってはことばづかいがあらたまったものになることがある。たとえば、家族内に不幸のあった人や、なにか災害にあった人に対するくやみとか見舞いのことばなどがそれである。この場合は、話の内容についての顧慮が働いていると見ることができる。また、ふだんの日常会話では「です」「ます」「ございます」などを使わないのに、なにかあらたまった席上ではそれらを使って話すということもある。これは、その場の状況についての顧慮によるものである。直接会って話すときには「です」「ます」をつけずに話す相手に対して、手紙の文章ではそれらをつけるという現象もある。これを手紙というコミュニケーションの媒体(手段)についての顧慮の結果だというとちょっとおかしいかもしれない。しかし、人間関係に対する顧慮よりも、媒体の種類がまず「です」「ます」の現れを支配する条件になっていることはたしかである。

第二の特徴として、そうした顧慮は、つねに言語主体のなんらかの評価的な態度を伴っているということを指摘することができる。その評価的態度というのは、たとえば、この人は自分よりなんらかの点で目上だとか目下だとか、(地位的、年齢的その他)、自分と親しいとか親しくないとか(ずっと以前からの友人、初対面その他)、あるいはその話の場が公的なあらたまった場合か、私的なくだけた場合かといったものなどは典型的なものであろう。その判断にしたがって、その人に対して、またはその人について、あるいはその場合において、どのような敬語的表現をするかという選択が行われる。こうしたことについて「評価的態度」という表現を使うことが適切でなければ、なんらかの対象についての、なんらかの観点からする一種の測定と言ってもいいかもしれない。これは、一般的なつきあいにおける諸種の人間の行動についての測定、たとえば祝儀・不祝儀のときの金の出し方、いろいろな場合のおくりもの、またそれに対する返礼、招待とそれに対する返礼といった行為において見られるものと似ている。もっとも、測定ということばもあまり適当なものとも思えない。ここでは一応、前の通り評価的態度と呼んでおくことにするが、一般

に言語使用の背景にある評価的態度といっても、さまざまな性格のものがありうるわけで、かならずしも敬語に関するものだけとは言えない。たとえば、コンピュータによる仕事を説明するのに、相手がその方面の専門家である場合は、基礎的なことがらについての話は省く、相手がずぶのしろうとのときには、基礎的なことがらもくわしく説明するなどというのは敬語の使用とは関係がないけれども、一種の評価的態度の現れということができる。また、相手が子どもだからむずかしい言い方を避けるとか、食事のときにその場にそぐわない話題を持ち出すのを避けるとかといったことにも、なんらかの評価的態度が働いている。このへんのところになると、敬語に関するものに近くなってくる。いうまでもなく、ここで問題になるのは敬語的表現の現れを支配するところの評価的態度で、その一般的な性格を簡単に指摘できるといいけれども、筆者は現在のところ適切な案を持っていない。ただ、現代日本語の常識的な意味での敬語について見た場合、いくつかの評価(測定)のための観点とでも呼ぶべきものがあって、それによって評価(測定)が行われているように思われる。たとえば、つぎのようなものである。

(a) 上下関係。なにをどれだけ上位(地位的、年齢的、そのときの立場その他)のものと見るか、なにをどれだけ下位のものと見るか。なんらかの点で目上の相手には「です、ます、ございます」などいわゆるていねい語を使って話すとか、自分の側のものを下位のものとして、いわゆる謙譲語の要素(「拙〜」「弊〜」その他)を使うなどはその例である。

(b) 親疎関係。なにをどれだけ親しい存在として見るか、親しくない(疎い)存在として見るか。社会的・心理的距離の問題である。一般に、親しくない(社会的・心理的距離が遠い)存在として見た場合に、よりていねいな表現が使われる。たとえば、初対面の人に対する話、身うちの者のことを身うちでない人に話すときなどがそうである。

(c) あらたまり/ふつう/くだけ。その場の状況がどの程度あらたまった場合か、くだけた場合か、あるいはそ

の中間かといったこと。これに類するもので「まじめ／ふざけ」(たとえばそのときの話題が相手にとって非常に重大なものかどうかなど)という観点も考えられると思うが、それを別に独立させるべきかどうかよくわからない。

(d)　上品／ふつう／乱暴(または優雅／ふつう／粗野)。これは前の三つのようになんらかの対象についての評価の観点というよりも、いわば言語主体自身の行動の基準のようなものである。つまり、なにをどの程度上品(優雅)だと認めるかというのではなくて、ある表現はどの程度上品(優雅)なものの言い方かということである。

(e)　弱／ふつう／強。これも前の(d)と同様、ものの言い方に関するもので、弱い調子の表現か強い調子の表現かといったことである。

第三は、そうした顧慮、評価的態度に基づく、なんらかの対象についての扱い方の違いがあり、その扱い方の違いを反映した表現の使い分けがあるということである。この表現の使い分けは、簡単な場合には、たとえば「机」というか「お机」というかといった二つの形のどちらかをとるということになるが、場合によっては、三つあるいはそれ以上の段階が区別されることもある。「これはブルー・サルビアだ」よりも「これはブルー・サルビアです」がていねい、さらに「これはブルー・サルビアでございます」がもっとていねいな言い方だというのはその例である。かりに、相手または話題になっている人物、あるいはその他のコミュニケーションの内容や、その場の状況についての十分な顧慮やなんらかの評価的態度があったとしても、それに程度の差がなくて、またそれを表す表現上の形の使い分けがなかったとしたら、そこに「敬語がある」といえるかどうかは問題である。日本人がみなばかていねいになって、どんな相手に対しても「あなたさま」と呼び、どんな相手にも、どんな状況でも「ございます」を使って話す事態が起った場合を想像していただきたい。現実にある言語の体系の少なくともある部分にはこうした事態が起っていることもある。現代のヨーロッパ諸言語の二人称代名詞には、大ざっぱにいって〈おまえ、君〉にあたるものと、〈あなた〉

にあたるものとの二種類の使い分けがあることはよく知られている。フランス語の tu と vous、ドイツ語の du と Sie はそれである。ところで、現在の英語ではそうした区別はなく、you だけになってしまっている。この場合、フランス語、ドイツ語などのヨーロッパ諸言語には、少なくとも二人称代名詞に関して常識的な意味での敬語的表現の使い分けがあるけれども、英語にはそれがないということになるであろう。もっとも、ついでに言うならば、英語の体系全体として敬語的表現の使い分けがあるかないかということは、また別の話である。たとえば、よく知られているように、要求・依頼の表現には Would you mind ~ing…、Could you perhaps…、Please + 命令文、単純な命令文など、ていねいな言い方からそうでないものまでさまざまな形が使われている。

以上見てきた三つの特徴は一応常識的に敬語と呼ばれるものについて考えたものだが、それらは、そうしたかぎられた範囲のものだけでなくて、他のなんらかの点で敬語に類する性格を持った言語表現、あるいはさらに非言語的な表現にさえも認めることができる。「あした」の代りに「明日(みょうにち)」を使うという場合には、その場の状況についての顧慮、そしてその状況がなにかあらたまったものであるという評価的態度が働いていることが多いと思われる。「集合」(人が集るという意味)の代りに「おあつまり」というときには、相手が幼稚園児で、幼稚園という場での話であるのがふつうである。こうした単語ばかりでなく、たとえば朝夕のあいさつをするかしないかといった一種の言語行動の型の選択の背景にも、相手に対する顧慮とそれに伴う評価的態度が認められる(身うちの者にはしない、よその人にはするなど)。非言語的な表現行動は、言語表現に伴うことを前提とするもの(あとで「随伴的行動」と呼ぶもの)と、それだけで独立して現れることができるものとに分けて考えることができる(林四郎一九七三a、b、南一九七三)。前者の例の一つとして声の質がある。日本の女性はあらたまったときは高く発話する傾向があるようだという観察がある(野元一九七四)。そのほか、話の中に出てくる間投音、話しているときの顔の表情や笑いなどいくつかの要素がある。書きことばに伴って出てくるものも少なくない。どんな書式で書くかとか、毛筆を使うかペン書き

にするか、どんな質の紙を使うかといったことはその一部である。言語表現を前提とせず、独立的に現れるものとしては、おじぎその他各種のしぐさ、どんな服装をするか、服装の着脱(帽子をかぶるか、ぬぐかなど)、おくりものをするかしないかなど、これまたいろいろのものがある。これらにおいても、表現行動の主体の、なんらかの対象についての顧慮と評価的態度、そしてそれを反映する表現形式が認められる。たとえば、職場の上司の家を訪問するのに、ある程度きちんとした服装をするなどというのはそれである。

ここで問題にしているような特徴を持った言語表現、あるいは非言語的な表現は、かならずしも日本語社会にだけ見られるものではない。これについては、すでにヨーロッパ諸言語の二人称代名詞や、英語の要求・依頼の表現の例をあげた。「敬語の存在は日本語の大きな特徴だ」とか「どうして日本語だけに敬語があるのか」などというのは、敬語というものをどう考えるかにもよるけれども、世界の諸言語についての、また日本語の敬語の性格についての十分な認識に基づく発言とは言いがたい。もちろん、どの言語も日本語的な敬語の体系を持っているわけではない。日本語の敬語に似た体系、あるいはむしろより発達した体系を持つ言語としては、インドネシアのジャワ語や朝鮮語をあげることができるが(崎山一九七四、梅田一九七四)、そのほかにもいろいろな言語にいろいろな類型のものを見出すことができるのである(ネウストプニー一九七四)。なにをもっぱら顧慮の対象にするか、ここでいう評価的態度の観点としてなにに重点をおくか(上下関係か、親疎関係かなど)、それを表す表現形式として言語的手段をよく使うか、非言語的手段をよく使うか、言語的手段にしてもどのような要素を使うかといったことによって違いが出て来る。もっとも、こうした見方を非常に一般的なものにすれば、人間社会ばかりでなくて一部の動物の世界にも類似の現象を見つけることはさほど困難ではない。ニホンザルの社会に見られるマウンティング(優位のサルが劣位のサルの背に乗る動作)やプレゼンティング(マウンティングを受けるために劣位のサルが優位のサルに尻を向ける動作)、その他の各種の動作はその例である(宮地伝三郎一九六六)。宮地によれば、プレゼンティングはサルどうしの間ばかりでな

く、人間に対して行われることもあり、飼育ケージの中から金網ごしに飼育人にむかって尻をさしむけるサルがいるそうである。ただし、この「敬意の表示」はすべての人間に対してなされるわけではなく、「ただの訪問者は、その光栄をうけることは期待できない」という。つまり、個々の人間についての、サルの評価的態度が異なるわけである。対人間的なものといえば、犬が人にしっぽをふる動作などもそうである。サルの各種の動作は、明らかに群の中での上下関係に基づくものであるようだが、犬については、彼らが人間を上位者として見ているのか、親しみの対象として見ているのか、その「評価的態度」の内容はちょっと知るよしもない。

動物の世界のことはともかく、人間のことばや非言語的な表現には、今まで見てきたように、常識的な意味での敬語を一応基準として考えてみても、それとなんらかの点で共通した性格を持つ表現がいろいろある。はじめにも述べたように、なにを敬語と呼ぶかということについて、いくつかの違った考え方が出てくるのはそのためである。具体的にいえば、表現のための形式の種類、ここでいう顧慮の対象、評価的態度についての考え方によって、敬語と認めるものの範囲が広くもなればせまくもなるわけである。以下、その範囲のとり方としてどのようなものが考えられるかを概観するが、ここでは表現形式の種類と評価的態度との二つの観点から見てみたいと思う。

㈠　表現形式の種類

(1)　言語表現だけを問題にする立場。

これはさらに、常識的な意味での敬語表現のためにもっぱら用いられる特定の要素だけにかぎる考え方と、もっと一般的な言語要素(または言語表現の型など)も含める考え方とに分けることができる。前者では、日本語の場合、いわゆる「尊敬語」「謙譲語」「ていねい語(丁重語)」、および人によっては「美化語」といった、もっともふつうの意味での敬語の要素だけが問題にされる。後者の立場に立つ場合には、右にあげた特定の要素ばかりでなく、軽卑表現とか卑罵表現といわれるもの(「～やがる」「～てけつかる」「～め」など)、尊大表現(「おれさま」「～てつかわす」な

ど）、一般の語彙の選択（「あした」というか「明日（みょうにち）」というか、「ここ」というか「（御）当地」というかなど）、要求・依頼のさまざまな言い方、あいさつをするかしないか、話題のえらび方など広い範囲のものが含まれることとなる。

(2)　非言語的な表現まで含めて問題にする立場。

これも二種のものを区別することができる。一つは、前に述べた言語表現に伴って現れることを前提とするもの（随伴的行動）だけにかぎるとする考え方である。話しことばの場合には、声の質、間投音、顔の表情その他のもの、書きことばの場合には、筆記用具や紙の種類の選択、書式、印刷の種類などが問題となる。もう一つは、さらに広く言語表現に伴うことを前提としない非言語的な表現も含めて考えようとするものである。この考え方に立った場合には、身ぶり、服装その他の行動一般が考察の対象の範囲にはいってくる。

(二)　評価的態度

この評価的態度の内容についてはいろいろの考え方がありうるが、ここでは一応、前にあげた「上下関係」「親疎関係」「あらたまり／ふつう／くだけ」「上品／ふつう／乱暴」「弱／ふつう／強」の五つの点について考え、きわめて大ざっぱにつぎの二つの立場を区別しようと思う。

(1)　上下関係については、相手または話題の人を上位のものと見る、親疎関係については、相手または話題の人を社会的・心理的に遠いものとして扱う、あらたまり／ふつう／くだけについては、その場の状況などをあらたまりと見る、上品／ふつう／乱暴については上品な態度を、また弱／ふつう／強については弱い調子（おしつけがましくない調子）を志向するという、いわば「上向き」の態度のものだけにかぎる立場。

これまで常識的に敬語といわれている諸要素の認め方は、大体においてこの立場にたつものである。

(2)　上下関係については上位と見るものも下位と見るものも、親疎関係については遠いとするものも近いとするも

のも、あらたまり／ふつう／くだけはあらたまりからくだけまで、上品／ふつう／乱暴も上品から乱暴まで、また弱／ふつう／強も弱から強まですべての態度を問題とする立場。

この立場にたった場合には、たとえば、「〜やがる」「〜てけつかる」「〜め」といった卑罵あるいは軽卑の表現といわれるもの、あだな・愛称の類、冗談とかふざけた表現、各種の乱暴な言い方なども考察の対象の範囲にはいることになる。

なお、評価的態度に関する立場としては、右にあげた(1)と(2)のほかにいろいろなものが考えられるわけである。たとえば、(1)とは逆に上下関係については下位と見る、上品／ふつう／乱暴については乱暴な態度をとる、弱／ふつう／強では強い調子になるといったものだけにかぎる立場を考えることもできる。「日本語社会における罵詈雑言の研究」を行おうとする場合などには、こうした対象の限定のしかたが必要となるであろう。また、上下関係について上位の者として見るという態度のみを取上げ、あとの親疎関係その他のものは問題としないという立場もありうる。しかしここでは、敬語の範囲についての考え方を単純に示すために、すこし図式的に過ぎるかもしれないけれども、右の(1)と(2)にかぎっておくことにする。

さて、表現形式と評価的態度それぞれに関するいくつかの立場(観点)を組合わせたものは、敬語の範囲についての考え方の型ということになる。たとえば、表現形式については、特定の言語要素にかぎる、評価的態度については、前にあげた(1)の立場(「上向き」の態度だけを問題とするもの)をとるというのは一つの考え方の型である。それに対して、表現形式としては非言語的な表現も含めて考える、評価的態度についても前にあげた(2)の立場をとるという型もある。そうした、いくつかの考え方の型をまとめて表にして示すと、つぎのようになる(表1)。

こうしたいくつかの考え方の型のうち、敬語ということばの「敬」という要素の字義通りの使い方に忠実であろうとすれば、表中の評価的態度の五つの項目が十のもの、すなわち、A、C、E、Gが適当なものだということになる。

もしそれにこだわらず、「あんちくしょうめ、よけいなことしやがって……」などという表現や、相手につばを吐きかけるような行動をマイナスの敬語の要素が使われているとでもいうとすれば、B、D、F、Hも入れてよいわけである。つぎに、敬語の「語」にこだわるならば、表現形式として言語表現を使うものだけにかぎられる。あるいは範囲を拡大して考えても、せいぜい随伴的な非言語的表現までということになる。すなわち、A、B、C、Dがそれで、あるいはさらに、E、Fが加えられるかもしれない。一方、独立的な非言語的表現も、いわば比喩的な使い方で敬語と呼んでもかまわないとすれば、G、Hも含めて考えることができる。「敬」と「語」両方の本来の字義に忠実な立場にたつならば、AまたはC(またはE)である。逆に、全然かまわない方の極端はHである。このようにして、広義の敬語、狭義の敬語といっても、広狭の程度にいろいろのものがあることがわかる。

日本語研究の世界における、敬語その他それに類する術語の現実の使われ方を見ると、まず「敬語」という語は、

表 1

観点／考え方の型	表現形式				評価的態度				
	独立的非言語表現	随伴的非言語表現	一般言語表現	特定言語要素	弱／ふつう／強	上品／ふつう／乱暴	あらたまり／ふつう／くだけ	親疎関係	上下関係
A	−	−	−	＋	＋	＋	＋	＋	＋
B	−	−	−	＋	±	±	±	±	±
C	−	−	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋
D	−	−	＋	＋	±	±	±	±	±
E	−	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋
F	−	＋	＋	＋	±	±	±	±	±
G	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋
H	＋	＋	＋	＋	±	±	±	±	±

表現形式の欄の＋，−はそれぞれの項目のものを用いるか，用いないかを示す．
評価的態度の欄の＋，±については以下の通り．
　上下関係：＋上位のものと見る態度だけ．
　　±上位のものと見る態度，下位のものと見る態度の両方．
　親疎関係：＋遠いものとして見る態度だけ．
　　±遠いものとして見る態度，近いものとして見る態度の両方．
　あらたまり／ふつう／くだけ：＋あらたまりと見る態度だけ．±あらたまり，ふつう，くだけの全部．
　上品／ふつう／乱暴：＋上品な態度を志向する．±上品から乱暴まで．
　弱／ふつう／強：＋弱い調子を志向する．
　　±弱から強まで．

今までたびたびふれてきたように、もっともせまい範囲、すなわちAの考え方を前提としたものであることが多いようである。しかし、「行動の中の敬語——敬語はことばだけとは限らない——」(南一九七三)とか「世界の敬語——敬語は日本語だけのものではない——」(ネウストプニー一九七四)などという場合の敬語は、それとは違ってずっと広い範囲のものをさす。これらはここのGにあたる考え方のようである。国語学でよく使われる術語に「待遇表現」がある。これが意味するところは、おそらくここのDあたりのところではないかと思われる。[2] この待遇表現という概念はたしかに一般性があって、いろいろな場合の説明に有用なものである。日本語にかぎらず、外国語の敬語的表現を研究する場合にも、それ専用の言語要素を持つ朝鮮語、ジャワ語、日本語のような言語ばかりとはかぎらないから、こうした概念を考えておくことが必要であろう。また、日本語社会、日本語以外の言語社会を問わず、(狭義の)敬語的表現は、いろいろな種類の非言語的行動と共起することが多く、またそれらと性格上共通している点が少なくない。狭義にしろ広義にしろ、敬語の研究においては、言語的、非言語的両方のコミュニケーションを統一的に把握するような理論の中での敬語の位置付けを考える必要がある。すなわち、E〜Hの範囲のもの、とくにHが考察の対象となる。しかし、Hの範囲までカバーする術語はまだないようだ。

本稿では、一応「狭義の敬語」という場合には、A(場合によってはB)の範囲のものをさすことにする。限定することばをなにもつけないで「敬語」または「敬語的表現」というときには、もっとも範囲の広いもの、つまりHの範囲のものをさしていることがある。Hの範囲のものについてなにか適当な特定の名称を与えたいと思うが、まだきめていない。他と区別することが必要な場合には、かりに「待遇行動」と呼ぶことにしておきたい。

二　敬語的表現のいろいろ

具体的な敬語的表現にはどのようなものがあるかを見るために、主として現代日本語社会に現れるものを概観しようと思う。ここでは、一で述べたHの範囲のもの、つまり待遇行動と呼んだもっとも広い範囲のものをつぎの三種に分けて取上げる。

言語表現（一で特定要素と呼んだものも、一般要素と呼んだものも含める）
随伴的非言語表現
独立的非言語表現

1　言語表現

前に特定要素と呼んだ、常識的に敬語といわれているもの（狭義の敬語）をまずあげ、そのあとだんだんと範囲をひろげていくことにする。狭義の敬語については、「尊敬語」「謙譲語」「ていねい（丁重）語」「美化語」という分類に従う（辻村一九六七、宮地一九七一a、b、大石一九七四など参照）。

(1)　狭義の敬語。

尊敬語

○人の動作・状態などを表わす言い方。いらっしゃる、おっしゃる、なさる、召し上る。　〜（ら）れる、お（ご）〜になる、お（ご）〜あそばす、お（ご）〜です（だ、でございます）、お（ご）〜くださる、〜てくださる、お美しい、お静かだ、ご立派だ、ごゆっくりなど。

○人の呼び方。あなた、あのかた、どなた、おたく、貴下、貴姉、大兄。　お〜のついたもの（お父上）、〜さん、〜さま、〜どの、〜ちゃん、〜ちゃま、〜くん、〜先生、〜氏などの接尾辞的要素がついたもの、職名、称号などがついたもの（伊藤部長、チャールズ王子、ヒラリー卿、湯川博士）。そのほか、令兄、令嬢、ご尊父など。

○人に属する物・事を呼ぶ言い方。お考え、お宅、ご意見、ご職業、高配、貴意、貴社、玉稿、芳情、芳名、ご高説など。

謙譲語

○人の動作を表わす言い方。あげる、いたす、いただく、さしあげる、まいる、もうしあげる、拝見する、拝借する。　お（ご）〜する、お（ご）〜いたす、お（ご）〜もうす、お（ご）〜もうしあげる、お（ご）〜いただく、〜てあげる、〜てさしあげるなど。

○人の呼び方。わたし、わたくし、わたくしども、てまえ、てまえども、小生、愚息、荊妻、豚児、小妹など。

○人に属する物・事の呼び方。愚見、小社、拙宅、弊店など。

ていねい語（丁重語）

〜です、〜ます、ございます、〜（で）ございます。そのほか、つぎのようなものをていねい語と認める意見がある（大石一九七四など）。〜ております（「よくわかっております」などの）、〜てまいります（「雪が降ってまいりました」などの）、〜といたします（「そういたしますと…」などの）、〜と存じます（「結構と存じます」などの）、〜ともうします（「夏野菜ともうしますと…」などの）、よろしい（「いい」「よい」に対して）、お〜のついた形（「お静かな晩ですわね」などの）、あちら（「あっち」に対して）、いかが（「どう」に対して）など。

美化語

いただく（「たべる」に対して）、たべる（「くう」に対して）、ごはん（「めし」に対して）、おてあらい（「便所」に

対して)、お(ご)〜のついた形(「おつとめ」「おやすみ」「おなか」「おやつ」「ごちそう」「ご酒(しゅ)」)など。

(2) 卑罵語とか軽卑語と呼ばれるもの。いわばマイナスの敬語。〜くさる(しくさる)、〜やがる(笑いやがる)、〜てやがる(すましてやがる)。くそじじい、こぞうめ、あいつ、どいつ、きさま、てめえ、やつ、やつら、やろう、あま、がきなど。

(3) いわゆる尊大表現。〜てつかわす、ちょうだいする(ありがたくちょうだいしろ)、おれさまなど。

(4) 今までにあげたもの以外の、各種の人の呼び方。職名、地位名、またはそれに準じるもの。お豆腐屋さん、新聞屋さん、専務、次長、マスター、キャプテン、キャッチャー。

○屋(家)号など。音羽屋、高麗屋、丸三、山十。
○芸名、雅号、ペンネームなど。坂東玉三郎、小椋佳、渡辺崋山、東山魁夷、藤子不二雄、伊藤整(せい)。
○愛称、あだなの類。コーちゃん、ライオン首相、ゲタさん。
○法名、戒名の類。瀬戸内寂聴(瀬戸内晴美)、安楽寿院功誉文林徳潤居士(谷崎潤一郎)。

右にあげてきたのは、どんな要素が使われるかという問題である。そのほかに、どのような要素をどのように使って呼ぶかという問題がある。

相手にしろ、言語主体自身にしろ、姓十名の形をいう(書く)か、姓だけをいう(書く)か、名前だけをいう(書く)か。以前は、手紙の宛名に、相手の姓(十様)だけを書き、差出人は名前だけを書くのが丁重な書き方とされたようである。[3] 今でも年輩の人の中にはこの形式をまもっている人もいる。また、日本語社会だけでなく、英語社会などで相手を呼ぶのに姓を使うか名前を使うかということが、親疎関係の表現に大きな役割をはたしていること

はよく知られている。

相手を表すのに、相手の姓または名を使うか、代名詞（「あなた」など）を使うかという問題もある。現代の日本語社会（とくに標準語を使う場合）では、上位の相手には「あなた」を使うことができず、相手の姓または名前に敬称をつけた形を使うのがふつうである。また、英語社会では話の場にいる第三者をさすのに、代名詞（he, she）を使うことは失礼とされるそうである。

相手に敬意を表する場合に、相手を直接さす要素（姓名、代名詞など）の使用を避けるという現象もある。そのかわり、相手の動作・状態、相手に属する人・物・事などを表す語に尊敬語的要素をつける（今度の御出張は、どちらへいらっしゃるんですか）。また、相手に関係する、言語主体の側の動作・状態などを表す語に謙譲語的要素をつけることもある（近いうちにお庭を拝見にうかがいます）。

(5) 間投詞・応答詞の類。

○なあ（な）、ねえ（ね）、おい、おいおい

○こら、こらこら、もしもし

○あのう、うーん、えー

○ああ、ええ、うん、おう、はい、はあ、はっ、へい

いいえ、いや、ううん（[N::]または[N::]のような発音のもの）

(6) 終助詞・間投助詞の類。

○なあ（な）、ねえ（ね）、か、かい、わ、ぜ、ぞ、の、よ、さ（さあ）

(7) 一般的な語彙の選択。たとえば、つぎのような現象がある。

○同義語・類義語のもので、和語を使うか漢語を使うか、和語（漢語）を使うかヨーロッパ系外来語を使うか。あ

す(あした)―みょうにち、ことし―ほんねん、やかましい―けんそう(喧騒)、ゆるすーきょかする、ながぐつ―ブーツ、しゃくやにん―テナント

話しことば的語彙を使うか書きことば的(または文語的)語彙を使うか。もう―もはや・すでに、たった―わずか、やっと―かろうじて、かない・およめさん―つま、しゅじん・だんなさん―おっと……

○幼児用語彙を使うか成人用語彙を使うか。たとえば、おえかき、おはじまり、おもらしなどの幼稚園用語や、あんよ、たっち、ねんねといったことばを使うかどうか、ということである。

(8)　文の構造について、話しことば的な型を使うか、書きことば的な型を使うかということも問題となる。中止の形として「〜て」の形を使うか、連用形そのままを使うかの違いはその一つの例である。

　昨日は朝六時に起きて、T町に出かけた

　昨日は朝六時に起き、T町に出かけた

そのほか、各種の助詞の使用、たとえば「で」の代りに「にて」「において」「をもって」を使うとか、「から」の代りに「より」を使うといったことも、この問題と関係がある。

(9)　命令、禁止、依頼、勧誘などの表現のいろいろな形の使い分け。

命令形(もっと飲めよ)、〜な(そんなに見るな)、〜て(ちょっとどいて)、〜ては(ちゃ)だめ(言ってはだめ、見ちゃだめ)。そのほか、〜なさい、〜てちょうだい、〜てください、〜てくださらない(?)、〜てくださいませんか、〜ていただけませんでしょうか、〜ていただけるといいのですけれど、〜しませんか、〜しましょう、〜しよう、〜したほうがいいよ、などさまざまな形がある。

(10)　文の長さ。長い方がていねいと感じられる傾向があるという(国語研一九五七)。

(11)　成分を省略した文を使うか、成分を省略しない、ととのった形の文を使うか。前者はたとえば、親しい者どう

しの間の会話によく出て来ると想像されるし、後者は互いにあまりよく知っていない者の間やあらたまった場合に現れることが多いと思われる。

(12) 間接的な、婉曲な言い方をするか、直接的な言い方をするか。

(13) へりくだった表現をするかどうか。たとえば、日本人特有のものと思われている「なんにもございませんが……」「つまらないもので恐縮ですけれど……」といった表現をするかどうか。

(14) 単語や文(sentence)についてばかりでなく、それより大きい言語単位である文章(discourse)に関しても、いろいろな点が問題となる。たとえば、さまざまな観点から文章の種類を区別することができるが、どのような種類の文章が現われるかということと、言語主体と相手との関係あるいはそのときの状況との間には、密接な関係がある。あいさつで始まり、実質的な内容の話が続き、あいさつで終る型の会話が現れるか、あいさつだけで終始する型か、いきなり実質的な内容の会話ではじまりそれだけで終る型か、あるいは雑談をするかどうかなどは、言語主体と相手との間の関係によることが多い。また、状況によっては、話題の種類・範囲に相当はっきりした制約が見られることがある。たとえば、食事のときの会話、結婚披露宴のときのスピーチ、病人の前での話など。

(15) 目を転じると、ことばの形の要素、つまり音形上の要素または表記上の要素の問題もある。音形についての一例をあげると、話しことば的な、一種の融合形を使うか、融合しない形を使うかということがある。「~ちゃう」「~ちまう」に対する「~てしまう」、「わかんない」に対する「わからない」、「それじゃ」に対する「それでは」などがそうである。表記については、まず表記の体系の選択の問題がある。漢字かなまじり文にするか、ローマ字にするか、使用漢字の範囲、かなづかい・送りがなはどうするか、ローマ字なら何式によるかなど。

(16) 話しことばにするか、書きことばにするか。これは、前にあげた話しことば的要素、書きことば的要素の選択ではない。たとえばなにかを人に通知するときに、電話で知らせるか、書簡で知らせるかといったようなことで

ある。

(17)　使用言語(方言)の選択の問題もある。標準語で話すか、ある方言で話すか、さらに広く考えると、英語にするか、フランス語にするか、日本語にするかといったことがそれである。ただ、選択の対象が言語(方言)の体系全体である場合もあり、その一部(たとえば音韻体系のみ――標準語的発音をするか方言的発音をするかなど)である場合もあって、その間にいろいろ程度の違いがあると思われる。

(18)　もっとも一般的な問題として、ある相手に対して話すか話さないか(書くか書かないか)、つまり言語的コミュニケーションを行うかどうかということがある。これには二つの違った性格のものを区別することができる。一つは、相手とのコミュニケーションを行うという前提にたつもので、言語的手段に訴えるか非言語的手段に訴えるかということが問題となる。もう一つは、相手とのコミュニケーションを拒否するという場合である。街頭で宣伝をしている人につかまりそうになって、ふり切って逃げるとか、なにかの問合せにわざと返事を出さずにほうっておくなどというのがそれである。もっとも、コミュニケーションを拒否するために、わずかながらでもことばを使うということはありうる。いやな相手からの電話に「違います」と言って切ることもできる。永井荷風は、あいたくない初対面の客に対して、書生のふりをして「先生は今旅行中で……」などと言ったということを、『断腸亭日乗』で読んだことがある。

2　随伴的非言語表現

(一)　話しことば関係

(1)　話の中で用いられる間投音。たとえば、日本人の成人男性によって用いられる、舌さきと上の前歯の裏との間の、スーという吸気の無声摩擦音。これはしばしばていねいな態度を表す。やはり、年輩の男性に見られる、あ

いさつをして下げた頭を上げるときに発するアッというような音もある。

(2) あらたまった、かたい調子、くだけた調子、強い語気の怒った調子などのことばの調子。そのほか声の高さ・大きさ。

(3) 語に伴う笑い。しゃべりながら、あるいは相手の話を聞きながら浮かべる微笑など。これは日本人の笑いの一つの特徴とされているものだが、言語主体と相手との間の一種の社会的関係(その会話を成立させている関係)を持続させる機能を持っているものであろう。

(4) 顔の表情で話に伴うもの。顔をしかめる、口をとがらす、口もとをゆがめるなど。

(5) 目の動き。相手をみつめる、目をそらす(伏せる)。日本人の場合、話をしながら、または話を聞きながら、目を伏せる(または相手から目をそらす)ことはそれほど失礼とは思われていないのではないか。

(6) 腕、手、頭その他体の部分を使う動作で、話に伴うもの。手をふる、うなずく、首をかしげる、横にふる、あごをしゃくるなど。日本人の中には、おもに文にあたる発話の部分を切るたびにおじぎをするように頭を下げる人がいる。丁重な態度の表現であろう。

(7) 話をしている者どうしの間の(物理的な)距離のとり方。

(8) 話の中の時間的な間(ま)のおき方。

(9) 媒体になにを使うか。直接あって話すか、電話、インターホン、録音などの物理的手段を使って話すか、人づてに話を伝えるか。

(二) 書きことば関係

(10) 字体、書体、文字の大きさなど。たとえば、相手の姓名を書くのに略字を使わない、相手が子どもだから字をくずさずに書く、あらたまった用件だから文字をていねいに書く、日常のちょっとした用事で相手も親しい間柄

だから走り書きのメモにするなど。

(11) 書写の形式など。たて書きか横書きか、あるきまった書式に従った書き方か、自由な書き方か。

(12) 書写の手段。手書きにするか、タイプするか、謄写印刷にするか、普通印刷にするか、コピー機械や電算機(各種端末機器を含めて)を利用するか。

(13) 書写の材料。ペンか、毛筆か、鉛筆か。その他、用紙の種類、インクの色なども問題となる。

3　独立的非言語表現

(1) 服装。たとえば、フォーマルな服装とカジュアルな服装の使い分け。冠婚葬祭のときのそれぞれの服装、よその家を訪問するときの服装、仕事のときの服装、家庭でのふだんの生活のときの服装など。

(2) 身につけるものの着脱。帽子をかぶる、脱ぐ。手ぶくろをはめる、とる。上衣を着る、脱ぐ。靴をはいたままでいる、脱ぐ。その他いろいろのものがあるであろう。

(3) 服装以外の身だしなみの類。女性の化粧、整髪、男性のひげそり、整髪など。その他、靴の手入れ、装身具の選択。

(4) 顔の表情で言語表現に伴わないもの。顔をしかめる、まじめな顔をする、(ぷいと)横を向く、秋波、にらむなど。

(5) 笑いで言語表現に伴わずに現れるもの。ややはなれた距離で相手を認めてにっこりする、呵呵大笑する(なにか都合の悪いことを笑いとばそうとする)、失敗した場合のテレ笑い、嘲笑、冷笑など。

(6) 態度・ものごし・動作。初対面の人、敬意を表すべき人に対する一種のかしこまった、かたい(全身的)態度。家または部屋にすすめられてもすぐはいらない躊躇の態度。ものを貰う場合の躊躇の態度または相手の方へ押し

返すしぐさ。日本人の中年以上の男性に見られるもので、人の前を通るとき片手をすこし前に出して小腰をかがめて歩く動作。そのほか、おじぎ、握手、合掌、拍手、室内で人を迎えて椅子から立ち上る動作、儀式のときなどの直立不動の姿勢、両手を体の前で軽く組む(丁重な態度の表現)、手をうしろで組む(おうへいな態度の表現)など。また日本人社会以外のいくつかの民族で見られるあいさつの場合の抱擁や接吻などの習慣もある。

(7) へやの出入り、乗物の乗り降りなどの場合に見られる、相手を優先させる動作。

(8) 食事のときの作法。

(9) 客に対するもてなしのしかた。正式の食事にするか、茶菓だけにするか、なにも出さないかなど。

(10) そのほか、交際一般についてのさまざまな行動の型。

以上列挙したものでもっとも広義の敬語表現、ここでいう待遇行動の全部をあげつくしたわけではないが、それらの中にはさまざまな言語要素や行動の型が含まれている。つまり、それらは一で述べた顧慮の対象やそれについての評価的態度を表す手段として使われているわけである。ところで、こうしたさまざまな表現手段を見ると、言語的なもの、非言語的なものを問わず、それらに共通したいくつかの一般的な特徴がありそうに思われる。またそれについては、日本語社会における表現にも、日本語以外の言語社会におけるものにも、いくつかの共通した点を指摘できる可能性もある。たとえば、狭義の敬語の中の尊敬語の諸要素の中には、そこで問題になっている対象を持ち上げる表現をとるものがすくなくない。「高配」「ご高説」「母上」「~てくださる」などはそれである。一方、謙譲語の中には、自分を低めることによって相手側を高める表現がいくつかある。「~てさしあげる」「~もうしあげる」「呈上する」などはその例である。これらにおいては、一種の上下(高低)関係がその表現の原理として使われていることになる。そういえば、非言語表現でもおじぎをする(頭を下げる)、なにかをもらうときにちょっと押しいただくしぐさをするなどということがある。これも同じ原理によるものと見ることができるであろう。たしかにこうした表現手段の上で

の上下(高低)関係は、評価的態度における上下関係を直接的に反映しているわけで、一般の敬語的表現にこの種のものが少なくないことはよく理解できる。もちろん、表現手段の上での上下(高低)関係と評価的態度における上下関係は区別して考えるべきである。「高〜」にしろ「〜上」にしろ、あるいは「上げる」にしても、本来は物理的上下(高低)関係を表す要素であった。それが敬語に関する評価的態度の上下関係を表すために、いわば流用されたわけである。それは頭を下げるなど姿勢を低くする動作についても同様である。ただ、それらの中には社会習慣的な性格が強いものから自然的な性格が強いものまで、いろいろ異なった程度のものがあると思われる。姿勢を低くする動作は自然的な性格が強いもので、人間の世界ばかりでなく動物の世界でも、前述のニホンザルのマウンティングにおける劣位のサルの姿勢のような例がある。

ところで、こうした表現手段の上での特徴は上下(高低)関係だけとはかぎらない。他にもいくつかのものが考えられる。一応の仮説だが、筆者はつぎのようなものを考えてみた。

(a)　上／下(高／低)。これについてはすでに述べた通り。

(b)　先／後(前／後)。言語表現では、他人と自分の名前(または代名詞)をならべてあげるときに、自分をあとにすることなどがその例である(佐藤さんと私、Mrs. Cook and I)。ただし、日本語社会では英語社会ほどその習慣は強くないようである。非言語表現では、部屋の出入り、乗物の乗り降り、食卓での飲食物のサービスの優先順序など。西洋人社会のレイディー・ファーストの作法は典型的なものだ。

(c)　大／小。言語表現では、「大兄」「小生」「小社」などといった表現はこの特徴が端的に現れた例である。随伴的な非言語表現では、手紙などで自分を表すことば(小生など)を小さく書くこともある。独立的な非言語表現で、手を体のうしろで組むといばった態度の表現になり、前で組むと丁重な態度の表現になるというのも、ひょっとしたらこの種の特徴と関係があるかもしれない。

(d)　美／醜または優／劣。言語表現では「玉稿」「芳情」「令嬢」「貴社」「弊社」「拙宅」などに見られるもの。この美／醜、優／劣の判定は社会によって異なることが少なくない。随伴的非言語表現で、日本の女性はあらたまった場合に声が高くなる傾向があることは前に述べた。しかし、日本では高い声がよいと認められるのかもしれないが、そうだからといって、日本以外の社会でも一般にそうであるとは言い切れない。筆者の経験では、英語社会では上品な話し方をめざす場合にはむしろ声が低くなる傾向があるように思う。各種の独立的非言語表現でそうぞうしい動作よりも静かな動作がよしとされるのは一般的なことかもしれない。

(e)　直接／間接、またはすぐ／ためらい。これはいろいろな形でいろいろな場合に見出されるものである。とくに日本語社会ではこの特徴を持った言語要素や行動の型が多用されている。尊敬語の要素として、いわゆる受身や自発の意味を表す要素と同じ「〜(ら)れる」が使われたり、「お〜になる」「お〜だ」のような表現が使われるのは、それらが話題になっている動作主の動作を直接的に表現しない、間接的な性格を持っているためと考えられる。人を示すのに、もともと方向を示す「あのかた」「このかた」のような言い方が用いられるのもそのためである。これが極端になると、前にふれた通り動作主や動作を受ける人間をことばで示すのを避けることになる。命令・勧誘・依頼の表現にさまざまな間接的な言い方が発達していることは、これまた前に見た通りである。この種の意味を表すためには、日本語以外の言語たとえば英語などにもいろいろな言い方があることはよく知られている(Would you mind 〜ing, Could you perhaps……, I wonder if you could……)。非言語表現にもいろいろのものがある。家または部屋にすすめられてもすぐはいらない躊躇の態度とか、ものを貰う場合の躊躇の態度などは間接またはためらいの特徴の現れとして典型的なものであろう。

(f)　順／逆。相手のいうことに従うか、さからってたてをつくか。その社会の習慣に従った行動をするか従わないかなど。日本人社会では、相手のいうことにさからわない(表現をする)傾向が強いということがよくいわれる。

相手の話に適当な反論をしながら会話を持続することがよしとされる社会もあるかもしれない。

(g)　注目／無視。これはけっきょく相手なり話題の人物なりにとくに注意を向けてそれを取上げる表現をするか、無視するかということである。非言語行動でこれが直接的に現われるのは、相手に敬意を表して注目することとそのもので、これが儀式化すれば「かしら右!」などの動作となる。それほどでなくても、だれかがしゃべっているときにその人に顔を向けるという習慣もある。あるいは、顔そのものの動作よりも、私語をやめて静聴することもそれである。西洋人社会では話をしている人に顔を向ける習慣が日本人よりはっきりしているように思われる。日本人社会では、たとえば三人以上の人が集って話をしているときに、その中の一人を話の中心点にする傾向がいちじるしいという観察がある(ネウストプニー一九七四)。言語表現としては、相手をさすことば(相手の名、称号、代名詞など)を話の適当な箇所にさしはさむことをその例としてあげることができるであろう。ただ、その意味するところが社会によって違うことがある。英語社会では、あいさつ、問いかけ、うけこたえなどの文の末尾に相手をさすことばを添えることは、表現を丁重にするはたらきを持っているようである(Good morning, Mr. Taylor.)。日本語社会では、どちらかというと相手との親しさを表現する効果があるのではないか。とくに、方言によってはそれが発達しているものが少なくない。河内弁の「よう来たのう、われ」というのもそうであるし、西九州の方言には「あなた」が終助詞化して「なた」「ばんた」「かんた」などの形になっているところがある。奄美・沖縄でも相手の名前を文末又は文頭に添える傾向がいちじるしいという(柴田一九七五)。島根県松江市では「あんた」のあいさつにおける使用が他の種類の話(用談、雑談など)におけるよりも多いという実態調査の結果の報告がある(国語研一九七一)。逆に無視の方もいろいろな形で現れるが、極端なものはさきに述べたコミュニケーションを拒否する行動である。

(h)　ととのい／乱れ。ととのいの典型的な例としては、あらたまった場合の服装や、儀式のときなどのかしこまっ

た姿勢をあげることができる。それは、随伴的表現としてのきちんとした発音のしかた、文字の書き方、書式、書写の材料のえらび方などにも見られる。言語表現としては、たとえば成分の省略をしないきちんとした形の文をいうか、成分の省略や中断の多い文をいうかといった現象がある。

(i) 装飾/非装飾。これは適当な用語とは思えないが、他によいものを思いつかないのでかりにそう呼んでおくことにする。言語表現で装飾というのは、たとえば「お〜」「ご〜」「み〜」といった接頭辞をつけたり、地位を示す各種の称号を人名の前または後につけたりするのがそれである。また、ほめことば的な語句を加えることもある。「わが親愛なる……」「われらが偉大なる英雄……」My dear……。逆に罵倒する表現を付け加えるのも装飾であることに変りはない。非言語表現では、各種の記章類(勲章、リボン、ワッペン、喪章など)や、花を身につける、特定の服装をする、旗などをかかげる、デコレーションをほどこすなどの例がある。話しことばに伴う随伴的表現では、話しながら微笑を絶やさない、とりつくろった声を出す、そら涙を流すなどはそうかもしれない。書きことばに伴うものには、印刷のしかたとか用紙などにそれこそ装飾的な要素が見られることが多いであろう。

これらの特徴のうちのどれがどのような形で現れるかは、それぞれの社会によって違う。まず、なにを顧慮の対象とするか、またそれにどのような内容の評価的態度を持つかによって違いが出て来る。たとえば日本語社会では、(表現上の)上下(高低)関係や直接/間接(すぐ/ためらい)、ととのい/乱れの諸特徴に基づいた表現が多用されているように見える。これはおそらくその背後にある日本語社会の慣習、文化の型となんらかの関係があるものと思われる。具体的にいえば、人間関係についての評価的態度における上下関係や、状況についてのあらたまり/ふつう/くだけの区別を強く意識することとか、日本人の一般的傾向としてよくいわれる言語的コミュニケーションについての一種の消極的姿勢を指摘することができよう。もっとも、確定的なことをいうためには、それぞれについて十分な調査を必要とする。

また、ここであげた諸特徴の中には、異なる社会、文化を通じて同じように受け取られる性格のものもあるし、社会によってその判定が違ってくるものもある。上下、先後、大小などというのはおそらくユニヴァーサルなものであろう。美醜(優劣)になると、社会、文化によってその判定の基準が違うことがありうることは前にもふれた。ととのい／乱れも似たような性格を持っているかもしれない。

三　敬語のはたらき

ふたたび、もっとも範囲の広いもの、すなわち待遇行動について考えることにする。敬語の機能またははたらきといっても、さまざまなものが考えられるが、ここではつぎの二つの点を問題にしようと思う。第一は、敬語はなにを表すかということである。第二は、敬語は人間の行うコミュニケーション全体の中でどのようなはたらきをしているかということである。

1　敬語はなにを表すか

常識的な言い方で簡単にいってしまえば、敬語が表す内容は、なんらかの対象についての言語主体の敬意(卑罵の表現などにおけるマイナスの敬意も含めて)であるということになりそうである(なお、ここまで「言語主体」ということばを使ってきたが、以後非言語表現の主体も含めて考えるときには「表現主体」と言うことにしたい)。しかし、敬語が表しているもののなかみはかならずしも単純ではない。筆者は以前、第一章で述べたような敬語の一般的性格についての考え方に基づいて、敬語の意味の構造についてつぎの三つの要素をたてる仮説を考えた(林大・林四郎・芳賀・南一九七四、南一九七四a、b)。

顧慮の対象
扱いの対象
扱い方の特徴

つまり、これらの要素の組合せによって敬語の表す内容を説明しようとしたわけである。ここでも、その考え方に従って述べることにしたい。

今右にあげた三つの要素のうち、顧慮の対象と扱いの対象を区別する理由はつぎの通りである。

まあ、このパンはおくさまがお焼きになりましたの？

このたび、貴社で開発されました新機種は……

などの場合の「おくさま」「お焼きになりました」「貴社」「開発されました」は、相手そのもの（「おくさま」「貴社」）または相手の行動（「お焼きになりました」「開発されました」）の表現である。大ざっぱにいえば、ここでは言語主体の敬意がめざす対象と、敬語的に表現されたものとは一致している。ところがつぎのような例になると、すこし事情が違ってくる。

大変おみごとな御作品と拝見いたしました。

この場合その作品の作り手が相手だとしても、「おみごと」とか「御作品」とかと表現されているものは相手自身、またはその状態ではない。そして、いうまでもなく言語主体は相手の作品そのものに敬意を表しているわけではない。言語主体は相手に対する敬意を表すために作品とかその状態についてそのような表現をしたのである。前にここで使った顧慮ということばを使うならば、相手についての顧慮の結果、相手以外のものについてそうした表現をしたのである。そこで、顧慮の対象と区別して、表現面でなんらかの敬語的な扱いをされる対象（ここでは「みごと」「作品」）を「扱いの対象」と呼ぶことにする。もっとも、この例ではまだ扱いの対象は顧慮の対象に属する事物だということ

もできるが、両者が明らかにはなれている場合もある。そうした顧慮の対象と扱いの対象との区別について、林四郎はつぎのような例をあげてたくみに説明している。

小さな子供に、「お月様がまん丸だね」と言ったとします。月を「お月様」と呼んだのは、子供を顧慮の対象にしているからですが、直接、ことばで扱っているのは、子供ではなくて、月です。ですから、扱いの対象は、月で、それに尊敬語の「お」と「様」をつけて「お月様」にして発話したわけです。顧慮の対象は、話し相手である子供ですが、それにつれて、子供と月との、親しいと想像される関係が顧慮の対象になっているとも言えるでしょう。（林一九七六）

われわれが常識的にばくぜんと敬意（または敬意の表現）と考えているものには、なんらかの顧慮の対象に対する顧慮と、なんらかの扱いの対象についての扱い（そしてその扱い方）という違った要素が含まれていることに注意しなければならない。

なんらかの対象について顧慮をする主体はつねに表現主体であると考えられる。顧慮の対象として考えられるものは、そのときのコミュニケーションに参加している人間（表現主体、相手、話題になっている人物）そのもの、またはそれらの人間どうしの間の関係、人間と話題になっていることがらとの関係、話題になっていることがら一般、および状況である。

人間が顧慮の対象として問題になっている場合には、それはある人間そのものよりも、人間と人間との間の関係であることが多いと、筆者は考えている。

山田「御令息のおくさんの御実家はたしか野田様でいらっしゃいますね」

林田「うん、そうだよ」

山田が林田の職場での部下であるような場合、そしてかりに野田家が山田にとっては不倶戴天の敵のような存在であ

ったとしても、山田は林田に対しては涙をのんで右のような言い方をすることもありうると思われる。ここでは言語主体と相手との関係(山田―林田)、相手と話題になっている人間との関係(林田―息子、林田―息子の嫁、林田―野田)が、言語主体の顧慮の対象となっている。

おじいさんは殿様からたくさんのごほうびをいただきました。

サー・ウォーター・ローリーは女王に自分のマントをしいてさし上げた。

における謙譲語「いただく」「さし上げる」では、第三者どうしの関係(おじいさん―殿様、サー・ウォーター・ローリー―女王)が問題となる。もっとも、顧慮の対象として人間が問題になる場合は、かならず人間どうしの関係が対象となるのかというと、そうともかぎらないようである。以前筆者は、そのような場合顧慮の対象となるのは、いつも人間と人間との関係だと主張して、林大から批判を受けたことがあった(林大・林四郎・芳賀・南一九七四、とくにその「五　討論」の部分参照)。今でも多くの場合は人間と人間の間の関係が対象となると考えているが、場合によってはたしかに林大の意見のように、ある人間そのものを顧慮の対象と見た方がいいこともある。たとえば、相手が外国人だからその人の言語を使って話すとか、聴力に障害のある人だから声を大きくするなどという場合がそれである。

顧慮の対象として表現主体自身を考えなければならない場合がある。それは、表現主体自身についてなんらかの必要がある場合、たとえば自分が女性であるから女性用語を使う、男性だから女性用語は使わない、あるいは一種のstatus symbolとして敬語を使うなどといったことがあるからである。非言語行動においても、男性、女性それぞれの服装をするなどということについては、そのときの状況あるいは相手に対する顧慮のほかに、しばしばこの種の顧慮が働いていると思われる。

相手について、直接の相手とワキの相手とを区別する必要がある場合がある。表現主体、直接の相手のそばに同席

しているの第三の人間(ワキの相手)が、発言しなくても表現主体の敬語的表現の使用に影響を及ぼすことがあると考えられるからである。たとえば、話題の人物自身とかその縁故者がワキの相手として同席しているときには、その話題の人物について尊敬語の表現を用いる、その人物がいないときには尊敬語を用いないなどということは、われわれの日常しばしば経験するところである。

動作主と被動作主(なんらかの動作を受ける者)とを区別する必要がある場合もある。その場合、動作主はふつうの尊敬語(「〜(ら)れる」「お〜になる」「お〜なさる」など)に関係したもの、被動作主は謙譲語の一部または対象尊敬語(松下一九三〇、北原一九六九)と呼ばれるもの(「〜てあげる」「〜てさしあげる」「お〜する」など)に関係したものである。

人間と話題になっていることがらとの関係が、顧慮されることがある。その場合の顧慮は、たとえば相手側に属するものごとには尊敬語的要素を使い、表現主体側に属するものごとには謙譲語的要素を使うといった場合に見られるものである。

顧慮の対象とすることができるものの種類と範囲には、待遇行動の要素によってさまざまな違いがある。動作主に関する顧慮が見られるのは、「いらっしゃる」「おっしゃる」「お〜になる」「〜(ら)れる」などの尊敬語である。謙譲語の中の「〜(て)さしあげる」「お〜する」「〜(て)くださる」「お〜いただく」といったものでは、動作主とともに被動作主に関する顧慮がある。そして、尊敬語や謙譲語の多くのものについての一つのいちじるしい特徴は、顧慮の対象たる動作主あるいは被動作主がその場にいない第三者であってもよいということである。「その方ならつい さきほどお帰りになりました」「うちの母があちらへお届けすると言ってましたけれど……」。一方、ていねい語ではこうした動作主、被動作主に関する顧慮は見られない。もっぱら問題になるのは、相手、状況、そして話題になっていることがらについての顧慮である。

一般的にいって、顧慮の対象の範囲は、狭義の敬語以外のものでは不自由になる。もっとも、言語表現の中で「〜やがる」「くそ〜」といった卑罵の表現は、尊敬語なみにその場にいない動作主についても使うことができるが、言語表現の他のものは相手または状況に関する顧慮にもとづいて使われるのがふつうのように思われる。非言語表現になるとなおさらで、おそらく現代日本の社会では非言語表現によってその場にいない人物に敬意を表するのは不可能に近いというべきであろう。過去の時代の例としては、天皇の名を書くとき前を一字あけたとか、行のはじめに書くようにしたとか、第二次大戦中フォーマルな状況のもとでは、天皇が話題になるときにその場にいるものが直立不動の姿勢をとったなどということがある。また永井荷風は、文壇の先輩の森鷗外、上田敏のことを話すときにはきちんと膝を正して話したものだという。

ところで、顧慮の対象をより具体的に見ると、その種類によっては、狭義の敬語あるいは言語表現一般よりも、非言語表現がより大きな程度で関与しているものもありそうである。その一つの例として、神、仏、自然、死者といった、いわば超人間的存在を相手とした場合をあげることができる。過去の時代では、この場合もそのための言語表現がよく用いられたこともあったと思われる。たとえば、神に対する特殊な呼び方、祈り、祝詞などの文章に用いられた表現がそれである。しかし、現代日本の社会では、どちらかというと、非言語的な表現の方が、この点に関しては言語表現より優勢なのではないか。仏前で合掌する、神前で手を打つ、キリスト教会で十字を切る、死者に頭を下げる、また合掌する、黙禱する、花その他の供物をそなえるなどいろいろな行動が見られる。

扱いの対象と考えられるものの一つは、言語主体、相手および話題になっている人間そのもの、あるいはそれらに関することがら(動作・状態、その他それらになんらかの関係のある事物など)の表現である。もう一つは、言語主体の態度(ていねいな態度、あらたまりの態度、怒りの態度……)そのものの表現である。

扱い方の特徴の背景にあるのは、前述の評価的態度、そしてその観点である。ある対象を上と見るか下と見るか、

社会的・心理的に遠いと見るか近いと見るか、あらたまったものと見るか、ある表現(行動)を上品と見るか乱暴と見るか、強いと見るか弱いと見るかといったようなことである。ただし、評価的態度の上下関係はさらにいくつかのものに分けることができる。単純に持ち上げるか見くだすか、なにかについての恩恵的関係(負い／負わせ)を認めるか、おそれるかあなどるか。

ある一つの敬語の要素を取上げて考えたときに、その表す内容において、今右に述べてきたような顧慮の対象や扱いの対象、扱い方の特徴が、それぞれ一つずつしか問題にならないということはない。むしろ、複数のものが問題になっている場合が多い。たとえば、「お〜になる」という尊敬語の要素について考えてみると、顧慮の対象としては、むろん動作主そのもの、または言語主体と動作主との関係が問題になるが、そのほか言語主体と相手(直接、ワキ)との関係、相手(直接、ワキ)と動作主との関係なども顧慮の対象としてあげることができる。たとえば、動作主が言語主体にとって目上の相手の身うちの者である場合にこの要素が使われるということもあるからである。また、扱い方の特徴についても、「持ち上げ」のほかに、「あらたまり」「上品」「遠ざかり」の特徴を認めることができる。ある敬語の要素の表す意味の構造は、こうしたいくつかの構成要素の複合として把握できるような性格のものだということができる。また、このように分析してみると、いろいろな敬語の要素のおたがいの間の共通点と相違点をくわしく指摘することができる。たとえば表2に示すように、謙譲語の「いたす」「存ずる」などは、顧慮の対象、扱いの対象の点では尊敬語と共通している。ところが一方、扱い方の特徴ではていねい語の「ございます」と共通であって、尊敬語とは異なる。

以下、待遇行動の要素の中からいくつかのものをあげて、それぞれが表す内容を概観したいと思う(表2)。

躊躇する態度	＋	＋	−	−	＋	±	−	−	±	−	−	−	±	±	−	−	±	±	−	−	−	−	−	＋	±	±	±	＋	＋	＋	＋
フォーマルな服装	＋	±	−	−	±	±	−	−	±	−	−	−	±	−	−	−	±	＋	−	−	−	＋	±	±	±	＋	＋	±	＋	±
印刷した手紙	＋	＋	−	−	＋	±	−	−	±	−	−	−	±	±	−	−	±	±	−	−	−	＋	±	±	±	＋	＋	±	＋	±
手書きの手紙	＋	＋	−	−	＋	±	−	−	±	−	−	−	±	±	−	−	±	±	−	−	−	＋	±	±	±	−	±	±	±	±
間投音 吸気のスー	＋	＋	−	−	＋	±	−	−	±	−	−	−	−	−	−	−	−	＋	−	−	−	＋	±	±	±	＋	＋	＋	＋	＋
融合形 〜ちゃったなど	±	＋	−	−	＋	±	−	−	±	−	−	−	±	±	−	−	±	＋	−	−	−	＋	±	±	±	−	−	−	±	±
命令・依頼の表現² 〜していただけるといいんですけれど	±	＋	＋	−	＋	±	＋	−	±	＋	−	−	±	＋	＋	−	±	±	＋	−	−	＋	＋	＋	±	＋	＋	＋	＋	＋
命令・依頼の表現¹ 〜なさい、いらっしゃいなど	±	＋	＋	−	＋	±	＋	−	±	＋	−	−	±	＋	＋	−	±	±	＋	−	−	＋	±	±	±	−	±	−	±	±
語彙² 幼児語(成人語に対して)	±	＋	±	±	＋	±	±	±	±	±	±	±	±	±	±	±	±	±	＋	＋	＋	−	±	±	±	−	−	±	±	±
語彙¹ 漢語(和語に対して)	±	＋	±	±	＋	±	±	±	±	±	±	±	±	±	±	±	±	＋	＋	＋	＋	−	±	±	±	±	＋	±	±	±
間投詞・応答詞² こらこら、おう、いや	＋	＋	−	−	＋	±	−	−	±	−	−	−	±	±	−	−	±	±	−	−	−	＋	−	±	−	−	−	−	−	−

＋	±	−
持ち上げ	中立	見くだし
負い	中立	負わせ
おそれ	中立	あなどり
遠ざかり	中立	近づき
あらたまり	中立	くだけ
ためらい	中立	すぐ
上品	中立	乱暴
弱	中立	強

* 表中の「顧慮の対象」と「扱いの対象」の欄における＋，−はその項目が問題になるかならないかを表す．±は問題になったりならなかったり．「扱い方の特徴」の＋，±，−は上の意味を表す．

表 2

内容＼要素		尊敬語[1] 〜(ら)れる、お〜になる、〜さま	尊敬語[2] 〜てくださる	謙譲語[1] 〜てさしあげる、〜申しあげる	謙譲語[2] 〜いたす、存ずる	ていねい語[1] 〜です、〜ます	ていねい語[2] ございます	美化語 お〜、ご〜	卑罵表現 〜やがる、〜くさる、〜め	間投詞・応答詞[1] もしもし、はい、いいえ
顧慮の対象	人間そのもの									
	表現主体自身	±	±	±	+	+	+	+	±	+
	相手	±	±	±	+	+	+	±	±	+
	動作主	+	+	+	+	−	−	±	+	−
	被動作主	−	−	+	−	−	−	±	−	−
	人間関係									
	表現主体－相手(直接)	±	±	±	+	+	+	±	±	+
	表現主体－相手(ワキ)	±	±	±	±	±	±	±	±	±
	表現主体－動作主	+	+	+	+	−	−	±	+	−
	表現主体－被動作主	−	−	+	−	−	−	±	−	−
	相手(直接)－相手(ワキ)	±	±	±	±	±	±	±	±	±
	相手－動作主	±	±	±	±	−	−	±	±	−
	相手－被動作主	−	−	±	−	−	−	±	−	−
	動作主－被動作主	−	−	+	−	−	−	−	−	−
	人間とことがらとの関係									
	表現主体－ことがら	±	±	±	±	±	±	±	±	±
	相手－ことがら	±	±	±	±	±	±	±	±	±
	動作主－ことがら	±	±	±	±	−	−	±	±	−
	被動作主－ことがら	−	−	±	−	−	−	±	−	−
	その他ことがら一般	±	±	±	±	±	±	+	±	±
	状況	±	±	±	±	+	+	+	±	±
扱いの対象	動作主に関することがらの表現	+	+	+	+	−	−	+	+	−
	被動作主に関することがらの表現	−	−	−	−	−	−	+	−	−
	その他ことがら一般の表現	−	−	−	−	−	−	+	−	−
	表現主体自身の表現	−	−	−	−	+	+	−	−	+
扱い方の特徴	持ち上げ／中立／見くだし	+	+	−	−	−	−	+	−	±
	負い／中立／負わせ	±	+	−	±	±	±	±	±	±
	おそれ／中立／あなどり	±	±	±	±	±	±	±	−	±
	遠ざかり／中立／近づき	+	+	+	+	±	+	±	−	±
	あらたまり／中立／くだけ	+	+	+	+	±	+	±	−	±
	ためらい／中立／すぐ	−	−	±	±	±	±	±	−	±
	上品／中立／乱暴	+	+	+	+	+	+	+	−	±
	弱／中立／強	±	±	±	±	±	±	±	−	±

2　コミュニケーション全体の中での敬語のはたらき

ことばによるコミュニケーションについてだけ考えてみても、そのはたらき(機能)は一様ではない。単純に考えると、なんらかの事実または論理的関係などのことがらについての情報を伝達する——たとえば「今こちらでは強い風が吹いている」「一五に七をたすと二二になる」といったような——ことが、ことばのおもなはたらきのように思われる。しかし、ことばの機能はそれだけではない。なにかに失敗したとき、そのくやしい思いを表現する「ちくしょう!」というのもことばであるし、はなれたところに友人のすがたを認めて「おーい」と呼びかけるのもことばである。道であった友人に「ひどい風だね」というのは、別に「強い風が吹いている」という知識を相手に与えるためではない。両者とも強い風が吹いていることは先刻承知のはずである。これは、いわばおたがいの社会的関係の再確認のようなものである。そうした目的のためにもことばは使われる。なぞなぞやしりとりも、もちろんりっぱな言語表現だが、これらのおもな機能は「遊び」である。「校長先生はきのうの午前一一時になにをしていましたか?」といったとしても、実質的な情報を含む返答を期待する質問だとは、だれも考えはしない。

ことばの機能としてどのようなものを認めるかということについては、さまざまな意見が今までにも提出されている(池上一九五七、Jakobson 一九六〇、岩淵一九六五、一九七〇、林四郎一九六六、Hymes 一九六八、Mackey 一九六八、国語研一九七一、南一九七四bその他)。ここでは、一般のコミュニケーションの機能と考えられるものの中から、もっぱら敬語的表現に関係があると思われるものとしてつぎのようなものを取上げる。

(一)　社会的関係の開始・打ち切りに関するもの。人と会ったときや別れるときのあいさつとか、呼びかけ・応答などはこの機能を持つ典型的なものだ。そうした種類の文章の現れ方ばかりでなく、それらの中での各種の敬語的要素の使用も問題となる。

(二)　社会的関係の維持に関するもの。会話を続けること、文通を続けることといった行動は、もちろんこの機能を持っているが、そのほかたとえばていねい語その他の敬語の要素も関係がある。もっとも、親しい間がらではていねいな表現の使用はお互いの間の疎隔をもたらすこともあり、逆に敬語の要素を使わないことが社会的関係を続けさせる場合もある。

(三)　社会的位置の保持に関するもの。たとえば、作法一般についてそれぞれの社会の習慣に従う(少なくとも大きな程度でさからわない)ことは、各個人がそれぞれの社会のメンバーとして存在することの保証の一部となるであろう。これは敬語(とくに狭義の)の使用を含む、いわゆることばづかいについても同様である。

(四)　実質的情報の受け渡し。なんらかの事実または論理的関係などのことがらについての情報の伝達である。ちょっと考えると、敬語的表現はこの機能とは関係がないようだが、日本語の尊敬語、謙譲語などの要素が使われている場合には、動作主や被動作主を明示することばがなくても、だれが(だれに)なにをする(される)かがわかってしまうことがしばしばある。前述の、尊敬語または謙譲語の使用により相手を直接さす語を避けて、相手に敬意を表す表現も、この種の機能の存在によって可能となる。古い時代の日本語で、たとえば源氏物語を読んでいて敬語の使い方をたよりに意味上の主語を推定するなどというのも、この機能を利用しているわけである。

(五)　相手に対する強制、訴えなど。これが典型的に出てくるのは、命令・依頼の表現、問いかけの表現などだ。つまり、言語行動を含む各種の行動を起すことを相手に要求するものである。

(六)　美的価値の表現。これはすべての敬語的表現の第一の目的ではないかもしれないが、どの表現にもなんらかの程度で付随しているものだと思われる。典型的なものとしては、たとえば作法一般、非言語的表現のなかの随伴的なもののいくつか(笑い、ジェスチャー、字の書き方……)、またことばづかいそのものにおいて認められるであろう。社会によっては、あらあらしい、乱暴な動作やことばづかいが好ましいものと認められて、そこでの社

会的関係の維持または社会的地位の保持に役立つ場合もあるだろう。

常識的に考えれば、一般の敬語的表現はいつもなんらかの人間関係に関係するということができるから、右にあげたものでいえば、もっぱら社会的関係に関する機能のための存在であるように見える。たしかに、一般の敬語的表現のはたらきとしてはまずそれを考えなければならないが、これまた右に述べたようにそのほかの機能との関係も認められるのである。以下、そのそれぞれと各種の敬語的表現との関係を見ようと思う（表3）。

表 3

要素＼機能	社会的関係の開始・打ち切り	社会的関係の維持	社会的位置の保持	実質的情報の受け渡し	相手に対する強制・訴えなど	美的価値の表現
尊敬語₁ ～さま ～(ら)れる，お～になる	±	＋	＋	＋	－	＋
尊敬語₂ ～てくださる	±	＋	＋	＋	±	＋
謙譲語₁ ～申しあげる ～てさしあげる	±	＋	＋	＋	－	＋
謙譲語₂ ～いたす，存ずる	±	＋	＋	＋	－	＋
ていねい語₁ ～です，～ます	±	＋	＋	－	－	＋
ていねい語₂ ございます	±	＋	＋	－	－	＋
美化語 お～，ご～	－	＋	＋	＋	－	＋
卑罵表現 ～め，～やがる，～くさる	±	±	±	＋	±	±
間投詞・応答詞₁ もしもし，はい，いいえ	＋	＋	±	－	＋	＋
間投詞・応答詞₂ こらこら，おう，いや	＋	＋	±	－	＋	±
語彙₁ 漢語(和語に対して)	－	＋	±	＋	－	＋
語彙₂ 幼児語(成人語に対して)	±	＋	－	＋	±	±
命令・依頼の表現₁ ～なさい，いらっしゃいなど	±	±	±	＋	＋	＋
命令・依頼の表現₂ ～していただけるといいんですけれど	±	＋	±	＋	＋	＋
融合形 ～ちゃったなど	－	＋	±	－	－	＋
間投音 吸気のスー	±	＋	±	－	－	＋
手書きの手紙	＋	＋	±	＋	±	＋
印刷した手紙	＋	＋	±	＋	±	＋
フォーマルな服装	＋	＋	＋	－	－	＋
躊躇する態度	＋	＋	＋	－	－	＋

＊ ＋，－はそれぞれの項目が関係があるかないかを表す．±は関係のある場合もあり，ない場合もあるというもの．

美的価値の表現というのは、ほとんどすべての敬語的表現に共通して認められるものだが、その具体的内容は表現の要素によって非常に異なる。いわゆる美化語の表す内容と卑罵表現のそれとは、たがいに極端に異なっているものの典型的な例である。

一つ一つの表現の要素はそれぞれなんらかの機能を一つしか持たないということはない。むしろ、いくつかの機能を同時に持っているのがふつうである。第1節で見た、敬語的表現の表す意味内容の場合と同様、このコミュニケーション上の機能についても、それぞれの要素に共通しているものと、たがいに相違しているものとがある。たとえば、「相手に対する強制・訴え」は、命令・依頼の表現には当然あると考えられるが、その他の多くの表現には認められない。「実質的情報の受け渡し」の機能は言語的表現の多くに共通して見られるが、非言語的表現には認められない。

ところで、敬語のはたらきを考える場合には、さらにことばの体系の外(あるいは一般の記号行動の体系の外)の世界のものごととの関係を明らかにする必要がある。一般的にいって、ことばの体系(そして一般の記号行動の体系)はそれ自身自律的な性格を示す側面を持っている反面、そのすべての要素のありかたはいつもその体系の外の世界のものごとによって条件づけられていると考えられる(南一九七四b)。敬語的表現も例外ではなく、その分析のためにはその現れを規定する条件となる外の世界のさまざまなものごとについての十分な情報を得なければならない。それについてはここではほとんどふれることができなかった。

(1)　筆者は今まで「配慮」ということばを使ってきたが、ここでは林四郎(一九七六)に従って「顧慮」にあらためた。
(2)　『国語学辞典』(一九五五、国語学会編、東京堂出版)「敬語」の項参照。
(3)　夏目漱石が明治三八年に野間真綱に与えた手紙の中に、こうした宛名と差出人の書き方について注意したものがある。

参考文献

池上禎造　一九五七「言語生活の構造」(岩淵悦太郎・林大・大石初太郎・柴田武編『講座現代国語学 I』筑摩書房)

岩淵悦太郎　一九六五『現代の言葉』講談社

岩淵悦太郎　一九七〇『現代日本語』筑摩書房

梅田博之　一九七四「朝鮮語の敬語」(『敬語講座 8 世界の敬語』明治書院)

大石初太郎　一九七一「敬意と敬語」(『話しことば論』秀英出版)

大石初太郎　一九七四『敬語』筑摩書房

大石初太郎　一九七六a「待遇語の体系補説」(『専修国文』二〇号)

大石初太郎　一九七六b「待遇語の体系」(『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』表現社)

奥山益朗　一九七一『日本人と敬語』東京堂出版

北原保雄　一九六九「敬語の構文論的考察――動詞の敬語法とそのアスペクト――」(『佐伯梅友博士古稀記念国語学論集』表現社)

金田一春彦　一九六四「話しことばの敬語的表現」(『言語生活』一四九号)

国立国語研究所　一九五七『敬語と敬語意識』(『国立国語研報告 11』)秀英出版

国立国語研究所　一九七一『待遇表現の実態――松江二四時間調査資料から――』(『国立国語研報告 41』)秀英出版

崎山理　一九七四「ジャワ語の敬語」(『敬語講座 8 世界の敬語』)

柴田武　一九七五「沖縄における呼びかけの習慣」(『伊波普猷全集』月報8、平凡社)

柴田武(編)　一九七六『朝日小事典 現代日本語』朝日新聞社

多田道太郎　一九七二『しぐさの日本文化』筑摩書房

鈴木孝夫　一九七三『ことばと文化』岩波書店

辻村敏樹　一九六七『現代の敬語』共文社

辻村敏樹　一九七六「敬語と非敬語――敬語研究の問題点――」(『国語と国文学』六三二号)

時枝誠記　一九五〇『日本文法 口語編』岩波書店

外山滋比古　一九七六　「文化と敬語」(『国文学』二一巻一二号臨時号)
ネウストプニー　一九七四　「世界の敬語――敬語は日本語だけのものではない――」(『敬語講座 8 世界の敬語』)
野元菊雄　一九六七　「敬語をどう使い分けているか」(岩淵悦太郎・飛田良文編『講座ことばの生活 3 ことばの倫理』筑摩書房)
野元菊雄　一九七四　「敬語の研究――調査・分析の方法――」(『敬語講座 10 敬語研究の方法』)
芳賀綏　一九七三　「敬語・態度・行為」(林四郎・南不二男編『敬語講座 7 行動の中の敬語』)
林大・林四郎・芳賀綏・南不二男　一九七四　「敬語の体系」(『敬語講座 1 敬語の体系』)
林四郎　一九六六　「言語行動のタイプ」(『文体論入門』日本文体論協会編、三省堂。『言語表現の構造』一九七四に再収)
林四郎　一九七三a　「表現行動のモデル」(『国語学』九二集。『言語表現の構造』に再収)
林四郎　一九七三b　「敬語行動のタイプ」(『敬語講座 7 行動の中の敬語』)
林四郎　一九七六　「敬語のしくみはどうなっているか」(『国文学』二一巻一二号臨時号)
松下大三郎　一九三〇　『改撰標準日本文法』中文館書店、一九七四勉誠社より覆刻再刊
南不二男　一九七三　「行動の中の敬語――敬語はことばだけとは限らない――」(『敬語講座 7 行動の中の敬語』)
南不二男　一九七四a　「現代敬語の意味構造」(『国語学』九六集)
南不二男　一九七四b　『現代日本語の構造』大修館書店
南不二男　一九七四c　「敬語研究の観点」(『敬語講座 10 敬語研究の方法』)
南不二男　一九七六　「日本語の敬語」(金田一春彦編『日本語講座 1 日本語の姿』大修館書店)
宮地伝三郎　一九六六　『サルの話』岩波書店
宮地裕　一九七一a　「敬語論」(『文論』明治書院)
宮地裕　一九七一b　「現代の敬語」(辻村敏樹編『講座国語史 7 敬語史』大修館書店)
Brown, R. W. and A. Gilman　1960　The Pronouns of Power and Solidarity (Style in Language, T. A. Sebeok ed., M. I. T. Press)
Hymes, Dell　1968　The Ethnography of Speaking (Readings in the Sociology of Language, J. A. Fishman ed., Mouton)

Jakobson, Roman 1960 Linguistics and Poetics (Style in Language)

Mackey, William F. 1968 The Description of Bilingualism (Readings in the Sociology of Language)

Martin, S. E. 1964 Speech Levels in Japan and Korea (Language in Culture and Society, D. Hymes ed., Harper & Row)

Neustupný, Jiři V. 1968 Politeness Patterns in the System of Communication (Proceedings, VIIIth International Congress of Anthropological and Ethnological Sciences, Science Council of Japan)

2　日本語の敬語の構造と特色

辻村敏樹

一　敬語と敬意

敬語の概念規定のしかたには過去から現在に至るまで諸説あって定まらないが、それらに共通して言えることは「敬意を表わすことば」とする点であろう。[1]

もっとも、後に述べるように、敬語の一部に関しては、時枝誠記の説のような否定的な見解も見られはするが、[2]一般的に言えば、右のような考え方は大方の認めるところと言ってよいであろう。

ところが、敬意とは何かということについては、従来あまり立入った考察もなされずに来たように思われる。[3]それはあるいはわかりきったことであり、改めて説明を必要とすることもないと考えられてきたためかも知れない。事実、国語辞書の類を試みにひもといてみても、「尊敬の気持」とか「相手を敬う気持」とかいった大同小異の説明が見られるだけである。

したがって、敬語は最も一般的に言えば、「尊敬の気持を表わすことば」とか、「相手を敬う気持を表わすことば」とかいうことになるであろう。

しかし、果してそれでよいかというに、そこにはいろいろな問題があるように思われる。

まず、「敬意」というものを右に見たようなごく普通の意味で考えたとしても、敬語を前述のように規定することは問題であろう。なぜなら、敬語は必ずしも話し手の敬意を表わすとは限らないからである。このことは特に現代敬語の実態に即して考える時に言えることであり、敬語がすでに敬語の名に値せず、むしろ社交語とでも呼ぶべきものになっていることについては、つとにその事実を指摘したが、[4]大石初太郎・宮地裕なども社交敬語の名を用いて現代

敬語の現象を説明している。[5]

勿論、「敬語」ということばが用いられはじめた当時は、字義どおり、敬いを表わすことばと考えられていたに違いないし、また、それゆえにこそそのような名が与えられたものと思われる。そのことは「敬語」という語の前身の「敬ひ詞」「崇め詞」といった言い方においても同様であったろうし、[6]さらに遡って、敬語そのものの起こりが、人智人力を超えた自然や神への畏敬に発していることは想像に難くない。

しかし、今日の敬語の使いざまを見ると、敬語が真に敬意を以て用いられていることはむしろ稀であり、それは上下・親疎・恩恵の授受等々の関係によって用いられているのである。つまり、表現主体は、相手や話題の人物が、自分から見て上位者であるとか、疎遠な関係にある人であるとか、あるいは恩恵を与える人であるとかといった場合に敬語を用いるのであり、もっと厳密に言えば、そのような認識をした場合に敬語を用いると言うことができるのである。ところが、そういう人に対して、表現主体は必ずしもいわゆる敬意を持っているとは限らないのである。そこで、敬意の有無と敬語使用とは別のことであるとする考えも出て来るのであるが、[7]それは、敬語といわゆる敬意とは必ずしも関係がないというように理解すべきことと思われる。そういう意味では、敬語と敬意の関係を辞の敬語のみに限定した時枝誠記が話し手の敬意の直接的表現であるとした「です」や「ます」でさえ、敬意を表わすと言えるかどうか問題である。[8]

しかしまた、相手なり話題の人物なりを上位者や優位者として認識し、その認識に基づいて、それに応じた言語形式、つまり敬語を用いるということ自体、広義の敬意表現と見なすこともできるわけで、そういう意味では、現代敬語といえども、敬意と無縁ではないと言えるのである。これは言語表現の場合に限ったことではなく、たとえば、年上の人を上席に据えるとか、上役が部屋にはいって来たら頭を下げるとかいったことも、その人を人間的に尊敬しているとかいないとかいうことではなく、社会的慣習に従って行動しているにすぎないのであるが、そういう行動は年

上の人や上役に対して敬意を表した行動であるとされるのであり、したがって、それらの人に対して敬語を用いる場合も、そういう意味での敬意は示されていることになる。勿論、そうした場合でも、動作者なり話し手なりが、真の意味の敬意を抱いている場合もあるが、そして、それが本来のものであったのであろうが、敬語によって表わされる敬意とは、それよりも、相手や話題の人物に対する表現主体の上向関係の認識に基づくものであるとするのが敬語使用の実態に即したものと言えよう。

以上のように考えて来ると、敬語が敬意を表わすことばであるという場合の敬意とは、上位待遇意識とでもいうことになろうか。ただし、その上位待遇とは、前述のように、相手や話題の人物を上位者、優位者、恩恵者、疎遠者等、敬語的に上位として扱うことを意味するものである。

敬語は、はじめは畏敬の対象に対する賛美や敬避の意識を以て用いられ、後に階級的上下の観念に基づいて用いられるようになったものと思われるが、遠く遡って、文献的に最も古い八世紀の資料、たとえば『万葉集』などでもすでに、恩恵意識や親疎関係による使用例は存在するのであるから[9]、敬語と敬意との関係は、過去現在を通じて、右に述べたようなものと考えて差支えないものと思われる。したがって、もし、そこに時代による違いがあるとすれば、階級的上下関係の意識が強いか、社交的意識が強いかといったような傾向の差があるにすぎないと言ってよかろうと思う。

二　敬語成立の条件

敬語が言語である以上、敬語の成立条件であるところの、(1)表現主体、(2)表現受容者、(3)表現素材の三者を必要とすること言うまでもないが、敬語はそれだけの条件で成立するわけではない。それに加えても

う一つ重要なことは、表現主体が、ある人物・事柄について述べるに当って、その人との関係において、前記の上位待遇意識(敬意)を抱き、それを言語形式の上に反映させるという意図を持つことである。

たとえば、Aなる人物が発見という行為を行ったとした場合、「Aが発見した。」という表現は、一応対人関係無顧慮の表現ということができる。それは歴史的事実の叙述などにおいて普通に見られることで、「コロンブスがアメリカ大陸を発見した。」などというように用いられるものである。

ところが、Aなる人物が発見という行為を行ったという事実は、対人関係を考慮した上でなお、「Aが発見した。」というように表現される場合もある。それは、話題の人物Aや聞き手が、話し手にとって対等、あるいはそれ以下の人物である(と認識された)場合である。しかし、もし、話題の人物が話し手より上位の人物である(と認識された)ならば、右の表現は「Aが発見された。」となるであろうし、さらに、聞き手も話し手より上位(と見なされる)なら、「Aさんが発見されました。」などといった表現となることが考えられる。

したがって、敬語成立のためには前記の、言語としての成立条件が、基本的なものとして必要ではあるが、それに加えて、上向的対人関係の認識、つまり、ここに言う敬意の存在が必要となる。そして、そういう意味でなら敬語と敬意は無関係でないどころか、ふたたび密接な関係を持つことになる。

そこで、次には、どのようなものが上向関係として考えられるかということが重要なテーマとなってくる。つまり、敬語を成立させる基本条件としての上位待遇意識を生み出す条件は何かということであるが、これには対人関係以下、さまざまな条件が考えられ、南不二男に詳しい考察もあるが[10]、今、筆者の主要と考えるものを左に掲げる。

1 対人関係の条件

敬語を左右する最も大きな条件は対人関係であるが、それには以下に述べるようなものがある。

(一)　上下関係

一口に上下関係と言ってもいろいろあるし、時代によっても様相を異にするが、次のようなものが、いつの時代でも重要な条件になっていることは言えよう。

(1)　同一組織内の地位

これは、会社や官庁における上役と部下との関係のたぐいであり、現代生活においては、敬語を左右する最も強いファクターの一つと言ってもよいであろう。かつての軍隊における位階や、武士の身分差に基づく敬語使用も当然この種のものである。宗教界における同一宗派内の序列も同様。その他、大学における教授、助教授、講師、助手といった違いなどもある。

(2)　社会階層

江戸時代における士農工商の身分差は周知のように厳然たるものがあり、町人は常に武士に対して敬語を用いなければならなかった。つまり、社会階層は敬語使用の前提条件となっていたと言える。しかし、そういう身分差のなくなった今日では、そういった意味での敬語使用はほとんどなくなっている。ただ、皇室に対しては、戦前戦後を通じて、とくに報道関係などで、一定のルールに則った敬語の用い方が行われているが、それも戦前に比べ、戦後はよほど簡略になっている[11]。

では、皇室に対する場合を除いて、この種の敬語使用は全然なくなってしまったかというと、必ずしもそうとは言えないようである。「職業に貴賤なし」ということが言われる反面、職業についての価値評価は依然としてあるようで、そうしたものの反映の一つとして、毎年春秋に行われる叙勲では、大臣、国会議員、裁判官、大学教授、大会社の社長等が高位の叙勲にあずかり、自家営業の商人などはそうした恩典を受けることが少ない。ただ、大会社の社長が高

く遇せられるのは、同じく商業に従事していても、社会的貢献度が大きいと見なされることなどによるのであろう。

ちなみに、日本社会学会が一九五二年に行った職業の評価についての調査によれば、六大都市における職業の格付順位は次のようであったという。(12)

1 府県知事
2 大学教授
3 裁判官
4 大会社の重役
5 医者
6 官庁の課長
7 建築技師
8 町工場主
9 労働組合の委員長
10 新聞記者
11 小学校教師
12 寺の住職
13 小売商店主
14 区役所の吏員
15 ふつうの会社員
16 自作農
17 巡査
18 洋服仕立屋
19 デパートの店員
20 保険の勧誘員
21 大工
22 理髪師
23 バスの運転手
24 旋盤工
25 漁師
26 炭坑夫
27 炭焼き
28 道路工夫
29 露天商人
30 くつみがき

勿論、こうした順位がそのまま敬語表現に反映されるわけではないが、右の表の下位の格付の人が上位の格付の人に敬語を用いることが多いのも事実であろう。もっとも、順位がわずかに違う程度では、そうしたことも起こらないが、その懸隔の大きい場合には、敬語出現の可能性も大になると言えよう。ただし、職業の評価は時代によって変わるものであるから、右の調査の行われた二十数年前と今日では順位が違うであろうこと言うまでもない。

(3) 年齢

年齢は過去から現在に至るまで、敬語を左右する重要な条件になっている。相手の年を知らないで話していた人が、その話の中で相手が自分より年上であることを知って、急にことばづかいを改めるといったケースはよくあることである。学校における上級生と下級生、先輩と後輩の関係による敬語使用は(1)に属することかも知れないが、本来は年齢差に基づくものである。親子兄弟の関係もこれと似ているが、今日では、昔と違ってあまり敬語は用いられなくな

ってきている。また、妻から夫への敬語使用は年齢差によるよりも、男女の差に基づいたものと言えるが、夫が年上、妻が年下という一般的関係が関与しているとも言える。

(4) 経歴の長短

経歴の長短も敬語使用の条件となる。つまり同じ一つの世界では、その中に少しでも先にはいった者に対して、あとではいった者は敬語を用いる必要がある。いわゆる新参者は古参の者に敬意を表さなければならないのである。その典型的な例としては、かつての軍隊で、たとえば同じ二等兵どうしでも、新兵は自分より先に入隊した者を古年兵殿と呼んで敬語を以て接しなければならなかったことなどをあげることができよう。職人の世界なども同様であり、極端な例では、悪の世界でも回数を重ねるほど、そこでは箔がつくという。つまり、能力よりも経験の長さが物を言うのが日本であり、会社や官庁、そして、大学でさえも、いわゆる年功序列が厳存するゆえんでもある。この辺のことについて、中根千枝は『タテ社会の人間関係』で詳しく論じている。[13]

ところで、この年功序列というのは、年齢とも関係が深い。年齢の多いものほど経歴も長くなるのが普通だからである。考えてみれば、年齢が重んじられるのも、年上の者ほど人生という経歴が長く、経験も豊富で、年下の者にとっては学ぶべきところが多いのが一般だからであろう。

さて、上記の諸関係は、いずれも広い意味での上下の関係であり、これが敬語成立の重要な条件となること言うまでもないが、これらとは趣を異にする次のような関係も敬語の成立に大きく関与する。

(二) 恩恵・負い目の関係

恩恵を与える者と受ける者の関係も、敬語使用に密接な関係を持つ。医者と患者、客と商人、教師と生徒の父兄といった関係においては、いずれも、後者が恩恵を受ける側として、前者に敬語を以て接するのが普通である。

その他、借金のような個人的関係における恩恵関係もあるが、そういう場合、恩恵を受ける者は、与える者に対し、負い目を感じて敬語を用いることが考えられるし、さらに、恩恵とは逆の被害を自己の意志に反して与えたような場合も、負い目の心理による敬語使用の現象が見られる。(14)

(三) 力関係

権力・腕力等、力を持つものに対し、力のない者は、敬語を以て接するのが普通である。権力者の場合は社会的地位などが高く、むしろ、本質的には上下関係と言ってよいものであるが、逆に地位は低くても、暴力を以て圧服する者に対し、制圧される者が敬語を用いて接するのは、文字どおり力関係によるものと言える。強盗やゆすりたかりに対し、被害者が敬語を以て接するとすれば、それも右の例にあたるものであろう。(15)

(四) 親疎関係

上下関係と共に、今日、敬語を左右するのに最も大きな要素となっているものに、親疎関係がある。疎い者には敬語を用い、親しい者に敬語を用いないというのは、何も今日はじまったことではなく、古来変わらぬ現象と言えるが、その傾向は時代を下って現代に近づくほど顕著な現象と言えそうである。

ある集団の中にはじめて属した人々、たとえば、大学の新入生、会社の新入社員等は、はじめのうちこそお互いに敬語を使い合ってよそよそしいが、段々親しくなるにつれ、敬語が後退して行くのは誰しも認めるところであろう。

『徒然草』の三十七段に、

朝夕へだてなく馴れたる人の、ともある時、我に心おき、ひきつくろへるさまに見ゆるこそ、「今更かくやは」など言ふ人もありぬべけれど、なほげにくしく、よき人かなとぞ覚ゆる。

疎き人の、うちとけたる事など言ひたる、また、よしと思ひつきぬべし。

とあるのは、敬語そのものについて言ったものではなく、また、例外的な事柄について、肯定的な立場で述べているのであるが、裏を返せば、「馴れたる人」は「ひきつくろへる」さまでなく、「疎き人」は「うちとけたる事など」言わないのが普通だという事実の上に立って言っているのであり、疎と敬との相関を示したものと言えるのである。

以上、敬語を支配すると考えられる対人関係の主なものをあげてみた。

ところで、対人関係は右に見たような関係のうちの一つのものだけの場合もあるが、多くの場合、それらは絡みあった関係にある。そういう場合は優先する関係によって、敬語は現れたり、現れなかったりする。

たとえば、同じ会社の中で、平社員は課長に、課長は部長に、たとえ相手の年齢が下でも、敬語を使うのが普通である。これは同一組織内の地位が年齢に優先することを示すものである。また、若い医師や教師に対して、年齢も社会的地位も上の患者や父兄が敬語を用いるのは、恩恵関係が年齢や地位に優先するためである。一体、どういう関係が敬語を支配する力が強く、どういう関係が弱いかは、時代によっても異なるし、それぞれの関係における格差の程度にもよることなので、一概に言うことはできないが、現代社会では、権力や暴力といった力関係が最も強く敬語を支配し、年齢などはその他の関係に比べて弱くなっているように思われる。

もっとも、これとて比較的に言っての話であり、支配力の弱そうな年齢の場合でも、その差が大きければ、年下の人は、年上の人に対して、他の関係ではたとえ自分が上位にあると判断しても、いくらかは敬語を用いるといった事もあるのである。

　したがって、敬語を使うか使わないか、使うとしたら、どの程度の敬語を使うかということは、一にかかって表現主体が上述の諸関係をどのように判断するかにあるのであり、その意味では敬語は極めて心理的なものと言うことが出来るのである。

以上は、話し手や相手の性別の問題を特に取立てることなく述べてきたが、敬語はまた、相手が女性であるという理由のみによって用いられることもあるようである。

わが国においては、古来男尊女卑的な考えが強く、そのため、女性から男性への敬語使用は多い。妻から夫への使用は、前述のように年齢差に基づく面もあるが、本来男性上位の社会での用法と見るべきであろう。それはすでに『万葉集』などでも一般的な現象として見られたことであった。[16] その意味では前記「(一)上下関係」の中に(5)として男女関係を一項立ててもよいほどのものである。しかし、そうした用法とは逆に、男性から女性への使用も見られる。『万葉集』開巻第一の雄略天皇の御製は、その典型的な例と言えようか。平安朝の文学作品にもそうした例が見られることは、森野宗明などの指摘もあり、筆者自身もかつて言及したことがある。[17] それらが、古代社会の女性尊重の傾向の反映とすれば、相手が(若い)女性であるということが敬語使用の条件の一つということになるであろう。

ところで、これと一見相似た現象は今日においても存在する。たとえば、男の教師や学生は、男の学生と話す時より女の学生に対する時丁寧になるといった例がそれである。ただし、これは右に見た古代の女性尊重的用法とはやや異なり、むしろ、丁寧なことばを使う女性を相手とする時、男性自身もおのずから丁寧な物言いになるというのが実情であろう。しかし、相手が女性であることを条件として敬語を用いるという点では共通するものである。

2　場面的条件

これまでは、特定個人を対象とする場合の人間関係の条件について考えたのであるが、敬語は場面的条件によって用いられることも多い。勿論、敬語はすべて場面によるものであるが、ここでは一般に用いられる場面ということば

をもう少し狭い意味に限定して考えたい。つまり、私的な場面か、公的な場面か、一対一の場面か一対多の場面かなどというように用いる、状況的な場面の意である。こういった場面的条件によって敬語が用いられることについては、大石初太郎の「公の場」における「あらたまりの表現」としての指摘もあるが[18]、最近では南不二男が「状況に関する条件」として述べている[19]。今、それらを参考にして述べると、場面的条件と言えるものには、次のようなものがある。

(一) 公的場面

たとえば、小学校の先生が普段はぞんざいなことばで生徒に接しているのに、運動会だとか父親参観日の授業の時になると、同じ生徒に対して敬語(美化語や丁寧語)を用いるなどというのは公的な場面という条件の制約によるものと言える。

なお、こうした場面は一対多の条件とも言える面を持っているが、テレビやラジオの放送などでは、親しい間柄のしかも一対一の対談でも敬語が使用されることが多いというような事実を考えると、やはり一対多ということが敬語使用の条件ではなく、公の場ということが条件になっているように思われる。(もっとも、公の場ということは公衆の前をも意味するのであって、直接の相手でなく、はたで話を聞いている人が多いということが敬語を使わせるのだとすれば、一対多ということも敬語使用の条件と言えるかも知れない。)

また、結婚式や祝賀会、あるいは葬式などで、普段は敬語を用いない間柄の人が、日頃に比べて丁寧なことばを互に用いたりするのは、儀礼的な場面における敬語使用ということになるが、これらは広い意味において、公的場面を条件とする敬語使用と言ってよいであろう。

(二) 間接的場面

一般に、人は面と向って話す場合よりも、電話をかけたり手紙を書いたりする場合の方が、丁寧な物言いをするようである。つまり、直接的な場面よりも、間接的な場面において敬語が用いられることが多い。それはなぜかというと、人とあって話をする場合には、ことば以外の態度・表情・物腰等によって敬意を補うことができるが、電話や手紙ではもっぱらことばによって敬意を表わすほかないからではないかと思われる。(したがって、電話の場合でも、将来、テレビのように相手の姿が映るようになれば、そこで用いられる敬語は、おそらく今より遙かに後退するに違いない。)とにかく、間接的場面は敬語使用の条件たり得るものと思われる。

付 自己指向の敬語

(一) 品格保持の敬語

敬語は本来、他への敬意を示すものとして用いられたものであり、そういう意味では自己指向的なものではないはずである。ところが、現代の用法を見ていると、上に述べてきたような条件によらず、敬語が用いられることがある。つまり、話し手は、相手または話題の人物が、自分より地位・階層・年齢・経験等のいずれの面で見ても下であり、恩恵や負い目の関係もなく、力関係でも弱く、かつ疎の関係にもない場合で、なおかつ敬語を用いることがあるのである。それは他に対するというよりは、自己の品格保持のための用法であると言ってよいものである。

かつて、山田孝雄は、その著『敬語法の研究』の中で、森鷗外がイプセンの『ノラ』の自分の訳に対する批評に答えて、

併し私の「お帰なさい」と書いたのはノラの夫がクログスタットを尊敬していふ敬語でない。ノラの夫が自ら尊敬して言ふ敬語である。日本語には自家の紳士的地位のために賤しむべきものに対しても使ふ敬語がある。

と言ったという例をあげて、

実に吾人の国語に存する敬語は単に他人に対して敬意をあらはすに止まらず。それと同時に自己の品格を維持するをも目的とするものなり。

と述べている。[20]

こうした用法は古代にもあったであろうが、現代では、特に女性に著しい現象のように思われる。ただ、自分の品格のためのみの用法なら、それは他に対するものではなく、したがって、敬語の枠から外れるものではないかとの疑いも出て来るが、自分の品格を保つということも、結局は他に対してのものであり、そういう意味ではやはり敬語の一用法と言ってよいであろう。

(二) 自敬表現

品格保持の敬語が自己指向の点で他の用法と異なることは右に見たとおりであるが、古代には神や天皇などが自分に敬語を用いたことが知られている。いわゆる自敬表現がそれであり、記紀歌謡や『万葉集』、上代の宣命などにそうした例の典型的なものを見ることができる。今、二三の例を次に掲げよう。

(1) 此之鏡者専為二我御魂一而如レ拝二吾前一伊都岐奉(『古事記』上巻)

(2) 食国 遠乃御朝庭尓 汝等之 如是退去者 平久 吾者将遊 手抱而 我者将御在 天皇朕 宇頭乃御手以 掻撫曾 祢宜賜 打撫曾 祢宜賜 将還来日 相飲酒曾 此豊御酒者(『万葉集』六・九七三)

(3) 朕汝乃志乎波暫久乃間毛忘得末之自美奈母悲備賜比之乃比賜比大御泣哭川川大坐麻須(『続日本紀』宣命・五八詔)

(1)は天孫降臨に際し、天照大御神が邇邇藝命に仰せられたことば、(2)は聖武天皇が、任地に赴く節度使等に酒を賜うた時の歌であり、(3)は光仁天皇が能登内親王の死を弔い、一品の位を贈られた宣命のことばである。

いずれも神や天皇が自分に敬語を用いた形になっている。こうした用例については、(イ)所伝に誤りないし作為があるとするもの、(ロ)伝言者の立場での言いかえであるとするもの、(ハ)直接話法と間接話法の混済であるとするもの等々、言語事実について否定的な見解がある一方、(イ)ことさらに下位者からの表現を用いた親愛的表現であるとするもの、(ロ)神や天皇の最高位者としての自覚に立った絶対敬語的用法であるとするものなど、肯定的な見方もある。[21]

確かに、否定的見解に見られるように、実際にははたからの敬語使用であったに拘らず、あたかもみずから敬語を用いたかの如く思われる例のあったであろうことも否定はできない。しかし、また、自敬表現をまったく否定することは、あまりに現代の敬語用法に執しすぎ、今日の考えを以て過去を律することになる嫌いがあるように思われるのである。

相手によって言い方を変える今日の敬語用法を相対敬語と言い、相手の如何に拘らず上位者を上位者として遇する敬語の使い方を絶対敬語と呼ぶ金田一京助の用語に従うなら、絶対敬語から相対敬語へという事実は敬語の大きな流れであり、その絶対敬語の頂点を自敬表現と見ると、神や天皇のような高位者が自分に敬語を用いたことはやはり否定できないように思われる。

ただし、このような敬語用法は、もっぱら対他関係に用いられる後世の敬語用法とは趣を異にするものであると言えよう。すなわち敬語成立の条件として、話し手による上下・尊卑の識別をあげ得る点では、現代と異ならないが、今日においては、話し手が他者を上、自己を下、他者を尊、自己を卑と見なすところに敬語が成立するのに対し、右に見た古代の用法では自他に拘らない点が著しく相違するのである。

なお、このように自己に敬語を用いる例では、今日でも、たとえば父親が子供に向って、「お父さんのお帰りだよ。」

などと言ったりする親愛表現がある。また、「おれ様のお手並を見ろってんだ。」というような尊大表現、さらには、「わが輩もそろそろお出かけ遊ばすか。」といった諧謔表現などもあるが、これらはあくまでも対他表現としての敬語の慣用をふまえてのものであるから、第一義的に敬語の成立条件を考える場合には考察の対象としなくてもよい。

三　敬語の構造と種類

1　敬語の分類

敬語は前述のように対人関係についての認識、特に上位待遇意識を言語に反映したものと言うことができるが、その認識の表わし方によって、その間に相違を生じる。

従来、最も一般的には、敬語を以て敬意を表わす語とし、敬意の表わし方によって、㈠相手や第三者について尊敬の気持を表わすもの(尊敬語)、㈡自分や自分側の者について謙譲の意を表わすもの(謙譲語)、㈢自他に拘らず、すべて物言いを丁寧にするもの(丁寧語)の三つに分けるのが普通であった。そして、この考え方は今日においても依然として最も一般的なものとして通用しているものと言える。

しかし、時枝誠記は、次のような理由をあげて敬語を尊敬・謙譲といった面から区別することに反対している。すなわち、第一に、尊敬とか謙譲とかいうのは話し手の意識において言われることであって、第二人称者や第三人称者の他者に対する敬譲を話し手が表わすことは考えられないとする。

第二に、尊敬と謙譲という二つの概念は相互に排斥し合う概念ではなく、むしろ表裏の概念のように、一方があれば必ず他方がなければならないといったものであり、それゆえに敬謙二概念を以て敬語を区別することは妥当でない

とする。そして最後に、事実もこれを証明するとして、「奉る」や「下さる」といったことばが、敬謙両様に用いられる事実を指摘している。[22]

また時枝は、いわゆる丁寧語が、尊敬あるいは謙譲の意を表わすのでなく、物言いを丁寧にするのに用いられるとすることに対しても異を唱え、むしろ丁寧語こそ話し手の聴き手に対する敬譲の意を表わすものであるとする。[23]

この時枝の考え方は、彼の言語過程観に基づくものであり、彼は右のように考えると共に、言語を表現過程の相違によって「詞」(概念過程を含む形式。表現素材を一旦客体化し、概念化して表わすもの)と「辞」(概念過程を含まぬ形式。主観的情意を客体化せず、また、概念化せず、そのまま直接表現するもの)に分けたのに従って、敬語をも「詞の敬語」(素材の上下・尊卑の識別の概念を表わすもの)と「辞の敬語」(話し手の敬意を表わすもの)に分けている。[24]

つまり、彼によれば、敬意を表わすのは「辞の敬語」(いわゆる丁寧語のうち「です」「ます」「でございます」「侍り」等)のみであり、いわゆる尊敬語や謙譲語は、詞の敬語に属して、話し手の素材に対する上下・尊卑の識別の概念のみを表わすことになるのである。

ところで、前述の時枝の尊敬・謙譲の別についての否定の理由のうち、第一の、第二人称者や第三人称者の他者に対する敬譲を話し手が表わすことはできないとする点はしごくもっともなことであり、これは、時枝のあげた「父上は宮に御仕申された」の例に限らず、古典の場合でも「奉る」や「聞ゆ」といったことばが第三者の動作に用いられている例、たとえば、

かぐや姫……いみじく静かに公に御文たてまつり給ふ。(『竹取物語』)

この御方(=弘徽殿女御)の御いさめをのみぞ(帝ハ)なほ、わづらはしく心苦しう思ひ聞えさせ給ひける。(『源氏物語』桐壺)

などの例に接すると、謙譲語という名称でこれらの語を呼ぶことがあまり適当でないことがわかる。まして、前述の

いわゆる自敬表現の例などでは、自己を尊敬し、相手を謙譲することになって、尊敬語とか謙譲語とかいう名称が一層不都合になる。

時枝が、敬語を「上下尊卑の識別に基く事物の特殊なるありかたの表現」であるとし、「敬語は尊敬の表現であるよりも、尊卑の識別による素材の概念的把握の表現であり、かゝる表現を通して、話手の尊卑の識別を表現する」としたのは、まさに右のような敬語の用法においてはうってつけのものであり、筆者がいわゆる尊敬語を上位主体語、謙譲語を下位主体語という名で呼んできたのも、敬語の普通の使い方だけでなく、こうした自敬表現の用法についても矛盾なく説明することができると考えたからであった。

しかし、時枝が前述のように尊敬と謙譲は表裏の概念のようなものであるゆえ敬謙二概念を以て敬語を区別することは妥当でないとしたのは適当でない。表と裏はやはり相違するのであり、たとえ裏返せば同じになるものでも、話し手側のものとしてとらえられたものは表であり、その反対に相手側のものとしてとらえられたものは裏となる。敬と謙も同様であり、敬とは相手を上座にすえる表現であり、謙とは自分が下座に坐る表現と言えるのである。

また、同じ一つの敬語が敬謙両様に用いられるといっても、それはいわゆる関係敬語(上位者から下位者、あるいは下位者から上位者への働きを表わす敬語)に限って見られる現象である。しかも、敬か謙かのいずれか一方により多く用いられるのが普通であり、そのうえ、多くは、「奉る」「参る」(共に原義、謙、転義、敬、メシアガル、オメシニナル等)のように、敬語としての意味も違っていて、厳密な意味では敬謙両用とは言い難いものである。

もっとも、時枝は敬語を尊敬か謙譲かという観点から分けて考えることを批判したのであり、言語の事実として、いわゆる尊敬語と謙譲語に相違のあることは認めていると言えよう。なぜなら、彼は、詞の敬語を、㈠話し手と素材の関係を規定するもの、㈡素材と素材の関係を規定するものに分けており、前者はいわゆる尊敬語、後者はいわゆる

謙譲語に相当するからである。

しかしまた、通説のように敬語を直ちに尊敬語・謙譲語・丁寧語に三分類し、それら三者を同次元において扱うことには問題があるように思われる。なぜなら、いわゆる丁寧語としてあげられることばには、(1)「お天気」「ご馳走」等の名詞や、(2)「参る」「いたす」「申す」等の動詞、さらには、(3)「です」「ます」等の助動詞などがあげられるが、(1)や(2)が事物や事柄についての敬語である点で、「いらっしゃる」「おっしゃる」「お美しい」「ご研究」といったいわゆる尊敬語や、「さしあげる」「いただく」「愚息」「拙宅」等のいわゆる謙譲語と共通する点があるのに対して、(3)は聞き手に対する敬意のみを表わすことばである点で、上述の諸語と大きく相違するからである。

そこで、本稿では、敬語を先ず大きく二つに分け、表現の素材(人物、事物、事柄)に関する敬語、つまり素材敬語と、対者(聞き手)への直接的敬意表現の敬語、つまり対者敬語に分けることとする。この素材敬語・対者敬語という名称は従来筆者の用いて来たものであり、時枝の言う詞の敬語・辞の敬語に相当する。

2　素材敬語

素材敬語については通説を参照して左の三つに分ける。

(1)尊敬語　表現主体(話し手・書き手)が上位者として遇する人物の事物・動作・状態等について言う敬語。筆者が「上位主体語」と呼んできたもの。今、通称に従う。

(2)謙譲語　表現主体(話し手・書き手)が上位者として遇する人物に対する者(表現主体自身を含む)の事物・動作・状態等について言う敬語。筆者が「下位主体語」と呼んできたもの。今、通称に従う。

(3)美化語　上下・尊卑といったとらえ方ではなく、話題の事物・事柄を美化して言うもの。

以下、それぞれについて問題点を考察してみよう。

(一)　尊　敬　語

「尊敬語」という名称がことばの実体に必ずしもそぐわないことは、すでに冒頭の「敬語と敬意」の項で述べたことからも言えよう。つまり、尊敬語としてあげられる諸種のことばは、尊敬の気持を表わすために用いられるとは限らないのであり、むしろ、ただ単に話し手が話題の人物を敬語的に上位者として認識したことを示すにすぎないと言える。辻村が上位主体語と名づけたのはそうした理由によるものであり、時枝が「話し手と素材との関係の規定」と言ったのも、話し手が素材のあり方を上者・尊者として把握し表現するものであると見たことによる。そして、特に自敬表現のような場合に、時枝や辻村の考え方が合理性を持つことは上述のとおりである。

しかし、敬語の一般的用法から言えば、自敬表現というようなものは古代における特殊な例であり、現代では、尊敬語が第一人称者に用いられるのは親愛・尊大・諧謔等、むしろ一般用法を踏まえた転用で、最も普通には、この種の敬語は第二人称者や第三人称者に用いられるものである。したがって、話し手がそうした人物を上位に待遇することを広い意味での尊敬と見なすならば、(たとえ話し手が実際に尊敬する気持で用いることが少ないとしても)これを「尊敬語」と呼ぶことは許されてよいであろう。

尊敬語の種類

一口に尊敬語と言っても、その中には表現性から見て相違するものがある。

それは、山田孝雄の指摘した絶対敬称・関係敬称の別であり、(25) 後に石坂正蔵が自体敬称・関係敬称、(26) 辻村が絶対上位主体語・関係上位主体語と呼んで区別したものである。(27)

山田は「めす」「おぼしめす」「あがる」等「尊敬すべき対象の作用を絶対的にいひあらはしたるもの」を絶対敬称、「くださる」のように「尊敬すべき対象がその敬称の語を使用するものに対して起す作用につきていへるもの」を関

係敬称と呼んでいる。辻村はこれをふまえて、「上位者の動作・状態を他者と関係なく絶対的なものとして表わすもの」を「絶対上位主体語」、「上位者の動作・状態を他者に(恩恵的)関係を持つものとして表わすもの」を「関係上位主体語」と名づけて区別した。今これをかりに「尊敬語(イ)」「尊敬語(ロ)」と仮称する。

敬語は敬意の表現のあり方によって分類すべきであろうから、山田のように動詞の表わす動作のあり方によって分類する考え方には問題があろうが、「お与えになる」「お寄りになる」といった表現(尊敬語(イ))と、「下さる」「お寄り下さる」といった表現(尊敬語(ロ))では、同じ与える行為・寄る行為でも敬語表現としては性質を異にする。つまり、前者は客観的・絶対的に上位者の動作として把握表現しているのに対し、後者は同じく上位者の動作として把握表現するのではあるが、同時に話し手は為手の動作を自己に恩恵的関係を持つものとして表現している点において異なるものと言うことが出来る。そして、実はこの後者の表現は敬語表現としてきわめて注目すべきものと言える。すなわち、話し手は、実際には為手の動作が自己に恩恵を与えることのない客観的なものであっても、あたかも恩恵を与えてくれる動作であるかのごとく言いなし、それがより敬語的な表現として成立するという事実に注目したい。

たとえば、前述の「お寄りになる」と「お寄り下さる」は、ともに「寄る」という為手の動作を高める表現、つまり尊敬語に属するものであるが、前者が客観的・絶対的表現であるのに対し、後者は恩恵的・関係的表現である点において相違する。

したがって、人に対して「お寄りになりませんか」と言って勧誘するのと、「お寄り下さいませんか」と言ってすすめるのでは、同じく尊敬表現でも、後者の方がより丁寧な印象を与えることになるものと思われる。そして、これが現代語において、「お――になる」形式に命令形がなく、「お――下さる」形式に命令形の存在を可能ならしめる原因をもなしているように思われる。

このように考えて来ると、古典の「見たまふ」「取りたまふ」といった表現も、今は一般に「御覧になる」「お取り

になる」というように訳されるのが普通であるが、本来は「御覧下さる」とか「取って下さる」乃至「お取り下さる」等の意味であったと思われる。

　日月は明かしと言へどあがためは照哉多麻波奴(『万葉集』五・八九二)

という例は、そうした「たまふ」の元の姿を伝えるものであり、末句は現代語訳すれば、「照ッテハ下サラナイノカ」とでもいうことになろう。しかし、同じ『万葉集』の「たまふ」でも、

　大君は神にしませば天雲の五百重が下に隠賜奴(『万葉集』二・二〇五)

というような場合になると「たまふ」に恩恵的関係を示す意味はなくなっていると見ざるを得ない。この歌は置始東人が弓削皇子の薨去を悼んでよんだ歌であって、その「隠賜奴」は「お隠レ下サッタ」ではなく「オ隠レニナッテシマッタ」の意であると考えられるからである。

　このように、恩恵的関係を示す敬語が客観的・絶対的表現の敬語に変わるのは、本来恩恵的関係のないものもそのように言いなすことがより敬語的であると考えられて、あえてそのような表現がとられたことによるものと思われる。

　なお、筆者はかつて、敬語の絶対・関係の別について論じた際、「AがBをお誘いになる」という表現(前記尊敬語(イ))と、「AがBをお誘い下さる」という表現(前記尊敬語(ロ))とを比較し、前者では、話し手(S)は、Aを自分より上位と見ている(A＞Sの関係にある)が、AとBとの上下関係は不明乃至無規定なのに対し、後者ではA＞Sの関係に加え、A＞Bの関係のあることを指摘した。[28] これも両者の注目すべき相違である。

　以上のように考えて来ると、同じ尊敬語中の(イ)(ロ)の違いを認めておくことは、敬語の本質を考える上に重要なことと考えられる。[29]

　ところで、尊敬語にはもう一つ別の面からこれを類別してよいかと考えられるものがある。

　それは、第二人称者、第三人称者のいずれにも用いられるものと、もっぱら第二人称者に用いられるものとの違い

である。

前者は「なさる」「下さる」「お読みになる」等の動詞や動詞連語、「お顔」「ご研究」「お美しい」といった名詞や形容詞など枚挙に暇がない。

それに対して、後者は「あなた」「貴下」「尊翰」等、話し手から見て、相手、または相手に属するもののみに用いられるものである。

前者はきわめて詞的であり、それに対して後者は、事物・事柄についていう点では詞の敬語と言うべきであるが、もっぱら聞き手指向性を持つ点では辞的な面をも持つものと言うことができる。今、かりに前者を「尊敬語(1)」と呼び後者を「尊敬語(2)」と呼ぶとしよう。尊敬語のこのような相違については、すでに古く山田孝雄に「一般の敬称」「対称の敬称」の別があり[30]、近くは大石初太郎に論がある[31]。大石は尊敬語をＡＢに分け、次のように定義している。

尊敬語Ａ――話題主一般を直接的に高める表現のために用いられる敬語。

尊敬語Ｂ――とくに聞手が話題主であるばあいにのみ、これを直接的に高める表現のために用いられる敬語。

もっとも、このような区別は尊敬語の中の用法上の違い程度に考えておくべきかも知れない。なぜなら、尊敬語(1)に属する「おっしゃる」「いらっしゃる」「なさる」「下さる」といった動詞も、命令形「おっしゃい」「いらっしゃい」「なさい」「下さい」といった形は聞き手に対してのみ用いられるという点で、むしろ尊敬語(2)に属させるべきものと言ってよく、結局、こうしたことばは尊敬語(1)、尊敬語(2)のいずれとも言えないからである。このことは何も現代語に限らず、古代語についても同様であろう。ただ、古代語はともかく、現代語の前記「おっしゃる」以下の諸例についてさらに言えば、それらの命令形は、他の活用形とは異なって敬意も軽く、その意味では、敬語としては別語と言ってもよい面を持っており、命令形だけを尊敬語(2)として扱ったり、敬語から除外したりすることもできそうではあるが、今は尊敬語(1)の中に、尊敬語(2)的なものもあることを指摘するにとどめておく。

(2) 謙　譲　語

「謙譲語」という名称が、ことばの実体に必ずしもそぐわないことは、「尊敬語」の場合と同様であり、謙譲語としてあげられる、(イ)「まいる」「いたす」、(ロ)「申しあげる」「さしあげる」といったことばは、話し手の謙譲の気持を表わすというよりは、相手や第三者に対して動作の主体である自己または自己側の者が下位者であるとの認識を示すにすぎないと言える。辻村がこれらのことばを下位主体語と呼んできたのはそうした理由に基づくものであるし、時枝に至っては、これらのことばが話し手の謙譲の表現のように思われるのは、「私はいただいた。」とか「私は差上げる。」のように第一人称者と話し手とがたまたま合致したためにおこる錯覚にすぎないとしている。

まして、かつて大名が家来に用いた「何といたした。」とか「早く申せ。」とかいったような表現においては、その「いたす」や「申す」を謙譲語といって説明するのは何としても事実にそぐわないことと言わなければならず、こうした表現につらなる古代の自敬表現の場合もまた同様であること言うまでもない。

しかし、右のような表現は、やはり尊敬語の場合同様いわゆる謙譲語の用法としても、異例に属すると言うべきであり、時枝が、第一人称者と話し手とがたまたま合致したとするような例の方がむしろ一般的であるということを考えると、謙譲語という通説的名称もそれなりの存在理由を持つということは言えよう。したがって、ここでも尊敬語の場合同様、一応通説的名称を用いておくことにする。(勿論、だからと言って、謙譲語が実際に話し手の謙譲の気持を常に表わすものであると考えているわけではないこと前述のとおりである。)

謙譲語の種類

謙譲語についても尊敬語の場合と同様、類別が可能であり、山田孝雄は謙称を絶対謙称・関係謙称の二に分ち、前者に対しては「謙称を用ゐる者の作用につきて絶対的に用ゐるもの」として「まうす」「いたす」「まゐる」「つかま

つる」等の語をあげ、後者に対しては「謙称を用ゐる者の、尊敬すべきものに対しての行動につきていふもの」との説明を与え、「いただく」「あがる」「うかがふ」「あげる」等の語を示している。[32] 石坂正蔵の自体謙称・関係謙称の別はこれに準じたものであり、[33] 辻村の絶対下位主体語、関係下位主体語の別も、山田説をふまえている。[34] したがって、尊敬語に(イ)(ロ)の二類を認めたように謙譲語にもこの二類を認めてよさそうである。事実、動作が他とかかわりを持つか否かという点から見るなら、山田のあげた絶対謙称に属する敬語動詞を謙譲語(イ)とし、関係謙称に属する敬語動詞を謙譲語(ロ)として区別することができるし、石坂や辻村のあげた例も、山田のそれに準ずるものであった。しかし、「尊敬語」の項でも述べたように、敬語の分類は敬意表現のあり方によるべきで、単に敬語動詞としての意味によって区別することは、あまり意味がある分類とは言えないように思われる。その意味では、謙譲語においても山田的立場の分類や、それに準じた石坂・辻村等の分類も再検討の要があるように思われる。ただ、辻村の分類において指摘した恩恵的意味の有無ということは敬語表現として注目してよく、絶対・関係の別を、謙譲語においても、動作の主体を単に低めるだけのものと、その動作を受け手に(恩恵的)かかわりあるものとして表現するものとの違いという観点からとらえなおすなら、この区別はなお敬語の類別として意味を持つものと言える。後者にも恩恵的関係を表わさないもの(「きこゆ」「申す」など)もあるが、恩恵的関係を持つものとしてとらえられた表現(「見ていただく」「お誘いいただく」「見てさしあげる」といった表現)は、前者が恩恵的関係を表わさないのと異なって注目すべきである。

たとえば、「出席いたします」と「出席させていただきます」とでは、前者が単に自らを下位において表現しているだけであるのに対し、後者は同じく自分が出席することではあっても、相手とのかかわりにおいて、つまり相手の恩恵によってその行為を行うことを示しているのであり、そこに両者の敬語表現の性質の相違、そして敬意の度合の差も現れていると言うべきであろう。

古代の謙譲の補助動詞、下二段の「たまふ」も、本来は、自己の行為ながら、それが相手の恩恵によって実現するものとして言いなし、後には単に相手に対し自己の動作を謙って言う表現と見なされるようになったに違いない。それはまさに尊敬の補助動詞、四段活用の「たまふ」の変遷と通うところのあるものと言えるのである。

もっとも、謙譲語の場合は、こうした恩恵的表現でないものについては、必ずしも、絶対・関係という区別は明確でないものがある。たとえば、「まいる」とか「いたす」とかいったことばも、もともとは、「聞ゆ」とか「申しあげる」とかいったことばと同様、動作が他者に及ぶ意味を持つと共に、動作の受け手に敬意が向けられている点で関係的な性質のものであったと考えられるのであるが、後には動作が他者に及ぶ意味を失うようになる。これはやはり関係から絶対への敬語の変質を示すものであると言えよう。ところが、前者は動詞としての意味の変質につれて、敬意の対象も聞き手へと移行する。[35]従って、この点に重点をおいて考えれば、両者を一括して、謙譲語とするよりは、これを別種の敬語として扱った方がよいとの考えも成り立ち得る。宮地裕はこの点に注目して、いわゆる謙譲語、筆者の言う下位主体語のうち、関係謙称、関係下位主体語のみを謙譲語と呼び、絶対謙称、絶対下位主体語を丁重語と呼んで区別している。[36]これに属する語としては現代語では、「まいる」「いたす」「申す」等がある。これらは事柄についての敬語という点では素材敬語(詞の敬語)に属するが、聞き手への敬意を示す点では対者敬語(辞の敬語)的であり、両者の中間的性格を持つものと言える。従って、尊敬語の場合に準じて考えれば、これらを謙譲語(2)として、「聞ゆ」や「申しあげる」の謙譲語(1)と区別してもよい。大石初太郎の「謙譲語B」も聞き手への敬意を表わす点に注目したものである。[37]

なお、右は主として動詞について見たのであるが、体言についても話し手を下位におくと共に聞き手への敬意を表わす語として考えられるものに「わたくし」「小生」「愚妻」「豚児」「拙宅」「弊店」等のあること大石の指摘するとおりである。

(3) 美化語

人物・事物・事柄に関する敬語、素材敬語のうち、上に述べた尊敬語・謙譲語は、話題の人物の上下・尊卑のあり方についての表現と言えるが、そのようなとらえ方でなく、素材を美化して表現することばを美化語という。たとえば、「天気」に対する「お天気」、「うまい」に対する「おいしい」のたぐいから、「雨が降ってまいりました。」とか「この列車は一四時一五分に発車いたします。」とかいう場合の「まいる」や「いたす」をあげることができよう。これらは普通、丁寧語と言われるものであるが、ここでは丁寧語ということばを狭く限定してあとで述べる「です」や「ます」のみに用いることとする。

ところで、尊敬語や謙譲語に聞き手指向性のあるものとないものとの別があったように、美化語にもそれを認めることができるようである。

すなわち、前述の「お天気」や「おいしい」といったことばは、むしろ話し手の品位保持のためにのみ使われ、対者を予測しないでも用いられることばである。(たとえば、「今日はいいお天気だなあ。」とか「おいしいお菓子を買って来よう。」とかいうように。)これは尊敬語や謙譲語にならえば美化語(1)と言える性質のものである。

ところが、「まいる」や「いたす」は「彼女も今日は早くまいるだろう。」とか「彼はどういたすかなあ。」などと独語することはできず、宮地裕も指摘するように常に「ます」や「です」を伴って用いられることばである。これらを宮地は前述の謙譲語の「いたす」「まいる」と一括して丁重語と呼んでいるが、やはり尊敬語や謙譲語に従えば、聞き手指向性を持つ点で美化語(2)とすることができそうである。美化語の聞き手指向性については、筆者の敬語分類についての一九七五年度の講義を聞いた菊地康人、川岸敬子からも意見が提出されている。[38]

以上のことから考えると、美化語と丁寧語「です」「ます」とを区別する基準を心中思惟に用いられるか否かにお

いた筆者の従前の見解は、美化語(1)に限定した方がよさそうである。

3　対者敬語

上述の素材敬語(尊敬語・謙譲語・美化語)が、聞き手指向性を持つと否とに拘らず、いずれも人物・事物・事柄について述べる敬語であったのに対し、もっぱら聞き手指向性のみを持つものが対者敬語である。語例として「です」「ます」等をあげることができる。時枝はこれらを「聞手に対し直接敬意を表す」ことばとし、辞の敬語と呼んでいる。これらは前述の「お天気」「おいしい」「まいる」「いたす」等本稿で美化語としたものと共に、一般に丁寧語の名で呼ばれているが、美化語が表現素材についての敬語であるのに対し、「です」や「ます」はそうでなく、聞き手指向性しか持たないところに大きな相違がある。今は後者に限定して丁寧語の名も用いることとする。

但し、丁寧語というのは文字通り「丁寧なことば」ということになるが、そういう意味では今日の敬語のすべてが丁寧語と言ってもよいものであるし、それはすでにしばしば述べて来たように、普通の意味で敬意を表わすことばと言うにはふさわしくないものになっているのである。したがって、あえて言うなら、謹みの気持を表わすことばとでも言うべきであろう。

ところで、対者敬語(丁寧語)をこのように狭義に限定した場合、「です」や「ます」以外にこの種のことばに含めてよいものはないであろうか。

時枝は「ございます」や「侍り」をも「です」「ます」と共に辞の敬語とするから、彼がかりに対者敬語とか丁寧語とかいう名を用いたとすれば、当然これらの語もその中にはいったはずである。また、宮地も「です」「ます」のほかに「であります」「でございます」を彼の丁寧語(話し手が、もっぱら聞き手への敬意的配慮をあらわす敬語)の中に入れている。[39] 敬意表現のあり方という点のみから見るなら、これらは確かに丁寧語に加えてよいものであるし、当然

「候ふ」などもその中に入れるべきものと考えられる。

ただ、こうしたことばは、文法的な語の独立性から考えればいろいろ問題がある。すなわち、「でございます」や「であります」は、「で」と「ございます」「あります」の間に係助詞や副助詞を挿入することができる点で、一語とは見なしがたいという事実がある(「で(は・も・こそ・すら・さえ等)ござい〈あり〉ますが」など)。それどころか、副詞までも挿入して、「……では決してござい(あり)ません」などとさえ言うことができるのである。さらに、「ございます」の場合は「ござい」と「ます」とを切って用いることはできず、両者は一語に融合しているが、「あります」の「あり」に至っては、完全に独立性を保持するものなので、「あります」を一語とすることはできないのである。

しかし、敬意表現という観点からすれば、丁度「お(ご)――になる」や「お(ご)――する」を一語相当のものとして前者を尊敬表現、後者を謙譲表現として扱うように、「でござい(あり)ます」全体で丁寧表現と言うことはできるかも知れない。(宮地は「敬語のほうからは、熟合度のややゆるい丁寧語としたいのである。」と言っている。[40])

また、「侍り」や「候ふ」が動詞に接続する場合は、前述のように聞き手への敬意表現の機能のみを持つものと見て、対者敬語とすることができそうであるが、形容詞の連用形や、「に」「て」等に接する場合は「でございます」や「であります」の場合同様、係助詞や副助詞を自由に挿入できるうえ、本来の存在の意味をもなお保っていると見ることもできる(たとえば、「美しく侍り」は美しい状態で存在する意と見られる)ので、そのように考えれば「侍り」や「候ふ」は「美化語(2)」と見る方が穏当だということになる。[41](したがって、「ございます」や「侍り」や「候ふ」が本来の存在の意(「…ガアル」の意)に用いられている場合も勿論、美化語(2)として扱うことになる。)この辺のことは語の解釈のしかたによって意見のわかれるところであるが、それは、この種のことばが、むしろそうした中間的語性を持つことを示すものにほかならない。

それよりも、近世に見られる「でえす」「でんす」「いす」「んす(連用形接続)」等の方がもっとはっきりと対者敬

語としての性格を持つものと言えよう。純然たる対者敬語(丁寧語)は近世以後のものと言えるのであり、敬語の流れは素材敬語から対者敬語へ、そして素材敬語の中では尊敬語・謙譲語から美化語へというのが大原則なのである。

四　敬語の語構成

敬語は右に述べたような構造と種類を持つが、その語構成は敬語の種類のいかんに拘らず次のごとくである。

(1)　特定語形を用いるもの

(i)　素材敬語

(イ)尊敬語　いらっしゃる　下さる　なさる　おはす　まします等

(ロ)謙譲語　いただく　さしあげる　奉る　参らす　つかまつる等

(ハ)美化語　まいる　いたす等

(ii)　対者敬語

丁寧語　です　ます等

右はいずれも敬語でないことば(通常語)の一語に対応する一語の敬語である。

敬語は本来、敬語でない語の転用によって成立するものであり、最初から敬語として存在するものはないと考えられる。しかし、一旦敬語として成立した後は、転用以前の用法を失って、もっぱら敬語としてのみ用いられるようになるものも多い。

右にあげたことばのうち「いただく」「さしあげる」「いたす」等は一方に、たとえば、

(1)富士山は年中雪をいただいている。

⑵彼は大きな岩を高々とさしあげた。

⑶それはわたしの不徳のいたすところだ。

のように敬語ではない本来の意味でも用いられている。⑶などは一見敬語のようにも見えるが、この「いたす」は「もたらす」意味で敬語ではない。したがって、こうしたことばは文脈の中ではじめて敬語たり得るとも言えるものである。その他のことばも、語源的に溯れば、敬語でないもとのことばに辿りつき得るものである。ただ、古語の場合には、もとの意味がどういうものであったかわからなくなってしまったものが多いが、多くの敬語の成り立ちから考えて、敬語でない普通のことばから転用されたに違いないということははっきりしている。

結局、特定語形をなす敬語には、敬語としてしか用いられないものと、文脈の中で敬語として機能するものとがあることになる。

⑵　敬語的成分を付加するもの

(i)　前につけるもの

(イ)尊敬語　お体　ご研究　み舟等

(ロ)謙譲語　おうらやましい　愚妻　おんうらめし等

(ハ)美化語　お天気　ご馳走等

(ii)　後につけるもの

(イ)尊敬語　高村様　行かれる　取り給ふ等

(ロ)謙譲語　手前ども　せがれめ　見奉る等

(ハ)美化語　憚りさま等

(iii)　前と後につけるもの

(イ)尊敬語　お医者様　ご出発になる　おん物語あり等

(ロ)謙譲語　お誘いする　ご招待いたす　おん尋ね申す等

(ハ)美化語　お人形さん等(関西方言では「おいもさん」「おかゆさん」などこの種の例が多い)

なお、「尊」「貴」「芳」「弊」「拙」等は接頭語的に用いられるものではあるが、「お」や「ご」のように自由に接続することはなく、むしろ、それらのついた形で一つの特定語形と見た方がよい面を持っている。たとえば、「尊顔」「貴国」「芳名」「弊店」「拙著」等の語は確かに、「顔(ガン)」「国(コク)」「名(メイ)」「店(テン)」「著(チョ)」等に「尊」「貴」「芳」「弊」「拙」等がついているのではあるが、「お顔」や「御本」から「お」「御」を除いた「顔(カオ)」や「本(ホン)」がそのまま用いられるのに対し、「顔(ガン)」「国(コク)」「名(メイ)」「店(テン)」「著(チョ)」等はそのままでは用いられず、「尊顔」以下の形となってはじめて一語と言い得るものである。したがって、これらの形を以て「顔(カオ)」「国(クニ)」「名(ナ)(前)」「店(ミセ)」「著書」等に対する特定語形とする方が現実的と言えるように思われる。(もっとも、「尊像」「貴僧」「芳恩」「弊宅」「拙論」などのように「尊」「貴」等を除いた形がそのまま用いられるものもあるが、それはむしろ例外的である。)

また、敬語にさらに敬語的成分を付加して二重、三重の敬語とするものもあり、それらの多くは行き過ぎ現象として指摘されるが、中には「御芳名」「お見えになる」のように重複した形の方が普通のようになっているものもある。しかし、いずれにしても、敬語は特定語形を用いるか、成分付加の方法によるかのどちらかの方法によって一つの非敬語形に対応していると言える。したがって、前掲の「ご出発になる」「お誘いする」といったことばも、文法的には二語三語であっても、敬語的には一語相当のものと見なされるのである。それはあたかも慣用句において、たとえば、「腹を立てる」「耳にはいる」等が「おこる」「きこえる」等に相当するのと同様であり、そういう点から考えれば、敬語も広義の慣用句の中に入れてもよい性質のものであると言うことができそうである。

五　敬語の組合わせ

前項においては一語相当の敬語がどのような語構成をなしているかを見たのであるが、敬語表現の実際においては、一つ一つの敬語が個々別々に現れる場合よりも、それらがいくつか組合わされて用いられることが多い。そこで以下には敬語の組合わせの原理について考えてみたい。

この点について、つとに松下大三郎は『標準日本文法』の中で、「待遇の干渉」という項を設け、敬語の組合わせの様式に一八通りあることを述べ、結論として、

一　所有的客体尊称は必ず一番先に示される。

二　対者尊称は必ず一番後に示される。

三　主体尊称は客体尊称より後に示される。

という三つの法則を提示しているが、[42] 彼のあげた一例を示せば、次のような順序で組合わされることになる。

客体的所有尊称	客体尊称	主体尊称	対者尊称
御育て	申し	遊ばし	ます。

また、時枝誠記も『国語学原論』の「敬語論」の中で、多くの具体例をあげて、「敬語の結合法は、素材、素材と話手、話手と聴手といふ順序に従つて、順に結合されて表現される」と述べている。[43] その最後の段階の一例をあげると次のとおりである。

丙が丁に見ていただきなさいます。

ここで注目すべきことは、松下・時枝のいずれの例に従っても、通説にいう謙譲語・尊敬語・丁寧語の順に並んで

いることである。このうち謙譲語・尊敬語は素材敬語に属し、丁寧語は対者敬語に属するが、右の松下・時枝の指摘をふまえ、言語事実に即して第一に言えることは、対者敬語は常に素材敬語のあとに位置して、敬語表現を締め括るということであり、この事実についてはかつて筆者も指摘したし、[44] 近年、北原保雄も「敬語の構文論的考察」[45]の中で、敬語の相互承接の規則の第一に「素材敬語は常に対者敬語の前に位置する。」と述べている。

また、素材敬語の配列について言えば、松下・時枝の例はいずれも、前述の謙譲語(ロ)(関係謙称)、尊敬語(イ)(絶対敬称)の順に並んでいるが、これは敬語の組合わせとして典型的な例であり、北原の第二則「対象尊敬語・謙譲語は常に動作主尊敬語の前に位置する。」も右の事実を彼の用語で述べたものである。

ただし、これに加え北原は、動詞の態(アスペクト)を変える敬語と変えない敬語の承接について論じ、第三則として態変化敬語どうしでは「アスペクトの順序に従う。」という事実をあげ、さらに第四則として、態不変敬語と態変化敬語とでは「(イ)態不変の対象尊敬語は常に態変化敬語の前に位置する。(ロ)態不変の動作主尊敬語は態変化敬語の前にも後にも位置する。」という事実のあることを指摘している。第三則の例は「書いてもらってやる」に対する「書いていただいてあげる」、「書いてくれている」に対する「書いてくださっていらっしゃる」等を言い、第四則の(イ)は「お招きしていただく(くださる)」等となることを言ったものである。また第四則の(ロ)は、「招いていただきなさる」とも「お招きになっていただく」とも言えるといった現象について言ったもの。そのきまりはかなり複雑ではあるが、敬語の組合わせには一定の法則に近いもののあることがわかる。

ところで、こうした敬語の組合わせは、単に言語形式だけの問題ではなく、人間関係に基づく表現の手順を示すものと言うことができる。たとえば、素材敬語+対者敬語の順に並ぶということは、話題の人物についての敬意表現をまず行った後に聞き手への敬意を表わすということであり、素材敬語間で謙譲語・尊敬語の順になるということは、話題の人物間の関係を顧慮した敬意表現の後に話題の人物そのものへの敬意表現が行われることを示すものである。

このように、敬語はその組合わせ方にも人間関係のとらえ方が反映するのであるが、この敬語と人間関係との関係について今少し立ち入って考察してみよう。

六　敬語と人間関係

敬語はどのような人間関係に対し、どのような組合わせを以て表現されるか、具体的な例を考えるために幾つかの約束を設定してみる。

約束1　a＝話し手、b＝聞き手、c＝話題の人物①、d＝話題の人物②とする。
約束2　cのdに対する授与行為についての言語形式を考える。
約束3　＞の上を敬語的上位者、下を下位者とし、＝はその上下の者が対等関係にあることを示すものとする。
　また「・」はその上下の者が互いに上位・下位いずれであってもよいことを示すものとする。

以上の約束に基づいて、敬語が人間関係に応じてどのように変化するかを表にしてみると次のようになる。

	人間関係(1)	人間関係(2)	語形	組合わせ
Ⅰ	a≧c・d	b＞a	やります	通常語＋対者敬語
Ⅱ	c＞d・a (c≧b)	b＞a	くださいます	尊敬語＋対者敬語
Ⅲ	d＞a≧c (d≧b)	b＞a	さしあげます	謙譲語＋対者敬語
Ⅳ	d＞c＞a (d≧b)	b＞a	さしあげられます	謙譲語＋尊敬語＋対者敬語

右の「人間関係(1)」というのは素材敬語の現れ方を規定するものであり、「人間関係(2)」は対者敬語の現れ方を規

定するものである。この表は敬語がどのように組合わされるかを明らかにしたものであり、したがって、対者敬語の現れない人間関係(2)の「a≧b」などは省いてある。

また、素材敬語が現れるためには人間関係(1)が条件となるが、それは必要条件であって、もし、聞き手(b)が、cやdより上位の人物の場合には、尊敬語や謙譲語が用いられないことがある。したがって、Ⅱの人間関係(1)のところに括弧して加えた「c≧b」、ⅢおよびⅣの人間関係(1)のところに括弧して加えた「d≧b」は、素材敬語出現のための十分な条件ということになる。

これらを具体的な例に即して言えば、Ⅰは話し手(a)が、話題の人物(c〈与える人〉・d〈受ける人〉)のいずれよりも上位(乃至対等)であれば、話題の人物(cとd)の間の上下関係にかかわることなく、通常のことば「やる」が用いられ、それに聞き手(b)が話し手(a)より上位であるという条件から対者敬語が加わって、「やります」という表現が用いられることを示す。

これは、たとえば、上級生が二人の下級生の間での授受行為について先生に語るような場合で、具体的な表現としては、

　春山が夏川に本をやりました。

といったような言い方になる。

Ⅱは、与える人(c)が受ける人(d)および話し手(a)より上位であれば、受ける人(d)と話し手(a)との上下関係にかかわることなく、尊敬語「下さる」が用いられることを示す。

これはⅠの場合と同様具体的な例で考えると、先輩が一人の生徒に本を与えたことを、別の生徒が上級生に報告するような場合で、

　秋野先輩が春山に本を下さいました。

といったような言い方が考えられる。
なお、この場合聞き手が動作主より上位者だと(つまり、右の例で聞き手が先生であったりすると)、尊敬語「下さる」が現れず、通常語の「くれる」が用いられたりすることもあるが、c≧bの関係においては尊敬語の使用は決定的と言える。
ただし、これに注をつけるならば、「下さる」ということばは恩恵的ニュアンスを持つので、話し手は物を受ける人(右の例では「春山」)の側に自分をおいて表現していると言える。したがって、まったく客観的立場での表現をとる場合には、同じ尊敬表現でも、

秋野先輩が春山に本をおやりになりました。

のように「おやりになる」という言い方をするものと思われる。さらに考えると、もし話し手が受け手(春山)の下級生なら、

秋野先輩が春山さんに本をおあげになりました。

となるかも知れない。それは「やる」ということばが、今日では上から下へのニュアンスを持つものになっていること、逆に「あげる」が本来の下から上へのニュアンスを失って、「やる」を丁寧にいう美化語化しているところから考えられることである。しかし、いずれにせよ、右の諸例において、「尊敬語＋対者敬語」の組合わせとなることだけは動かせない事実であると言える。
Ⅲは話し手(a)が受け手(b)より下位、与え手(c)より上位(乃至対等)の関係にあるもので、たとえば、

春山が秋野先輩に本をさしあげました。

というような形であらわれる。
この場合、勿論聞き手は話し手にとって上位者(たとえば上級生)であるが、受け手(秋野先輩)が、聞き手(上級生)

より上位者(乃至対等)であることが、前例同様決め手となる。
最後にⅣは、与え手(c)が受け手(d)より下位、話し手(a)より上位にあるもので、前者の関係から謙譲語「さしあげる」、後者の関係から「られる」が用いられる。そしてこの場合も、聞き手上位(b∨a)の関係から最後に対者敬語が添えられる。具体例としては、
秋野先輩が冬原先生に本をさしあげられました。
というような表現が考えられる。これは下級生が上級生に報告するといった場面で考えられることである。ただし、これも、さらに受け手(d)が聞き手(b)より上位(乃至対等)という条件に支えられているのであり、もし聞き手が逆に上位者(たとえば校長先生)である場合には、謙譲語も尊敬語も控えられて、
秋野先輩が冬原先生に本をあげました。
程度の表現となることも考えられる。
以上は、典型的な組合わせの一例を示したものであるが、敬語はこのように、話し手、聞き手、話題の人物それぞれの関係によって、複雑な変化をするものなので、その関係に正しく対応する的確な表現を用いることが大切なことと言える。[46]
なお、右に述べた上位・下位は同一組織内における典型に例をとったが、前述の敬語的上位・下位の意味における場合に広く適用できること言うまでもない。

七 日本語の敬語の構造的特色

日本語の敬語の特色ということは、日本語以外の言語の敬語と比較して言えることであろう。

ところが、日本語以外の言語で敬語を持っていることばは少ないと言われる。もっとも、朝鮮語・ジャワ語・タイ語・チベット語・中国語など、日本語に匹敵するような敬語を持っているものもあり、さらに、普通、敬語がないとされる英語・ドイツ語・フランス語などでも、敬語と言ってもよいような言語現象はあるのである。

したがって、それらの一々と比較対照してはじめて日本語の敬語の特色もはっきりするのであるが、日本語以外の言語の敬語について、特にこれを論じたものは従来数少なく、まとまったものとしては、『敬語講座』の『世界の敬語』[47]ぐらいしかない。

そこで、本項では右の講座に述べられていることを主に参照して、日本語の敬語の特色と思われるもの二三について述べることとする。

ところで、日本語の敬語は最も根本的には語彙的事実と言うことができる。なぜなら、敬語は敬語でない語との対応において成立し、意味的共通性を持った体系をなしているからである。

同じ一つの事物を表わす通常のことばに対し、人間関係に応じて敬意に基づいた別の語を用いることは、日本語でない他の言語にも見られるようであるが、日本語ほど豊富にそれを持っていることばは、そう多くないようである。ただ、朝鮮語・ジャワ語・チベット語などは非敬語に対する選択形式としての敬語を日本語に劣らない程度に持っており、特に、チベット語に至っては、「敬語形式は、品詞別にみると、おそらく数詞、接続詞を除く、他のすべての品詞に認められる。[48]」というから、まさに日本語に匹敵するものと言える。

しかし、ヨーロッパのことばとなると、英語はもちろん、フランス語でも、ドイツ語でも、ロシア語でも、その他多くのことばにおいて、右のような事実はないに近く、わずかに人称代名詞(特に二人称の代名詞)や人を呼ぶ呼称に敬・非敬の対照が見られるにすぎないので、そういう意味では敬語が語彙的事実であるということは、やはり日本語の敬語の一つの特色と言ってよいかと思われる。

もっとも、敬語が語彙的事実であると言っても、実は一つ一つのことばにいちいち敬語形が存在するわけではなく、通常語形に敬語的成分を付加してはじめて敬語形を構成する場合の多いことはすでに「敬語の語構成」の項で述べたところであるが、そのことは、日本語と同様に敬語の多い朝鮮語以下の諸言語においても同様である。ただ、非敬語形を敬語形にする言語的手段は必ずしも同一でなく、ジャワ語のように通常語形に対し母音交替や子音交替あるいは語末変化形を用いる言語もあるが[49]、日本語では接頭語や接尾語あるいは補助動詞を用いる。これはチベット語に大変よく似ている[50]。朝鮮語も日本語と似ているが接頭語を用いないから[51]、日本語の敬語形成法はチベット語に最も近い特色を持つと言えよう。ただし、その付加形式にどういう語を用いるかということになると、各言語まちまちのようである。日本語で、古く接頭語に、讃える意味と思われる「おほ」や「み」を用いたのは[52]、中国語の「大」「尊」「貴」等と相通じるし、補助動詞に「申す」を用いるのは朝鮮語と似ているが[53]、「お(ご)――になる」の「になる」や「る」「らる」のような自然的実現(あるいは受身)の意からのもの、「す」「さす」のような使役の意からのものを用いるのが日本語の敬語の特色と言えるかどうかは、他の言語の接頭語や接尾語の類の起こりなどを詳しく調べてみないとわからない。

なお、日本語の敬語には和語・漢語両様あり、後者は本来中国輸入のものという意味において中国語と最も近く、また、同じ中国語を輸入したベトナム語にも通じるものがある。前記の「尊」「貴」のほか「令」「弊」「舎」等の接頭語的用法、「光臨」「敬呈」「拝領」等の敬語の例は[54]、日本音化あるいはベトナム音化していても、本来中国語に基づくものであり、自国の固有の敬語と他国語から借用の敬語の両方を用いるところも共通的特色と言えよう。

さて、日本語の敬語はまた、文法的事実であるとされ、特にそれが人称の対応という点から述べられる。これはヨーロッパのことばにおける人称の概念を日本語に持込んだものであり、山田孝雄・金田一京助等の説くところである[55]。これに対して、時枝誠記は敬語の対応は素材的対応であって文法的事実ではないとする[56]。

確かに金田一の言うように「いらっしゃいませんか(Don't you go?)、まいります(Yes I do.)」という応答が「まいりますか？　いらっしゃいます！」となったら、人称が反対になり、一般には文法的な誤りとされるであろう。しかし同時に、「君にも僕の絵を拝見させてやらうか。」のような表現が、文法的誤りとされず、皮肉・諧謔として認められるのは、敬語が文法的事実でない証拠だとした時枝の指摘も注目すべきであろう。

もっとも、時枝の例は敬語の一般的用法の逆用の例であり(むしろ逆用なるが故に諧謔性が生まれることに注意)、金田一は、オーソドックスな用法について誤用とされるものをあげているのだから視点が異なるのであり、最も一般的に言えば、日本語の敬語にヨーロッパ語の人称に似た対応は確かに存在するのである。

石坂正蔵は、これらに鑑み、敬語的人称なる概念を提唱し、一人称者は勿論、二・三人称者でも、話し手側にとらえられるものは一括して、これを敬語的自称と呼び、反対に、聞き手もしくは第三者側にあるものを敬語的他称、そして、いわゆる丁寧語のように人称にかかわらないものを無人称的なものとして敬語的汎称と呼んでいる[57]。これは日本語の敬語表現の特色をよくとらえたものと言えるが、こうなると、もはやヨーロッパ的な人称の概念では律し切れないものがある。したがって、このようなものを一般的に言って文法的事実と言い得るか否かは問題であろう。

しかしまた、敬語的自称・敬語的他称それぞれにおける言語的対応の事実は、個々のことばの意味的対応とは異なって法則的であり、単に素材的対応とは言いかねるものである。

しかも、日本語の敬語はすでに述べたようにその語構成においても文法的手続を必要とするうえ、さらに重要なことは、文を文たらしめる陳述辞の変容というきわめて文法的な側面を持っているということである。これはことばを変えて言えば、辞の敬語、対者敬語の存在を意味する。

ただし、この点も日本語のみの特色と言うことはできず、朝鮮語・チベット語などにも見られる現象である。特に朝鮮語の場合は、日本語のように「ます」を付けるか否か、断定の表現を「だ」「です」「でございます」のいずれに

するかといった程度のものではなく、その段階差は五段階ないし六段階にも及ぶという。[58] したがって、日本語の敬語が文法的に発達しているということは、むしろ朝鮮語などと共にヨーロッパのことばに対して言えることであろう。（朝鮮語の敬語と比較して日本語の敬語の特色と言えることは、逆に素材敬語、中でも、前記謙譲語(ロ)や美化語の豊富さであろう。）

ところで、日本語の敬語についてもう一つ言えることは、その文体的特色である。つまり、「です」体、「でありま す」体、「でございます」体等というように文末形式を以て呼ぶことのできる文体的統一性が、敬語表現には見られるということである。こうした現象は陳述辞において特に著しいので、右に見たような名称も与えられているわけである。

しかし、朝鮮語などでも前述のように対者敬語に複雑な段階があり、それが相手の地位・年齢などに従って日本語よりきびしく使いわけられ、上称なら上称、中称なら中称で統一された文体が構成されるし、チベット語でも、「敬語形式自体の段階についての選択によって、文単位の段階差が認められる。[59]」というから、敬語の文体性ということに関しても、これを日本語のみの特色とすることはできないようである。

しかしまた、英・独・仏語などにはそうした現象はなく、その意味では、文法事実に関連して述べたように、ヨーロッパのことばなどとの比較において、やはり特徴的な事実と言うことはできると思う。

なお、一言付け加えれば、ヨーロッパのことばには呼称などを除いてはほとんど敬語がないと言われる一方、仮定法・条件法などによる敬意表現の方法のあることが言われ、前述の『世界の敬語』にも、そういった観点から、興味ある事実が数々指摘されている。そして、それは文体的（あるいは文法的）な事柄でもあるようであるが、要するにそれらは言いまわしの問題であって、むしろ修辞段階のものと言ってよさそうである。日本語では仮定法・条件法などと言えるものがないから、それらと比較することは困難であるが、直接的表現を避けて、間接的な言い方をするとか、

命令の言い方を勧誘や願望などの表現にすることによってやわらげるといった類のことは、日本語の場合にもいくらでも存在するのである。ただし、それは敬語的な表現であって、敬語そのものではないから、ここでは省略に従うこととする。とにかく、敬語を使っても使わなくても、そういう言い方はできるのである。

最後に、現代日本の敬語はきわめて相対的な敬語と言うことができる。つまり、話し手は話題の人物との関係のみから言えば当然敬語を用いるべき人物について、聞き手のいかんによって敬語を用いたり用いなかったりする。これは古代の絶対敬語の用法とは大きく相違するのみならず、同じく敬語の発達している朝鮮語とも異なるのである。朝鮮語では、「上代から現代に至るまで目上でさえあれば自他を問わず、絶対的に敬語を用いる絶対敬語である。(60)」というから、現代日本語の敬語とはその様相を異にすると言える。

また、こうした現象の裏返しとも言えることとして、日本人は、目上の人に向ってその子供のことを話題にしたり、あるいは目上の人の前で、その子供に話しかけたりする場合、子供に対しても敬語を用いるが、朝鮮語ではそういうことはないという。(もっとも、この点についてはドイツ語なども朝鮮語と同様であり、二人称の代名詞 du に対する敬語形 Sie(本来二人称の複数形)は大人向けであって、話し手はたとえ目上の人の子供でも、子供には du を用いず Sie を用いる。)

以上のことからも、相対的ということは、やはり日本語の敬語の特色の一つであると言ってよいと思う。

(1) 辻村敏樹「敬語と非敬語」(『国語と国文学』五三巻一〇号、一九七六年)。
(2) 時枝誠記『国語学原論』岩波書店、一九四一年、四三八―四四一頁。
(3) 時枝も「敬意の表現」の意味については『国語学原論』の中でくわしく論じているが、敬意そのものについては特に論じていない。

（4） 辻村敏樹「現代の敬語意識」（『国文学解釈と鑑賞』二一巻五号、一九五六年。のち『現代の敬語』共文社、一九六七年、所収、二一五—二一六頁）。

（5） 大石初太郎『正しい敬語』大泉書店、一九六六年、九一—九四頁。
宮地裕「現代の敬語」（辻村敏樹編『敬語史』大修館書店、一九七一年）三七七—三七八頁。

（6） 「敬語」という語は、字面の上では、井上淑蔭の『活語新論』（文久三（一八六三）年序）に早く見えているが、ウヤマイコトバと読ませるのかも知れない。明らかにケイゴと思われるもので早いものは、田中義廉の『小学日本文典』（一八七四年）や西周の「洋字ヲ以テ国語ヲ書スルノ論」（『明六雑誌』一号、一八七四年）などである。佐藤誠実の『語学指南』（一八七五年）には「佐行四段ノ活ニハ、他ノ活ヨリ転ジテ敬語トナレルコトアリテ、」（巻二一六ウ）などとわざわざルビがふってある。江戸時代は「敬ひ詞」（「尊称」）、「崇め詞」（「尊めことば」）、「尊み辞」「崇め言」「あがまへ言」等いろいろの言い方・表記がなされている。

（7） 大石初太郎、前掲書、七三—七四頁。

（8） 宮地裕、前掲論文、三八一頁。

（9） 阿我農斯能　美多麻々比弖　波流佐良婆　奈良能美夜故尓　咩佐宜多麻波祢（『万葉集』五・八八二）
右の歌は大伴旅人が大納言に昇進して奈良の都に還るのに際し、筑前の国司山上憶良が自分を都へ召しあげてほしいと願ったもので、その敬語は勿論身分的上下の差に基づいてはいるが、相手の恩恵を願って、特に高度の敬意表現を用いたものと思われる。
須受我祢乃　波由馬宇馬夜能　都追美井乃　美都乎多麻倍奈　伊毛我多太手欲（『万葉集』十四・三四三九）
これは旅する人が宿駅の女に水を乞うた歌であろう。親疎の関係で言えば勿論疎の関係にあり、それ故の敬語と思われる。（もっとも、これも恩恵関係を含んではいるが）男から女へ普通は敬語を用いないことを思うべきであろう。

（10） 南不二男「現代敬語の体系」（林四郎・南不二男編『敬語講座 1 敬語の体系』明治書院、一九七四年）一一一—一一八頁。

（11） 日本放送協会編『皇室関係放送用語集』一九五四年、等参照。

（12） 尾高邦雄「職業と社会的地位」（尾高邦雄編『職業と階層』毎日新聞社、一九五八年）四二頁。
同じ日本社会学会による日本全国の職業の格付が一九五五年にも行われているが、一九五二年の調査の方が職種の変化に富ん

でいるので、この方をとりあげた。
(13) 中根千枝『タテ社会の人間関係』講談社、一九六七年。
(14) 敬語に負い目の心理のかかわることについては、森野宗明の「古代の敬語 II」(前掲『敬語史』)一〇七—一〇九頁、参照。
(15) この種の敬語用法については、つとに石坂正蔵の『敬語史論考』(大八洲出版、一九四四年、五〇—五一頁)に狂言「二人大名」の例が指摘されており、筆者もこれにふれたことがある。
辻村敏樹「待遇語法」(『続日本文法講座 1』明治書院、一九五八年。のち『敬語の史的研究』東京堂出版、一九六八年、所収、四—五頁)。
(16) 沢瀉久孝「万葉集に於ける男女の言葉」(『国語国文の研究』一〇号、一九二七年。のち『万葉集新釈 下』星野書店、一九四八年、所収、二六九—二七八頁)。
佐伯梅友『国語史 上古篇』刀江書院、一九三六年。のち『奈良時代の国語』三省堂出版、一九五〇年、所収、八一—九五頁。
(17) 森野宗明、前掲論文、一〇五—一〇七頁。
辻村敏樹「敬語表現」(岡一男編『平安朝文学事典』東京堂出版、一九七二年)三二六—三二七頁。
(18) 大石初太郎、前掲書、七七—七八頁。
(19) 南不二男、前掲論文、一一六—一一八頁。
(20) 山田孝雄『敬語法の研究』東京宝文館、一九二四年、三—四頁。
(21) 同前、四〇六—四〇七頁。
湯沢幸吉郎「自己に敬語を用ひた古代歌謡等について」(『国語と国文学』七巻五号、一九三〇年。のち『国語学論考』八雲書林、一九四〇年、所収、一八三—二〇一頁)。
金田一京助「女性語と敬語」(『婦人公論』一九四一年九月号。のち『国語研究』八雲書林、一九四二年、所収、三〇〇—三〇二頁)。
尾崎知光「所謂自敬表現について」(『名古屋大学文学部研究論集 10』一九五五年)。
辻村敏樹「上代敬語の特質」(『国文学』一一巻八号、一九六六年。のち前掲『敬語の史的研究』所収、八六—八九頁)。
春日和男「古代の敬語 I」(前掲『敬語史』)九二—九四頁。

西田直敏「天皇のことば――鎌倉時代の宸記・宸翰の「自敬表現」を中心に――」(『(藤女子大)国文学雑誌』一六号、一九七四年)。
(22) 時枝誠記、前掲書、四五七―四五八頁。
(23) 同前、四九八頁。
(24) 同前、第五章「敬語論」ほか。
(25) 山田孝雄、前掲書、四四頁。
(26) 石坂正蔵「万葉集の尊卑表現の研究」(『万葉集講座　第三巻　言語研究篇』春陽堂、一九三三年。のち『敬語史論考』大八洲出版、一九四四年、所収、二二六頁)。
(27) 辻村敏樹「敬語の分類について」(『言語と文芸』五巻二号、一九六三年。のち『現代の敬語』共文社、一九六七年、所収、一〇八頁)。
(28) 辻村敏樹『現代の敬語』(前掲)一一〇頁。なお、一九七五年度の筆者の東大の講義を聴講した言語学専攻の菊地康人は、その夏のレポートとして「敬語の分類に関する私見」と題する論文を提出しているが、その中で、彼は生成文法的観点に基づき、構文論的立場から補語を重んじ、〔主語〕＞o(話し手が主語を上位者として遇する意)のみの条件のものをa種の敬語(ここに言う尊敬語(イ))とし、その条件にさらに〔主語〕＞〔補語〕(話し手が主語を補語より上位者として待遇する意)という条件の加わっているものをb種の敬語(ここに言う尊敬語(ロ))と呼んで区別したが、これは辻村の右の論の生成文法論への適用として注目される。
(29) 時枝誠記は『国語学原論』(四六八―四六九頁)で、「下さる」の意の「給ふ」を素材間のありかたの表現、「お――になる」の「給ふ」を話し手と素材の関係の規定とし、前者から後者へ転ずることを述べているが、これは通説をとらない彼の立場でも、尊敬語の両類の相違を認めていることになる。
(30) 山田孝雄、前掲書、一五一―一六頁。ただし、山田の「一般の敬称」には、いわゆる丁寧語としてのものも含まれている。
(31) 大石初太郎「待遇語の体系」(『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』表現社、一九七六年)八八六―八九〇頁。
(32) 山田孝雄、前掲書、三九頁。
(33) 石坂正蔵、前掲書、二二六―二二七頁。

(34) 辻村敏樹『現代の敬語』(前掲)一〇九頁。

(35) 麹田定樹は『中古中世の敬語の研究』(清文堂、一九七六年)で「いたす」が関係規定性の敬語から自卑・丁重の敬語へと移る様子を詳しく説明している。

(36) 宮地裕「敬語の解釈」(国立国語研究所『ことばの研究 第2集』秀英出版、一九六五年。のち『文論』明治書院、一九七一年、所収、二六七—二七二頁)。

(37) 大石初太郎、前掲論文。

(38) 菊地康人は注(28)の論文で、「雨が降ってまいりました。」という例を辻村の『現代の敬語』から引用し、その「まいる」が「聞手を意識してしか用いられない(心中の思惟にあらわれない)ことから」美化語とすることを疑っている。
また、川岸敬子も、同じ年のお茶の水女子大の夏のレポート『現代の敬語』を読んで」を発展させた「辻村敏樹氏の『美化語』について」(『(お茶の水女子大)国文』四五号、一九七六年)と題する論文で、菊地のあげた例や「列車は三時に出発いたします。」という別の例(これも『現代の敬語』所収)をあげて辻村が美化語とする「いたす」や「まいる」について、「心中の思惟、独語に用いられないのはもちろんのこと、文章の中でもこれらを使う時は必ず、何らかの意味で相手を予想していると言える。」とし、「これらの語が前に述べたように直接・間接を問わず、必ず対者敬語を伴って用いられるということは、(中略)むしろ対者に対する敬意と大いに関係があることを示すものと言えよう。」と述べ、「以上のようなことから、私は絶対下位主体語に対者尊敬性を認めてもよいと思うのだが、とすれば、今ここで問題にしている美化語の「いたす」「まいる」などについても同様の性質を認めることは無理でないと思う。」と結んでいる。

(39) 宮地裕「現代の敬語」(前掲『敬語史』)四一三—四一五頁。

(40) 同前、四一四頁。

(41) 辻村敏樹「いわゆる敬語の助動詞について」(『国語学』七二集、一九六八年。のち前掲『敬語の史的研究』所収、四八—五四頁)。

(42) 松下大三郎『標準日本文法』紀元社、一九二四年。

(43) 時枝誠記、前掲書、五〇一頁。

(44) 辻村敏樹「待遇語法」(『続日本文法講座 1』明治書院、一九五八年。のち前掲『敬語の史的研究』所収、一四頁)。

(45)　北原保雄「敬語の構文論的考察」(『佐伯梅友博士古稀記念国語学論集』表現社、一九六九年)六一七―六四七頁。

(46)　この項で述べたことは、多く辻村の「現代語――敬語――」(『(早稲田大学語学教育研究所)講座日本語教育』第一分冊、一九六五年)によっている。

(47)　林四郎・南不二男編『敬語講座 8』明治書院、一九七四年。

(48)　北村甫「チベット語の敬語」(前掲『敬語講座 8』)七一頁。

(49)　崎山理「ジャバ語の敬語」(前掲『敬語講座 8』)一〇一―一〇六頁。

(50)　北村甫、前掲論文、八二―九〇頁。

(51)　金東俊「日本語の待遇法と韓国語の待遇法の比較研究」(早稲田大学大学院文学研究科修士論文、一九七〇年一月提出)二三八頁に、接頭語についてふれ、「このような(=日本語のような意)接頭語が全然ない。ただ한(han)(大)が敬意を表わす接頭語として用いられた痕跡は残っている。한아비(han-abi)」とある。

(52)　辻村敏樹「敬語史の方法と問題」(前掲『敬語史』)一二頁。

(53)　小倉進平『郷歌及び吏読の研究』(京城帝国大学法文学部紀要 第一)一九二九年、五七一頁。

(54)　阮克堪(竹内与之助訳)「ベトナム語の敬語」(前掲『敬語講座 8』)一二五―一二九頁。

(55)　山田孝雄、前掲書、一一―二〇頁。
金田一京助『日本の敬語』角川書店、一九五九年、一四―一七頁。

(56)　時枝誠記、前掲書、四五四―四五八頁。

(57)　石坂正蔵「敬語法」(『日本文法講座 1 総論』明治書院、一九五七年。のち『敬語』講談社、一九六九年、所収、一四四―一五二頁)。

(58)　同じく対者敬語と言っても、言語の形式はかなり相違し、朝鮮語では、主として用言の終止形語尾の変化により、チベット語では助動詞と疑問助詞の結合あるいは連結形式によって示される。それぞれについては次の文献にくわしい。
梅田博之「朝鮮語の敬語」(前掲『敬語講座 8』)四七―六三頁。金東俊、前掲論文、一四五―二〇八頁。金均一「韓日両国語の敬語法の比較研究」(早稲田大学大学院文学研究科修士論文、一九七七年一月提出)一四二―一七五頁。北村甫、前掲論文、七八―八二頁。

(59) 北村甫、前掲論文、八一—八二頁。

(60) 金均一、前掲論文、一八三頁。梅田博之・金東俊も前掲論文で同様の趣旨のことを述べている。

3　敬語の変遷(1)

春日和男

緒　言

一　上代の敬語を中心に

1　資料と敬語の体系

2　上代敬語とその変遷

二　中古の敬語を中心に

1　資料と敬語の特色

2　中古敬語とその変遷

緒　言

はじめに　ここに、「敬語の変遷」として説くのは、国語史でいう古代語の時代におけるそれである。さらに具体的にいえば、奈良朝におわる上代、および続く平安朝を中心とした中古、この二期を中心に、多少中世に跨った歴史的時間、いわば推古朝ごろから始まって、院政初期に至る約五〇〇余年の間における「敬語の変遷」ということになる。筆者は、本稿末尾の参考文献に示したように、すでに古代敬語について、再三説いたことがあるので、ここではなるべく重複を避け、要点について集約的に述べてゆくことにする。

時代の概観　言語の変遷を述べるにあたり、敬語は、とりわけ政治・文化・民俗・宗教等外部的条件の影響を受け易いことは、あきらかであって、そのような視点にたてば、氏族制度に始まる国家の形成は、大化改新を経て、律令制度に移行することになり、壬申の乱を始めとする内乱や謀叛を体験しつつ、天皇中心の中央集権的政治体制が確立し、奈良朝を経て平安朝に入った。平安初頭は、なお天皇中心の時代であったが、やがて藤原氏の擡頭による摂関制度が、いわゆる王朝文化の開花をもたらし、終りは院政時代に受け継がれ、次第に中世的過渡期の様相を深めていったことになる。以上のような時代を貫く社会の風潮は、天皇・皇族、それをとりまく門閥等、いわゆる上流貴族を中心にした環境の中に醸成され、その他には、祖先神を祭り、儒教・仏教等、外来の宗教に参与する面があったが、中でも、神仏に対する儀礼的な行事は、これら貴族ないし知識人の政治・学問・社交に欠くことのできない外部的条件を形成することとなった。このような情勢の中で育成された言語、なかんずく敬語の持つ意義の重大さは、もはやいうまでもないことながら、そのような時代色の中で、なお微妙な消長を見せながら「敬語の変遷」は遂げられているのである。

一　上代の敬語を中心に

1　資料と敬語の体系

敬語史は国語史と共に始まる　敬語は日本語と切り放せられない宿縁の存在である。すなわち上代の国語資料は、そのまま敬語資料でもあるわけであるから、今は資料としての文献名を列挙する煩を避けたく思う。ただ資料を大別して、散文と韻文の二つとし、それぞれの価値について触れることにする。

上代敬語資料と散文　例えば、『万葉集』には、四五〇〇余首の和歌の他に、漢文による散文の詞書きがある。すべて純正漢文体ともいうべきものであるが、敬譲をあらわす漢字面は、漢語本来のものが用いられている。その例として、

　御製歌　両君大助　芳旨　芳藻　玉体　幸　崩

等は尊敬語を示すもの、

　伏辱*　敬奉*　跪承　謹承　伏奉*　野鄙之歌　進上*　謹上*　拝読　誠惶頓首謹啓

等は謙譲語を示すものであるが、後者は主として書簡文の中のものであって、その数も多く、中には和訓されたと思われるもの（*印）も混っている。またこのような漢字面では、敬譲行為としての動作を示すものがあって、それら具体的行動を示す漢語と、抽象的に敬譲の意をあらわす日本語との間には、やはり一線を画すべきであることは論をまたない。

序に、近年遺跡から出土する木簡類の文章も準漢文体として、和化したものが多いと思われるが、例えば平城京趾

出土(霊亀天平の間——八世紀前半頃)のものに、

紀伊国无漏郡進上御贄磯鯛八升(調の貢進に関するもの——以下括弧内筆者注)(SK二一〇二)

監物史生等謹啓 酒一二合 右依望処分……以状(酒の処分許可願)(SD三〇三五)

請飯三升 御洗布粥養料(請求書)(SK二一〇二、以上いずれも出土の地点、奈良文化財研究所保管)

等とあって、敬譲に関する字面も散見するのであるが、資料として必ずしも価値あるものとはいえない。散文の主流をなす漢文では、敬語の委細について観察することは困難である。ただ漢文の中には、記紀をはじめ『日本霊異記』等にまで、訓注・訓釈を文中に插むものがあり、例えば、

訓立云多多志(『記』神代) 柱此云美簸旨羅(『神代紀』上) 食国二合久尓乎之之(『霊異記』上二・三、中二七訓釈)

のような訓読のさまが一応明かであれば、たまたまその中にあらわれた敬語は資料として役立てることができる。これらは『古事記』本文中に挿入された、一字一音式表記語彙「於天浮橋宇岐志摩理蘇理多々斯弖」(神代)のような例と共に明白な敬語の例となる。その他、上代には「祝詞」や「宣命」のように、奏宣を旨とする特殊な文体の資料があるが、敬語の記載がかなり厳密で、比較的正確に訓読できる点、価値が高い。それらは、かの正倉院文書の中の真仮名書簡などと共に、散文の中から敬語を抽出できる好資料となるが、詳細は例示の際に譲る。以上をまとめると次のようになる。

一 上代文献で、散文の主流をなす漢文は、その純正なると、和化したるとを問わず、用字を通じて待遇表現の所在を知り得ても、そのままでは、なお敬語の詳細と実状を知る対象としては、かなり困難な面を持っている。

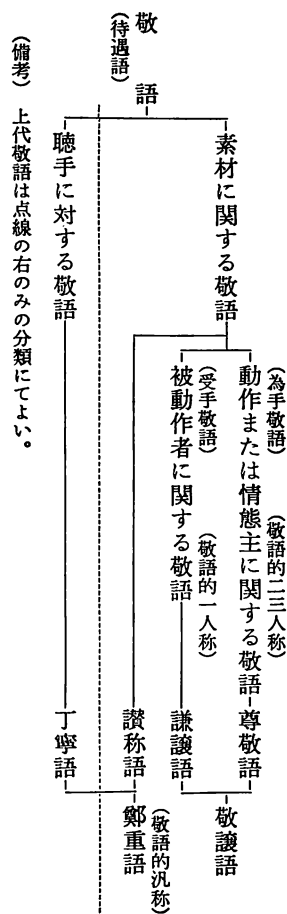
二 したがって、それらの文献における当時の訓法が明確に把握できない限り、解決困難な問題がそこに残る。ただわずかに訓法や訓釈、あるいは漢文中に插入された一字一音式仮名表記の部分を通じて把握できることもある。

これに対して、上代の言語資料としては、主として一字一音式万葉仮名表記を多用する韻文に求めねばならぬことも当然であり、敬語もその例外ではない。

上代敬語資料と歌謡　主として奈良朝を中心として、編集された上代歌謡は、言語の抽出が、その表記様式の関係上、比較的容易であるが、歌謡そのものは、待遇表現に関して厳密であったかどうかを考える必要がある。一般に平安朝以後の和歌では、特例を除き、敬語の使用が極度に制限を受けてしまうことは指摘されている通りであるが、これに比較すれば、上代の歌謡は敬語の用例が豊富であり、それだけ歌謡が人間の言語行動の一環を緊密に担っていたことになる。つまり平安朝の和歌類とは、その表現の次元が異なっていたともいえるのである。

上代敬語とその体系　一般に敬語は、尊敬・謙譲・丁寧の三種類に分類して観察するのが習慣であるから、ここでは、この方法に従って説いてみることにするが、このうち尊敬と謙譲は素材に関する待遇法の表現であり、丁寧とはそれらとまったく異なった聴手に対する言語主体たる話手の尊敬の表現である。時枝誠記は前者に関する語を「詞の敬語」、後者に関する語を「辞の敬語」として、その言語観に依って区別している。[1]かくして待遇語は、動作主(または情態主)たる主語に関する敬語(為手敬語)と、被動作者たる補語に関する敬語(受手敬語)に分かれ、それぞれに尊敬語と謙譲語の名目が与えられている。その他、素材に関する待遇語の範疇には、美称ないし讃称の語が入るが、多くは接辞によって意味の添加がなされる。丁寧語とこれら讃称語を総称して敬語的汎称(敬語的一人称=謙譲、敬語的二三人称=尊敬に対する)という場合があるが、[2]仮に鄭重語という名称を与えて処置する。讃称は敬譲と丁寧の中間的存在で、その間を浮動し、その帰属に関してなお曖昧な節が存する。ことに上古の讃称語は、聴手に対する話手の姿勢や態度を示すいわゆる美化語とは異なるといわれる。また美化語と同じく、聴手に対する尊敬語ともいうべき丁寧語(辞の敬語)はまだ発生を見ないというのが通説であるが、ここでは、平安朝以後発生の丁寧語と対比する関係上、尊敬・謙譲・丁寧の三分法を主に、讃称を加えた分類を表示する。

敬語（待遇語）
- 素材に関する敬語
  - 動作または情態主に関する敬語（為手敬語）（敬語的二三人称）――尊敬語 ┐
  - 被動作者に関する敬語（受手敬語）（敬語的一人称）――謙譲語 ┘ 敬譲語
  - 讃称語 ┐
- 聴手に対する敬語――丁寧語 ┘ 鄭重語（敬語的汎称）

（備考） 上代敬語は点線の右のみの分類にてよい。

尊敬語と謙譲語とは、それぞれ動作主が他に影響をおよぼすか否かによって、便宜上、絶対尊敬語と相関尊敬語、絶対謙譲語と相関謙譲語に分類しておくが[3]、これも語によっては、必ずしも明確でない場合が存する。謙譲語には、自卑語・卑称語を加えるが、後者は謙譲語の範疇を逸脱することもありうる。

一 尊敬語

(1) 絶対尊敬語

(イ) 体言およびそれらに付く接辞

きみ（まし　いまし）　うし　なむち

おほ――　み――（みこと）　おほみ――

――たち　――はしら（ところ）

(ロ) 動詞および補助動詞

ます　います（おほましますいまさふ）

――たまふ　――たぶ（のたまふ　のたぶ）

(ハ) 助動詞「――す」および派生語

おもほす　きこす　しろす　けす　せす　めす　をす

(2) 相関尊敬語(動詞)

たまふ　たぶ

二 謙譲語(自卑語)

(1) 絶対謙譲語

(イ) 体言および関係接辞(卑称を含む)

わけ　やつこ(なびと　おれ　おのれ　い)　しこ――　――ども

(ロ) 動詞

まゐる　まかる　はべり(はむべり)　さもらふ

(2) 相関謙譲語(動詞および補助動詞)

まをす　まつる(たてまつる)　たまはる　たばる　(あぐ)

たまふ(たまふる)　います(いまする)(以上下二段活用)

――まをす　――まつる　――あぐ

三 讃称語(接辞)

ま――　み――　ゆつ(いつ)――　ゆ――　ふと――　たか――　うづ――　たま――

四 丁寧語(敬辞または聴手尊敬語)

はべり(はむべり)　さもらふ(さぶらふ)　(上代には適例がない)

補説　以上のような体系の中で各語についての解説は、別にすでに説いたところでもあるので、今は多少の補説

を加えることに留めておく。

絶対尊敬語の「きみ(君・王)」は、上は天皇・皇族から下は一般の同輩・友人・夫婦等に至るまで、用途の広い二人称の代名詞であったが、もっとも普通には、女性が男性に対して用いた代名詞である。もちろん女帝や王女等にも用いるばあいがあり、「宇万良尓乎世　乎者可支美(伯母が君)……」(『琴歌譜』阿夫斯弖振)のごとく尊称の形式名詞として、時には一般の女性にも用いられたようである。『万葉集』にも、例外と思われるものがあり、

朝日影にほへる山に照る月の不厭君(あかざるきみ)を山越しにおきて(四・四九五　田部忌寸櫟子)
うつたへに籬のすがた見まく欲り行かむといへや君乎見尓許曾(四・七七八　大伴家持→紀女郎)
うるはしと阿我毛布伎美波いや日けに来ませわが背子絶ゆる日無しに(二〇・四五〇四　中臣清麿→大伴家持)
吾君者(あがきみは)わけをば死ねと念へかも逢ふ夜逢はぬ夜ふたはしるらむ(四・五五二　大伴三依)
こと問はぬ樹にはありともうるはしき伎美我手奈礼能琴にしあるべし(五・八一一　大伴旅人→藤原房前)

等は、特殊な事情や思わせぶりな技法もあったであろうが、多少とも原則的でない。女性から男性への尊敬語としての規制が自由になる前兆とも思われ、平安時代にはこれがさらに著しくなることはそのところで述べる。

同じく二人称の代名詞「なむち」は、後世ならば「汝ナムチノ・爾ナムチ」(『類聚名義抄』)のごとく第三音節を濁音化したが、「於保奈牟知　少彦名の神代より……」(一八・四一〇六)とあるオホナムチ(大汝少彦名　三・三五五、六・九六三)と同語であり、「汝言虚実」(『神代紀』)の訓註が「汝此云奈牟知」を示し、『私記丙本』に「奈牟知加己止乃伊豆波里万古止」とあるように、清音であった。ナムヂは後世ならば、目下にも用いられたが、上代では、ナ・ムチと分析され、汝・貴(貴いあなた)の意で、第二人称として尊敬の意を有していた。それは『日本書紀』の「大己貴」(オホナムチ)の字面に照合しても明らかである。平安時代には「きむぢ」(君・貴)という語が擡頭して、敬意を帯びて用いられたが、「なむぢ」は敬意が失せて、例えば「汝が持ちて侍るかぐや姫たてまつれ」(『竹取物語』帝の求婚)のごとく目下に用い

られ、格助詞ガの用法にもそのような傾向が著しくあらわれる。「なむち」の複数は「なむたち」であって、

佐渡与里乎知能所乎　奈牟多知疫鬼之住加登……(『貞観儀式』大儺儀)

とも見え、『新撰字鏡』に「你……汝也　伊万志　又支三也」(天治本)と出ているように、「いまし・みまし」または親称の「まし」と共に二人称の尊称として用いられ、かくして上古の一般の二人称代名詞は、ほとんど敬意を帯びたものばかりであったことになる。

汝多知諸者、吾近姪奈利(汝たち諸は吾が近き姪なり)。(『続紀宣命』一七詔)

汝等為吾近人(汝等は吾が近き人なれば)……汝等乎皇朝者已已太久高治賜乎(汝等を皇朝はここだく高く治め賜ふを)……是以汝等罪者免賜(是を以て汝等の罪は免し賜ふ)……(同一八詔)

等の「汝多知・汝等」等もナムタチと訓めば、多少の敬意、少なくも親称の意(お前様方)は具えていたものと思われる。

相関謙譲語の補助動詞「あぐ」(上ぐ　下二段)は、本来、自動詞「あがる」(上がる　四段)に対する他動詞として、「西風吹き阿宜て」(『仁徳記』)、「白栲の袖纏上げて」(七・一二九二)のような基本的用法から、「妹が髪上げ竹葉野」(一一・二六五二)における髪の結い上げ、さらには、「六位已下尓冠一階上給比」(『続紀宣命』一三詔)のごとく抽象化したものなどがあるが、

美毛止乃加多知支止多末乊尓多天万都利阿久(そちら様のごようすお伺いかたがたお便り差し上げます)。(『正倉院文書』)

の「たてまつりあぐ」は言上の意に用いられ、上に相関謙譲の動詞がおかれる。

釈迦の御足跡　石に写しおき　敬ひて　後の仏に　譲りまつらむ　佐々義麻宇佐牟(『仏足石歌』)

の「ささげ」(差し上げ)もその変型であり、

添餝申志會上留……大御世乎万代祈利仏尓毛神尓毛申上流事之詞波……(『続後紀』嘉祥二年宣命)

後世ではあるが「申し上ぐ」の古い例である。

因みに自動詞「あがる」は「石門を開き　神上（かむあがり）　上座奴（あがりいましぬ）……」（二・一六七）のように用いると崩御・薨去の意になる。

2　上代敬語とその変遷

ここでは、上代の敬語について、もっぱらその変遷の方向に視点をおいて、語形・意味・用法の異動を説くことにする。

語形の先後　例えば絶対尊敬語の補助動詞として、「たまふ」と「たぶ」がある。

万世に伊麻志多麻比提　天の下　麻乎志多麻波祢（政治を補佐なさってください）朝廷去らずて（五・八七九）

吾が聞きし耳によく似る葦の末の足引くわが背勤め多扶倍思（二・一二八）

の二首におけるように、同等の意味用法に見られるものである。もともと「たまふ・たぶ」は、実動詞として上位から下位へ物を授け与える意味の相関尊敬語として発生したもので、

あが主の美多麻多麻比弖（御魂賜ひて）春さらば奈良の京に咩佐宜多麻波祢（お召し上げ下さい）（五・八八二）

では、第二句の「たまふ」が実動詞で、第五句の「たまふ」が、補助動詞である。

あかねさす比流波多多婢弖（昼は田賜びて）ぬば玉の夜の暇に摘める芹これ（二〇・四四五五）

は第二句に実動詞「たぶ」がある。このように「たまふ・たぶ」は、実動詞としても、それから派生した補助動詞としても意味上の異なりはなく、その先後については不明の点もある。すなわち、タブがその継続をあらわす意味を添加させてタバフになり、それがさらにタマフになったと見る説(4)（山田孝雄）と、タマフからタムブ（母音脱落・撥音化）、さらにタブ（撥音脱落）の方向に音韻変化したと見る説(5)（金田一京助）とがあって、にわかに決し難いが、上代では、「た

まふ・たぶ」は二重形として共存したものであろう。ただし後世「いでたうびし」(『土左日記』一月九日)のごとく、タマヒシがタウビシ(ウ音便化)になった例があること、派生語で相関謙譲語の「たまはる」(頂く)にも「たばる」の形があって「足柄の御坂　多麻波理」(二〇・四三七二)「御坂　多婆良婆」(二〇・四四二四)同様に用いられ、これが、「請ニ(タウハレ)家地ニ(ヲ)」(『天武紀』古訓)「似ニ(タウハレリ)天皇ニ」(『応神紀』古訓)のようにタウバルをもつに至っていること、「受賜多婆受」(二六詔)のように「たまはり」に下接してタブと訓ませた例があること、などによってタマフが本来の形であることを思わせる。因みに、同じ派生語として、「のたまふ・のたぶ」があり、『新撰字鏡』などに「詔・使下」の文字に「乃太万不」とあり、万葉では、「……栲縄の白鬚の上ゆ涙垂り奈気伎乃多婆久……」(二〇・四四〇八)にノタバクとなっている。これも後世の『類聚名義抄』に「亏」(僧下)の文字をノタウバクと訓ませてあるようなウ音便形があることとまったく揆を一にする。いずれも「ノリタマフ・ノリタブ」のリが促音化し、やがて脱落した形であろう。

活用の異なりと意味分化　「たまふ・たぶ」系統の謙譲語に「たまはる・たばる」があったが、

古人の令食有(たまへしめたる)　吉備の酒　病めばすべ無し貫簀(ぬきす)賜(たば)らむ(四・五五四)

の第五句の「賜」も「頂く」意のタバルと訓むのが一般で、それは第二句をタマヘシメタルと下二段に訓んで自動詞的に「頂けるようにした」の意味と相応じている。下二段活用の「たまふ・たまふる」は、平安朝以後、主として「見る・聞く・思ふ」等に接続して、助動詞ないし補助動詞としての謙譲的用法が著しくなるが、上代にもすでに見た「支ょ多末ヘ尓　奉り上ぐ」(『正倉院文書』)があって、真仮名の散文中に連用形の体言化した「聞きたまへ」(伺い)としてあらわれている。後の訓読文にも「如是我聞」を「是(の)如キことを我聞きたまへキ」(『西大寺本金光明最勝王経』平安初期点)などと訓んであることが知られている。

鈴が音のはゆま駅の堤井の水を多麻倍奈　妹が直手よ(一四・三四三九)

これも単独に他動詞的な「頂く」意に用いてある。「たまふ」における四段と下二段両活用の対立は、本来他動詞と

自動詞の対応となっている「知る・解く・欠く・抜く・破る・振る・焼く・仕ふ」等の動詞と同じで、下二段の「たまふ」も本来的には自動詞「頂かれる・頂ける」に近いものと思われるが、自他の区別が意味上緊密すぎるのである。

後世の

常も見る踏歌見太部退止為弖奈毋御物賜はくと宣る。(『類聚国史』七二、歳時三、天長四年宣命)

におけるミタベは「部」が甲類であるが、これは仮名遣のあやまりと見るべきで、下二段「たぶ」の命令形または連用形(べ乙類)が補助動詞的に用いられ「見るようにして頂けたら」と希望を述べた形で「見させて頂きたい」の意になる。そのような意が次第に軽くなり、「聞きたまへ」では「承り・拝聴・伺い」のごとく熟語化してしまったのである。

上代のもっとも基本的な敬語は、存在をあらわす単独尊敬の「ます・います」である。

王は千歳に麻佐む(三・二四三)

新羅へ伊麻須君が目を(一五・三五八七)

すめろぎの敷き麻須国(一八・四一二二)

松が枝の栄え伊麻佐ね(一九・四一六九)

等のような実動詞の用法はどちらも四段活用である。

動詞に接続した形にあっても同様四段活用である。ただしこの場合、マスはすでに意味が抽象化して、単なる敬意を添える補助動詞ないし助動詞となっているのに対して、イマスの方は独立性が強く、存在の意が失せないのが特色であるという。したがってマスは上位語と複合して熟語化の傾向が強く、

泣子なす慕ひ来麻斯て(おいでになって)(五・七九四)

魂合はば君来益やと(一三・三二七六)

のごとく「来ます」に著しく、「いでます・しきます」等がこれに次ぐ。イマスには下二段活用のものがあって、

人国に君を伊麻勢て何時までか吾が恋ひをらむ時の知らなく(一五・三七四九)

のごとく原義(存在)が「行く」の尊敬体に変化して、さらに使役の意が加わって、「お行かせして」のような他動詞化したものになる。このような敬語表現は現在にはないし、「ます」の場合もまた同じであった。平安時代に入ると「かかる道はいかでいまする」(『伊勢物語』九)のような例が出て来るが、使役の意味はなく、単なる「おいでになる」という敬体である。

語の複合と意味の変遷　前述のことから、さらに複合について説くと、「ます」の連用形マシとマスを重ねた「ましますし」という語は、上代に確例がないが、「おほましますし」という形をもって散文にあらわれる。

天つ日嗣の位は大命に坐せ　大坐坐而(おほましまして)治め賜ふ可し。(『続紀宣命』三詔)

然て朕は御身都可良之久於保麻之麻須尓依天(つからしくおほましますに依りて)(『続紀宣命』四五詔)

わが養ひの代りには於保麻之麻須……(『正倉院文書』)

三宝(の)徳海ハ広大无辺に(し)て極(め)て峻(タカ)ク極(め)て奥く大坐(ふかくおほまします)……久劫の貴親(に)大坐。(『東大寺諷誦文稿』九三―九四行)

のごとく、最上敬語として、神仏および天皇などに用いられた。「まします」は、平安朝以後には珍しくないが、「爾時　世尊黙然して(而)止シマ(マ)ス(止ハ居ゾ也)」(『西大寺本最勝王経』古点)、「大神託宣摩志万志木」(『倭姫世記』)など初期の文献に、動詞あるいは補助動詞としての用例があるので上代以来存したに違いない。

「ます」が上に動詞連用形をおいて、熟語化し易いことは「来ます」などに著しいと述べたが、「出づ」の連用形「出で」に接続して「いでます」という複合動詞ができる。

打橋のつめの遊びに伊提麻栖古(おいでなさい、お嬢さん)……伊弖麻志能(御外出の)悔いはあらじぞ伊提麻西古(『天智紀』童謡)

とあるように、「いでます」(四段自動詞)とその名詞形「いでまし」(御外出・行幸)が生ずる。

　闇夜ならばうべも来まさじ梅の花咲ける月夜に伊而麻左自常屋(おいでにならぬとおっしゃるのでしょうか)(八・一四五二)

は「来まさじ」と応じた同様の例である。後世訓点資料では「行・往・来」の訓読語としてイデマスがあり「往来する」意の尊敬語として固定するが、『万葉集』には、

　父母が殿のしりへの百世ぐさ母ゝ与伊弖麻勢わが来たるまで(二〇・四三二六)

では単なる存在ないし在世の意の尊敬語となっている例がある。こうなれば、もはや完全な一語である。

さて、「ます」の複合と同時に考えられるものは、既述の「たまふ」である。「たまふ」は記紀歌謡等においては、「ます」に比して用法が少なく「那志勢多麻比曾」(な死せたまひそ)(『記』神代)、「斗比多麻閇」(問ひたまへ)(同、仁徳)等があるに過ぎないが、『万葉集』では約七〇例ほどに及ぶ、特に、

　万世に伊麻志多麻比提(五・八七九)　見之賜者(めし給へば)(一・五二)　所聞賜而(聞こし賜ひて)(六・一〇五〇)

のごとく二重敬語となってあらわれ、筑前守山上憶良が帥大伴卿に対する敬語となり、また天皇に対する臣下の詠の中に用いられることになった。「ます」の接続が「来ます・出でます」等の熟語形成の傾向にあって、用法の慣用化が、敬意漸減を促進するという内部的要因の他に、「たまふ」は新興語として、比較的接続が自由であり、熟合度も「ます」ほど緊密ではない。公的用語として一つの位相の中に多用されたため、宮廷や官庁の諸卿官人の間に定着し、その最たるものが最高敬語となったものと解せられる。

　絶対謙譲の動詞「まゐる・まかる」等が意味的分化をとげるのは、平安時代に入ってからであるが、例えば、「都べに末為し我が背を」(一八・四一一六)とあるように上二段活用動詞「まう」の連用形マヰが、他語を下接して、

　一日には千遍参入りし東の大き御門を入りかてぬかも(二・一八六)

「麻為弖牟(まゐ出む)・麻為多利弖(まゐたりて」(以上いずれも『仏足石歌』)は、共に「まゐいる・まゐいづ・まゐいたる」の融合形であり、

板蓋の黒木の屋根は山近しあすの日取りて持将参来(四・七七九)

の第五句は「まゐく(来)」の熟合を示す。これらのヰがウ音便をおこし、「まうづ・まういたる・まうく」さらには「まうのぼる」等が生ずるのは、平安時代に入ってのことである。

音変化を伴う複合語と意味分化　例えば「思ほす・聞こす・知ろす」は、それぞれ上位語の「思ふ・聞く・知る」の未然形「思は・聞か・知ら」に上代の尊敬助動詞スが接続し、「思はす・聞かす・知らす」となり、そのア列の音がオ列乙類に転じて一語化したものであるという。

賢し女をありと岐加志弖　細し女をありと岐許志弖(『記』神代)

には「聞かす・聞こす」が共存しているが、『万葉集』ではすべて「聞こす」となり、「お聞きになる」の原意が「いわれる・おっしゃる」の意に変ったものもある。

わが背子しかくし伎許散婆(このようにおっしゃるならば)天地の神を乞ひのみ長くとそ思ふ(二〇・四四九九)

また「飲食なさる・召し上る」意にもなる。

大御酒うまらに岐許志母知袁勢(召し上って下さい)まろが父(『記』応神)

さらに補助動詞的になって、意味が抽象化すると「……して下さる」となり相関尊敬語化する。

あなにな恋ひ岐許志(恋い慕って下さるな)八千矛の神(『記』神代)

「召す・食す」等の尊敬動詞が下接すると「きこしめす・きこしをす」と二重敬語になり、「統治なさる」意の最高敬語となる。

押照る宮に伎許斯売須なへ(御統治なさると共に)(一一・四三六一)

谷蟆のさわたる極み企許斯遠周　国のまほらぞ(五・八〇〇)
また前掲「きこしもちをせ」(『記』応神)と共に「日の皇子　聞食す御食都国　神風之伊勢国」(一三・三二三四)のように「食物を召し上る」意となる。
「統治する」意味の「知ろす」は、本来「知らす」であって、
葦原の瑞穂の国を天下り之良之売之家流　すめろぎの神の尊の御代重ね天の日嗣と之良之久流　君の御代御代(一八・四〇九四)
のごとく用い、そのラがロ(乙類)に交替したこと「聞こす・思ほす」と同じである。
所知食古語云志呂志女須(『祝詞』大殿祭)
所御志呂之女須(『日本書紀私記』乙本)
等主として後世の資料や、書記古訓として「奄有・知食」等の字面に見られるが、『万葉集』ではシラシメスとあり、おそらく上代末ごろでは、両形共存したものであろう。
「めす」は、右に見たようにしばしば二重敬語の下位語となるが、これは「なす(寝す)・けす(着す)・せす(為す)」等と同じく、極めて卑近な日常動作を表す尊敬動詞で、尊敬の助動詞スの接続した特殊形であり、「めす(見す)」は、本来「見る」の尊敬体(御覧になる)である(この場合のエ列は、すべて甲類)。意味分化が著しく、
秋の花くさぐさにあれど色ごとに見之明良牟流(はっきり区別してごらんなさる)今日の貴さ(一九・四二五五)
のごとき原義から、
東の滝の御門に候へど昨日も今日も召言毛無(お呼びよせになることもない)(二・一八四)
高照らす日の皇子　荒栲の藤井が上に食す国を売之賜牟登(御統治になろうと)(一・五〇)
武奈伎　取喫売世反也(鰻を獲って召し上れ)(一六・三八五三)

のごとくである。「めす」は、すでに見たように上に敬語動詞、下に「給ふ」を接続させて、複合語としての二重敬語（最高敬語）を形成する。

「をす（食す）」は本来「食物を召し上る」意であるが、これも意味が分化して、

献り来し御酒ぞ　あさず哀勢（召し上がれ）ささ（『記』仲哀）

臣の子は栲の袴を七重　喁絁（着なさい）（『雄略前紀』）

すめろきの乎須久尓奈礼婆（お治めになる国であるので）（一七・四〇〇六）

食国上字乎師志（『日本霊異記』下三八訓釈）

のごとく衣食する日常的な動作の尊敬語（お召しになる）から天子の統治される意が派生したものである。

敬譲に関する転位　意味分化の一種で、謙譲語、特に相関謙譲語（受手尊敬）が絶対尊敬語になり、相関尊敬語が相関謙譲語になるような、意味の転換現象について観察する。

「まつる」は、尊者に対し、恐れ畏みながら種々の奉仕的行為をなすことであって、

礪波山たむけの神に幣　麻都里（幣をお供えして）あが乞ひ祈まく（一七・四〇〇八）

木綿懸けて祭る三諸の神さびて（七・一三七七）

のように、神に供物を献げ、神霊を慰め祈る意で、相関謙譲語であるが、

やすみししわご大王は平けく長くいまして等与美岐麻都流（豊御酒まつる）（『続紀』天平一五年）

は、「献げる・捧持する」意から「召し上る」という尊敬語に転位している。「まつる」は補助動詞としての用法が一般化すると、「仕へまつる・たてまつる」等の複合語が形成される。特に「たてまつる」の「たて」は進発させる意の動詞「たつ」（下二段）の連用形に「まつる」が下接した複合語であるが、平安朝では、「飲食、着衣する」意の最高敬語としていわゆる「お召しになる」意に転化する。上代では、「登与美岐多弖麻都良世（豊御酒奉らせ）」（『記』神代）

のごとく、さらにス(尊敬の助動詞)のついた二重敬語で「酒を飲む」の最高敬語として用いられ、

　天つ神　御孫の命の　取り持ちてこの豊御酒を伊可多氏末都流(うやうやしくお召し上りなさる)(『続紀』天平一五年)

では、聖武天皇の自称敬語として用いられている。「まつる・たてまつる」は「めす・をす」と同意になって、謙譲の原義から飲食に関する尊敬語に転位する。

「います」が下二段に活用して「ひと国に君を伊麻勢て……」(一五・三七四九)のように用いると尊敬と使役の意を兼備して「居させる」の尊敬語となるが、現代ではこのような表現はできない。これが補助動詞的に、

　神葬り葬り伊座而（いませて）(二・一九九)

　隠りくの初瀬の山に神さびに伊都伎坐等（いますと）(神として鎮座させ申して)たまづさの人ぞ言ひつる(三・四二〇)

になると、意味が相関謙譲語(受手敬語)の「申し上げる」に近くなり、転位が認められる。

　万世にいまし給ひて天の下　麻乎志多麻波禰　朝廷去らずて(五・八七九)

は、「政治を補佐奏上なさる」意で、「たまふ」は尊敬の意を備えている。しかるに、

　陸奥の小田なる山に金有りと麻乎之多麻敝礼(八・四〇九四)

は、何等敬意を必要とせぬところに「たまふ」があらわれている。これは、儀礼的表現ともいうべき一種の被支配者待遇の表現で、「言上させて頂く」に近い意味となる。「たまふ」が上位する「申す」の謙譲に引かれて、謙譲の補助動詞化した一種の転位現象ともみなされる。同様に、

　あかねさす比流波多多婢豆(昼は田賜びて)(二〇・四四五五)

は、尊敬動詞「たぶ」の授受に関する変位が、尊敬から相関謙譲に転位した例となる。

自称尊敬語　上代の待遇語法の特色として、天皇など至尊の地位にある者が自己の行動に尊敬語を付して表現す

ることがあった。「天皇(聖武)賜ニ酒節度使卿等一御歌」には、

吾(天皇)は遊ばむ　手抱きて　我は将御在（いまさむ）　天皇朕（すめらわ）が　宇頭乃御手持ち　掻き撫でぞ　禰宜賜ふ　うち撫でぞ
禰宜賜ふ……(六・九七三)

とあって、「いまさむ・うづの御手・ねぎたまふ」のごとき自称敬語に接するのである。これをいかに解すればよいかは問題であるが、少なくとも、天皇および、これに準ずる高位の人びとには公式の場と私的な場とがあって、前者にあっては、自称敬語の使用されることもあったと見られる。特に上代歌謡や詔勅などにはその傾向が著しいことすでに見た通りである。しかし、このような自称敬語の用例は平安朝に入ると非常に少なくなり、いわゆる尊大語がわずかに残る程度である。

対者尊敬としての丁寧語の欠如　これも上代の待遇法の特色である。絶対謙譲語としての「はべり・はむべり(侍)」と「さもらふ・さぶらふ(候)」は、平安朝以後、上位用言などと接続して、例えば「この歌すべて訓み侍らじ」(『枕草子』)、「秋もをかしう侍り」(『拾遺集』九)、「辛い目を見さぶらひつる」(『枕草子』)、「敵に未だ会はず候」(『保元』上)のごとく口頭語の文末などに用いられ、現代語のデス・マス・ゴザイマスに相当する対者(聴手)尊敬語としての用法に発展したが、上代では、

是を以ちて意中に昼も夜も倦み怠ること無く謹美礼末比仕奉都都侍利。(『続紀宣命』四一詔)

の「侍利」など、多分ハベリと訓まれたのであろうが、存在の実動詞としての謙譲語以上のものではない。活用語などに接続したと思われる例も「集侍」(『祝詞』祈年祭、六月晦大祓、大嘗祭)、「恐麻里侍」(『続紀宣命』二五詔)などは一般に「ウゴナハレル・カシコマリハベル」と訓まれているが、なお「はべり」の独立性を認め、実動詞として「控えている」意にとられる。

「さもらふ」も「さ・目らふ」で、『日本霊異記』訓釈が「毎日来候」(下序)に「候毛良不」と注した通り、貴人の面

前に「様子を伺いながら控えている」意である。

鹿じもの　い這ひ伏しつつ……鶉なす　い這ひ廻(もとほ)り　侍候(さもら)へど　佐母良比えねば(二・一九九)

はそのような意味の実動詞で、絶対謙譲語である。

ハベリ・サブラフは、『書紀』古訓などでも「侍・侍坐・侍宿・随侍」また「在・有・居・陪住・留住・無・見・近・黙然・安置」等の字面の上にあらわれているが、ほとんど存在動詞の謙譲である。古文書にも、

然全万呂以㆓去月七日㆒臥病。至㆑今東西患侍。但昨日明日間少怠息侍。(天平宝字六年七月五日)

依㆑為㆓妻病㆒、今間患苦侍。(宝亀二年三月六日。以上『大日本古文書』)

などとあるのは、連用形接続を思わせ、同様のものでは、

(多遅摩毛理)擎其木実叫哭以白「常世国之登岐士玖能迦玖能木実持参上侍」(『記』垂仁)

の後の部分は、多遅摩毛理の奏上のことばであって「常世の国の登岐士玖能迦玖能木の実を持ちて参上りて侍(さもら)ふ」と一般に訓まれて実動詞としている。しかし、マキノボリハベリと訓めば、後世風な対者敬語に間違えそうな字面でもある。

つまり上代では、言語主体(話手)を中心とした対者(聞手)目当ての敬譲表現法(辞の敬語の用法)は未発達であって、すべて内容としての素材中の敬語を出るものではない。それは既述の次のような事象とも照合できる。

1 「隠りいませ」のごとき尊敬の使役表現の存在。

2 「申し給ふ」のような特殊な表現を除き、相関謙譲語と絶対尊敬語が接続したいわゆる両面敬語の用法がほとんどない。(6)

3 聞手を意識した美化語の用法がない。

4 卑称は別として、二人称の代名詞は、ほとんど尊敬語から由来する。

5 尊敬語の対象として最たる天皇のことばに、往々自称敬語があらわれる。

等である。平安朝は、このような現象が次第に稀薄になり、崩壊し、対者敬語が擡頭してきた時代でもあった。

二　中古の敬語を中心に

1　資料と敬語の特色

平安朝と敬語資料　時代は狭義に平安奠都以来約三〇〇年にわたり、院政期に引き続いているが、その初期約八〇年間は、国風暗黒時代という国語史料としての文献、ひいては敬語資料の乏しい時代であり、その極初頭は、むしろ上代に準ずる時代で、資料の性格も上代のそれに類似する。ただし、平安朝の中心は一〇世紀後半から一一世紀初頭にかけて、藤原道長・頼通を中心とする摂関制の最盛期であって、このような貴族政治のもとに敬語の資料となるべき文献が多出し、その位相的価値も新たに考慮されねばならなかった。

この時代、文献としては、いわゆる平仮名・片仮名によって表記された文学資料等が豊富になり、和歌・日記・物語等のジャンルにおいて、主として上流階級に属する女性が中心のサロンにおける用語が残されていて、これが在来の漢詩漢文や万葉仮名資料よりもはるかに敬語の実態を精細に示している。しかしこれにも、書写の時代が後世のものが多いため、その正確さに劣るものがあるが、まずまず観察に堪えうるものと思わねばならない。もちろん上代以来の伝統をひく漢詩・漢文の資料が敬語摘出に欠陥を有することは、前代のところで述べた通りである。

ただ、変体漢文の一種に天皇や公卿の残した日記類が存し、『御堂関白記』(道長)、『中右記』(宗忠)、『台記』(頼長)のごとき名称で残された。これらは、和文を漢字面に表記した独特の記録体という文章の上に、敬語を漢字面に定着さ

せ、例えば「参(まゐる)・被(らる)・令(しむ)・罷(まかる)・上・奉(たてまつる)・下・給(たまふ)・申(まうす)・仰(おほせ)・侍(はべり)・候(さぶらふ)」のように用い、これらを組み合わせて「若宮従内出給(いでたまひ)、戌時近衛御門被着(着せらる)。」(『御堂関白記』寛弘六年六月一六日)のごとく敬語を用いて訓むことができ、抽出に便利になった。

一方、平安初頭から、漢文としての内典・外典には、当時における和訓つまり訓点を施したものがあらわれ、新たに訓点資料として、仮名表記の和文資料と別次元の言語ないし敬語をしばしば提供していることが注目される。すなわち前者が漢文を基本にした理解のための文体であれば、後者は仮名文字による純表現のための文体となり、そこにおのずからなる用語差が生じたのである。敬語彙においても同様であった。漢文の訓読はヲコト点とカナ点を併用するのが一般であるが、そのヲコト点に往々敬語が用意されていることは、前述の通り漢文・漢字そのものにおける敬語彙が日本語のそれと比較して著しく劣勢であることによる。試みに施点年代の明記された最古のものとして有名な『聖語蔵東大寺分蔵本成実論』天長五(八二八)年点におけるヲコト点図中に示された敬語彙を示せば図1のごとくである。

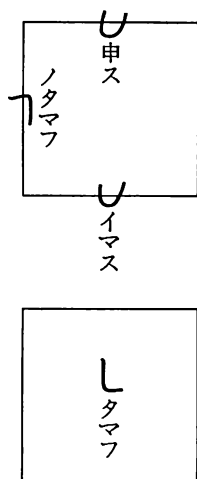



図 1

これは第一群点の古点であるが、同じ種類のニシハカ点では、図2のような複雑な展開を見せる。

訓点語では早く、「ます・います」が「たまふ」に交替するのであるが、それは、このようなヲコト点図や、補助符号として「給・幺・合・𠆢・下・丁・亠・玉」のごときものが数多く用意されていたこと、また前述のように公式用

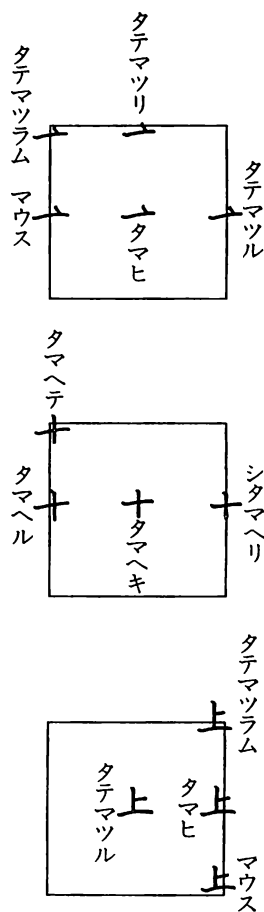



図 2

（以上、点図集より摘記）

語として「たまふ」が頻用されたこと等が主因であるが、「ます」が古来馴用されて、単独用法として敬意が漸減する傾向にあり、熟語化の方向に進んだこと、「います」はもっぱら神・仏・天皇等に用いられたが、一般化せず特に動詞に下接して熟することがなかった等の理由が挙げられる。総じて、漢文訓読語としての敬譲語は、読者の受容態度によって変動し、内容的に絶対のものとは言い難い。それがかえって創作的要素ともなり得るが、訓読上にあらわれる敬譲動詞として、次のごときものがある。(7)

イデマス(往・行・来・詣)　オモホス(欲)　メス(喚)　キコシメス(聞)　*ノタマフ(曰・言・告・命)
シロシメス(知)　ミソナハス(見・視)　*マヲス(曰・言・白・云)　マウヅ(詣)　ウケタマハル(受・請・承・奉)　ツカマツル(承・奉)　(*は補読にも用いる)

等であり、補読用語としては「イマス・マシマス・タマフ(四段・下二段)・タテマツル」等があって、タマフの応用が広かったことを知る。これらの敬語彙は、上代以来さまで変転をとげない単純な用例が多く、時には「イマス」のごとき古語の残存を見る。さて、これらの敬譲語には、いわゆる対者尊敬語としての丁寧語が生じない。訓点語彙が本来的に受容者側にあるがためで、平安朝に丁寧語が派生するのは、どこまでも表現的立場にある仮名文字資料を待

たねばならない。

仮名書き資料と敬語　平安朝の敬語資料として、もっともその特色を発揮し、価値を有するものは、草・平仮名または片仮名表記を主流とする仮名文献であって、諸種の文学作品にあらわれるものは、これを網羅していると考えてよい。中でも宮廷を背景とした女流作家によるそれは、当時の上流社会における敬語を写し得ていて、その特色はこれら仮名資料の中に包含され尽くされているといっても過言ではない。

和歌では敬語を使わない　まず仮名文献を韻文および散文に区分していえることとは、上代まで、韻文の中から多く採取し得た敬語が和歌の中にはほとんどあらわれなくなったことである。これは上代の和歌は、実用性を主とした伝達の具（ことばの代替）であったが、平安朝に入って、次第に文芸性を帯びた一つの作品としての価値が重んぜられ、極めて日常的な普遍性から、改まった文芸的な特殊性へと変移したためであって[8]、和歌の中では、音節数に制約されて、特殊な歌語が用いられ、言語形態も、例えば音便現象による変形を受け付けなかった等種々なる制限が付帯した。以上のことを『古今和歌集』における和歌と詞書の例を利用しつつ説明してみよう。

わがいほはみわの山もと恋しくはとぶらひ来ませ杉立てる門（一八・九八二）

みさぶらひみかさと申せ宮城野のこの下露は雨にまされり（二〇・一〇九一）

等は古い伝誦歌で口誦性の強いものであろう。

きみまさで煙たえにし塩釜の浦さびしくもみえわたるかな（一六・八五二）

うちわたすをち方びとにもの申すわれそのそこに白く咲けるは何の花ぞも（一九・一〇〇七）

ひととせに一たび来ます君なれば宿かす人もあらじとぞ思ふ（九・四一九）

等は「きみ」との併用も見られ、最小限の許容に属するものである。これに対して題詞はいたるところに敬語があらわれる。例えば、

二条のきさきの東宮のみやすん所ときこえける時、正月三日おまへに召して、おほせごとあるあひだに、日は照りながら雪のかしらにふりかゝりけるをよませ給ひける(歌をお詠ませになった)(一・八題詞)

このように多数の敬語を見る。ただし、「よませ給ひける」のセはまだ使役である。

受身の助動詞(複語尾)「る・らる」が尊敬に　この平安朝敬語の特色となる事象も、『古今集』の題詞などにあらわれる。

歌たてまつれとおほせられし時、よみてたてまつれる(一・二二題詞)

しばしば接する題詞で、自称敬語(謙譲の「たてまつる」)があって、その主語は帝であることが知られるが、「おほせられし」のラレは、受身から尊敬への過渡的姿のものである。(9) 文全体の主語は、作者(紀貫之)であるから、このままなら本来受身にとるべきであろう。しかるに同じ題詞でも次のような例がある。

これを題にて歌よめとさぶらふ人に(帝が)仰せられければ、(私が)よめる(一七・九三〇題詞)

わかりやすいように、主語を挿入してみたが、全体の主語は、「さぶらふ人」としての「私」(作者「三条の町」)であり、この構文では「られ」の受身の意味が稀薄になって、上位の「仰せ」という語に引かれて、尊敬語化したと見るべきである。このような現象は、すでに序文にあって、

延喜五年四月十八日に、大内記紀友則、御書のところの預かり紀貫之、前の甲斐の少目凡河内躬恒、右衛門の府生壬生忠岑らに仰せられて、万葉集に入らぬ古き歌、みづからのをも奉らしめ給ひてなむ……

とあるように作者貫之は「さぶらふ人」四人の中に入っているし、ここの「仰せられ」は、受身ではなく尊敬となって、しかも最高敬語を形成している。かくして前例(一・二二)の題詞も「帝が歌たてまつれと私におほせられし時私がよみてたてまつれる」と解することができる。「らる」はすでに受身から尊敬の助動詞(複語尾ないし接尾辞)となっていた、と見るべきで、これには、日本語の受身形の主語は原則的に有情物であるという特色が作用している。

「侍り」の丁寧語化　『古今集』の題詞を利用して、平安朝敬語の特色の一つである対者(聴手)尊敬の例を指摘しておく。

さくらの花の散り侍りけるを見てよみける(二・七六題詞)

この「侍り」は、いわゆる被支配者待遇から脱して、丁寧語化した例であろう。つまり題詞は口語調であったわけだが、それだけに前の題詞同様、言語主体(話手)としての自己(私)が強く主張されている表現というべきで、受身の「る・らる」が尊敬語を上位させて、尊者ないし目上の人を補語にして、話手が光栄とするような場合に、このような意味的変化が起こり、また一方では丁寧語の派生を見たといえまいか。そしてさらに必要なことは、題詞のような簡単な文ないし文章で、たとえ主語が省略されても、その述語としての敬語の性格が主語となるべき人物を明示しているという特性がすでにここにも発揮されているという事実である。ともあれ、「侍り」が丁寧語化することは、言語主体(話手)が敬譲表現に関与してくる重要な傾向を示すものであって、仮名書き文献の一端にもこのような重要な言語ないし敬語事象があらわれていることを知るのである。

登場人物への待遇意識　仮名文献の物語などでは、敬語表現の階級的水準が決まっていることがわかる。『源氏物語』では、地の文において、皇族と上達部の列まで、特別の君達を除き殿上人以下には敬語が使われないのが通則である。ただ天皇と皇族以下との間には大きな溝があって、隔絶の度が大であるといわれる[10]。次には東宮および皇后が続き、さらに一般皇族、上達部・家格の高い殿上人クラスが敬語の対象となる。天皇・皇后は敬語の位相も格別で、「行幸・行啓・御幸・奏す・啓す」等の専用待遇語が用意される。これに反し、家格の低い殿上人・受領クラス以下の人物には敬語を付けない。

ただし待遇表現は、いずれの場合も相対的なもので、その場面の相違においても異同が生じる。例えば、『源氏物語』の中の女性夕顔に対する待遇は、頭中将が「雨夜の品定め」に語り出す際は、「山賤の垣ほ」と歌にある通り、癡

れ者として軽蔑的な待遇である。この場合の彼女の位置は、待遇上未定ともいうべきであるが、やがて源氏との交渉が述べられる場面では、作者は、敬語なしであるが、登場人物としての源氏は「……ただはかられ給へかし」とつかい、源氏としては、頭中将が「語りし心ざまと思ひ出でられ給ふ」のであったが、屍骸となった彼女を従者惟光は車に「乗せ奉り」東山の寺に運ぶ。侍女右近は、夕顔について「『うつつとも覚えずなむ』と宣ひて……憂きことにおぼしたりし」と述べる。源氏のごとき高位者でも、意中の人には、敬語を用いる。ただそのような情事を第三者に語る場合には、敬語なしである。このことは、話手側に所属する上位者に敬語を省略する現代語の「父が参ります」といった息子のことばにも似て、そのような兆候が多少ともあらわれ始めているのではないかといわれる。[11]「帚木」の巻における紀伊守の光源氏に対することばの中に「私の主とこそは思ひて侍るめるを」のごとき父伊予介へ敬語なしで応答する部分などがよく引用される。作者(紫式部)ももちろん常体で書いている等のことが観察される。源俊頼が元永元(一一一八)年一〇月二日の内大臣忠通家の歌合せに判詞として「……女房などは、我にしなくだりたれど、詞はうやまひてこそこふめれ」といったことを森野宗明は引用しているが、それは女房だけでなく恋人にもあてはまる一種の女性尊重であったわけである。また驚異的な賞讃に価いすることがらには『紫式部日記』の「この人は日本紀をこそ読み給ふべけれ、誠に才あるべし」と帝の綸言の中にも敬語が使用される。『宇津保物語』(藤原の君)の上野(かむつけ)の宮は、あて宮を欲しいばかりに、その方法を教えた下賤なる徒輩に「のたまふ・し給ふ」等の敬語を使うのは、品位を保つためか、あるいは智恵を授けてくれた恩恵者に対する敬意から生じたものであるといわれる。[12]『更級日記』の作者は父母に対して、物語などを見せてくれる時は「親の太秦に籠り給へるにも……」と敬語を使うが、親の仕ぐさがもどかしく思われる時は敬語を使わない。「古代の親は宮仕はいと憂きことなりと思ひて過ぐさするを(そのままにさせてしまうが)……」など感情の起伏に従って敬語の消長を見る。これも仮名文献が示す心情と敬語の微妙な結び付きである。

平安朝の自称敬語　尊者が臣下に「歌たてまつれ」と謙譲語を使用するのと、『竹取物語』で帝が「顔かたちよしと聞こしめして……」と自らに使用する尊敬語とでは、自己尊敬の価値に軽重があったと思われるが、結局『源氏物語』等には自称敬語はないと断じてよい。つまり上代の天皇が使用したものとは、性格が異なってきたということである。例えば、「横笛」の巻で匂宮が「大将こそ、宮抱きたてまつりて……」と謙譲語を自称敬語的に使っているのは、いわば幼稚な錯誤であると見るべきである。(13)というよりは、話手の立場と素材としての内容的立場の区別がつかぬ表現と見るべきである。結局自称敬語は、話手の立場が明確になると共に、減衰の方向を辿るのであって、言語主体たる話手が聴手目当ての、いわゆる丁寧語が敬語体系に定位してくると、自称敬語は反対にその影を薄くして、わずかにその形骸が尊大語のような姿で残されることになる。

2 中古敬語とその変遷

在来敬語の消長　「なむぢ・なむだち・なむぢら」は上代以来用いられた二人称代名詞で、複数形を含めて男性用語として訓読専用となり、多少敬意の残ることもあったが、一般に対等または下位の者に対して使用された。『源氏物語』には「汝が父」(柏木)と一例だけ出ているが、光源氏が薫に対して用いた特殊なもので、「慎ミテ勿ナカレ三頑愚似ルコト二汝ノ爺ニ一」(文集二八律詩)よりの引用である。訓読語として「你・迺・汯・此・卿・子・若・弥・乃・爾・女・曹・渠」等の漢字訓(『類聚名義抄』)としてあらわれ、連体格には「なむぢが」として、通常助詞ガを用いるので、高い待遇法のものではない。類似の語に「きむぢ」があって、

　きん(む)ぢらは同じ年なれど(お前さん〈惟光→童〉方は夕霧と同年だが)、いふかひなくはかなかんめり。(『源氏』少女)

のごとく用いられ、「君きみ・貴むち」の融合といわれ、多少敬意を保有したが、普通には対等または下位者に用いられた。

「きみ(君)」は、前代のような女性の対男性二人称用語としての枠がとれ、用法が広がった。女房の呼名に「右近の君こそ、まづ物見給へ。……」(『源氏』夕顔)とあるように対女性的用法も多くなった。

「その女御の宮とてのどかには、かの君(あの姫君)こそかたちをかしかなれ」など心に思ひて(はなだの女御)

はふ〳〵も君があたりに従はむ長き心の限なき身は……君はいとのどかにて「なもあみだぶつなもあみだぶつ」

(虫めづる姫君)

右は『堤中納言物語』の例で、いずれも女性である姫君に用いてある。

お前(あなた様〈中宮様〉)にだにつつませ給はむことをましてこと人はいかが(『源氏』手習)

「おほ前」から変化した「お前」が二人称の尊敬度の高いものとして用いられた例で、「お前」の今日的用法と比べ思うとき、変転を経た敬意漸減の好例となる。

「す」系統の動詞「思ほす」は「おぼす」に変化し優勢に用いられる。補助動詞「給ふ」の上位語との結合は、一層緊密にかつ広範囲となり、訓点語では、その傾向が特に顕著となる。ただし「言ひ・来・いで・思ひ・まし・おはし」等は、「たまふ」を下接させない。「のたまふ・来ます・いでます・おぼす・おはす・おはします」等の熟合ない し擡頭が著しかった為である。稀に「思ひ給ふ」のごとき用例があっても「おぼす(思す)」より敬意が軽く、『枕草子』では四・五位級の人に対して用いられているという。[14]「たまふ」の下接複合語は、敬意がやや薄く助動詞「る・らる」と同等の軽度のものであった。総じて、助動詞や補助動詞として適用範囲の広い敬語は、尊敬語「おはす・おぼす」等、語彙の形態の異なるものに比して敬度が低いのであって、それらは上位尊敬語を複合させて「……(ら)れ給ふ・……(さ)せ給ふ」のごとき二重敬語の形で、敬意を補強して最高敬語として転成する他はなかった。

あまたの御方々をすぎさせたまひて、ひまなき御前わたりに人の心をつくし給ふもげにことわりと見えたり。

(『源氏』桐壺)

の傍線部の主語は必然的に帝である。

御車いるべき門はさしたりければ、人して惟光召させて、待たせ給うける程……御車もいたうやつし給へり。(『源氏』夕顔)

光源氏に対しては、政権掌握後でないと「せ給ふ」のような最高敬語は使わないので、ここは一つの特例となり、他の「……給ふ」と併用されている。

いかめしき釣殿造られて……人々涼みなどし給ふ……など聞こえ置き給ひて、釣殿に出で給ひぬ。(『宇津保』祭の使)

主語は正頼大殿で助動詞の「る」と、補助動詞の「給ふ」が同程度の尊敬をあらわした例である。「たまふ」は一方「たぶ」ともなり、また「たうぶ」(ウ音便形)という中間形を示すことがあった。

長谷部のゆきまさらなむみ館より出でたうびし日よりここかしこに追ひ来る。(『土左日記』一月九日)

船酔ひしたうべりしみ顔には似ずもあるかな。(同二月六日)

後例は、対話中に見え、揶揄的気分が濃厚で、それだけに敬度は低い。命令形の「たまへ」は「いざさせ給へ・いざ給へ」となって、「さあおいでなさい」の意で勧誘語となる。

敬譲の転位　謙譲の動詞(絶対謙譲語)が尊敬動詞化するものが多い。例えば「まゐる」は、「御かはらけまゐりて」(『源氏』須磨)のような場合、「酒を召し上がる」意に転ずるのであるが、尊敬語への転位である。「たてまつる(奉)」も同様の転位を遂げる。

法性寺のほどまでは御車にて、それよりは、御馬にはたてまつりける(源氏はお馬にお乗りになった)。(『源氏』浮舟)

紅の唐衣をぞ上にたてまつりたる(中宮は着ていらっしゃる)。(『枕草子』宮にはじめて参りたるころ)

右のように、「車馬に乗る・着物を着る」意の尊敬語(絶対尊敬)、それもかなり敬度の高いものに転位する。つまり受手尊敬の動詞は、多く実質的な他動詞の為手尊敬語となり「めす・きこしめす」と意味用法が接近する。

絶対謙譲語が丁寧語(対者尊敬語いわゆる敬辞)に 絶対謙譲つまり為手自卑の動詞には、「はべり(侍り)・さぶらふ(候ふ)」をはじめとして、「——給ふ(下二段)」、それに「まかる・まうで来」などがある。「まかる」は上位の者の前から退出する意を原義としたのであるが、平安朝に入ると、対話文の中だけに用例が限られ、『古今集』の題詞にもあらわれて、退下より参上の意に変化したと思われるものがある。例えば、

雲林院のみこのもとに、花見に北山の辺にまかりける時によめる。(二・九五題詞)

などである。『土左日記』の、

この歌主またまからずといひて起ちぬ。(一月七日)

の傍線部は、また「まからず」・また「まからンず」・「まだまからず」・「またまからンず」等に解せられるが、最後のように見れば、「またまいりましょう」となるわけで、貫之がその意味の転換を意図的に示したものと見られる。[15]「まうで来(まで来)」も、

あひ知れりける人の、越の国にまかりて、都へまうで来てまた帰りける(『古今』八・三八二題詞)

等は原義であるが、到来先の上下に関係なく、

大輔がもとにもうで来たりけるに(やって来ましたが)侍らざりければ(『後撰』八八五題詞)

となると、上下の意識はなく、丁寧表現に近くなる。

このような傾向が著しくあらわれるのは前代から伝った「侍り・候ふ」である。『枕草子』では、

わが使ふ者などの「なにとおはする」「のたまふ」などいふいとにくし。ここもと「侍り」などいふ文字をあらせばやと聞くこそ多かれ。(文ことばなめき)

といって、召使などが自分の動作に「侍り」という語を使うことを称揚する。『源氏物語』では、

いともかしこきはおきどころもはべらず（身の置き所もございません）。（桐壺）

桐壺更衣の母自身の、帝に対する自己卑下となっているが、それはそのまま聴手（帝）への尊敬語つまり丁寧語に化する。

今までとまり侍るが（生き残っておりますのが）いと憂きを（桐壺）

同じ母のことばであるが、「侍る」はまったく補助動詞として丁寧語化している。いずれも対話ないしそれに準ずる手紙文の中にあらわれるが、時には、

いとうるさくて、こちたき御仲らひの事などもえぞ数へ侍らぬや。（若菜、上）

のごとく地の文にも用いられ、作者（紫式部）の読者に対する個人的意識の吐露となる。しかるに、「侍り」は一方で、

かの故郷は女房などの悲しびにたへず泣き惑ひ侍らむに（夕顔）

のごとく話手以外の動作をあらわす文節にもついて、さらに、

まだこれより聞こえさせ給はざりける時より召し侍りけるを（『和泉式部日記』）

などは「一日召し侍りしにやおはしますらむ」（『源氏』若紫）の例と共に、第三人称者を主語とし、上位に尊敬動詞を持つに至る。

つれづれに思しめされて侍るに（中宮が退屈にお思いでいらっしゃるから）申させ給へ。（『堤中納言物語』このついで）

も同様である。こうなると「侍り」は尊敬語に転位したような印象さえ与えるが、これも、上代以来存した「神や高位者の前での行動」としての被支配者待遇として、「……のお蔭で――させて頂く」のような意味の極端な場合と見れば、一貫性を見出すことができる。[16] 丁寧語は謙譲と尊敬の間を浮游しているような立場にある。現代語の場合でも、

あんなことしていやあがります。
あなた様は何とおっしゃるか。

とはいわず、「いやあがる(マス無し)」「おっしゃいますか(マス有り)」の方が表現として、はるかに自然であることとも照応して、丁寧語が素材的な敬卑に関することがわかる。

「候ふ」は「侍り」ほど用法が進歩していない。この語が丁寧語として熟するのは、やや遅れて次の時期を待たねばならぬ。

かの浦々の巻は、中宮にさぶらはせ給へ(お手元にお留めなさいませ)。(『源氏』絵合)
いかなるところにか、この木はさぶらひけむ(ございましたろう)。(『竹取』蓬萊の玉の枝)

は、第三人称者が主語で、丁寧語化しているが、聴手目当ての尊敬表現とはなっていない。

辛い目を見さぶらひつる(ひどい目にあいました)。誰にかは愁へ申し候はむ(訴え申しましょう)。(『枕草子』大進生昌が家に)

対話文で話手が主語となり、動詞に下接してほとんど丁寧語化した例である。

「侍り」も「候ふ」も上位者に向けて語る対話文として用いられ、話手が主語になり、述語となって複合すると典型的な聴手目当ての丁寧語となり得るが、そのような用法において「侍り」の方が「候ふ」より一歩進んでいた。院政期以後「候ふ」は「侍り」の領域を次第に侵してゆくが、そのような過程は『今昔物語集』や『法華百座聞書抄』(天仁二年)等で実証されている。[17]

上代以来存した下二段活用の「給ふ」、「申す」(上代はマヲス、中古はマウス)にも、
主の娘ども多かりと聞き給へて(耳にいたしまして)はかなきついでに言ひよりて侍りしを(『源氏』帚木)
郷女童部モ其ヲ聞キ伝テ此ク罵リ立テ申ス也。(『今昔』二六・一)

は、動詞に接続した形で、聴手を意識して丁寧表現になった例である。

丁寧語が生ずるためには、言語行動における素材としての内容と伝達行動の二面を意識的に区別することが前提条件となる。平安時代についていえば、

1　「聞え給ふ」のような相関謙譲語（受手尊敬）と絶対尊敬語（為手尊敬）が接続したいわゆる両面敬語が生ずる。

2　和歌などに敬語がなくなり、純粋に内容的表現のものとして鑑賞されるようになった。

3　天皇などが使った自称敬語がなくなった。

4　話手側に所属する上位者（子供が話手の場合父母など）に敬語を簡略化する傾向があらわれ始めた。

等の現象は、多少とも右を暗示するものであろう。

受身・使役の助動詞（複語尾）が尊敬表現に参与する　いわゆる「る・らる」「す・さす・しむ」の意味が尊敬に転ずることである。「る・らる」については、すでに『古今集』の題詞などの例で説いたが、受身表現が日本語では動詞の自他に関係しないこと、常に有情物が主語となること等の原則がその背景にあることも重要な事実である。転義については、自然勢とか能力の存する意からと見る説[18]（山田孝雄）や、自然的実現または成立の意からとする説[19]（時枝誠記）があるが、その当初は「おぼす・めす・おぼしめす・仰す」等尊敬動詞に下接した例が多いので、尊敬動詞の影響も考慮に入れねばならない。単独の用法では、

「……あしくもあれ、いかにもあれ、便りあらばやらむ」とて置かれぬめり。（『土左日記』一月七日・作者→船君）

こはいつよりも、よく縫はれよ。（『落窪』一・継母→姫君）

のごとくあらわれるが、訓読語にはかかる用法はなく、記録体文には、

宰相中将被参（まゐられ）時刻相遷　各被退出（退出せらる）。（『権記』長徳四年三月二八日）

のごとく、「被」字によって示される。敬意は前述の通り軽い。

使役の「す・さす」は、中古に至って下二段活用の形を整えたが、上代では、「照らす・沸かす・暮らす等」(以上四段)、「知らす・聞かす・逢はす等」(以上下二段)の両形があり、四段活用のものは、尊敬の助動詞「す」と同形であった。使役からの直接転義と見てよいが、それ自身で敬意を表することはなく「たまふ・のたまふ・おはします・たてまつる・きこゆ・まうす・まゐる」等尊敬語ないし謙譲語に接続して敬度を強め、通常二重敬語として、最高敬語を形成した。「しむ」は上代からの使役の助動詞であるが、漢文訓読語として定着し、この場合尊敬には用いられなかった。ただ、

便なきこともあらば、重く勘当せしめ給ふべき由なん仰言侍りつれば(『源氏』浮舟)

のように和文では漢語のサ変動詞と「給ふ」の間に時に用いられたが、単独用法は生じないこともちろんである。

新興敬語 多く在来の「ます」系存在動詞の複合した変形としてあらわれる。

「いますがり・いまそがり・みまそがり」等ラ変活用の存在をあらわす敬語動詞は、

本院の北の方の御弟の童名をおほつぼねといふいますがりけり。(『大和』一四)

右大将にいまそかりける藤原常行と申すいまそがり。(『伊勢』七七)

中期の仮名書き和文の物語などに見られ、

御子はいままでいますがりつるとやおぼす。(『三宝絵詞』中一八)

等男子の作品ないし男性の口頭語にあらわれ、「います」の衰頽に伴う代替として、やや敬度の軽い表現で、語形に多少の動揺が認められる。補助動詞として、「つかさ位をば何とも思はずすぐしいますがらふや」(『源氏』竹河)のようにも用いられることがあった。

「おはす」は、上代からあった「おほましますす」等の存在敬語動詞の変形で、活用は、四段と下二段の混成したサ変活用を示す。[20] 女性作品に使用され、

いときびはにておはしたる(いらっしゃる)をゆゆしううつくしと思ひ聞え給へり。(『源氏』桐壺)

かかる人も世にいでおはするものなり。(同上)

のごとく単独にも、補助動詞としても用いられる。「ます」を連用形に下接して「おはします」となり、

何事も思しめしわかれずおはします。(同上)

のように帝など最上位の者に対する最高敬語として、盛んに用いられた。「おはさふ」(おはし・あふ)という派生語があって、複数主語の述語として用いられることがあった。「おはす」系の語は、平安時代に擡頭した時代語と称しても差支えない。

「みそなはす・みそこなはす」は、「見る」の最高敬語で、「みそなふ」にさらに「す」が下接したもの、

旧りにしことをもおこし給ふとて、今もみそなはし、後の世にも伝はれとて(『古今』序)

のごとくあらわれるが、漢文訓読にも「見・視」等にナハス(シ)と送り仮名をして、用いられ、「見ゾコナハス」(『石山寺旧蔵金光明最勝王経』古点)という形も見られるので、その原形は「みそこなはす」さらには「見し行はす」から起ったものと考えられている。おそらく男性用語であったろう。

特別な上流用語に「寝る」意の尊敬語「おほとのごもる(大殿籠る)」という動詞が生じ、

「今はさは大殿籠るまじきぞよ(そんなに大きくなって乳母と共寝をなさるものではない)」(『源氏』若紫・源氏→紫上)

命婦はまだ大殿籠らせ給はざりけるを、あはれに見奉る。(『源氏』桐壺)

のごとく用いられる。後の例は、帝に対する最高敬語となっている。

以上、新旧いずれの敬語も最高敬語を形成する場合、二重の結合になったものが多いが、『栄花物語』などには「おぼしめしおきてさせ給ふ」(あさみどり)、「おぼしめし忘れさせ給へり」(はつはな)のような三重敬語が見られ、小一

条院や倫子(道長の北の方)に対する最高敬語となっているのが注目される。[21]

以上新興敬語については、既述の論文も多く、筆者も説いたことがあるので、簡略にした。

(1) 時枝誠記『国語学原論』第五章敬語論、岩波書店、一九四一年、四三〇頁以下。
(2) 石坂正蔵『敬語法』(『日本文法講座 I』明治書院、一九五七年)。
(3) 辻村敏樹「敬語の分類について」(『言語と文芸』五巻二号一九六三年)。『敬語の史的研究』東京堂、一九六九年。
(4) 山田孝雄『奈良朝文法史』宝文館、一九一二年、第二章第二節用言。
(5) 金田一京助「上代敬語動詞成立考」(『言語学五十年』宝文館、一九五五年)。『日本の敬語』角川書店、一九五五年。
(6) 渡辺実「上代・中古敬語の概観」(『敬語講座 2 上代・中古の敬語』明治書院、一九七三年)二四頁。
(7) 春日政治『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究 坤(研究篇)』斯道文庫、一九四二年、二五三頁。
(8) 辻村敏樹「敬語史の方法と問題」(『講座国語史 5 敬語史』大修館、一九七一年)二三頁。
(9) 木下正俊「古代の敬語・受身と敬語」(『万葉集語法の研究』塙書房、一九七二年)二九二頁。
(10) 玉上琢弥「敬語の文学的考察——源氏物語の本性(二)——」(『国語国文』二一二号、一九五二年)。
(11) 森野宗明「古代の敬語 II」(前掲『講座国語史 5』)一一九頁。
(12) 塚原鉄雄「卑者に対する敬語」(『平安文学研究 一五』一九五四年)。
(13) 秋山虔「上代・中古の風俗と敬語」(前掲『敬語講座 2』)。
(14) 渡辺英三「枕草子の敬語」(『国語国文研究』一九三七年二月号)。
(15) 遠藤嘉基「貫之の文体と表現意識」(『京都大学文学部五十周年記念論文集』以文会、一九五六年)。
(16) 阪倉篤義「「侍り」の性格」(『国語国文』二一九号、一九五七年)。
(17) 桜井光照『今昔物語集の語法の研究』明治書院、一九六六年、三頁以下。春日和男「「侍り」と「候ふ」の分布より見た「法華修法一百座聞書抄」の文体」(『説話の語文』桜楓社、一九七五年)一七三頁。
(18) 山田孝雄『日本文法論』宝文館、一九〇八年、八〇二頁以下。

（19）　時枝誠記『日本文法　文語篇』岩波書店、一九五五年、六六頁以下。
（20）　宮地幸一『おはす活用考』白帝社、一九六二年。
（21）　松村博司「栄花物語・大鏡の敬語」（前掲『敬語講座　2』）一二二頁以下。

参考文献

山田孝雄『敬語法の研究』宝文館、一九二四年。
江湖山恒明『敬語法』三省堂、一九四三年。
石坂正蔵『敬語史論考』大八洲出版、一九四四年。
佐伯梅友「敬語」（『奈良時代の国語』三省堂、一九五〇年）。
金田一京助『日本の敬語』（角川書店、一九五五年）。
石坂正蔵「奈良時代の敬語」（『国文学解釈と鑑賞』一九五六年五月号）。
木下正俊「上代敬語動詞成立考」（『万葉』一九五六年一〇月号）。
石坂正蔵「敬語法」（『日本文法講座　1　総論篇』明治書院、一九五七年）。
辻村敏樹「待遇語法」（『続日本文法講座　1　各論篇』明治書院、一九五八年）。
泉井久之助「敬語法」（『ことばの講座　2』角川書店、一九五九年。『言語の世界』筑摩書房、一九七〇年、所収）。
湯沢幸吉郎「敬語法の時代的展開」（『国文学』一九六〇年一月号）。
藤井信男「古代の敬語」（『国文学』一九六〇年一月号）。
辻村敏樹「上代敬語の特質」（『国文学』一九六六年七月号）。
辻村敏樹『敬語の史的研究』東京堂、一九六九年。
『講座国語史　5　敬語史』大修館、一九七一年。
木下正俊『万葉集語法の研究』塙書房、一九七二年。
『敬語講座　2　上代・中古の敬語』明治書院、一九七三年。
穐田定樹『中古中世の敬語の研究』清文堂、一九七六年。

春日和男「「ます」及びその類語の発生と展開」(『国文学』一九六〇年一月号)。
春日和男「中古敬語の特質」(『国文学』一九六六年七月号)。
春日和男「丁寧語」(『月刊文法』一九六八年一二月号)。
春日和男『存在詞に関する研究』風間書房、一九六八年。
春日和男「古代の敬語 I」(『講座国語史 5 敬語史』大修館、一九七一年)。

4 敬語の変遷(2)

外山映次

はじめに

本稿で扱うのは、院政鎌倉時代から江戸時代までの敬語の変遷についてである。この期は、社会は荘園制から封建制に移行し、政治権力も公家(貴族)から武家(武士)に移るなど、社会的政治的に大きく変動していった時代である。同じ封建制と言っても、鎌倉・室町時代の前期封建制と、江戸時代の後期封建制とでは性格に相違があろう。いくつかの時代の切れめには、それまでの価値観が否定されてしまうという現象も起きる。また江戸時代は、それまで上方中心であった言語・文化に対し、江戸(東国)を中心とする言語・文化が発達し、いわば二極を形成するに至った時代でもある。

敬語は、言語活動の中で、社会制度・慣習・人間関係に特に大きく影響される領域である。大きく揺れ動いた時代を通して、敬語の変遷をとらえることは、そう容易なことではない。加えて、七世紀にわたる期間とあってみれば、その考察の対象となる言語資料に位相的等質性を求めるのは困難なことであろう。以下の記述は、それらの難点を踏まえての素描に過ぎないことを、あらかじめお断わりしておきたい。

一　古代敬語から近代敬語へ

1　序列敬語と相対敬語

敬語を古代敬語と近代敬語(室町時代――現代)とに分けた場合、両者に見られる特徴は何であろうか。いろいろ考

えられているが、次のような敬語意識の違いが両者の間に存するると思われる。[1]

古代敬語の特徴は、社会的階層的序列関係への配慮が、敬語表現の選択のし方に大きく影響することだと言える。つまり敬語使用の対象となる人物の身分・家柄・地位などといった社会的序列構成に関する条件についての上下関係に対する話し手の配慮が、敬意の度合いを決めたり、敬語を用いるか用いないかを決めたりする基準として強力に作用するのが古代敬語の特徴と言えるのである。この意識は現代でも見られるが、比較にならぬほどそれが強固なものであったのである。厳しい身分制度の下にあっての上下関係への配慮は、敬語を固定化の方向に導く。人称・場面のいかんを問わず、その人物に対する敬語使用が固定化してくるのである。

近代敬語の特徴は、場面や相手(敬語使用の対象や聞き手)との関係などへの話し手の配慮が、敬語表現の選択のし方に大きく影響することだと言える。恩恵・利害・親疎あるいは社交上の必要など、いわば話し手側の意識が優先する。古代敬語が、身分・地位という客観的条件による外側からの規制が強いのに対し、近代敬語は、話し手の主観的心理的要因による、いわゆる相対敬語的性格の強いものだと言えるだろう。

敬語の性格が、序列重視の敬語(絶対敬語的)から相対的敬語へと移行したのはいつごろかという点は、事の性質上判然としない。ある時期を境に、敬語の性格が一変するわけではなかろう。鎌倉時代においても、すでに相対敬語使用の一面が窺えるし、江戸時代においても強固な序列敬語の反映は窺えるのである。ただ、人間関係の複雑さを増してくる室町時代末から江戸時代にかけて、相対敬語への傾斜が著しく増していったらしいことは言えるかと思う。

以下、この時期に見える二つの性格について触れてみる。

2　根強い序列への配慮

公家(貴族)から武家に政治権力が移ったとは言え、鎌倉時代における敬語使用に際しての身分関係への配慮は、序

列重視の前代とそう変ってはいないようである。宮廷貴族の序列に武家階級のそれが割りこんだ形となっている。もちろん武家階級の内部には、また強固な序列が構成されてくる。

すでに岡村和江・西田直敏の指摘[2]にあるごとく、『覚一本平家物語』(鎌倉時代の言語が反映している)の地の文における敬語使用は、人物の身分・地位関係によって画然と分たれている。すなわち、最高位は、天皇・院(上皇)を別格として頂点に据えた、皇族・摂関などの貴族社会の最高支配層で、これらは常に最高の敬語によって待遇されている。特に、天皇・院には他の階層には絶対に用いられない特別の敬語が用意されている。それは、「行幸」(天皇)「御幸」(院)を始めとして、「叡覧」「宸襟(しんきん)」といった一群のもので、天皇制下にあって、前代から引き続き用いられ、以後ながらく皇室関係の用語として存在していたことは周知のことである。第二の層は、上達部(かんだちめ)で、最高位より一段低い敬語ながら、その人々の行動には原則として敬語が用いられる。第三の層は、原則として敬語が用いられない層で、殿上人以下がそれに当たる。武士関係では、平氏などはむしろ貴族社会に編入された形として、それぞれの階層に対応して待遇される。しかし、太政大臣清盛を始め、平氏一門がやや低めの待遇を受けているのは、身分関係にかかわる門閥意識が強く働いているためであろう。関東武者としての源氏一門では、頼朝(正二位大納言にいたる)が第二の層に匹敵する待遇を受けているけれども、他は概して待遇が低い。

『覚一本平家物語』の語り手の待遇意識は、右の通り、ほぼ在来の貴族社会のヒエラルキーに従っているのであり、新興階級としての武士に対する待遇は概して低いと言えよう。

身分関係・序列関係意識が強く作用すると、直接の上下関係(主従関係など)・恩恵関係等がなくとも、身分上の上位者には常に相応の敬語が用いられることになる。さらに、自らと敵対関係をなす者・憎悪の対象となり得る者に対してさえも、序列上上位者であれば、敬語が用いられることにもなる。

我等なたねの二葉よりおほしたて給ふ神だち、後二条の関白殿に鏑箭(かぶらや)一つはなちあて給へ。(『覚一本平家物語』巻

一・願立)（傍点筆者以下同）

これは、山門（比叡山延暦寺）と敵対関係にある、時の関白藤原師通を呪った山門の仲胤法印のことばであるが、きちんと「殿」をつけている。この種の言い方は、武士の名のりなどに典型的に表れる。一の谷合戦での熊谷直実の名のり、

越中次郎兵衛はないか、上総五郎兵衛、悪七兵衛はないか、能登殿はましまさぬか。（『覚一本平家物語』巻九・一二之懸）

もそうである。対等の者には敬語抜き、敵将能登守教経には尊敬語を用いている。武士階級の内部では、貴族階級と同様、むしろより強固に身分関係が定まっており、それが敬語意識に反映している。

序列意識は室町時代にいたっても変らない。たとえば、太平記の中に次の如き一節がある。

楠判官摠大将ノ前ニ来テ申ケルハ、「今日御合戦、不慮ニ八方ノ衆ヲ傾クト申セ共サシテ被レ討タル敵モ候ハズ、将軍ノ落サセ給ケル方モ不レ知、御方僅ノ勢ニテ京中ニ居候程ナラバ、兵皆財宝ニ心ヲ懸テ如何ニ申ストモ、一所ニ打寄ル事不レ可レ有候。（下略）」（『古活字本太平記』巻十五・正月二十七日合戦事）

足利尊氏の軍勢との一戦に勝利を得た総大将（新田義貞）に対し、その事後処置について楠判官（正茂）が進言しているところである。太平記の作者は、正茂のことばに敵将たる将軍（尊氏）に対し尊敬語を使わせている。義貞と尊氏とは不倶戴天の敵同士であり、正茂にとっても尊氏は現在の敵である。正茂――尊氏の身分関係への配慮が、聞き手義貞への配慮よりも優先していることになる。正茂は後醍醐天皇に対することばの中でも、朝敵に当たる尊氏の行動について敬語を用いているのである。しかし、尊氏と同等の出自・地位関係にある義貞やその弟脇屋右衛門佐のことばの中には、敵将尊氏に対する敬語は見られないのである。

このような身分・序列関係を優先的に配慮する敬語意識は、中世武士団にあってはふつうのことであった。

室町時代末から江戸時代にかけての戦国乱世を生きた武士たちの意識も、事情は同じであったらしい。甲斐武田家の老将高坂弾正信昌の遺記(天正年間か)に基いて作られたという『甲陽軍鑑』の起巻第一に、

一、敵方にても一国を持給ふ侍は、なに大将が大将と申さず、ただ大将とばかり申物なり。此大将をも口きたなくいふ事、弱将の下にて未練の人々の作法也。敵みかたともに、口にても書付もうやまふて申事也。子細は日本国をあつめても百人にたらず、六十六人の武士なり。さる程に一国をもつ大将の中に、古来からの侍をば家をたつとび敬べし。しいでの国持侍をば、其人の智恵冥加を感じて思へば、是又口きたなふ申は非也。(『甲陽軍鑑 起巻第一』戦国史料叢書による)

とある。武士たる者、一国の主をば敬って言うべしとの戒めであるが、中でも「古来からの侍云々」から、家柄・出自の重視されている点も見逃せない。もっとも「しいでの国持侍(新興の戦国大名——以下引用内括弧筆者)」に対しても、その個人の力量に対して相応な敬意を表すべきであるとの言及があるのは、乱世下克上の精神の反映と言えよう。

下克上と言えば、室町後期以降台頭してくる新興町人階級(町衆)の間にも身分序列意識の敬語への反映を窺うことができる。町衆の文芸とされる御伽草子の中に、成り上がり者の典型を描いた『文正草子』がある。鹿島神宮の神官の雑色(雑役をつとめる身分の低い使用人)であった文太の出世致富譚であるが、彼は塩売に成功して、「たからはいかなる十善の君(天皇のこと)と申すとも、これには過ぎじ」と思われるほどの長者となる。彼は名を文正常岡と改め、人々は長者としての彼に付き従うのだが、この草子の作者は、長者文正に対して、たえて敬語を用いることをしない。雑色としての身分が最後までまつわりついている。鹿島の申し子としての娘が時の帝に召されたお陰で、彼はとうとう大納言に出世する。作者は、そこで始めて尊敬語を用いて、文正を待遇しているのである。『文正草子』に限らず御伽草子は、旧来の価値観を否定する下克上的精神も見られる反面、著しい貴族社会志向という性格をも持っている。文正に対する敬語使用もその反映であろうが、いまだなお強い身分・序列意識を窺うことができる。

織豊政権による兵農分離の遂行により、支配者としての武士が階級的身分的に固定してきて、いわゆる士農工商(四民)の身分制度が生まれてくる。江戸時代は、厳しい封建制度のもとで、それが法制上・慣習上強化された時代である。身分制度が個人の意思で自由に改変し得ないものである以上、身分・序列に対する配慮は敬語使用上不可欠の要因となってくるだろう。足軽ていの者にまで無礼打ちが赦されるような時代とあってみれば、百姓(農)や町人(工商)は、そんな特権的立場にある武士(士)に対し、丁重な物言いをしなければならなかった。武士は、それに対し一段と低い敬語を用いるか、まったく敬語を用いないかして応じるのがふつうであった。

経済力をつけた町人階級が武士に対抗しようとする傾向は、すでに江戸前期から見られるが、それが待遇表現に反映するまでには至らない。江戸時代も後期になると、武士の疲弊に伴い、武士対町人の地位関係が相対的に縮まり、為永春水の『いろは文庫』(一八三六(天保七)年)などで、悪者強八の、

ヤイ二本坊(ほんぼう)めへ、此広(このひろ)い大道(でへだう)を、明盲(あきめくら)ぢやァあるめへし、何(なん)で此身(おれ)に突当(つきあた)りやァがつた。(『正史実伝 いろは文庫』巻十八・有朋堂文庫による)

といった武士に対する待遇ゼロ(ないし、マイナス)の表現が町人側の言動に見えはするが、無頼者やいさみ肌の男に限られるようで、しかも稀な例に属する。右の例も、生酔いの無頼者が田舎武士を侮って、難くせをつけている場で用いられている。もっとも、対武士関係のことばのやりとりが、実際ありのままの姿でどれほど文芸作品の上に現れているのか問題は残るかも知れない。文化文政期など江戸の文芸興隆期における幕府公儀の出版弾圧ははなはだ酷しかったのであるから、作者側の公儀に対する遠慮があったことは考えられよう。式亭三馬の『浮世風呂』(一八〇九(文化六)年)に正体不明の生酔いが登場するが、小島俊夫は、これを武士に擬した。(3) 相当に揶揄した書きぶりであるが、正体不明にしたのは公儀をはばかってのことであろうという。しかし、この生酔いに対しても、湯屋の番頭は他の町人に対するよりも、一層高い敬語で待遇している。

士と農工商三民との間には越えられない階級的身分差が存在したが、武士階級の中にも当然上下の身分差が存在した。ことばも、『難波土産』(一七三八(元文三)年)発端で穂積以貫が述べているごとく、身分・格式に応じて使い分けていた。町人側もそれ相応に配慮して待遇する必要があったわけである。ただ、武家屋敷に奉公する中間折助などは、お屋敷者として一応の待遇は受けるが、武士とは見なされていなかったらしく、洒落本『卯地臭意』(一七八三(天明三)年)には、中間が江戸本所の夜鷹(下級の売春婦)に面罵されている情景が描かれている。

農工商三民の身分差については、そもそも四民の身分制度が封建制支配者としての武士の論理から出たものである以上、三民側相互の身分差の意識は薄かったと思われる。三民間における身分関係の配慮に基づく敬語使用の例はあまり見かけない。むしろ、農(百姓)工商(町人)内部に、経済力・社会的地位等に応じて、上層下層の階級差が生じていった中で、待遇表現の選択が行なわれた。職人層(工)は、武家屋敷や富裕な町人宅の出入り職人となることが多かったから、その意味では、むしろ商の下位に置かれることも多かったであろう。もっとも三遊亭円朝(一八三九―一九〇〇)述の『文七元結』(『円朝全集』巻一)に、大家の町人近江屋卯兵衛が、裏長屋住まいの左官の棟梁長兵衛に対し、きわめて丁重な物言いをしているところがあるのは、命の恩人に対する、また大家の主にふさわしい品格保持という点を考慮しても、商の工に対する身分意識の、かすかな現れと読みとれないこともない。

3　自敬表現

身分・地位への配慮がもっとも強力に敬語表現に働きかける時、いわゆる自敬表現の現れることがある。たとえば、『平家物語』巻三の、皇子誕生祈願に験のあった三井寺僧頼豪の法外な望みに対する白河天皇のことば、

主上、「これこそ存の外の所望なれ。一階僧正などをも申べきかとこそおぼしめしつれ。(以下略)」とて(『覚一本平家物語』巻三・頼豪)

のごとき言い方で、「申す」は、下位者（頼豪）から上位者（話し手である帝）に対する動作「言ウ」の謙譲語であり、「おぼしめす」は動作主（話し手である帝）の動作「思ウ」の尊敬語である。つまり話し手である白河天皇が自らを高く待遇していることになる。

このような自敬表現は、古く奈良時代から見られ、絶対敬語の典型と言われているが、一方、これはむしろ直接話法と間接話法との混淆によって生じた現象と見るべく、貴人のことばの伝奏者や作者（語り手）の敬意が介入したと見るべきものであって、現実にはそのような表現は行なわれなかったのだとする考え方もある。一部の用例は、後者の考え方で解釈しうるものもあるが、自敬表現全体を否定しさることは出来ないように思われる。鎌倉時代の天皇自筆の日記類には、かかる用法が頻出するという報告もあり[4]、自敬表現の存在は考えてよいだろう。

特に話し手自身の事がらに尊敬語を用いる自敬表現は特徴的である。その場合、話し手の動作が相手と関わりなく行なわれる（「おぼしめす＝思ウ」など）ものも、相手と関わる（「給ふ＝与エル」など）ものもあるが、これらは多く、天皇（帝王）やそれに準じる者（摂関・将軍など）が用いている。『平家物語』は、この種の自敬表現の多いことで知られているが、鎌倉・室町時代では、ふつうに、

横座の鬼のいはく、「（上略）いまより此翁（このおきな）、かやうの御あそびに、かならず参れ」といふ。（『宇治拾遺物語』三・鬼に癭（こぶ）とらるる事）

（後醍醐天皇ガ義貞ニ）御涙ヲ浮べテ被仰ケルハ、「（上略）只汝ガ一類ヲ四海ノ鎮衛（ちんゑ）トシテ天下ヲ治メン事ヲコソ思召ツルニ天運時未到シテ兵疲レ勢ヒ廃（すた）レヌレバ、尊氏ニ一旦和睦ノ儀ヲ謀（はかつ）テ且（しばら）クノ時ヲ待ン為ニ還幸ノ由ヲバ被仰出也。（下略）」ト御涙ヲ押ヘテ被仰ケレバ（『古活字版太平記』巻十七・立儲君被著于義貞事）

帝王その優しい志を感じさせられて、「御赦免なさるる（原文 goxamen nasaruru）」と仰せられたれば（『天草版イソポ物語』一五九三（文禄二）年）

と拾える。こぶとりの横座(上座)の鬼は、この場合、爺に対して絶対的権力保持者として描かれているのであろう。
ヤソ会の宣教師ロドリゲスは、『日本大文典』(一六〇四―一六〇八)の中で、これらの用法は関白や公方の御教書や親書の中における一種の文体だとし、文章語として把えているが、『天草版イソポ物語』などの例からして文章語に限らなかったように思われる。

話し手に対する動作に謙譲語(先の『平家物語』の例で「申す」に当たる)を用いてする自敬的言い方は、むしろふつうに行われていた。この場合は天皇・摂関より低い階層でも広く用いられる。

(義経ガ猟師ニ)「さては案内しったるらん、ありのままに申せ」とこその給ひけれ。(『覚一本平家物語』巻九・老馬)

(源頼朝ガ家人葛西清重ニ)「争デ不レ給ベキ。若給ラズハ、汝ガ所領モ可ニ召取一」トシカリ給ヒケレドモ(『梵舜本沙石集』巻九の四)

当然ながら、命令表現が多いわけだが、「つつみ隠さず申しあげろ」式の言い方として後にまで残るものである。

もちろん、天皇など自敬表現使用者が常に自敬表現を用いているというわけではない。その身分・地位関係が強く意識された時、現れるのである。公的な(またはそれに準じる)場における、公的な伝達・命令に多く見られるのも、その理由による。地位身分関係への配慮が極度に働いた上になりたった表現と言えるだろう。

4 相対敬語的性格の進展

近代敬語の特徴と言われる相対敬語的意識の発生は、すでにその端初を平安時代に見いだし得る。使用人が自らの主人のことを他人の前で話す時、尊敬語を用いるのは聞き苦しいとする清少納言の批評(『枕草子』ふみことばなめき人こそ)は、場面・聞き手を意識してのいわば相対敬語的意識の現れと読みとれるようだ。

しかしながら文献上にそのような反映が読みとれる例を見いだすことは、なお鎌倉・室町時代にあっては、そう容

易ではない。もっとも身分関係が複雑にからみあうこの時期にあっては、その関係を読みとることとの困難さもある。ただ、

(宗盛ガ後白河法皇ニ)「世をしづめん程、鳥羽殿へ御幸なしまいらせんと、父の入道申候。」(『覚一本平家物語』巻三・法皇被流)

(義経ガ後白河法皇ニ)「義仲が謀叛(むほん)の事、頼朝大におどろき、範頼・義経をはじめとして、むねとの兵物(つはもの)三十余人、其勢六万余騎をまいらせ候。(下略)」(同上巻九・河原合戦)

のごとく話す相手が天皇など絶対的権力保持者になると、清盛も頼朝も謙譲語だけの表現(つまり法皇に対する敬意だけ)になることもある。もちろん、宗盛の、父太政大臣清盛に対する、義経の、兄源氏の総領頼朝に対する、常々のことばは尊敬語を用いていること言うまでもない。

ただし、相対敬語的意識は、鎌倉・室町時代にあってはなお微弱であったようで、序列意識の方が強かったこと先述の通りである。

ところで、室町時代末から江戸時代初期にいたると、敬語の性格も、ロドリゲスの著名な発言[5]、

この国語の動詞及び名詞は、尊敬・丁寧・謙譲の色々な関係によつて用ゐられる。(中略)かかる動詞や助辞の用法は常に誰と共に話すか、誰に就いて話すか、誰の前で話すかといふ人と関係し、又何に就いて話すかといふ事物と関係してゐる。(『小文典』(一六二〇年)第一巻)

で知られるように、場面・聞き手・わきの聞き手への配慮が、現実に必要であったようで、著しく相対敬語的性格を帯びてきている。

ロドリゲスが言っているのは、敬語使用者(話し手)と使用対象者との関係、そしてその両者と聞き手との関係を配慮して話し手は敬語選択を行わねばならぬということであった。この関係把握は優れた日本語研究家であった彼にと

っても手に負えぬものであったらしく、『日本大文典』では、習慣により学ぶのが一番優れているのだとも述べている。

また、敬語の誤用の点に触れて、

外部の者と話す場合には、たとひ目上の人の事であつても、らるるを用ゐる以上に尊敬した言ひ方をしてはならない。だから従者がその目上の人の事を、弟子がその師匠の事を、子が親の事を、更に又召使が主人の事を外部の者と話すのには、尊敬せらるべき人の事であっても、そのやうな言ひ方をするのである。（『日本大文典』第二巻）

とも述べている。(6) つまり身うち（主従・師弟・親子・夫婦など）のことを外部の者に話すのに、「らるる」（尊敬助動詞「る・らる」のこと）以上の高い尊敬語を用いてはならないと言っている。「る・らる」型尊敬語はロドリゲスが最低の敬意としている語だが、最低にせよ尊敬語を用いるという点に、序列敬語から相対敬語への正に過渡期を思わせる。よく引用される狂言『塗師』の例、すなわち塗師平六の妻が、夫平六のことを、平六の師匠に語る部分に、

「さては都に御ざある平六の師匠にて御入候か、情なひ事にておりやらしますぞ、平六は此春はてられて御ざ有よなふ」（大蔵流虎明本狂言集『塗師』）

とあるのは右の記述に対応するが、使用しているのは「る・らる」型である。江戸初期の類例（浄瑠璃など）もほとんど同型であることを考えあわせ、この現象は相対敬語化への過程の中での序列敬語の反映とみることが出来よう。

5　心理・場面などによる敬語意識の変容

社会的序列への配慮が最優先する時代であっても、場面的状況や話し手の心理・心情（憎悪・恩恵など）によって敬語の取捨が行なわれることはあった。ただ外側から規制する力が強いだけに、そのような現象は鎌倉時代あたりでは少ない。

伴大納言善雄が応天門放火の一件で失墜する事件の話が『宇治拾遺物語』にある。事件は古いのだがことばは当代のものであろう。放火が露顕するのは、伴大納言家の出納（しゅつのう）係の者と、隣人の兵衛府舎人（とねり）(放火の目撃者)とのいさかいの場からである。発端は子どものけんかからなのだが、出納のあまりの仕打ちに対して舎人は、

「まうとは、いかで情なく幼きものをかくはするぞ」と言へば、(中略)舎人おほきに腹だちて、「おれはなにごといふぞ。わが主の大納言を高家に思ふか。をのが主は、我口（わがくち）によりて人にてもおはするは知らぬか。わが口あけては、をのが主は人にてはありなんや」といひければ(『宇治拾遺物語』一一四・伴大納言焼応天門事)

と言う。最初、舎人は、「まうと」(敬称の二人称代名詞)を用いて一定の敬意を表しているが、後には怒りのあまり、「おれ」(蔑称の二人称代名詞)などを用いて罵詈雑言を浴びせる。あげくには相手の主たる大納言に対してさえ敬語抜き(「人にてはありなんや」)で言い放っているのである。

似た例は『平家物語』にもある。鹿ヶ谷謀略の一件が露顕し、西八条(平家の居所)に引っ立てられた西光法師が清盛に対し堂々と言い放ったことばである(巻二・西光被斬)。成り上りとはいえ時の太政大臣清盛に対して、西光は始めこそ敬語を用いているが、感情が高ぶるにつれて敬語が抜けてくる。豪胆な西光の姿を鮮明に描こうとする語り手の意図が窺えるにしても、極度の状況においては話し手の心情が敬語の取捨に反映することが当代にもあったためである。ちなみに、この清盛にしても謀叛した高倉宮に対して、まったく敬語抜きで言い放っている部分がある(巻四・いたちの沙汰)。

その逆、つまり序列的には敬語を使用すべき対象ではないのに、ことさら敬語を用いる場合もある。これは話し手が、恩恵を受けたり、心理的負い目を持ったり、何かを依頼したりする場合に多く現れ、著しく相対敬語的性格の濃いものである。

『平家物語』巻一・内裏炎上の一節で、平時忠が激怒する比叡山の衆僧に対し鎮撫することばに敬語を用いている

など、すでに鎌倉時代からみえる。室町時代末の御伽草子『物くさ太郎』で、村の厄介者太郎を長夫(長期間の労働課役)として京へ送りこむために、村人たちが尊敬語を用いて盛んに口説いているのも、その例であろう。恩恵授受に関係のある「やりもらいの表現」(「てやる・てくれる・てもらう」など)が言語的に一つの型として登場するのは室町後期と言われ、それと敬語の性格との関係を考えようとする宮地裕の視点は[7]、この点でも興味ぶかいものがある。

また、身分関係とアンバランスな敬語使用で、場面状況が特別になると、

(大名ガ猿引キニ)「(猿ヲ)かすまひと言とも借らふ、かさふかかすまひか、いで物見せう」〈弓をひつはぐる、(猿引キガ)「いや申々かしまらせう」(大名ガ)「いやおかしやるまひものを」(大蔵流虎明本狂言集『うつぼざる』)

(実家ノ姉ガ出戻リノ妹ニ)「念に念をつがうた今度の嫁入、よう戻りやつた。」(近松浄瑠璃『心中宵庚申』中之巻)

のごとく、敬意はまったく欠落し、逆に、怒り・皮肉・不満の意を表すようなこともある。いずれも室町時代末以降の用法のようだが、狂言の例は、むしろ怒りを表わすもので、他にも類例がある。浄瑠璃の方は、一種の皮肉で現代にも通じるものであろう。使用すべきでない所に用いることにより、一種の心理的距離感を生じさせ、敬意とは逆の効果を期待した用法である。

二 丁寧語の発達

1 丁寧語の発生・展開

この時代(つまり古代敬語から近代敬語への過渡期)の敬語における一つの特徴として、丁寧語の発達をあげること

ができる。辻村敏樹は、丁寧語(辻村は丁寧語のうち「です・ます」に当たるものを対者敬語、それ以外を美化語とする)の発生展開を、

奈良(未発達)――平安(発生)――鎌倉(過渡)――室町(発達)――江戸(過渡)

としている。[8]

丁寧語は、話の事がらにかかわることでなく、話し手の聞き手に対する配慮の上からくる敬語であって、いわば対話の場にかかわるものである。聞き手への配慮、自身の品位保持など、話し手側の主体的な判断に多くゆだねられるものである。話し手側に敬語選択の余地が多くなってくる近代敬語への過渡期に、丁寧語が発達してくるのは、むしろ当然とも言えよう。

また、この時代の、特に室町時代から江戸時代にかけての、社会構造の変化も当然考慮に入れるべきであろう。比較的閉鎖的なムラ的生活から多くの人の出入りするマチ的生活へ移って行く時代にあっては、また諸国間の交通網が整備され人々の往来が激しくなってくる時代にあっては、対人関係に人々はより多くの配慮を払う必要があったに違いない。城下町が形成された織豊時代以後江戸時代にかけて、特に丁寧語の発達が著しいのは、そういう社会構造の変化から来る影響もあったものと思われる。

狂言『入間川』(虎明本による)に、東国の大名が入間川で見知らぬ土地の者に物を聞くところがある。大名は始め、「やい〳〵むかひな者に物問はうやい」と、敬語抜きのぞんざいな言い方で問いかけるのだが、入間の男は、それに腹を立て、同様に敬語抜きで答える。自尊心を傷つけられた大名は、すんでのところで太刀を抜きかけるのだが、太郎冠者の忠告で、「申々むかひなお方に物が問ひたうござる」とことばを改める。ここでやっと両者のコミュニケーションが成立したのであった。もっとも右の例では、「やい〳〵――→申々」「者――→お方」なども改めているのであって、丁寧語「ござる」の使用だけの問題ではないのだが、対人関係ということから言えば丁寧語の比重はより重くな

っているのと思われるのである。また、このような場面は、程度の差こそあれ、いつの時代でもあることで、それなりの配慮はあったに違いないが、社会・生活上の変化は、それをより強いものにしていったと思われる。

2　丁寧語の語彙的変遷

次に語彙の面から、丁寧語の発生・発達をみてみよう。丁寧語らしきものとしては、

つくの穴ごとに、つばくらめは巣をくひ侍る。（『竹取物語』）

のごとき補助動詞「侍り」の存在が、すでに平安時代に見られる。が、この「侍り」は、いささか特別な用法で、少なくとも平安時代における一般の「侍り」は、すでに諸氏の説くごとく、いわゆる被支配者待遇、つまり自らを相手の支配下に置いて待遇する（オカゲデ……サセテイタダク式の言い方）ものとして考えるべきであろう。「侍り」本来の謙譲語としての性格が強いとみるわけである。現代語の「です・ます」は原則として文末（もしくは、それに相当する部分）につくが、「侍り」はかなり自由に用いる。この点からも「侍り」を「です・ます」と同一視するわけにはいくまい。しかし、丁寧語化へのきざしは見えていたのである。

「侍り」に似た性格のものとして「候ふ」がある。いずれも出自が「オ仕エスル」意の謙譲動詞である点共通するが、一般に、平安時代の「侍り」に代って院政・鎌倉時代に「候ふ」が現れると説かれている。実際、『覚一本平家物語』などにおいても、「侍り」は、きわめて例外的でしかも古体を帯びた用法に限られ、一般は「候ふ」が主体となっている。もっとも、書簡文などでは、すでに平安時代の『明衡往来』（『雲州往来』ともいう。藤原明衡（九八七―一〇六六）撰）に、「侍」にまじって「候」が散見するから、その分野での発生は早かったのであろう。書簡文の「候」は、言うまでもなく候文につながるもので、院政時代の『貴嶺問答』（藤原忠親（一一三一―一一九五）撰）などでは、かなり一般化している。

「侍り」はその後、文章語化していくが、「候ふ」は鎌倉・室町時代を通じて盛んに用いられた(「候文」としては現代まで残る)。「候ふ」は、当初は「侍り」と似た性格であったが、この語が「侍り」と決定的に違う点は、語形の変化、すなわち、

サフラフ——サウラウ——サウ(ソウ)——ス(途中変化形としてソロがある)

を経て、室町時代以降次第に用法が限られてきて丁寧語の色彩を強く持ち、そして次代の新しい丁寧語の発生にもつながるということである。

丁寧語発達期の室町時代には、その末期に現代語の「です・ます」の母胎と見られる形が発生した。

「ます」は、

マイラス(ル)——マラス(ル)——マッスル——マスル——マス

を経て、江戸初期に発生したと考えられている。ただし、補助動詞「申す」(マウス——モウス——モス)系の混入もあったであろう。「マイラス(ル)」は、「参らす」で、本来は「サシアゲル」意の謙譲動詞であったが、院政時代ごろから謙譲補助動詞としても用いられ始め、「奉る」「申す」などとともに多用された(謙譲補助動詞「聞こゆ」はこの時期から急激に衰え、「参らす」と交替した感がある)。この語が、「まらする」と語形を変えたころから丁寧語としての用法が見え始めるのである。

「まらする」は、室町時代後期口語のメルクマールとして名高いもので、位相関係の違いによっては、「まいする」(五山系禅僧のものなど)、また「まらする」の変形「まるする」(朝鮮関係資料のもの)などの形もあるが、規範的には「まらする」に落ちついていったらしい。

「まらする」の語形そのものは、一四二〇(応永二七)年書写の『東山御文庫本論語抄』に現れるのが早そうで、語形変化もその頃であろう。が、当初の用法は謙譲動詞(サシアゲル)としてであり、引きつづき謙譲補助動詞に及び、

その定着を待って丁寧の用法が発生する。したがって、「ます」の源流としては、

風呂には唯一人居まらする(『天草版イソポ物語』)

のごとく室町末期を待たねばならない。

室町時代末期は、いわば「まらする」時代で、江戸初期にいたり「ます(る)」に代わる。室町時代語の反映が強いと言われる大蔵流虎明本狂言集が、「まらする」専用であるに対し、江戸時代語の反映が著しいとされる大蔵流虎寛本狂言集が、「ます」専用であるという事実も、それを裏づける。江戸初期の近松浄瑠璃でも、「まらする」の残存はかすかに見受ける(『心中宵庚申』など)が、田舎武士の古めかしい言い方などに現れるのみである。

「です」の源流については諸説があり、その発生の時期も、それによって異なってくるのだが、この期の「ニテ候」を発生母胎とする考え方も有力なものとして見捨てがたい。つまり、

ニテサウラウ——ニテサウ——デサウ——デソウ——デス

の変化である。この種の「です」は、

罷出たる者は、東国にかくれもなひ大名です(大蔵流虎明本狂言集『入間川』)

のごとき狂言の名のりが有名で、これはやや尊大な感じを伴うとされているが、学者・学僧の講義を写しとった講義録の類(抄物など)に、「デス」の形が現れることもある。これは「デ候」の「候」字の草書体と見るべきものなのだろうが、字体の近似から「デス」の発生をうながしたと考える余地は十分あるように思われる。「です」の語誌は諸氏の説かれるごとく複雑で一様ではない。江戸時代の雑俳の用語とか、「デゴザイマス」起源など多様の要因を考えるべきだが、その一端を室町末期に求めることはできるだろう。ただし、江戸時代の「です」は初期中期は資料的に偏在しており、一般化は、やはり末期となる。

「まらする」「候ふ」(「侍り」も)が、いずれもその母胎が前代にあり、しかも謙譲語出自であるという共通的性格

を持っているのに対し、その母胎を当代(特に室町時代後期)に発生した尊敬語に求めることのできる丁寧語の一群がある。いずれも鎌倉・室町時代に特徴的な尊敬語形式、「御(ご・おん・お)——ある・ない」によるものである。それらは、

○おぢゃる(「お出(い)である」の変化)——オイデニナル
○おりゃる(「お入(い)りある」の変化)——イラッシャル
○おりない(「お入(い)りない」の変化)——前項の否定形
○ござある(御座ある)——「ござる」の前身
○ござない(御座ない)——前項の否定形
○ござる(「御座ある」の変化)——イラッシャル

の諸語である。いずれも室町時代に尊敬語として用いられた形(「御座あり」は前代から)であるが、室町末期には、

「物申とはたぞ、いや太郎くわじゃか」「あふ、みどもでおりやる」(大蔵流虎明本狂言集『武悪』)

のごとく丁寧語としての用法が現れる。特に「で——」の形で用いる補助動詞的用法が多い。

これらの諸語は、「ござる」を除いて、江戸時代極初期まではわずかに残存するが、後、消滅してしまう。生き残った「ござる」は、江戸時代を通じて用いられはするが、補助動詞としては固い武士詞などに限られてくる。

「ござる」は、江戸初期発生の「ます」と結合した「ござります」を経て、後期の「ございます」にいたり、現代につながる。

なお、江戸時代の丁寧語としては、「やんす・やす」「ござんす」などがある。

3 丁重語・美化語の発達

謙譲語が丁寧語化していくのは補助動詞だけではない。例えば、謙譲動詞「申す」の、

　爰ニ兄、傍へ弟ヲ呼テ申ケルハ(『梵舜本沙石集』巻九の六)

のごとき用法が、そうである。兄→弟の動作である以上謙譲とは言えない。むしろ、語り手(作者)の聞き手(読者)に対する丁寧な物言いと見るべきだろう。

話す事がらとは無関係に、話し手の聞き手に対する敬意を添えるのが丁寧語というわけだが、これは、事がら(ここでは兄の行為)の表現を通して聞き手に敬意を表す言い方である。聞き手志向という点では同じだが、事がらの表現を通すという点で異なってくる。この種の言い方を、宮地裕は丁重語と名付けたが、鎌倉時代あたりから、「致す・存ず・申す・参る」などの用法に見え始める。

また、丁寧な言い方ではあるが、聞き手への配慮とは関係なく用いられる言い方がある。大石初太郎の言う美化語であるが、聞き手志向に無関係に存在するという点で、一般の丁寧語とは異なってくる。美化語は、奈良時代の、いわゆる美称(「玉藻」などの「玉」)にも通じる性格のもので、その発生は古いとも言える。この期では、女房詞や女性語の中で接頭辞「お(おん)」の過度の使用の形で著しく発達してきたようである。このことは次章で触れる。

三　女性のことばと敬語

1　女性の敬語の特徴

女性に対して一段と丁重な物言いになるのは、序列関係のやかましかった時代でも変らぬことであったらしい。貴族社会では、そういう意識がより強かったのだろう。鎌倉時代の、たとえば『平家物語』でもその傾向は変らない。

同等(と目される)の身分関係であれば、女性に対する場合のほうが一段と敬意を高めて待遇されるのである。

一方、敬語使用者としての女性はというと、自然、用語選択の上で男との相違が出てくる。前代において、女性が、「しめ給ふ」「申す」などの漢文訓読文的表現やいかめしい表現を嫌ったことは、よく知られている。鎌倉・室町時代においても、そういった用語選択の上での配慮が女性側にあった。ただし、言語教育上、どのようなことが行われていたかは、必ずしも明らかではない。鎌倉時代の女子教訓書『めのとのふみ』(『庭のをしへ』とも。阿仏尼作)にも、敬語のことにはほとんど触れていない。言語生活に関しては、できるだけことばを控えよとか無躾けなことばは避けよとか述べているに過ぎない。室町時代の『めのとのさうし』(武家道徳の影響ありという。南北朝ごろか)も同じである。男女の用語の差などは経験的にわかることであるから別段問題とする必要もなかったのかも知れないが、実際には言語教育上、ある配慮があったものかと思われる。

室町時代後期、『毛詩(詩経)』を講義した儒学者清原宣賢は、その講義の中で、

婉ハ内言ゾ、女ノ詞ツカイゾ、外言ト言ハ男ノ詞ゾ、男ハ祝着ニ候ナドトイヘバ、女ハヲウレシウ候ナドト言ト同(おなじ)事ゾ、(『毛詩抄』巻一、天文年間(一五三二―一五五五)の始めごろ成か)

と述べている。これは詩経の本文に後漢の学者鄭玄が加えた注「女子十年不出、姆教ニ婉娩聴従ニ」(『礼記』内則)に対して、宣賢が行った説明の一部である。『礼記』の本文は、姆(うば)による女子の家庭教育のことで、姆は、婉(女の詞・内言)と娩(容姿)、及び聴従(人の言に従うこと)を教えるの意である。儒教道徳の極まりであるが、宣賢は、婉について、男性語「祝着ニ候」、女性語「ヲウレシウ候」をあげて説明している。男——漢語、女——お十和語(形容詞)のきわだった対比が、この種の説明に恰好であったためであろう。「お十形容詞」の形は、もちろん女性専用というわけではない。発生的には鎌倉時代初期(『発心集』など)にまで溯れるが、室町末ともなれば男女問わずに用いられている。しかし、『お湯殿の上の日記』などこの期の宮廷女官の日記の中に、「おするする」のごとく副詞にまで

「お」をつける傾向のあることを考えると、「お」が著しく女性側に傾いてきていることを感じさせる。

「祝着」(喜びに思うの意)という語も、この期の書簡文や日記に女性の使用例が見えるから書きことばでは女性も用いていたわけで、そうすっぱりと割り切れるものでもない。しかし、当代人宣賢が、それを典型と考えていたことは確かであろう。礼記の本文解釈ということだから、そのまま当時のことばの躾というわけにはいかないが、その意識の一面は窺える。

敬語の上での男女の相違については、前述のほか、「候」を、「サフラフ(男)」、「サブラフ(女)」と使い分けていたらしい形跡や、狂言などに見える女性専用語「おりやらします」の存在、鎌倉時代以後急速に発達してくる人称代名詞の男女差(女性語「わらは」など)などが知られている。江戸時代に入ると、代名詞・助動詞・終助詞の類に至るまで男女の差が著しくなってくる。

2　「お」と女性語

接頭辞「お」については、やはり女性語との関係が深いと言える。

「お」は、「御」字で代表される他の読み「おん・ご・ぎょ・み」などと一群をなす代表的な敬語接頭辞だが、室町時代では、おおむね「おん」に代って「お」が勢力を得ていたらしい。

「お」と女性語と言うと、鎌倉時代、禁裡の女官の間から発生してきたとされる女房詞を無視するわけにはいかない。女房詞関係資料の語彙では、「もじことば」(「こもじ・かもじ」の類)の発生の方が古く、「お」が頻出し始めるのは室町中期の『大上臈御名之事』(足利義政の時代成立)あたりからと言われる。同書には「おさかな」などの語も見えている。女房詞は貴人の生活(飲食・器物など)に関することばが多いから、当初は尊敬語としての性格が強いと思われるが、一般の言語生活にはいりこんでいくに従い、次第に丁寧語(美化語)化していったものと思われる。

江戸元禄時代の『女重宝記』(一六九二(元禄五)年成)に、「よろづの詞に、おともじとをつけてやはらかなるべし」(五・女ことばつかひの事)とあるのは、女房詞の影響を受けつつも、それが女性特有の丁寧語(美化語)として受けとめられていったことを示している。これは、「お」の使用過多という現象として現代にもひきつがれていることである。

女性が過度に「お」をつける傾向は、すでに室町時代末期から江戸時代初期にかけて、相当に一般化していたらしい。笑話本『きのふはけふの物語』(江戸初期成)にも、子どもが世話になっている礼として、寺の僧に奈良酒(当時の上等の酒)を贈るに際し、その母親が、地名「なら」に「お」を冠したという話(下巻・九)までのっている。いささか尾籠な話ながら、同書や類書の『醒睡笑』(安楽庵策伝・一六一五(元和元)年ごろ成)には、「お」に関する話がいくつも見える。「お」の乱用をからかって笑話・小話の素材にしているのである。

もっとも、「お」使用過多が女性に限ったことではなく、男の場合にも見られたらしいことは、同じ『醒睡笑』に、新規召しかかえの男の奉公人が、何にでも「お」をつけて言うので、主人が閉口して、「むさと(やたらに)おの字つけまい。聞きにくし」と諫めている話(巻之一・鈍副子)のあることからも知れる。現今人々を悩ます「お」使用の問題は、古くこの時代から発生しているのである。

3 遊里語

女性語との関連で言えば、江戸時代の遊里語(遊廓での遊女のことば)の一般語への影響を見逃がすことはできない。遊里語の実態については、それぞれの専門研究書に譲るべきだが、その一般語への影響については、上方語(京・大坂)において著しく、江戸語において微弱であったと言われている。

「んす」系の尊敬語(「下さんす・さんす・んす・さしゃんす」の類)は、上方で広く用いられた言い方だが、出自は京都島原の遊女語だと言われる。それが、江戸前期(宝暦(一七五一—一七六四)以前)上方語ではすでに一般女性、

遊女ともに使用しており、後期には一般男性も使用するに至った。遊女語出自の語が男女を問わず広く一般に用いられるに至ったわけで、上方における遊里語の影響の大きさが窺える。

一方、江戸の遊里語というと、「ありんす（アリマス）」「ざます（ゴザイマス）」「なます（ナサイマス）」「おっせんす（オッシャル）」などの「ありんす言葉」で知られる吉原の廓言葉で代表されるが、この廓言葉が一般に広まったことは、ほとんどなかったらしい。せいぜい遊里（吉原）に関係する者たちの間に若干広まったにとどまり、ついに市民権を獲得するに至らず、幕末には消滅してしまう。

廓言葉は、むしろ逆に廓言葉使用者の身もとを明かすがごとき働きさえする。もっともこれは吉原中心のことで、岡場所となると一般のことばとそう径庭はなかったらしい。深川の芸者・遊女を描いた洒落本『辰巳之園』（一七七〇（明和七）年版）に登場する女性たちのことばは、一般の庶民とあまり相違がない。

上方と江戸とで、社会構造上、廓の位置がどれほど異なっていたのか判然としないが、少なくとも江戸吉原の遊里語が一般に滲透しにくかったのは、それが遊女の出身地訛りを隠すものであり、遊里独特の雰囲気をかもし出すため様々な位相のことばを取り入れて作った人造語であるということば自体の特殊性に加えて、公認遊里として江戸市外の新吉原に「ありんす国」で象徴されるような閉鎖的歓楽街を造りあげた幕府の政策によるものであろうと思う。

四　敬語の周辺

1　敬語によらない敬意の表現

敬意を表すには必ずしも敬語を使用するだけとは限らない。書きことばなら、書体・書式、話しことばなら、身ぶ

り・態度・発声などが待遇にかかわってくるだろうし、また用語選択の当否も影響してくる。これらのことへの配慮は、いつの世にもあったことである。

鎌倉時代以降多く書かれた書札礼(書状の規範書、『弘安礼節(せち)』(一二八五年成)などには、それぞれ相手・自分の官位・格式に応じて事細かに定められた書式が述べられている。前書きや後付けなどは敬語語彙に関わることもちろんだが、その書式全体が待遇に関係するわけである。「平出(へいしゅつ)・闕字(けつじ)」などは特に注意したらしい。「平出」は尊貴な身分にかかわる語(天皇など)が来ると行をかえることを言い、「闕字」は同様にその上一字分あけることを言う。書簡などは相手と直接対面していないわけだから特にその配慮が必要であった。使用する敬語も口頭語より一段高い敬意のものを使用する傾向がある。「御芳札」など現代でも問題にされる「御」「芳」の二重使用の例もすでに『明衡往来』に見えている。

話しことばにおいては、態度・行動が問題にされる。『覚一本平家物語』(巻八・猫間)の木曾義仲の言動についての、語り手の否定的態度がそれであろう。義仲は、京都の貴族猫間中納言に対して、「おわいたる」(「おはしたる」の変化)などいささか訛りめいているが、確かに敬語を用いている。しかし、よごれた大ぶりの椀に山盛りの飯を無理強いするなど一連の粗野な行動・態度が礼を失しているのである。義仲の行動は、頼朝の礼にかなった貴族的行動と対比的に描かれていると読みとれるのだが、ことばだけではなく、その行動・態度も問題にされているのである。

用語の選択も待遇表現と深く結びつく。敬語の使用不使用ということだけでなく、聞き手や話題に関して適切な語の選択が要求されるのである。

中でも注意すべきは言語的禁忌(タブー)の残存であろう。その代表は、二人称に実名を用いるか用いないかの問題であろう。長上者に対して二人称に実名のみによる呼称を避けるのは現代でも同じだが、鎌倉・室町時代あたりでは、なお広く一般に、軽々しく他人の実名を呼称することは避けるべきだとする「名忌み」の意識が強く支配していた。

「名忌み」は実名のみによらず、その実名と同音・類音の普通名詞の使用さえ避けるに至る。藤原実頼の幼名が牛飼であったことから、後世その一族が牛飼の語を避けた(『大鏡』実頼)などは、院政時代のことだが有名な話である。そういった禁忌は、「横笛」を「王敵」に通じるとして「ヤウデウ(ようじょう)」と読むといった類のいわゆる故実読みや忌み詞の中に根強く残存していた。

2　助詞の微妙な使い分け

格助詞「の」と「が」の間に尊卑の別に応じた使い分けが存在したと言われる。人物を表す語につく「の・が」で、主格助詞の場合も連体格助詞の場合もあるが、特に後者の場合が著しい。「の」を敬称、「が」を蔑称とみる立場は、古く藤原顕昭の『古今集注』(一一八五年)あたりから見えるが、特に、ロドリゲスの、

〇主格の「の」は普通に第二人称第三人称に使はれ、「が」は第一人称及び身分の低い第三人称に使はれる。(中略)〇属格の「の」は第一人称及び尊敬される身分の第二人称に用ゐられるのが普通であり、「が」は第一人称及び身分の低い第三人称に用ゐられ、往々第二人称において特にその人を軽蔑する場合に用ゐられる。(『日本大文典』第一巻)

の指摘を中心とした『日本大文典』の記述[9]が注目されている。この記述に端を発し各氏の論考の結果、この区別は上代から存していたであろうと考えられている。

問題が、格助詞という文法機能上にかかわる語の用法のことでもあり、また人物の呼び方(名忌みに関係する)にもかかわることでもあるので、「の・が」自体に尊卑の区別があるかないかについては肯定的立場も否定的立場もあるが、少なくとも鎌倉・室町時代には、人々の意識にも、また実際の用例上にも、この区別が存していたと認めてよいと思われる。

その典型としては、『宇治拾遺物語』(九三・播磨守為家侍さたの事)の、さたなる愚かな侍の話が著名である。彼は任地先の郡司の家に仕える女性に、衣の綻びの修理を頼んだのだが、その女性から「さたがころもをぬぎかくるかな」と言われた彼が、「さたが」の語の解釈を早合点して激怒する一節である。彼は、そこで、

……ほころびのたえたる所をば、見だにえ見つけずして、「さたの」とこそ言ふべきに、(中略)なぞ、わ女め、「さたが」といふべき事か。

と悪口を浴びせる。「さたが」の解釈については諸説あるけれども、少なくとも侍さたが激怒した理由は、当然「の」と高く待遇されるはずのところを、「が」と低く待遇されたと感じたことにある。

この区別は、室町時代末期の抄物・キリシタン資料・狂言に至るまで明瞭に見える。狂言『どんだらう』(和泉流による。狂言は流派・伝本により相違がある)に、はやし詞「鈍太郎が手車」に対し、シテが「そのがの字が耳に触って悪い」と言い、「鈍太郎殿の手車」と言ってほしいと要求しているのもそうであるし、戦国武士の言行録『甲陽軍鑑』にも、

平家勝(かち)ては、猶源氏を義朝がといふて悪口する。其後源氏又平家に勝(かち)つるが、清盛の・小松殿・大臣(おおい)殿と申て
(起巻第一)

と、その意識が窺える。

が、江戸時代に入ると急激に区別が消滅していったらしい。前期の上方語にはまだ名残りが認められるが、後期の江戸語になると、ほとんど区別は認められないと言う。しかし、現代でも一部方言に、その区別が残っているから、江戸時代を通じて地方語には引きつがれていたと思われる。方言の用法は尊卑よりむしろ親疎の区別に近付いているようである。

同じ助詞でも終助詞になると待遇上の差が比較的はっきりしてくる。終助詞は話し手のさまざまな気持ちを聞き手

にもちかけていく働きを持つもので、聞き手を意識して用いる場合の多い助詞である。したがって、尊卑・親疎の気持ちが終助詞の選択に反映することが多い。終助詞が目ざましく発達してくる室町時代末期以降江戸時代を通じて特にそれが目立ってくる。ロドリゲスも、『日本大文典』(第二巻・感動詞)の中で、感動の終助詞「なう(Nŏ)」が、「な(Na)」に較べて敬意の高いことを、すでに説いている。微妙な発音の差が尊卑の表現に関係してくるわけだが、これは現代にも通じることである。いったい強い響を持つ終助詞例えば「ゾ」などは、敬語表現では避ける傾向が強い。

発音について言えば、「オマエ(お前)」「オメエ」の関係のごとく訛言形が待遇表現上に与える影響は大きい。もちろん訛音形が一段低い段階になるのだが、江戸語では特にそれが著しく、江戸語待遇表現の一つの特徴ともなっている。

五　敬語語彙の変遷

最後に語彙上から見た敬語の変遷について触れておく。丁寧語や接頭辞「お」などについては前述したので、ここでは尊敬語・謙譲語(動詞・補助動詞・助動詞を中心に)について考えてみる。この方面については辻村敏樹作成の「敬語変遷一覧表」が、まとまりもよく極めて有益である。[10]

敬語語彙は大きく変遷している。奈良時代以前発生のものは一往おくとしても、平安時代に発生した語や用法で、現代までその性格・用法・意味等大差なく用いられているものは、接辞関係を除けば、「おほせらる(言ウ)」「めす(乗ル・着ル)」「あそばす(スル)」「る・らる(助動詞)」などの尊敬語、「うけたまはる(聞ク・承知スル)」「たまはる(モラウ)」などの謙譲語ぐらいではなかろうか。「おぼしめす」「きこしめす(飲食スル)」「たまふ(与エル)」(以上尊敬語)、「申す」「存ず」「参る」(以上謙譲語)などは語としては残っているものの、性格・用法は、同じではない。

変遷上の一つの大きな切れめは、鎌倉時代と室町時代との間に認められる。先の辻村一覧表でも、前者は古代に、後者は近代に入れて区別している。とりわけ口語資料の比較的多く残存する室町時代末以降は、語彙的に見て現代語とのつながりが極めて強い。室町時代前・中期は、口語資料の乏しい時代であるから、末期の状況をどこまで溯らせうるか、はっきりしない点もあるが、室町時代は、敬語語彙史から見て、古代色が次第に影をひそめ、新しい敬語にとって代わる時代と言えるだろう。室町時代末期には、すでに次のごとき敬語が発生している。

○尊敬語――おっしゃる(言ウ)・めしあがる・あがる(飲食スル)・くださる(与エル)・なさる(スル)・お……なさる(スル)

○謙譲語――うかがふ(聞ク)・いただく(飲食スル)・さしあげる(与エル)・おめにかかる(会ウ)・お……いたす(スル、ただし……の部分は漢語中心)

鎌倉時代以降、活発に用いられ出すのは、「御」に関する多彩な用法である。中でも、「御……あり」のごとく、……の部分に動作性漢語名詞や動詞連用形をはさみこんで行く用法が特徴的で、ほぼ通則的に用いられ、敬語の中核を占めるようになった。

尊敬語では、「御……あり」「御……なし」の肯定否定両形が代表的で、室町時代後期から「ある・ない」と口語形になる。当初は「御」のないものもある。この形は江戸時代まで見られる。「御……候」は、丁寧が加わった形である。「御……なる」の形は室町時代には勢力を失ってくるが、代って「御……やる」が後期に発生し、江戸時代まで続く。断定助動詞「ぢゃ」(デアルから出た)の発生定着に従って、室町末期から「御……ぢゃ」が姿を現す。この形は、東国語・江戸語では「御……だ」の形となる。その丁寧形、「御……です」は、「です」の一般化が江戸時代末になるので発生が遅れ、明治以降となるようである。

現代敬語の花形「御……になる」は、発生が遅く、江戸天保期の江戸武士詞から発生し、江戸時代では十分に発達

せず、その発展完成期は明治二〇年代に下ると考えられている。

謙譲語では、「御……いたす」の……の部分が漢語や名詞のものが早く、室町末から江戸初期の頃に見え始める。が、……部が動詞連用形の場合は発生が遅れて、江戸時代末ごろになる。現代語で頻用する「御……する」の形は、意外に発生が遅く、明治も中期以降に下るようである。

敬語語彙に関して一考すべきは、敬意逓減と言われる現象である。敬語は用いているうちに使いべりがしてくる。つまり度重なる使用のうちに敬意が次第に落ちてくるわけであって、そのため敬意復原作業としてさらに敬語を加える(接辞・助動詞など)必要が生じてくる。それが出来ない場合は、その語は敬意の下落の一途をたどる。

「召す(オ召シニナル)」の敬意が一般的に下落してくる鎌倉・室町時代には、「召さる(「る」は尊敬助動詞)」の形が多くなってくるとか、江戸時代に、丁寧語「ござる」にさらに丁寧語「ます」を添えた「ござります」(のち「ございます」となる)が発生したり、また代名詞類に接辞を添える形(「こなた」→「こなた様」)が発生したりするとかは、前者の例である。後者は、江戸時代初期の高い敬意から、次第に下落し、現代ののしり語にまで至った「貴様」の例が、あまりにも著名である。

むすび

敬語が大きく変動していく姿を、はたしてうまく描きえたかいなか自信はないが、ここで筆をおく。特に、個々の敬語語彙の変遷については、その詳細を、紙数の都合上触れる余裕がなかった。その点は、各種の位相・領域における既刊の詳細な研究書を参看されたい。また、ののしり語の発達についても触れたかったが果せなかった。

なお、一々氏名をあげることはしなかったが、本稿をなすに当たって先学諸氏の論考を大いに参考させていただい

た。学恩を謝したい。

(1) 一九七三(昭和四八)年度秋季国語学会大会(於岩手大学)において、「近代敬語の研究をめぐって」と題して討論が行なわれた。講師、渡辺実・宮地裕・古田東朔・林四郎の四氏、司会、辻村敏樹、によって行なわれた討論の記録が、『国語学』九六集・三三頁以下にのせられている。

(2) 岡村(宮坂)和江「平家物語流布本の敬語表現」(『実践女子大学紀要』五集、一九五七年)一〇五頁以下。西田直敏「平家物語の敬語」(『敬語講座 三 中世の敬語』明治書院、一九七四年)三一頁以下。

(3) 小島俊夫「浮世風呂に登場する生酔のことばづかい」(『国語と国文学』四六巻六号、一九六九年)四四頁以下。

(4) 西田直敏「宸記に見える所謂「自敬表現」について――伏見天皇宸記・花園天皇宸記を中心に――」(『国語国文研究』五〇号、一九七二年)二三四頁以下。

(5) 訳文は、土井忠生『吉利支丹語学の研究』靖文社、一九四二年、二五九頁、による。

(6) ロドリゲス『日本大文典』(土井忠生訳)三省堂、一九五五年、六一八頁。

(7) 宮地裕「受給表現補助動詞「やる・くれる・もらう」発達の意味について」(『鈴木知太郎博士古稀記念国文学論攷』桜楓社、一九七五年)八〇三頁以下。

(8) 辻村敏樹「敬語史の方法と問題」(『講座国語史 五 敬語史』大修館、一九七一年)一八頁。

(9) ロドリゲス、前掲書(土井訳)、八―九頁。

(10) 辻村敏樹『敬語の史的研究』東京堂出版、一九六八年、巻末。

参考文献

湯沢幸吉郎『徳川時代言語の研究』風間書房、一九六五年。
湯沢幸吉郎『江戸言葉の研究(増訂版)』明治書院、一九五七年。
湯沢幸吉郎『廓言葉の研究』明治書院、一九六四年。

土井忠生『吉利支丹語学の研究』靖文社、一九四二年。
山崎久之『国語待遇表現体系の研究』武蔵野書院、一九六三年。
国田百合子『女房詞の研究』風間書房、一九六四年。
真下三郎『遊里語の研究』東京堂出版、一九六六年。
辻村敏樹『敬語の史的研究』東京堂出版、一九六八年。
小島俊夫『後期江戸ことばの敬語体系』笠間書院、一九七四年。
穐田定樹『中古中世の敬語の研究』清文堂出版、一九七六年。

『講座国語史 五 敬語史』大修館、一九七一年(桜井光昭・小松寿雄「近代の敬語」)。
『敬語講座 三 中世の敬語』明治書院、一九七四年(山田巌他執筆)。
『敬語講座 四 近世の敬語』明治書院、一九七三年(田中章夫他執筆)。

5　現代敬語の問題点

宇野義方

一　問題の概観

1　敬語使用の悩み

一九七六年一〇月七日の『夕刊読売新聞』は、「敬語は世代映す」という横見出しを掲げ、「エサを「やる」婦人「あげる」若い人」という五段抜きの見出しで、敬語に関する記事を出している。その前文を、左に引用してみよう。
日本語のプロであるはずのアナウンサーにとっても、敬語の使い方は悩みのタネだ。NHK総合放送文化研究所は全国のアナウンサーから、実際の放送で使い方に迷った敬語の事例を集め、そのテープを聞いた視聴者の反応調査を行った。この結果、「あげる」か「やる」かで議論の分かれている「小鳥にエサを〝あげる〟」は、まあいいだろうと認めながら、「自分の子どもに買って〝あげる〟」には強い抵抗があることがわかった。また、三木首相の行動に敬語を使うことにはかなり抵抗があったが、フォード米大統領の場合には敬語支持者がふえるなど、ケースによって受け止め方が変わっている。同研究所では、この結果をもとに、敬語の使い方についての範例をつくりたいとしている。

この記事の本文には、調査結果がやや詳しく紹介されているが、ここでは、それを逐一取り上げることはしない。それよりも、前文に書かれているように、敬語の使い方がアナウンサーにとっても「悩みのタネ」であることや、視聴者の反応が「ケースによって受け止め方が変わ」ること、さらに世代によっても意見の異なることなどに注目したいのである。

敬語に限ったことではなく、言葉の使い方についての意見や議論は、いろいろな場合に数多くの人々によって取り上げられてきていることは、ここで改めて言うまでもないであろうが、例えば新聞のコラムや投書欄などを見ていても、相当多数の例を拾うことができるのである。敬語がこのように問題にされるのは、それなりの理由があるからであるが、それを考える前に、どのような点が問題にされてきているかを見渡してみようと思う。

2 現代敬語の諸問題

敬語を扱った文献は非常に多い。そして、それらの大部分は、多かれ少なかれ、問題点に触れているのであるが、ここで列挙することは避ける。いま、雑誌『言語生活』について言えば、「現代の敬語」(七〇号)、「正しい敬語」(一一五号)、「敬語を使い分ける」(一六二号)、「敬語」(二一三号)、「生きた敬語」(二九五号)などの特集があり、多くの問題を提供している。ついでながら、同誌は創刊以来、「目」「耳」の欄を設けているが、その中にも興味深い例が数多く見出される。

ところで、「現代敬語の問題点と敬語の将来」[1]という座談会がある。その見出しを並べると、次のようになっている。

敬語変化をどう見ていくか。皇室敬語。ヨーロッパの敬語、中国の敬語。敬語は古めかしいことばか。第三者に対する尊敬表現の衰え。利害関係にもとづく敬語の発達。敬語と親疎。「させていただく」。「お」。「お勤めしています」。媚態語。女性語と敬語。コミュニケーションを妨げる敬語。「あなた」。女の子が男の子を「クン」。敬語の将来。敬語はなくならない。

以上の一七項目の中、最初の七項目は主として敬語の変化に着目したものであり、次の八項目は主として言葉自体の問題を扱ったものであり、最後の二項目は主として今後のあり方に触れたものである。座談会の性格や、その他の制約によって、ここに問題点がすべて並んでいるとは言えないが、参考になる点が多い。

文化庁編『敬語』にも「敬語について――その現状と将来――」[2]という座談会が出ている。前の例と同様に、その見出しを並べると、次のようになっている。

具体例で敬語を考える。時代の推移と言葉遣い。手紙や電話の言葉遣い。家庭や学校における言葉のしつけ。家庭の内と外とにおける言葉遣い。幼稚園の「お」言葉。「お」の使い方。職場での敬語。商売上の敬語。自分を誇示する敬語。謙譲語の難しさ。地域により異なる敬語。外国語の表現の仕方、日本語の表現の仕方。敬語の乱れ。敬語の基準。事柄を表す言葉、心の言葉。敬語は簡素に、表現は豊かに。「これからの敬語」(建議)について。

以上の一八項目の中には、前の例と共通のものも含まれているが、問題の取り上げ方に相違の見られる点もある。例えば、「言葉遣い」や「しつけ」、場合や場面、さらに「基準」などは、すぐに気の付くことであろう。これらの相違が、どの程度まで司会者の考え方を反映しているかは知るよしもないが、現代敬語の問題点に迫るのにも、いろいろな見方ができることを示していると言えよう。

右に、二つの座談会の例を引いたが、いずれも見出しを並べただけであるから、分かり難い点もあろうが、学者、教師、文化人が、どのような問題点を考えているかを知る上で、大いに役に立つものと思うのである。これは、人数も限られているし、現代人の敬語観や敬語意識の代表という意味でないことは、改めて言うまでもないが、それでも有益であることには変りがない。

斎賀秀夫「B・Gのための敬語心得十か条」[3]は、「B・Gのため」という限定が付いているために、範囲がやや限られてはいるが、かなり一般性を帯びているものと考えられるので、一通り見ておくことにしよう。

B・Gのための敬語心得を、次のような十か条にまとめてみました。第一条と第二条は敬語についての総括的な事がら、第三条から第六条までは、特に職場における敬語の問題、第七条から第十条までは一般に誤りやすい敬語の使い方、という全体の構成です。あなたが上役から「近ごろの若い女性は敬語の使い方を知らない」などと

言われないために、この十か条が少しでもお役に立てば幸いです。なお、この原稿をまとめるために、電々公社、銀行、デパート、私鉄会社などを回って職場用語についてお話をうかがったり、資料をいただいたりしました。

右によって、この十か条の構成、目的、取材範囲などが知られるであろう。以下に、各条項を引く。

第一条　『これからの敬語』が敬語の使い方の拠りどころになること
第二条　敬語には、三つの種類があること
第三条　上役の呼び方はその職場での習慣を尊重すること
第四条　敬意の度合いも、職場の習慣に従って選ぶこと
第五条　話し相手と話題中の人物との人間関係をよく見定めること
第六条　周囲の人の気持ちに対する考慮も必要であること
第七条　謙譲語をまちがえて尊敬語として使わないこと
第八条　敬語のつけすぎ、特に「お」のつけすぎをいましめること
第九条　必要なところに敬語を落とさないこと
第十条　敬意をはらうべきではない物に対して、敬語を使わないこと

これは、前の二つの座談会とは行き方を異にしており、「敬語心得」であるから、問題点を云々するものではないが、それにもかかわらず、世間で問題にされることの多い点をふまえているという意味で、やはり参考になるところが多いのである。

個々の問題を取り上げれば、例は相当多数にのぼり、ここで扱う余裕はない。また、問題点のとらえ方が右の三つの文献で尽きているという訳でもない。しかし、問題の広がりを概観するのは、この程度に止めておくことにする。

3　問題の整理

本稿の課題は「現代敬語の問題点」である。この中で「現代」に重点を置けば、江戸時代に続く、明治の初年から現在までのすべてを含むことになるし、本巻の「敬語の変遷」(1)、(2)に続く部分についても、取り上げるべきことがあろうかと思う。宮地裕「現代の敬語」(4)は、それを扱ったものの中でも注目すべき文献である。

「敬語」に関しては、この巻全体が触れることでもあるので、しばらく別とすると、残るのは「問題点」である。言葉の問題すべてに通じて言えることであるが、言葉のやりとりは日常生活において、誰でも経験するものである。ところが、問題の方は、そうではないことに注意しておく必要がある。これは、問題が客観的に存在していて、すべての人が等しく、また、容易にそれを把握できるというものではないことである。換言すれば、問題となりうる現象があっても、それに関心を持たない人にとっては、問題とはならないということなのである。敬語については、自分の敬語使用の習慣や、敬語意識に合わない例にぶつかると、変だと感じたり、誤っていると考えたり、時には失礼だと思ったりすることが多いのである。このように、コミュニケーションの円滑な遂行に関して、何等かの障害や抵抗が起った時に、それが問題として意識されるようになるのが普通であろう。

ところで、敬語の問題点については、ここで新しく探り出すまでもなく、前に述べたように、すでに多くの指摘がある。したがって、それらについて一往の整理を加えることも意味のあることであろうと思う。この点に関する考察としては、まず、辻村敏樹「現代の敬語とその使い方」(5)がある。その中で、「敬語の使い方」を大きく二つに分けて「正しさの問題」「ほどよさの問題」としている点に注目すべきであろう。

次に、大石初太郎『新版正しい敬語』(6)に、次のような記述がある。

いわゆる「敬語の乱れ」の類は、整理してみると、大きく二つに分かれる。(A)は、人間関係・社会関係に応ずる

敬語の適切な使い方、つまり、相手やばあいによる使い分けという点でまずいとされるものである。もう一つ(B)は、そういうことに関係なく、ことばの形そのものが正しくない、ないしは、へんだとされるものである。

(A)に属する例は、

○オリルカタヲ早クオロシテヤッテクダサイ。

○車庫へ行ケバカエテクダサイマスカラ。

○スリノカタヲツカマエル……

○(学校職員)校長先生ハゴ出張中デス。

○(教師)×年×組ノ××君、イラッシャイマシタラ職員室マデオイデクダサイ。

等々。

(B)に属する例は、

○コノ舞台ニゴ共演サレル中村雁治郎(ママ)サント花柳章太郎サンノオフタカタニ……

○皆サン、ゴ注意シテイタダキタイト思イマス。

○オシリモチヲオツキニナッタワネ。

○ご自身、ひそかに満足されておいでではないでしょうか。

○モシコレデオ使イデキルンデシタラ……

○お二階は食券をお求めずにお上りください。

等々。

これら二つの整理のしかたの関連を、ごく大まかに言えば、辻村の区分は、大石の(A)に関する部分がさらに二つに分けてあると見ることもできるのである。

以上によって、現代敬語の問題点の概観を終り、具体例の考察に移ることとしたい。

二　具体例の考察

1　謙譲語の転用

前章において、種々の問題点を見渡してきたが、その全般にわたる考察をする余裕はない。そこで、まず、敬語の使い方を中心に考えることに、その領域をしぼることとする。しかし、語形そのものに問題があるものは、ここでは取り上げない。また、相手や場合による使い分けに問題があるものの中でも、不注意や言い損じによるものは、考察から外すこととしたい。

以上のように範囲を限っても、問題点は多いのであるが、その中から、世間一般で比較的広く、また、多く取り上げられていると思われるものを選んで考えてゆくこととする。

最初に取り上げるのは、謙譲語を尊敬語や丁寧語のように使うものである。本稿の冒頭に掲げた「あげる」などはその一例であるが、この語から始めることとしよう。

(一)　あげる

「あげる」については、これまで、いろいろの見解が出されている。ここで、いくつかを見ることにしよう。

平井昌夫「自己採点式(テスト)あなたは正しい敬語が使えますか」[7]に、

子どもに本を買ってあげました。

が、「敬語の使い方のまちがいで、敬語テストなどに取りあげられる問題」の一つとして出ている。この問に対する答としては、説明抜きで、「買ってやりました」が正しく言いかえたものとして示されている。

伊吹一「実例集・正しい敬語の使い方」[8]には、

「うちの子は、朝からお熱が出て、お乳を上げても飲みませんので、(下略)」→「うちの子は、朝から熱が出て、お乳を含ませても飲みませんので、(下略)」

のような言いかえを示し、「『上げる』は謙譲語である以上、子供を高めて、医師ともども母親が低くなっているのはおかしい。ここは、「飲ませても」「与えても」「やっても」でもよいところだ。」という解説が加えてある。(例文中の傍線は省略した。)

大石初太郎「敬語の誤用の実例」[9]には、次のような指摘がある。

毎年今ゴロフジノ花ニ肥料ヲアゲルンデスカ。(テレビ、女性インタビュアー)

「犬ニゴハンヲアゲル」「金魚ニエサヲアゲル」など、とくに女性に多くなってきている感じだが、植物にまで「アゲル」とくると、異様に聞こえる。「ヤル」ということばがぞんざいに感じられて、女性は、上品な言い方として「アゲル」を使うのだろう。「アゲル」は謙譲語だとしてこの用法を否定するのは、今日適当かどうかは問題になるだろう。丁寧語として認めれば、これらの言い方には問題はなくなる。だが、「フジノ花ニアゲル」などをおかしく感じる人がもし多いとすれば、単純に丁寧語と認めることにも問題があるということになる。

以上は研究者の意見の例であるが、次に、一般人の意見を参考にしてみよう。『朝日新聞』に「へんな「あげる」」[10]として、左のような声が出ている。

「へんな「あげる」は関東だけと違いますか」と、大阪から越してきた川崎市の主婦井戸知恵子さん(三六)から。「子どもに菓子をあげる、とか、離乳食を子どもが食べてくれない、とか、へつらったようないい方、関東の方

言やないのかしら。大阪ではいいませんよ。花に水はやるものでしたし」

「「あげる」っていうのは、イヌやネコに使うとおかしいほど、ていねいな言葉ではないんですよ」と、東京都中野区の女性(六〇)から。

「それよりも「やる」という言葉、これは大変に悪い言葉なんですよ。わたくしなど、この言葉を聞くと、トリハダがたってしまいます。(下略)」

「「あげる」は、聞き苦しい。そういえば上品だ、と錯覚しているようですが、あれは幼稚園ことばから広まった」と東京・渋谷の主婦、北沢澄子さん(六五)から。

「子どもに面と向かった時は「あげる」でいいが、他人に話す時は、たとえ主人や父母でも「主人にやりました」というべきです。「やる」というと、なにか下品に聞こえるらしく、最近は「あたえる」といってるようですが、これもおかしい」

このように見てくると、「あげる」一つの使い方に関しても、さまざまな意見のあることが知られるであろう。ところで、このように相異る考え方、感じ方が、どの程度まで広い範囲に支持されているかを見ることも、重要なことであろうと思う。そこで、本稿の冒頭に引いた新聞記事の本文を引いてみることとしよう。

放送文化研の今度の調査は全国のアナウンサー百七十六人から集めた実例をもとにテープをつくり、これを教員(話しことば研修会参加者二百三十六人)、婦人(日本女子大同窓会員九十三人)、学生(専修大国文学科学生百十人)の三グループに聞かせ、適否を求める方法がとられた。さらにこれとは別に、劇作家の内村直也氏ら識者五十人にもアンケート調査を行った。

まず意見が分かれたのは、国語学者の間でも論議された「あげる」と「やる」の問題。女性アナウンサーが先生に「小鳥には、毎日、先生ご自身でエサをあげていらっしゃるんですね」というのと「小鳥には、毎日、先生ご

自身でエサをやっていらっしゃるんですね」というのを聞き比べて——。

婦人グループの六四％が「やる」、二二％が「あげる」を支持したが、大学生では「あげる」が三八％、「やる」が二六％と逆転している。若い世代ほど「あげる」が強く、婦人グループのうち戦後卒業生で「あげる」を支持したのは二九％なのに戦前卒業生は一七％と、支持者は少ない。

さらに女性アナウンサーが次のように言う場合は、「あげる」への抵抗感は一層強まった。「私も親として、自分の子どもにはなんでも不自由なく買ってあげたいと思うのですが」——。婦人グループの八七％が「買ってやりたい」とすべきだと感じ、「あげる」は九％、大学生でも「やる」が五六％にふえ、「あげる」は一七％に減った。教員グループはいずれの場合も婦人と大学生の中間だった。

識者も「小鳥」の場合は「あげる」が十人いたが、「自分の子ども」の場合はゼロ。「現代敬語の誤った傾向の代表」「〃あげる〃を上品語とみる意見もあるが、現状ではそこまで踏み切れない」「〃あげる〃はていねいすぎ〃やる〃は少し下品」などの意見が出された。（下略）

右によれば、「あげる」を支持する者もいるが、その割合は、年齢の多い者ほど少なくなる傾向が著しいことと、自分の子ども、すなわち身内の者について述べる場合には、それぞれのグループで、支持率が減少することが知られるのである。

中島国太郎「どのように敬語を身につけさせたか　中学生の場合」[11]に、東京の山手地区の中学二年生の敬語意識の調査結果が出ている。その中に、次のような部分がある。

母親Eと父親Fとの家庭での会話

E「けさは、犬に御飯をあげたかしら？」

F「さっきヒロ子が食べさせていたよ。」

についての反応は、次のようであった。

		男子	女子	男女計
ア	このままでよい	79%	94%	86%
イ	「御飯をあげた」を直すべきだ	7%	3%	5%
ウ	その他	12%	0%	6%
エ	無答	2%	3%	3%

イの例としては、▽御飯をあげた→えさをやった、がほとんどであった。ウの例としては、▽食べさせていたよ→食べさせていましたよ・あげていたよ、などが多く見られた。

右によれば、「あげる」の支持率は著しく高い。これらの調査が、どの程度まで一般人の意識を代表するものであるかは明らかでないが、ここに現れた限りでは、年齢あるいは世代の差が注目すべき点であることを予想させるのには十分であろうと思う。

右に関連して、少し古いところに目をやると、ジョアン・ロドリゲス原著・土井忠生訳註『日本大文典』[12]に「上ぐるは身分の低いものから「主人」「貴人」等を始めとして天子に至るまで非常に貴い方に差上げるのに使はれる」旨の記載が見られる。

田中章夫「近世敬語の概観」[13]に「アグ(供える・与える)」を「ごく軽い敬意のある場合の言い方」の中における謙譲の動詞として掲げてある。

辻村敏樹『敬語の史的研究』[14]に「あぐ(る)・あげる」が近世において「美化語」(丁寧語)の方向に転用されたことが指摘されている。

これらの詳細にわたることはできないが、右の三つを一連のものとして見る時、われわれは、「あげる」がどのよ

うな変遷を経てきたものであるかの見通しをつけることができるのではあるまいか。すなわち、ごく大まかに言えば、「あげる」が謙譲の意味を表わすことに変りはないが、古くは高い敬意のある場合に用いられたのに対して、その敬意の度合は次第に弱まり、また、近世に於ては、丁寧語として見るべき用法も現れているということになるであろう。『日本国語大辞典』の「あげる」の項の六の2に「敬うべき人にさし出す。さし上げる。また、現代では対等、または目下の者に与える意の丁寧な言い方。」とし、『角川国語中辞典』の「あげる」の項の一の20に「〔敬語〕上位者への動作にいう〈謙譲語〉。転じて、美称(丁寧語)にも。」とする類の解説も、右のような事情を参照することによって、よく理解することができるであろう。

このように見てくると、現在問題になっているような「あげる」の用法も、国語の変遷の方向に沿った現象であり、また、それだからこそ、いろいろの批判があるにもかかわらず、ますます広く使われるようになるかも知れない状況になっていることが、根拠のないものではないことが知られるのである。

しかし、このような現実の状況と、敬語の使い方に関する規範意識とは、必ずしも一致するものではない。そのずれこそが、現代の問題なのであるが、それをどのように考えるべきかは、後の章で扱うこととする。

(二) 申す

宮地敦子「まちがいだらけの敬語[15]」に、次のような部分がある。

謙譲表現の使いどころをあやまって、尊敬するつもりの相手(や第三者)を低めてしまったり、逆に自分(や自分の側)、あるいは動物などを高めることになってしまうこともある。

(1)謙譲表現を(尊敬のつもりで)相手や第三者の動作に関して使うこと。

(イ)「オル」「マイル」「イタス」など。

今ここに〇〇さんがおりますから、お話を伺ってみましょう。　(テレビ)
こちらへまいりませんか？　(談話)
おセットいたしますか？　(談話)
先生が私の所へうかがったとき……。　(談話)
御用の方は係員に申して下さい。　(車内アナウンス)

これらは敬語の誤りの最右翼としていつも槍玉にあがるものであり、いまさら説明の必要もなかろう。(しかしこのなかの幾つかは、本来の謙譲語としてでなく、丁寧語に転用されて安定するかもしれない。)

右の(イ)には八例掲げてあるが、適宜抄出し、問題部分の傍線は省略した。

平井昌夫の前掲論文[16]に、

社長の申されたことに賛成いたします。

に対する答として「おっしゃったことに」が示されている。

伊吹一の前掲論文[17]には、次のように記してある(例文中の傍線は省略した)。

「乗り越しの方は、車掌にお申し出下さい」→「乗り越しの方は、車掌にお知らせ下さい」

「申す」が自分についての謙譲語なので、お客に「申し出てくれ」と要求するのは失礼である。「お知らせ下さい」「おっしゃって下さい」となるところである。

ところで、右に扱われている形を見ると、「申して下さい」「申された」「お申し出下さい」のようになっていて、それらの使い方が、無条件で誤りであるように記されているかの観がある。

他方、『言語生活』「目」欄[18]には、次のような指摘が見られる。

「申す」ということばは、「言う」ということをただよそゆきにいう意味になっているらしい。言う人と言う相

手との身分関係などは、もう考えられていない。会議の席で、「何博士も申されましたとおり」などは普通のこと。ところで芹沢氏の小説に、——君は怒つて……と……くつてかかつたよ。——覚えてゐません、そんなことを申しましたか。——言つたよ。私は覚えてゐる——先生もひどいことを申しましたね。覚えていらつしやるでせう。雹の日に……窓からとびおりて死んでしまへなんて……。この、あとの申すはどんなものだろう。

宮地敦子「敬語の誤用——「目」「耳」欄から——」[19]に、右の例をも上げつつ、次のように述べてある。

謙譲表現の誤用は、それぞれが臨時的な現象とばかりはいえない。そのうちのあるものは、丁寧、尊敬の用法として社会習慣になりつつあることは先にもふれた。これは「オ……ニナル」「イラッシャル」など尊敬表現の誤用が少なく、また「目」欄には見えないのに対して、「オ……スル」「オル」など、謙譲表現の誤用が格段に多く、また、反省を経る書き言葉の「目」欄にも見えることからもわかる。自分の動作を低く格づけすることによって間接に相手を尊敬するという、まわりくどい手続きをとる謙譲の意図はどうやら先細りのようだ。「オル」「致ス」「申ス」などは本来の謙譲語としてでなく、丁寧語もしくは尊敬語に曲用されて次代にうけつがれるかもしれない。

もし、これらを単純な誤用と考えるとすれば、「会議の席で、「何博士も申されましたとおり」などは普通のこと。」や「謙譲表現の誤用が格段に多」いのが、どうして起ってきたのかが問題となるに止まるであろう。しかし、これらが「社会習慣になりつつある」という事実に目をとめる必要があるのである。それだからこそ、文化庁編『言葉に関する問答集 1』[20]に、

「申す」は謙譲語と言われているが、よく「申される」という言い方を耳にする。これは正しいか。また、「申し出てください。」「お申し込みください。」は、尊敬語として一般に使われているが、これはどう考えればいいのか。

という問と、それに対する答が取り扱われることになったのだと考えるべきであろう。本書の「前書き」に「この本は、日常生活における具体的な言葉の使い方、書き方、読み方等広く関心を持たれている問題」について、「一問一答の形式で解説したもの」としているのも、その事を裏付けていると見てよい。

大石初太郎「先生が申されました」[21]に、次のような部分がある。

『朝日新聞』(昭39・3・1)に私は求められて敬語テストの問題を出した。使い方の正誤を問うものである。その中に次のような例を上げた。

ただいま会長の申されたことに、私は賛成いたします。

これの解答は、

ただいま会長のおっしゃったことに、私は……

が正しい、と示した。するとさっそく、参議院の事務局に勤めているという人から、〈「会長が申された。」は多少古めかしい言い方かもしれないが、誤りではなかろう。国会ではこの言い方はさかんに使われている〉と電話がきた。

また、鍬方建一郎「会議用語における「申す」の敬語意識について」[22]によるとして、

議長ノ許ヲ受ケマシテ、満場諸君ノ御意ヲ伺ヒマス。……所ガ今議長ノ申サレルニハ、ドウ云フヤウナ質問ヲスルカ、此ノ質問ノ区域外ニ渉ツテハ許サナイト云フコトデ御座イマス。……(三崎亀之助代議士の弁論)

の例が、「明治二十三年の第一回帝国議会衆議院の速記録に」見られるという述べてある。

さらに、「先生が申されました」について小調査を試み、「都立北高校の三年生一クラス四七名(男二二名、女二五名)から、次のような結果を得た。」としている。

正しい　　　　一二(男五、女七)

正しくない　三〇(男一六、女一四)
わからない　五(男一、女四)
なお、付記された意見ないし感想を整理してみると、おもなものは次のとおりである。
かた苦しい・ていねいすぎる・不自然だ　一九
感じがよくない　四
古めかしい　四
「申す」は謙譲語だから誤り　四
さらに、「正しくない、あるいは、よりよい言い方があると思ったら直しなさい。」という要求を添えたのに対しては、次のような反応があった。
おっしゃいました　四〇
言われました　五
申しました　五
以上の結果についての解釈はいろいろと成立しうるであろうが、「この約五〇名の高校三年生の正誤の判断がかなりゆれているという事実は、対象を限定したこの小調査の結果、一般の傾向を示す資料とすべきほどのものではないとはいえ、今日の一般の状況と無関係のものとは見られない。」という判断は、認められるものと思う。
ここで、古いところに目を向けてみると、桜井光昭『今昔物語集の語法の研究』[23]に、「要するに、源氏物語などの「申す」に比べて、今昔物語の「申す」は、敬度(謙譲度と言ってもいい)が低下しており、また、そのために、新しい局面の展開を見せていると言える。」と述べてある。ついでながら、補助動詞の場合については、「「申す」には、公的な場における男性に関して用いられるとされる慣用的な用法も残っているが、一方において、著しく丁寧語的な

用法のものが認められる。」と述べてある。[24]いずれも詳細な調査研究の裏付けを持ったものである。

文化庁の前掲書[25]には、「江戸時代などには、「申す」が謙譲語以外にも広く使われている。例えば、単に「言う」の意味に使われたり、場合によっては尊敬として使われたり、更には「言う」を丁寧にいうために使われたりする例も見られる。最後のは、改まった場面では、「言う」の代わりに使われるもので、それが国会などの会議の習慣として用いられているものであろう。」と述べてある。

辻村敏樹『現代の敬語』[26]には、次のように述べてある。

今日では「御用がございましたら、さようお申しつけください」などという言い方はむしろあたりまえになっていて、別に不審も抱かれないようですし、映画や、音楽や、芝居などの入場券の裏面を見ますと、よく「御気分の悪い方は受付までお申しいでください」などという文句を見いだします。

そして、決して「仰せつけください」とか「仰せいでください」などとはなっておりません。「仰文」に対する「申文」、「仰出」に対する「申出」のような対立は、今日ではすでになくなっております。

では、この現象をどう解釈したらよいでしょうか。

わたくしはこう思います。これは、「申す」が、もう上下関係の意識に基づいて用いられるのでなく、単なる場面の制約によって、改まった言い方にしなければならない時に「言う」ということばのかわりに用いられるようになっているのだと。そして、今まで「申す」を用いていたところには「申しあげる」が用いられるのだと。こう解してこそ、先の「お申しつけ」や「お申しいで」も解釈がつくので、そうでなければ「お」の付く理由が説明できないのではないでしょうか。

このように考えてくると、「先生がそう申しておられました」とか「申されております」などというのも解けてきます。「申す」がいけないとかいいとかいうのでなく、すでにそういうふうにも用いられる性質のものになっ

ているということを申したいのです。

右の解釈は、敬語の史的変遷を踏まえたものであり、適切であると思われる。ただし、そこにも述べてあるように、正誤または適否の問題は別としてあることも見落してはならないであろう。また、「そういうふうにも用いられる」という点にも注目すべきであろう。さらに、「申す」と「申し出る」などの複合動詞との相違にも考慮を払う必要があると思われるのである。

以上、「申す」の用法に関する種々の意見と、歴史的変遷を考えに入れての現実の使われ方とを見てきたのであるが、「おる」「まいる」「いたす」などについても、類似の点が認められよう。したがって、これらの問題をしぼってゆけば、「申す」を謙譲語として謙譲の意味にしか使えないものと考えるべきか、丁寧の意味にも使えるようになっていると考えるべきかというのが重要な点になることは明らかであろう。それとともに、人々の規範意識がどうであるかということも、やはり、合わせて考えなければならないと思うのである。

2　子供から大人へ

荒木節子「子どものコトバづかい――敬語について――」(27)は、次のように始まっている。

わたくしは国語の時間に、六年の児童に「先生に告げる場合、次のどちらの言い方がよいでしょうか」と質問しました。

「先生、父はきょうの父兄会には出席できませんと言いました」

「先生、おとうさんはきょうの父兄会には出席できませんとおっしゃいました」

みんなは小首をかしげて考えていましたが、初めはほとんど大部分が、後の答に手をあげました。

敬語の問題は、今の子どもにとっては、特にむずかしいようです。この場合もていねいでさえあればよいと簡単

に考えたのと、先生とおとうさんと目上の人が二人出てくるので迷ったためだと思います。終戦後のことばのみだれが身についてしまって昔なら自然に口から出たことばが、考えなければわからなくなってしまったのでしょう。

「先生が　きた　きた」廊下を通ると中学年の児童の、こんな声が耳に入ります。「犬がきた」というのと同じ表現です。

これは、大分以前のものではあるが、現在においても、問題になる点であろう。すなわち、子供が先生の行動を尊敬語を使わないで言うこと、および、他に対していつごろから父、母と言うべきかということなどである。

以下に、それらを考えてみたい。

(一)「先生が来た」

大石初太郎『新版正しい敬語』[28]に、次のような部分がある。

あがめの表現を取ることと、あがめの気持ちすなわち敬意の有無とは別である。

生徒が先生の姿を見て、

先生ガ来タ。

と言い、あるいは、

先生ガイラッシャッタ。

と言う。「来タ」と言うばあいは先生に対して敬意をもたず、「イラッシャッタ」と言うばあいは敬意をもっているのかというと、必ずしもそうではない。「敬意」の有無ではなく、「敬意の表現」の有無である。それはつまるところ、わきまえ・作法の有無ということにもなる。そこに敬語のしつけ・教育の意味もあるわけである。

ここで、「敬意」と「敬語表現」とを区別しているのは、重要な着眼であるが、「わきまえ・作法」の問題としていることも、その通りであろう。しかし、どうしてそのような問題の言い方が現れるかについても考えてみるべき点があろうと思う。

まず、児童・生徒が先生に話す場合と、先生のことを他に話す場合との区別を考える必要がある。次に、直接に先生に話す場合に、「正しい敬語を用いて、ていねいであるべきだ」と「敬語のていねいさよりも親しみのあることばの方がよい」とのどちらが一般に支持されるかということとも関係があると思われる。これらの点に関するアンケート調査は一九六四年に国立国語研究所によって実施され、その結果は、田中章夫「敬語論議はなぜ起こる」[29]にも示されている。さらに、その数年後に、同一の問題によって別個に行われた調査結果が、大石初太郎『話しことば論』[30]に、先行の調査結果に添えて示されている。それらによると、五一歳以上、三〇歳以下、高校生と、年齢の若い層ほど敬語表現の支持率が低くなっていることが知られるのである。この調査結果だけで、どうこうという結論を出すのは早計であろうが、先生に対する意識の移り変わりや、敬語表現の変遷の傾向なども、この問題の背景にあることが考えられるのである。

(二) 「お母さん」と「母」

柳田国男「敬語と児童」[31]に、次のような部分がある。

今まで折角平語対等の言葉使ひを許されて来た児童の群に、わざ〳〵煩雑にして誤り易い敬語の一般的使用を、強制するのはどんなものかといふのである。是が先例どほりの踏襲であつてさへも、なほ無益なことのやうに考へられる。ましてや新たにどこにも無いやうな言ひ方まで、こしらへて押付るといふに至つては、果して権能の濫用で無いかどうかを、危ぶまざるを得ないのである。(中略)「うちのお母さんが、何々とおつしやいました」

といふ類の読本の文章は、明白に敬語の今までの法則に反して居る。長者の前で我身の側の者に、様を附けて話をする様な者は、小学校以外にはどこを捜しても有りはしない。

これは一九三八年のことであり、その後、国語の教科書の様子に変遷の跡もあるが、家庭内で「お父さん、お母さん」と呼ぶことは、現在でも格別珍しいことではない。両親を「パパ、ママ」から「お父さん、お母さん」に切り替える問題については、『毎日新聞』[32]に、三つの投書が出ていたりする。『朝日新聞』に、「暮しの中の呼び名」[33]が出ていて、次のように書いてある。

国立国語研究所の調べでは、ちいさいとき「パパ、ママ」「お父ちゃん、お母ちゃん」と両親を呼んでいた子どもが、中学から高校時代になると、全く呼ばなくなってしまう例がかなりみられるという。とくに男の子に多く、外では「うちの父は、母は」「おやじが、おふくろが」といいながら、家の中では呼名をはぶいて「あの……」「ねえ……」ですませてしまう。

このように、呼び名の使い方には種々の問題があるのであるが、両親に直接呼びかける場合を含めて家庭内でのコミュニケーションと、外部に対するコミュニケーションとの区別をして、言葉を変えるべき時期はいつかという点を問題にしたい。

柴田武・鈴木たか「「母」と言うようになるまで」[34]は、これに関する注目すべき調査研究である。以下に、その概要を引いて、参考にしよう。

これは東京の女子生徒についての実態調査である。小学校は五・六年、中・高校は女子ばかりの私立の同一学園にあるもの一・二・三年で、山の手と下町とから一校ずつ選んである。生徒は各校とも全員、合計五四八一名が被調査者である。調査方法は質問紙法で、吟味のために面接法が加えてある。

「母」と言う者の割合を「母の率」と呼び、一つの質問に対する回答の学校別の平均を出すと、次のような結果が

得られた。

	山の手	下町
小学校(女子)	六・三%	〇・七%
中学校	六八・三%	四八・四%
高等学校	九八・七%	七一・三%

結果は一目瞭然であるが、「学年別に見ると、必ずしも学年順に高まってはいない(たとえば、下町の中学で、三年は二年・一年よりも「母の率」が低い)。言語能力ならば学年順に発達するところだ。言語能力とこれとは現象の構造が違うらしい。」という所見も加えられている。異った場面の質問も用意されたが、「場面は違っても母の率は小・中・高の順に、しかも、小学から中学校、中学校から高校へ移るときに急激に高まることが明らかになった。」という指摘は重要である。

この他にも注意すべき点は多く、特に吟味の部分も大切であるが、ここでは省略する。ただし、「「母」と言わない生徒たちは、直接話しかけるときの呼び方をそのまま、話題として出すときにも使っているわけだ。だから、「母」と言うようになるということは、話しかけ方と話題のなかでの呼び方とを区別するようになるということだ。」という見解は逸することができない。

ところで、言語行動や内省の実態と言語規範とが必ずしも一致するものではないことは前にも述べたが、それを踏まえると、次のような条件を付けた上での提案が出ることになる。説得力のあるものと言えよう。

無難な言語習慣を身につけることが、ことばの教育の目標の一つだと考えるならば、「母」と言うようになるまでの教育について、次のように提案することができよう。

中学校を卒業したときには「母」と言えるようになっていること。それは、特に中学校の先生が教えること。し

かも、中学校へはいったときからその注意を始めるのがいい。他人に話すときは「母」と言い、呼びかけるときは「おかあさん」と言うのが中学校卒業者にとっては最も普通だ、ということを。

なお、右の続稿「おかあさんは元気でおります」[35]には、静岡市で同様の調査を行い、次のような結果を得たことが記されている。

東京では、山の手のほうが下町よりも「母」への移り方が早かった。静岡市は、調べてみると、ちょうどその中間の位置にあることがわかった。

3　「ウチ」と「ソト」

直塚玲子「『ウチ』と『ソト』の感じ方」[36]は、次のように始まっている。

「もしもし、直塚さん、いますか?」「直塚先生は、まだおみえになっておりません」「そう、Aですけど、直塚さん、きたら〈読んだ〉と言っといてね」「はい、わかりました。直塚先生がおみえになりましたら、そうお伝えします」

出張先での仕事をすませて出勤したわたしを待ちかまえていたBさんが、Aさんの人柄や職業について問いかけてきた。

Aさんはジャーナリスト出身、Bさんは教師の世界の人である。BさんのAさん像は、

「電話を三本ぐらい同時に処理するチャキチャキのおばさん、といった感じですね。それにしても乱暴な言葉遣いをする世間知らずのご婦人という印象が強かったですよ。だけど直塚さんのお友達だと思って、丁重な応答をしておきました」

AさんのBさん像は、

「電話を取った男は、一体何者なの。出入りの商人かと思ったけど、あなたの同僚だったの。いやにばか丁寧な言葉遣いだったので、こちらもついツッケンドンになったわ。それにしても同僚に対して敬語を使ったり、〃先生〃と呼んだりするのはおかしいわね。わたしなんか、新入社員には一番にそのことを教育するわ。課長であれ部長であれ、外に対してはいわば身内じゃないの。あなたも教師仲間に問題提起をしたら？」

右のような二人の印象・感想に続けて、次のようなことが述べてある。

電話のかけ手も、受け手も、相手がけじめをつけないことに立腹している。ところがそれぞれの立場によって、けじめをつけるべき内容が異なっているのである。このことには、個人の生活圏のなかでつちかわれる言語感覚が投影されていて、興味をそそられた。

さらに、「ヨコ」と「タテ」との関係、「ソト」と「ウチ」との意識に及んでいるのであるが、このような問題が、中根千枝『タテ社会の人間関係』[37]において解説されているように、日本の社会を考察する場合に、重要な概念になっていることは改めて言うまでもないことと思う。敬語の使い分けについても、これらに関係する問題がいろいろ取り上げられているのであるが、その中から一、二を拾って考えてみることにしたい。

(一) 職場内の身内

職場の上長を職場外の人に言う時には尊敬語を使うべきではないというのが一般の常識になっていると思われるが、それでも何となくひっかかる場合があるという声も聞かれる。しかし、課長のことを部長に言う時などは、さらに問題が微妙になってくると思われるのである。これについても、いろいろな場合があって単純ではないが、ここでは一例だけを取り上げることとしよう。

『言語生活』「相談室」[38]欄に、

社長——課長はいるかね。

私——はい、A　いらっしゃいます。

　　　　　　B　おります。

Aの場合は、社長に対してなにか悪いような気がするし、Bの場合は、自分の直属上司に対して失礼なようで、どうも困るのです。

という、中小企業に勤める女子事務員一年生の問が出ている。その答（大石初太郎担当）では、この判断はむずかしいとしながらも、社長や重役に対する尊敬を声の調子や態度で示した上でAを採用するのも許されるし、若い女性としては自然であるように思うという趣旨のことが述べてある。そして「こういうことを言ったら、きびしい人々からはしかられるでしょうか。会社の管理的な立場におられるかたがたの意見を、むしろわたし自身うかがってみたいと思います。」としている。

これに対する直接の答ではないが、吉沢典男・林謙二「職場の敬語——アンケートによる小調査——[39]」に、次のような部分が出ている。「部長に、課長の所在の有無を尋ねられ、いないことを言う場合　1、いらっしゃいません。2、おりません。」について、一般社員には、もっともよいと思うものの答を求め、役付社員には、一般社員としてもっともよいと思うものの答を求めるものである。その結果は、細部を省略すると、次のようになっている。なお、数字は%を示す。

	一般	役付	一般男	一般女	全体
1	三三・九	五二・五	三一・一	三九・四	三九・八
2	六二・〇	四五・〇	六五・〇	五七・六	五六・六

ここで、1を選んだ者が相当数あること、一般社員では、女子の方が多いこと、一般社員より役付の方が多く半数

以上にのぼることなどは、興味深いことである。これは、ごく概略のことであるが、「職場内身内」についての考え方の反映と見れば、そこにもゆれのあることが知られるのである。

(二) 配偶者の呼び方

『朝日新聞』「夫と妻の力学、9、呼び名」[40]に、次のようなことが出ている。

世の中さまざま。夫婦もさまざま。でも「……くん」とか「……ちゃん」とか、「ジュン」「タロー」「マーやん」のように、妻が夫を人前でも呼ぶ時代など、戦前派には理解できないのではないだろうか。

けれど、こんな若い夫婦たちも子どもができると、あっという間に、「パパ」「ママ」「お父さん」「お母さん」、それに最近は「ダディ」「マミィ」も加わり父親・母親としての呼称に変わっていくのが、おおかたのようだ。

(中略)「最近の夫婦の意識調査」でみると、妻が夫を呼ぶのは六一%までが「父親として」、一方夫は妻を呼ぶのに「母親として」三七%、「名前を呼びすて」三六%。

右のような、互いに呼ぶ場合の問題も、世間で取り上げられ、また、それに関する研究も出ているが、これは夫婦間のことであるから、相手の承認だけで処理しうるものである。

ところが、夫や妻のことを他人に話す場合には、そういうわけにはいかない。中でも、夫を「主人」と呼ぶことが、これまでに問題となってきている。妻は夫の召使ではないのだから「主人」は不当だとするもの、妻は「主婦」なのだから夫は「主人」で差支えないとするものなどをはじめとして、いろいろな意見が出されている。

さらに、名前を呼び捨てにするか、敬称を付けるかということになると、「主人」以上に複雑な問題となるのである。

三宅武郎『現代敬語法』[41]に、次のように述べてある。

> 自分の夫のことを他人に対していふのには、通例「主人」といふ。但、その人が夫の友人であるやうな場合には、夫の「姓」を呼捨てにする(但、これは比較的に新しい言ひ方の一つである)。また夫の先生や長上に対して話すやうな場合にも同様である。(例は省略)
>
> あるいは夫の名(姓名の名)を呼捨てにする人もある。しかし、これは少しく必要以上に親愛味が出てゐる、言はゞ露骨すぎてゐるので、一般の標準的な言ひ方としては推奨し得ない。けだし夫の「名」を直称することは、家庭的にも社交的にも、妻として差控へるべきであると考へられる。
>
> 但、これは一般中流社会の語感に基づく立言であつて、それが上流社会となると、また、少しく異つた語感によつて次のごとき言ひ方があるらしい。即ち徳川義親侯の「日常礼法の心得」によると
>
> > 妻が他人に向つて夫のことを話すには、普通には「主人」「たく」などが用ひられてゐる。しかし改まつた場合、或は目上の人に対しては「山田がどう致しました」といふやうに姓をいふのがよい。又、舅・姑など目上の家族に対しては「一郎」だとか「三郎」だとか名前を呼び捨てにするのが本当である。
> >
> > ところが斯ういふ例があつた。お嫁さんがお舅さんに自分の夫のことを呼び捨てにして「太郎が斯う申しました」といつたといふのである。この場合は、言葉遣ひからいへば、親に対して夫を呼捨てにしたお嫁さんに間違ひはないわけだが、ただ手落が一つあつた。それは、お嫁さんが婚家の家風に気がつかなかつたことである。
>
> (下略)

なお、その後の方に、「妻のことを他人に対しては「家内」といふのがもつとも普通である。手紙では「小妻」である。」「上流の社会では、主人が夫人をさして「奥」と呼ぶ家庭もある。」などとも述べてある。

酒井美意子「夫や家族の呼び方」[42]では、

> 夫のことを「太郎がこういった」などと呼び捨てで話すと、夫の親きょうだいから不快に思われることはよくあ

ることです。夫の肉親に向かっては「太郎さん」といい、ある程度敬語で話すのが感じのよいもの。ただし、妻が夫の名に「くん」をつけるのは、現代的というよりは、なんとなくおかしなものです。

としている。

これらの考え方の相違が大きいと考えるかどうかは人によって違うであろうが、いずれにしても、「ウチ」と「ソト」との考え方が深く関係するのは事実であろう。

なお、この問題に関しては、鈴木孝夫『ことばと文化』[43]、林巨樹「家庭と敬語」[44]などが参考になる。

三 問題の考え方

前章において、謙譲語の丁寧語化に伴って起る問題、子供の教育、しつけに係わる問題、場面に応じた使い分けに関する問題を、敬語の使い方に即して見てきた。そこに、迷いや疑問が起るのは、要するに、従来の規範と現実の用法との間にずれが生じてきているからであると考えることができるであろう。

その原因は何かと言えば、社会の変動の反映としての敬語意識の変動と、国語の史的変遷に根ざした言語使用の変遷とを挙げることができると思われる。江川清「階層と敬語」[45]には、国立国語研究所の敬語意識・敬語行動に関する調査を踏まえて、

そこでは、敬語を身分の上下の関係という立場からとらえる層と心理的な力関係や立場の違いなどの面を重視する層との二つの考え方が併存していることが明らかになっている。前者は「タテ」の関係に従ったたいわば保守的な敬語法である。これに対して後者は「左右」の関係といったものに基づく比較的進歩的な敬語法であるといえよう。

と述べてあるが、その通りであろうと思う。表現のしかたには相違があっても、このような傾向は、一般に認められているところであろうと考えられるのである。J・V・ネウストプニー「世界の敬語」[46]には、広い視野に立った考察があるが、そこにも、右の考え方と類似の結果が示されている。

ここで、どのような敬語の用法が正しいかとか、何を規範とすべきかという問題を取り上げるとすれば、現実における敬語の用法の記述だけでは解答が出るとは限らないのである。記述と規範とは、元来が別のものだからである。正しさを考えるとしても、その判断を下すためには、基準なり尺度なりを設定して、それに照らし合わせる必要があることは言うまでもない。その基準にも、種々のものを立てることができようが、概括的に言えば、長年の伝統に重点を置くものと、現代の一般的な用法に重点を置くものとが、主要なものとなるかと思われる。どちらの立場を取ろうとも、その基準に合えば、それなりに正しいということになるのであるが、その基準を一本化しようとする時に、見解の分かれる場合が起こるのである。

ところで、われわれが「動く実態自体(社会)に価値の尺度をおいている[47]」「日本人の日本語による自己規定が、相対的で対象依存的な性格を持っている[48]」というような指摘があるが、世間あるいは相手がどう思うかという他人志向型の傾向は、敬語の使い方についても、考慮に入れる必要があろう。場面の制約による敬語の使い分けも、こういう観点から解明できる点が少なくないと思われるのである。

言語の規範を考える場合、安定と変動、保守と革新、制度と運動など、互いに反する方向があると認められるのであるが、言語のあるべき姿としては、むやみに変化させるべきものではないという点を忘れることができないと思う。コミュニケーションの時間的・空間的広がりを保とうとする場合、これは当然のことなのである。したがって、あえて言えば、私は敬語の用い方も一世代ぐらい前のところを一往の目安として、そのあたりに一般的であった規範をよしとするのが適切であろうと考えている。ただし、特別な事情がからめば、その限りではない。

なお、敬語の問題を考える場合に、正しいか誤っているか、適切か不適切か、というような二分法は、実際問題としては、必ずしも現実的な処置とは考えない。文法に、許容事項が設けられたことがあるように、敬語においても、特に用法上のゆれが存在したり、変遷の途中にある場合には、許容あるいは中間段階を認めるのがよいであろうと思うのである。

以上のように考えてくると、先に「具体例の考察」の章で扱った問題はどのようになるであろうか。次に、ごく簡単に、私見を述べておくことにする。

「あげる」「申す」は、基本的には、現在でも謙譲語であると考える。したがって、規範としては、謙譲語としての用法を立てるべきであろう。しかし、これらの語の用法は多岐にわたっているので、場合によっては、丁寧語としての用法を許容するのが現実的な処理の方法であろうと思う。

「先生が来た」「お母さん」は、場面の把握のしかた、あるいは、敬語表現のわきまえの問題としては、一般の社会人の規範と認めるべきではないと考える。敬語表現における子供と大人との境界をどこに設定すべきかについては、義務教育の終了時を目安とするが、成人式を迎えるまでを猶予期間とするのが適当であろう。

「職場内の身内」「配偶者の呼び方」は、外に対しては謙譲語を使うか、それに準じた表現をするのが原則であると考える。ただし、部内の習慣や家庭内の了解ができていれば、その限りではない。周囲の人の方式に従うのが適当である。

とは言うものの、人間関係は複雑で、時と場合、あるいは相手によって、これだけでは処理の困難な例も出てくるであろう。しかし、それは、各人のその場の判断に任せるほかはないのである。

(1) 大石初太郎(司会)、奥山益朗・北原保雄・沢田允茂・戸塚文子「現代敬語の問題点と敬語の将来」(『敬語講座 6 現代の

敬語』明治書院、一九七三年)。

(2) 岩淵悦太郎(司会)、内村直也・大石初太郎・島田一男・高田敏子「敬語について――その現状と将来――」(文化庁編『敬語』ことばシリーズ 1、大蔵省印刷局、一九七四年)。

(3) 斎賀秀夫「B・Gのための敬語心得十か条」(『言語生活』一一五号、一九六一年)。

(4) 宮地裕「現代の敬語」(『講座国語史 5 敬語史』大修館書店、一九七一年)。

(5) 辻村敏樹「現代の敬語とその使い方」(『現代の敬語』共文社、一九六七年)一一―五〇頁。

(6) 大石初太郎『新版正しい敬語』大泉書店、一九七一年、二五―二六頁。

(7) 平井昌夫「自己採点式テストあなたは正しい敬語が使えますか」(『国文学解釈と教材の研究』一七巻四号、一九七二年)二〇四頁以下。

(8) 伊吹一「実例集・正しい敬語の使い方」(同上、一七巻四号)九六―九七頁。

(9) 大石初太郎「敬語の誤用の実例」(『国文学解釈と鑑賞』三七巻六号、一九七二年)一九頁。

(10) 『朝日新聞』一九七三年九月二八日朝刊「(03)212 0023」欄。

(11) 中島国太郎「どのように敬語を身につけさせたか　中学生の場合」(『国文学解釈と教材の研究』二一巻一二号、一九七六年)一五六頁以下。

(12) ジョアン・ロドリゲス原著、土井忠生訳註『日本大文典』三省堂、一九五五年、五九頁。

(13) 田中章夫「近世敬語の概観」(『敬語講座 4 近代の敬語』明治書院、一九七三年)一二頁。

(14) 辻村敏樹『敬語の史的研究』東京堂出版、一九六八年、三八〇頁。

(15) 宮地敦子「まちがいだらけの敬語」(『国文学解釈と教材の研究』一一巻八号、一九六六年)一九五―一九六頁。

(16) 注(7)、二〇四頁。

(17) 注(8)、九五頁。

(18) 『言語生活』五号、一九五二年、三八頁。

(19) 宮地敦子「敬語の誤用――「目」「耳」欄から――」(『言語生活』一一五号、一九六一年)四七頁。

(20) 文化庁編『言葉に関する問答集 1』ことばシリーズ 3、大蔵省印刷局、一九七五年、二六―二八頁。

(21) 大石初太郎「先生が申されました」(『口語文法講座 3 ゆれている文法』明治書院、一九六四年)三〇八頁以下。

(22) 鍬方建一郎「会議用語における「申す」の敬語意識について」(『国語』東京文理科大学終結記念号、一九五三年)。
(23) 桜井光昭『今昔物語集の語法の研究』明治書院、一九六六年、二二一頁。
(24) 同上、二五一頁。
(25) 注(20)、二七頁。
(26) 辻村敏樹『現代の敬語』共文社、一九六七年、七五—七六頁。
(27) 荒木節子「子どものコトバづかい——敬語について——」(『東京新聞』一九五七年二月二一日朝刊、家庭欄「教室からお母さんへ」)。
(28) 大石初太郎、前掲書、五三頁。
(29) 田中章夫「敬語論議はなぜ起こる」(『言語生活』二一三号、一九六九年)。
(30) 大石初太郎『話しことば論』秀英出版、一九七一年、五八—六〇頁。
(31) 柳田国男「敬語と児童」(『国語・国文』八巻一〇号、一九三八年)七二—七三頁。
(32) 『毎日新聞』一九七五年一一月三〇日朝刊。
(33) 『朝日新聞』一九六八年六月二二日朝刊、家庭欄。
(34) 柴田武・鈴木たか「「母」と言うようになるまで」(『言語生活』九八号、一九五九年)。
(35) 柴田武・鈴木たか「おかあさんは元気でおります」(同上、一一五号、一九六一年)。
(36) 直塚玲子「「ウチ」と「ソト」の感じ方」(『読売新聞』一九七三年八月二七日朝刊「ときの目」)。
(37) 中根千枝『タテ社会の人間関係』講談社、一九六七年。
(38) 『言語生活』一八四号、一九六七年。
(39) 吉沢典男・林謙二「職場の敬語——アンケートによる小調査——」(前掲『敬語講座 6』)一九九—二〇一頁。
(40) 『朝日新聞』一九七六年二月一九日朝刊。
(41) 三宅武郎『現代敬語法』日本語教育振興会、一九四四年、三一八—三二〇頁。
(42) 酒井美意子「夫や家族の呼び方」(『読売新聞』一九六八年八月一三日朝刊「相談室エチケット」の「答え」)。
(43) 鈴木孝夫『ことばと文化』岩波書店、一九七三年。

(44)　林巨樹「家庭と敬語」(前掲『敬語講座　6』)。
(45)　江川清「階層と敬語」(同上)一四四頁。
(46)　J・V・ネウストプニー「世界の敬語」(『敬語講座　8　世界の敬語』明治書院、一九七四年)二九—三一頁。
(47)　中根千枝、前掲書、一七〇頁。
(48)　鈴木孝夫、前掲書、一九七頁。

6 敬語の研究史

大石初太郎

一 江戸時代における敬語研究

敬語は日本語のもっとも大きな特色であると、常識的に言われる。明治初年に来日して、日本語および日本文化を研究し、近代国学語のもとを開いたとされる英人チェンバレン B. H. Chamberlain は、"No language in the world is more saturated with honorific idioms than Japanese."(「世の如何なる言語といへども日本語より多くの敬語を有するものなし。」山田孝雄訳)と言っている。しかし、敬語が日本語だけにあるものと考えるのはもちろん誤りだし、チェンバレンの言葉も文字通りに受け取ることはできない。

とはいえ、多くの言語の中で、日本語が特に複雑な敬語をもつ言語の一つであることは、事実として否定できない。その敬語を、日本人自身どのように意識し、敬語の研究がどのように行われてきたか。

よく引かれる『万葉集』巻一二の、

妹と言はば無礼し恐ししかすがに懸けまく欲しき言にあるかも

には、男が女に対して親しみをもって呼びかける「妹」という語の待遇的価値についての反省が見られる。また、これも有名な『枕草子』の、

文ことばなめき人こそいとにくけれ。……

の段は、平安時代人の敬語に対する意識の表白の一例である。『宇治拾遺物語』巻七の播磨守為家の侍「さた」という男が、女から「さたが……」と人を卑しめる格助詞を用いて呼ばれて(「さたの」と言うべきだと)怒る話も有名である。

これらは二、三の例にすぎないが、敬語を用いてきた上古以来の日本人の間に、このような敬語についての意識が終始相当強くあったことは、当然だろう。言葉の要素の中でも、人間関係のとらえ方に基づく待遇表現にあずかる敬語について、人は特に意識的になることを避けられないからである。

そうした意識の学問的組織化としての敬語の研究は、それではどのように行われてきたか。不思議というべきか、研究らしい敬語の研究は、明治も末年になってようやく見られるのであって、それ以前には、ほとんど言うに足るものがない。江戸時代の学者の間に、二、三個別的な考察は見られても、敬語の本質は何か、敬語の体系はどうかというような研究を見ることはできない。文法に関し、文字に関し、語彙に関し、江戸時代あるいはそれ以前から、かなり見るべき言葉の研究の伝統があるのに対し、敬語についての研究が起らなかったのは、奇妙なことだった。

だが、一方、江戸時代初頭に、一外国人によって敬語の体系的記述がみごとになされている事実は、驚異的である。それは一五七七(天正五)年来日のポルトガル人宣教師ジョアン・ロドリゲス Ioãn Rodriguez の『日本大文典』(1)(一六〇四—八年)の中に見られるものである。しかし、これが日本人の近づきがたい異国語による著述であり、しかも、現在ではその原本はイギリスに二部伝わるのみというような稀覯書であるためもあってか、ついに日本人の敬語研究を誘発したり、日本人の敬語研究に影響を及ぼすにいたらずに終ったのだった。

とにかく、ロドリゲスは当時の敬語を整理して体系的に記述している。その大要および見どころは、次のように指摘することができる。

○一般の敬語と書状の敬語とに分け、それぞれの性質に応じて分類し、記述している。

○たとえば、一般の敬語に関しては、(1)名詞に接続する尊敬の助辞、(2)動詞に接続する尊敬および卑下の助辞、(3)敬語動詞・謙語動詞、と分け、それぞれに属する言語形式をあげ、その個々について、話手・聞手の関係その他の諸条件に基づく用法を、周到に説明している。また、敬意の度合いについての説明がある。

○待遇表現を広く見る立場に立ち、敬語・謙語を中心としながら、見下げの表現にも及び、また、単純動詞の待遇的価値をも説いている。

○たとえば、謙語動詞「申す」については、「この動詞を用ゐる場合には、話し対手かその座に居る人かを尊敬するのである。」のような記述があり、把握の確かさを示している。

ロドリゲスの敬語記述に整理の不完全、体系化の不十分があるにしても、当時の一般情況から見れば、なんといっても、きわめて注目すべき異色の作業だったと言わなければならない。このようなすぐれた敬語研究が、前述のようなやむをえない事情によるとはいえ、研究史上まったく孤立的なものとして終ったのは、はなはだ惜しまれることだった。(ついでながら、明治に入ってからも、サトー E. M. Satow・アストン W. G. Aston・チェンバレンら外国人による敬語研究があったが、詳しくは省略する。)

右のような情況から、江戸時代は敬語研究のいわば前史というべきだろう。

なお、個別的ながらも、この期における日本人による研究のうちおもなものをあげれば、次のようなものがあった。東条義門の『山口栞』その他における四段活用・下二段活用の二種の「給ふ」の別の指摘、鹿持雅澄の『舒言三転例』その他における奈良時代の尊敬語「す」の説、越谷吾山の『物類称呼』における方言の待遇語の記述、安原貞室の『片言』の中に見られる敬語の用法の説、その他、本居宣長・本居春庭・滝沢馬琴・富士谷御杖・長野義言らの著述の中の敬語説。総じて古典注釈に伴う考察あるいは、それに発する語学的考察が多く、それ以上にあまり発展しなかったために体系的研究が成立しなかったとも考えられる。

なお、これらに先立って、鎌倉時代に、仙覚の『万葉集註釈』に、「ラ」「タチ」の待遇価値の相違の指摘等のあったことは、注目すべきである。

二　明治以後における敬語理論の発展

まず、敬語理論の発展の情況をながめることから始めることにする。

1　初期の敬語論

一般に、山田孝雄（やまだよしお）の敬語論と時枝誠記（ときえだもとき）の敬語論とが、敬語研究史上の双璧とされている。しかし、大正、昭和期にこれらのすぐれた敬語研究が出現する前に、研究を徐々に展開させる動きがあったことは、いうまでもない。二〇世紀初頭から、「俗語文典」「口語文法」等の名で口語文法書が多数現れたが、これらはすべて、敬語を取りあげている。この辺から敬語研究が本格的にスタートした観がある。そのおもなものに、松下大三郎『日本俗語文典』(2)、吉岡郷甫『日本口語法』(3)等があり、また、上代語から現代口語までを対象とした汎時代的な三矢重松の『高等日本文法』(4)があった。

『日本俗語文典』に出発した松下の敬語論は、その後発展修正を重ねて、一九二八年の『改撰標準日本文法』で到達点を示すことになるので、その扱いはあとに送る。

吉岡は、敬譲動詞、助動詞の敬譲相を、尊敬・謙遜・丁寧に分けている。その前後に、同趣の簡単な敬語論は少なくない。

三矢(増訂版による)は、次のような敬語分類を示している。

(一)尊他敬語――他の主体・所有・動作・状態を尊敬するもの(「あなた」「お靴」「御書き下さる」「お美しい」等)

(二)自卑敬語――自己の主体・所有・動作を卑下するもの(「私」「粗品」「存ず」等)

(三)関係敬語——自己の動作の他に関係するを、他を尊び、己を卑めるもの(「御返事」「奉る」「御気の毒」等)
(四)対話敬語——聴者を尊敬するために語を丁寧にするもの(「お元気」「参る」「ます」「相成」「はい」等)

また、「付」として卑罵の表現をあげている。敬語助動詞と他の助動詞との接続についても説く。文の待遇上の種類として平説文・崇敬文・卑罵文の三種をあげている。

以上の三矢の敬語論は、明治期における敬語研究としては、松下のものとともに、もっとも詳しいものとして注目に値する。

なお、松下・三矢らに先立って、三橋要也の「邦文上の敬語」[5]という論文があったことを見逃すわけにはいかない。ここで最初の敬語分類、他称敬語・自称敬語の二分法が見られる。また、「敬語の必要」の章で、文章上の修辞的、文学的効果を説き、さらに社会生活上の効用を説いている。当時における異色の敬語論だった。

以上のようにして、明治の中期から、次第に敬語研究は発展してきた。

2　山田孝雄の敬語論

山田孝雄は、『日本文法講義』[6]『日本口語法講義』[7]の中で敬語法の一端を説いたが、それを発展させて、『敬語法の研究』[8]を出した。前例を見ない敬語に関する専書で、大正末期になってようやく現れた敬語研究の一大モニュメントである。

まず『敬語法の研究』中の「敬語法の大綱」の記述を見よう。冒頭に、「こゝに敬語といへるものは文法上に於ける敬語の法則といふ義」であると前提して、文法上における敬語の法則は、敬語が称格(人称)と密接に関係する点にあることを強調し、その見地から、まず大きく、謙称・敬称に分けられるとする。

謙称——他に対して謙遜する意を表す語で、主として第一人称に立つ者が自己をさし、または自己に付属するも

のをさして言うに用いるもの
敬称——対者または第三者に関する者をさして尊敬の意を表すもので、第二人称また第三人称をさして言うに用いるもの
名詞については、その敬称を、さらに次のように分ける。
対称の敬称——第二人称に立つ者あるいは第二人称に付属連関するものをさすときに尊敬する意を表すもの(一般の敬称に流用することのできないことを本質とする)
一般の敬称——主として第三人称に用いられるもの(ばあいによっては対称の敬称に流用されることがある)
以上要するに、第一人称の句(文)では謙称を用い、第二人称の句では対称の敬称を用い、第三人称の句では一般の敬称を用いるを原則とするということになる。つまり、敬語は句の称格の区別に大きな関係をもつのである。
以上の「大綱」に基づいて、口語・候文・普通文のそれぞれの敬語を説く。
なお、口語の動詞の謙称・敬称に、それぞれ絶対・関係の別を立てる。
絶対謙称——謙称を用いる者の作用について絶対的に用いるもの(「申す」「いたす」等)
関係謙称——謙称を用いる者の、尊敬すべき者に対しての行動について言うもの(「いただく」「うかがう」等)
絶対敬称——尊敬すべき対象の作用を絶対的に言い表すもの(「めす」「おぼしめす」等)
関係敬称——尊敬すべき対象がその敬称の語を使用する者に対して起こす作用について言うもの(「くださる」等)
この区別は、候文・普通文にも通用するものと見てよかろう。
また、口語の敬語法の中で、「敬語の特別の用法」を説いている。特別の用法とは、まず「自己又は自己に属する者に敬称を用ゐる変態」で、これは、「形式上より見れば敬語なれど、精神より見れば親愛の意をあらはしたるもの」

だとする。例を挙げる。
おかあさん(母の自称)はあの白い花がすきです。
先生(第一人称)がかいてあげます。
叔父さん(説話者の夫にして対者の叔父)は大変だ土手が切れたといつてすぐ屋根に出ました。
また、人以外の事物を言うにも敬称を用いることがある。これは、「言葉遣ひを上品ならしめ、説話の対者に親愛なる意と、崇敬する意とを間接に表明する手段として用ゐたるもの」としている。例えば、
お正月のおかざりにはどんなことをいたしますか。

以上、山田の敬語論は、敬語が称格的働きをする点を強調し、それを基準として組織体系化したところに、最大の特色をもつものである。しかし、その点から生ずる無理・欠陥が、後に時枝誠記・石坂正蔵らによって批判されることになる。

ところで、巻頭の「総論」で、敬語は人々の相推譲する意を表明する一つの方法で、この敬語の存在するのは、「わが民族間に推譲の美風の行はるるによるもの」と論じているところは、山田の、ないしは当時一般の国粋主義によるところである。しかし、また、

我等が用ゐる敬語は必ずしも尊崇に限らず親愛の意をあらはす場合あり、又言語に品格あらしめむが為に用ゐることあり。

と述べているところなどは、客観的なとらえ方として、今日認められるものである。

「結論」で、敬語は口語文にもっとも発達し、候文がこれに次ぎ、普通文にもっとも敬語要素の少ないことを指摘し、その理由を論じているところが注目を引く。現代の口語は、幾百年の間、彫琢を施されぬままに放置され、支離滅裂の無統制の観を呈しているにもかかわらず、敬語の組織がもっとも整っているのは、口語が「国民の精神生活の

核心に触るるものありてかく健全に発達せしもの」だろうという。候文の敬語は、「形式上の礼儀をのみ重んぜし徳川幕府の弊を受けて皮相的に発達せしに止ま」ったのだろう、普通文に敬語がほとんどないのは、「今日の普通文はその骨子とする処は蓋し漢文読下しの体にある」からだと論じている。

山田の敬語論は今日不備の指摘されるところもあるが、叙述は精細で、敬語研究史上、もっとも注目すべき開拓的業績であると認められる。

3 松下大三郎の敬語論

松下大三郎の敬語論は、『日本俗語文典』から出発して、「国語より観たる日本の国民性」[9]の中の「敬語の体系」に発展し、さらに『標準日本文法』[10]を経て、最終的に『改撰標準日本文法』[11]における論に到達した。その間に少なからぬ発展修正があるが、『日本俗語文典』に見る敬語分類の基本線は変わっていない。ここでは『改撰標準日本文法』について見ることにする。昭和期初頭の敬語論としては、最も注目すべき大きな存在と見られるものである。

そこでは、敬語の体系は、次のように示されている。

名詞の尊称
　自体尊称――その名詞の表すところの人や物を尊崇するもの(「太郎さん」等)
　所有尊称――その詞の表すものの所有者を尊崇するもの(「ご姓名」等)
　主体尊称――その詞の表す作用の主体を尊崇するもの(「仰せ」等)
　客体尊称――作用の客体を尊崇するもの(「拝謁」等)
名詞の卑称
　自体卑称――その名詞の表すところのものを卑めて言うもの

自体謙称（「ぼく」等）
自体罵称（「きさま」等）
所有卑称——その物の所有者を卑めて言うもの（「拙宅」等）
動詞の尊称
主体尊称——その表す作用の主体を尊崇するもの（「言われる」等）
客体尊称——作用の客体を尊崇するもの（「差上ぐ」等）
所有尊称——事件（動作状態）の所有者を尊崇するもの
主体的用法——事件の主体を事件の所有者として敬うもの（「御帰り遊ばさる」等）
客体的用法——事件の客体または客体の所有者をその事件の所有者として敬うもの（「御祝ひ申しあぐ」等）
支配尊称——万事の支配者（君主）を尊崇するもの（「罷り立ち侍りなむ」等。もっぱら中古文に行われたもの）
対者尊称——説話者が説話の対者を敬う意を表すもの（「ます」「です」等。口語にだけある）
動詞の卑称
謙称——自己側のものを卑めて対者を尊崇する意を表すもの（「驚き申し候」等）
罵称——単に他を卑めて言うもの（「怠けやがる」等）
以上についての説明の中で注目される点を、二、三取りあげてみる。
○「雷様」「お月様」等は、尊意が失われて尊敬の外形だけとなったもので、これを自体尊称の「虚的用法」とよぶ。「お父さん」（子供に向かって自分をいう）などもそれ。
○「御茶」「お花見」等は、所有尊称の虚的用法であり、「美称」と名づける。
○動詞の主体尊称において、「あの方は御子さんがお生れなすった。」は、小主体なる「御子さん」を敬うもので

あり、「あの方は御子さんがお有りなさる。」は、大主体なる「あの方」を敬うものである。

なお、「尊称の交錯」として、二つ以上の尊称が重なる場合の形式一八種をあげ（例——主体的所有尊称兼客体尊称兼主体尊称「お申上げ遊ばす」）、その順序に次の原則があることを示す。㈠所有的客体尊称は必ず一番先、㈡対者尊称は必ず一番後、㈢主体尊称は客体尊称よりも後。

尊称・卑称の外に、荘重態・利益態を説いているところは、松下の特色である。

荘重態は言語を厳粛荘重にするもので、その結果は彼我の品位を高めるものである。「候」を「……て」の下などに付けるもの、「相成りました」など「相」を付けるもの、「参る」「申す」等の動詞、「所持」「昨今」「至極」「聊か」等の名詞・副詞等。

「参る」「申す」などは中古文では客体尊称であつたものであるが近古以来荘重態にもなつたので

貴殿は何れへ参られしぞ。　何と申され候や。

などの様に使はれる。

という。

利益態はその作用がある人の利益になることを表すもので、

他行自利態（「教へて下さる」「教へて呉れる」等）

自行他利態（「貸して上げる」「貸して遣る」等）

自行自利態（「賛成して戴く」「賛成して貰ふ」等）

の三種がある。

以上の松下の敬語論も、山田の敬語論とは異なる立場による精密な分析的敬語論で、ことに、罵称を組み入れている点、小主体・大主体の説、荘重態・利益態の説などは、松下の考察の幅の広さ、あるいは詳しさを示すもので、今

日なお、取り上げて吟味すべき価値をもつものである。

なお、敬語の本質的性格については、次のように論じている。

外国語にも敬語はないではないが、其れは文学者の作つた修辞的敬語で時々気紛れに遣ふのであつて、言語の構造に何等の関係が無い。日本語の敬語は名詞にも動詞にも規則的に存する厳正なものであつて、壮大なる体系に統一されて居る文法的敬語である。これは思遣といふ国民性の発露であつて実に尊いものである。

敬語の発達を民族・国民の美風と結びつけて論ずるところは山田と同趣だが、こうした敬語観は別として、敬語の体系・構造の研究は、山田・松下の二家によって飛躍的発展をとげたと言える。

4　時枝誠記の敬語論

続いて昭和戦前期に入るが、ここで、時枝誠記の敬語論を吟味する前に、松尾捨次郎の『国語法論攷』[12]の中の特色ある敬語論に一言触れる必要があろう。松尾は、談話ないし記述には、「話者又は記者(自己)」「聴者又は読者(対者)」「談話・記述の材料」の三要素があるとして、敬語を、

談話・記述の材料となるもの(主語・客語・述語・従属分となるもの)に関する成分敬語(「あなた」「給ふ」「奉る」「おのれ」「ぬかす」等)

話者・記者、聴者・読者に関する非成分敬語(「お菓子」「相成」「侍り」「です」「ます」等)

に大別する。

話者・記者や聴者・読者が談話・記述の材料となって表されるばあいはそれぞれ自称・対称となって、成分敬語の分野に属することになる。

また、反敬語ともいうべき卑下を、尊敬と対立させる。

卑罵語の類を体系中に組み込んでいる(謙譲語とともに卑下に含まれる)点、成分敬語と非成分敬語(内容的には一般の丁寧語とほぼ同じ)とに大別した類別法が、注目される。この二分法は、結果的に、時枝の敬語論に近い。

時枝誠記の敬語論は、独特の言語過程説に基づく詞辞の論を中核とし、場面論を支えとして成立した、きわめて特色のある敬語論で、昭和戦前期に現れた敬語研究史上の一巨峰である。その『国語学原論』[13]中の「敬語論」によって、内容を概観する。

敬語の体系を、次のようにとらえる。

言語の素材の表現(詞)に現れた敬語法

イ　話手と素材との関係の規定(「お―になる」「―給ふ」等)

ロ　素材と素材との関係の規定(「あげる」「くださる」等)

言語の主体的表現(辞)に現れた敬語法

(「です」「ます」「でございます」「はべり」等)

詞の敬語と辞の敬語とは、本質的に性格を異にする。辞の敬語(「敬辞」ともいう)は、たとえば「暑うございますね。」について見るに、「言語主体の直接的表現である判断が、場面即ち聴手によつて制約されたもの」、言いかえれば、「言語主体の直接的表現に属するものであつて、敬意の対象は明白に場面即ち聴手である。」これに対し、詞の敬語は、たとえば「お庭を拝見した。」について見るに、「表現素材である或る行為が、単なる「見る」行為とは異なる行為として、言語主体によつて把握され、それが表現されたものと考へなくてはならない。この概念把握において、聴手でない素材である処の見る者と見られる者との間に、上下尊卑の差別が意識せられ、それが、「拝見し」といふ語によつて表現せられる処に、敬語と称せられる所以があるのである。」「概念的内容として敬意がこの語にあるので

なく、かゝる語の選択に於いて敬意が表現されてゐると見るべきである。」だから、詞の敬語は、「素材の上下尊卑の関係の認識であり、話手のわきまへの表現」だということになる。

要するに、敬意の直接的表現としての辞の敬語と、敬意の直接的表現でなく、敬意に基づく表現としての詞の敬語とに分けられるのである。

さらに、詞の敬語が二分される。

一は、素材的事実が話手の上位者・尊者である場合、この事実は特殊なありかたのものとして把握され、たとえば、「お書きになる」のような表現が選ばれる。これが「素材と話手との関係の規定」の敬語である。

他は、話手と素材との関係は入らず、素材間の上下尊卑の関係が話手に認識され、それに基づいて、「丁が丙に差上げる。」のような表現が行われる。これが「素材と素材との関係の規定」の敬語である。

以上が時枝の敬語論の大要だが、次に敬語の結合法を説く。すなわち、素材と素材との関係の規定の表現―素材と話手との関係の規定の表現―話手と聴手との関係の規定の表現、の順序に結合される(「丁が丙を見てあげなさいます。」)とする。松下の「尊称の交錯」の原則と通ずるところがある。

右のように事柄の概念的把握で構成される詞の敬語は、おのずから語彙論に属するもので、文法論に属するものではないとする。その立場から、山田の称格的呼応の説を批判し、文中の首尾の敬語の対応関係は文法的対応でなく、素材的対応にすぎないと論ずる。従来の論者がほとんどすべて、敬語を文法論に属せしめていたのに対立する見方である。

また、尊敬・謙譲の類別を設けることは、妥当でないとする。尊敬と謙譲とは表裏のような概念で、謙譲なくして尊敬なく、尊敬があれば必ず同時に謙譲がなければならないと、心理面の見方を強調する。

さらに、尊大語とか卑罵語とかいわれるものも、事物のありかたの表現にほかならないから、敬語以外のものでは

ない、また、「お母様が読んであげませう。」のような親愛の表現なども、敬語そのものであって、敬語の特例とすることは当たらないとする。

敬語が日本語の特色であるということに関しても、時枝の見方は新しい。

一の「見る」といふ事実を表現するに当つて、（略）誰が誰を、又何を、そして話手より見てその誰、何が如何なる上下尊卑の関係にあるかの識別が必要とされ、それによつて「見る」といふ事実の表現を制約しようといふのが国語の立前である。（略）常に上下尊卑自他の関係に対する敏感な識別が要求されることとなる。（略）敬語が国語の特質であるといふことは、敬譲の美風の顕現であるといふよりも、一事一物の概念的把握に於いて、右述べた様な相互的綜合的関係の認識が働く処にあると見るべきであると思ふ。

と論じている。

時枝の敬語論は、従来の敬語論に対して、断層的差異をもつものともいえよう。それはその後の敬語研究を大きくリードしたが、また、その基盤となっている言語過程説に基づく詞辞の論への批判とともに、根本的な批判をも受けている。

5　その後の敬語論

時枝以後、今日にいたるまで、少なからぬ敬語論が出ているが、そのほとんどすべてが、時枝説にかかわる色彩が濃い。それらのかかわり方は、敬語の分類法にもっともはっきり表れているが、敬語の本質の見方、ことに、敬語と敬意表現との関係の見方などが、分類の根拠として関連をもつばあいが多い。それらの点に着目して、その後の敬語論の展開を見ていこう。

時枝説に対して最初に批判を打ち出したのは、石坂正蔵だった。石坂はその著『敬語史論考』[14]で、時枝説を精細に

紹介したあと、「其の批判」を述べている。要点をあげてみる。
○時枝は第一人称者・第二人称者を素材として同列に考えるために、尊敬・謙譲の別を無意味とするが、第一人称者・第二人称者は、それぞれ背後に話手・聞手との結びつきをもつもので、つまり、主体的素材・場面的素材である。尊敬・謙譲は区別されなければならない。
○時枝は、辞の敬語を敬意の直接的表現、詞の敬語を敬意に基づく表現とするが、敬意という以上は主体的感情である。詞の敬語に主体的感情としての敬意を否定しているのは矛盾である。
○詞の敬語と辞の敬語とは、果して次元を別にするものだろうか。その性質・範囲・関係・転換は、今後解かれるべき問題を多く含んでいる。
いずれも、時枝説の根本にかかわる批判である。
石坂はその後、敬語的人称の概念を整えて、敬語的自称(謙称に当たる)・敬語的他称(敬称に当たる)・敬語的汎称(謙称(次の辻村敏樹の分類参照)に当たる)の三分類説を立てた。[15] 称格と敬語との関連をとらえた山田の謙称・敬称の二分類説を発展させたものである。
次に、辻村敏樹は、次のような敬語分類を示した。[16]

一　素材敬語
　(1)　上位主体語(＝敬称)
　　(イ)　絶対上位主体語(＝絶対敬称)
　　(ロ)　関係上位主体語(＝関係敬称)
　(2)　下位主体語(＝謙称)
　　(イ)　絶対下位主体語(＝絶対謙称)

(ロ) 関係下位主体語(=関係謙称)

(3) 美化語(=美称)

二 対者敬語(=謹称)

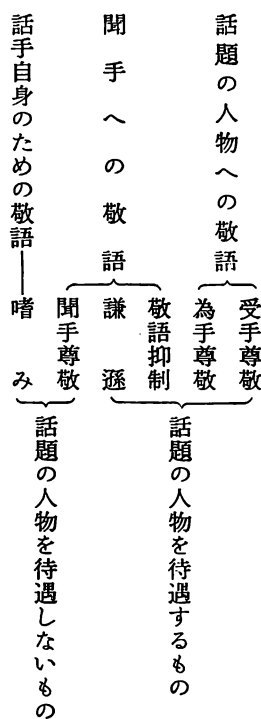
素材敬語・対者敬語の別は時枝説に従ったもの、絶対・関係の別は山田説を採ったものと述べている。松下にも所有尊称の虚的用法としての美称があったが、これは名詞の範囲に限られるようで、辻村の方が、その概念の内容は広い。その美称と「です」「ます」等の謹称とを切りはなしたのは、時枝の詞辞論に従った結果ではあるが、従来の一括丁寧語扱いに対して一進展を示したものである。また、辻村も石坂と同様、尊敬・謙譲の別を立てる立場である。

敬語と敬意表現との関係については、辻村も石坂と同様、時枝に対して批判的である。

敬語の敬意表現に関してさらに徹底した見解を示したのは渡辺実である。渡辺は次のように論じている。(17)

「御案内申し上げる」のような敬語は、「話手が話題の受手に対して抱く敬意を表わす敬語」である。時枝の「素材と素材との関係の規定」という理解は改められなければならない。また、時枝の「話手と素材との関係の規定」の敬語は、正しくは、「話手が話題の為手に対して抱く敬意を表わす敬語」である。

右の見方に基づいて、渡辺は次のような敬語分類を示す。

分類	種別	待遇
話題の人物への敬語	受手尊敬	話題の人物を待遇するもの
	為手尊敬	
聞手への敬語	敬語抑制	
	謙遜	
	聞手尊敬	話題の人物を待遇しないもの
話手自身のための敬語	嗜み	

謙称・謙譲と呼ばれてきたものを、受手尊敬と謙遜とに分けた。「御案内申し上げる」などが前者であり、「東京へ行って参りました」などが後者である。為手尊敬は敬称・尊敬に当たる。敬語抑制とは、話題の人物に対する敬語（受手尊敬・為手尊敬）は聞手に対して失礼にあたる場合にはさしひかえられる、という法則的事実。聞手尊敬は、対者敬語・謹称に当たる。嗜みは辻村の美化語にほぼ当たると思われるが、一方、「です」「ます」等も聞手尊敬だけでなく、嗜みの敬語としての用法もあるとしている。

さらに、敬語は右のように整理されるが、その根底を支えているのは話手の言葉の嗜みの意識だ、と述べている。この点は敬語の本質をさらに深く追究するためのいとぐちとなるところだと思われる。

次に、詞・辞を不連続とする時枝説に対し、敬語に関してもっとも強くこれを批判しているのが、宮地裕である。宮地は次のような敬語分類を示している。[18]

（一）尊敬語――話題のひとの行為・所有などについて、話手がそのひとへの配慮をあらわす敬語

（二）謙譲語――話題の下位者の上位者に対する行為の表現をとおして、話手がその上位者への配慮をあらわす敬語

（三）美化語――話題のものごとの表現をとおして、話手が自分のことばづかいの品位への配慮をあらわす敬語

（四）丁重語――話題のものごとの表現をとおして、話手が聞手への配慮をしめす敬語

（五）丁寧語――話手が、もっぱら聞手への配慮をしめす敬語

「小生」「拙宅」「いたし―」「まいり―」「申し―」などが丁重語に属し、「―です」「―でございます」「―ます」などが丁寧語に属する。

現代敬語は（一）から（五）へ、「詞的な敬語」から「辞的な敬語」へ、分断しにくい系列をなしているとともに、いずれにも、「話手の配慮」をみとめる点で、完全な「詞の敬語」をみとめがたい、という考え方の上に、右の分類は設

けられている。また、「敬語はもともと、詞辞の結合形態」として論じられるべきものだという、本質にかかわる見解を示している。

以上のほか、敬語分類については、従来の諸説をふまえた上でそれぞれ特色を示しているものが少なくない。とくに、森野宗明が美化語を狭義敬語からはずすべきだと論じている点は、[19]注目されるし、また、理のあるところと思われる。

三尾砂（いさご）・三宅武郎が、「ます」「です」「ございます」を文体形成の成分と見ている点も、[20]注目をひく。

さらに、この間にあって、異色を放っているのは、水谷静夫の『待遇表現の基礎』[21]である。従来の諸説が主として帰納的方法によって敬語体系を立てようとしているのに対し、数学的方法を用いて公理を立て、それに基づいてありうる待遇関係を想定し、待遇表現の型・形式を設定したものである。

また、北原保雄の構文論的立場からの発言[22]も見逃せない。動詞敬語の相互承接についての従来の論（松下説・時枝説等）が定説たりえていないのは、その敬語分類に欠陥があるからだとし、敬語分類の基準にアスペクト（態）を導入して、動詞敬語の相互承接に一定の順序があることを確認し、それが構文上の法則によっているものであることを論証しようとしたものである。動詞敬語を、

1　本動詞　　2　助動詞　　3　態不変補助動詞　　4　態変化補助動詞

と、アスペクトの面から四分して、これを敬語分類に組み入れ、具体的論証の上に、動詞敬語の相互承接を整理した。松下や時枝がかつて述べたところを修正している点がある。

なお、近年、南不二男が斬新な敬語論を打ち出している。[23]特徴の一点は、敬語の範囲を非言語的表現にまで広げようとする点である（二四一頁参照）。もう一点は、敬語の意味は、言語主体の対象についての配慮と、それに基づく対象についての表現上の扱い方を要素として構成されるとして、その配慮・扱い方を分類し、その組合せによって個々の

敬語形式の意味を確かめている点である。対象についての配慮は、

言語主体と関係者との関係についての配慮　相手と関係者との関係についての配慮　言語主体自身についての配慮　ことがら的内容についての配慮　状況についての配慮

に分類される。扱いは、対象として、ことがら的内容と表現的内容とが考えられ、扱い方の特徴は、

上げ／下げ／中立　強／弱／中立　近づき／はなれ／中立　あらたまり／くだけ／中立　負わせ／負い／中立　美／醜／中立　おそれ／あなどり／中立　ためらい／すぐ／中立

と分類される。たとえば、「イラッシャル」「ナサル」などは、上げ・はなれ・あらたまり・美・すぐ、の特徴をもつものとされる。

敬語研究法の新しい提唱で、これによれば、従来の観点からするほぼ平面的な分類は、すべて否定されることになろう。この方面の展開は、今後のことに属する。

以上を通観すると、次のような大観図が得られよう。明治期に敬語の体系的研究が芽生え、大正末期から昭和初期にかけて山田・松下らによって精細な敬語論が樹立された。昭和戦前期に、時枝によって独得の言語理論に基づいて革新的な敬語論が打ち出された。その後多くの研究者によって、あるいは山田の敬語論の修正発展がなされ、また、時枝説が批判されつつ消化吸収されて、敬語理論はいっそう精細周到なものになってきた。しかも現在、人によってさまざま説を異にするところがあり、課題を将来に残している。ことにそうした中で、最近、南の説のような斬新な見方の提示があり、その発展が今後の敬語研究の展開を動かすところがあるだろうと予想されるのである。

三　敬語の歴史的研究

厳密な意味で「敬語史」とよぶことのできる通時的研究は、限られた事象、限られた時間範囲については、ないことはない。しかし、統一的な全体的敬語史の記述は、まだない。敬語史あるいは敬語の歴史的研究とふつうよばれているものは、大方、過去のある時代の敬語の研究あるいは各時代の研究の集積である。ここでわれわれが追跡できるものも、おのずから、大部分そうした業績にほかならない。そこで、まず各時代の敬語の研究のあとをながめることから始め、ついで、通時的考察を志した研究を取りあげてみることにする。とはいえ、両者をきびしく分けて扱うことは技術的に難しいので、これは大まかな区別とするにすぎない。

なお、紙幅の制限もあるので、単行本関係を主として見てゆき、関係する個別の論文発表にある程度触れることにする。

1　各時代敬語の研究

(1)　奈良時代以前の敬語の研究

敬語の起源について論じているのは、金田一京助である。その著『国語研究』[24]および『日本の敬語』[25]で、イェスペルセン O. Jespersen の説により、また、ラムステッド G. J. Ramstedt の原日本語と原アルタイ語との関係の説により、また、アイヌ語の敬語のあり方にも照らして、敬語は女性の性のタブーに発源したもの、一方また、神をたたえるほめことばが敬語の基となったものと、論じている。

これに先立って穂積重遠の『諱に関する疑』[26]は、古来、神や天皇のような尊貴者の実名を敬避して諱を用いる習俗のあったことを論じたものだが、敬称の接尾語や代名詞がタブーに基づく避称から発していることなども論じ、金田一の敬語起源説と相通ずるものがある。

さらに金田一は、『日本の敬語』の中で、上代敬語動詞は「座す」「給ふ」「申す」の三語が代表であるとして、それぞれの語源・用法・関連語等について述べている。

石坂の『敬語史論考』では、『古事記』『日本書紀』『万葉集』の敬語を論じ、『万葉集』については、とくに敬語接頭辞「ミ」について考察し、関連して「ミヤ」「ミカド」「ミコ」「ミコト」等について論じている。『日本書紀』については、その古訓「ハヘリ」「ハムヘリ」が被支配関係の待遇的意味をもつと論じ、これは後に、阪倉篤義の「『侍り』の性格」[27]という論文や、辻村敏樹の『敬語の史的研究』[28]は、上代から現代にいたるまでの敬語の諸問題の研究を収めているが、まず上代敬語を概観した「上代敬語の特質」がある。すなわち、上代敬語にはまだ対者敬語や美化語がないこと、基本的な語がごく少なく、それのわずかな語形変化によって色々な形を派生していること、神や天皇に関する用法がきわめて多く、ことに絶対敬語としての自尊敬語(自敬表現)のあること等を、指摘している。

絶対敬語は金田一の命名で、タブー敬語の時代に続くものを絶対敬語の時代とする。そこでの典型的な現象が自敬表現で、『古事記』『日本書紀』『万葉集』等にしきりに出てくるが、後の『平家物語』などにも見いだされる。これについては早く湯沢幸吉郎が、所伝の誤り、作者の立場での言いかえの例もあろうが、事実自己尊敬の表現があったと考え[29]、松尾の『国語法論攷』でも、これに賛成している。少なくも『古事記』『日本書紀』『万葉集』等の時代には絶対敬語に属する自敬表現が存在したというのが、一般の見方になっている。

(2) 平安時代、院政・鎌倉時代、室町時代の敬語の研究

この期の主として敬語動詞の研究をまとめたものに、最近刊行された龜田定樹『中古中世の敬語の研究』[30]がある。「申す」「聞ゆ」「宣はす」「仰せらる」「まゐる」「まゐらす」「致す」等を中心に、その周辺を論ずるところが中心である。『源氏物語』からはじめて、『今昔物語集』『平家物語』『太平記』、能狂言、その他古文書・古記録等の敬語を調べている。とくにこの期の特徴とすべき被支配待遇の表現を詳しく論じている。

奈良時代の絶対敬語に対し、平安時代に相対敬語の性格が見られることを、石坂は指摘した。[31]他面、同時代に帝・后・東宮・院に関し、絶対敬語の存する事実を、玉上琢弥が明らかにしており、[32]この時代は過渡期の入口であることが考えられる。

平安時代はとくに尊敬表現の発達が著しく、語形式が豊富になるとともに等級段階の差がはっきりしてきたが、それらの状況は、前記龜田の著のほか、桜井光昭『今昔物語集の語法の研究』[33]などが明らかにしている。また、謙譲語については、和田利政・伊藤和子らの研究[34]も注目される。

平安時代の「侍り」は被支配待遇だと、阪倉は論じたが、とにかく奈良時代になかった対者敬語の発生がここに見られることになる。「侍り」がやがて「候ふ」と交替することになるが、その辺の状況(『今昔物語集』から「候ふ」が「侍り」にかわって優勢になる)を桜井の『今昔物語集の語法の研究』が明らかにしている。

また、山田孝雄は『平家物語の語法』[35]において、延慶本『平家物語』についてその敬語を詳述しているが、宮坂和江は流布本によって、鎌倉時代における武家社会における階級に応ずる敬語の使い分けを解明した。[36]

室町時代後期に「まらする」「ござる」「おりゃる」「おぢゃる」などが現れるが、これらについては、早く湯沢幸吉郎・土井忠生が、また、その後、山崎久之が解説している。[37]

平安時代以前から室町時代にいたる敬語接頭辞については、辻村が「敬語接頭辞「お」について」「吉利支丹関係資料に見える敬語接頭辞について」(ともに『敬語の史的研究』所収)で論じている。前者は平安時代以前の「お」と鎌倉・室町時代以後の「お」とは起源を異にするものという論証である。後者は、主として「御」に当たる敬語接頭辞の各種の用例・用法の考察である。

(3)　江戸時代・現代の敬語の研究

江戸時代については、湯沢が『徳川時代言語の研究[38]』の中で前期上方口語の敬語を、『江戸言葉の研究[39]』の中で後期江戸口語の中の敬語を、いずれも使用事実を明らかにするという態度で、分類・排列している。

その後、江戸時代の敬語については、山崎・辻村、さらに小島俊夫の研究が目立っている。

山崎は『国語待遇表現体系の研究[40]』で、前期上方を中心として、降って後期上方、のぼって室町末期に及んで、それぞれの待遇表現の体系を共時的に明らかにし、その上で上方敬語の変遷をとらえようとした。待遇表現の内容は、敬語・平常語・卑罵語を含むが、同一待遇意識に支えられている語群を整理すると、「大敬語」から「ののしりことば」にいたる六段階に分けられるとする。男性語と女性語、武士ことば、遊里ことば等、位相語の待遇表現が記述されているのは、この時代の特徴によるものである。前期上方にとくに詳しく、それに対し、後期上方については簡単でつけたりの観があるのは、根本的に、資料の豊かさ・乏しさのちがいによるものでやむをえないところと察せられる。ともあれ、比較的研究の少ない江戸時代の敬語の領域に精査を加えた業績である。

山崎はその後も当時代の敬語の研究を進め、ひき続き多くの報告を出している。

小島は『後期江戸ことばの敬語体系[41]』で、化政期以後の江戸語の敬語について記述している。自称・対称の代名詞を「最上級の敬意」のことばから「ののしりことば」にいたる六段階に分け、それらを主語とするばあいのそれぞれ

に対応する述語の段階づけを行った。これによって、「あなた」「お前さん」「お前」「手前」「うぬ」、「わたくし」「わたし」「おれ」「おいら」その他の代名詞の体系が明らかにされた。また、「さっし」「っし」「ス」「です」「でありまス」等の助詞・助動詞・補助動詞の用法、待遇的価値、位相との関係を考えなどしている。なお、後期江戸語につながる明治東京語に言及しているところが、随所にある。

辻村の『敬語の史的研究』には、「『貴様』の変遷」「近世後期の待遇表現」「『浮世風呂』・『浮世床』の敬語」「『お……になる』考」「『です』の用法」など、江戸時代の、あるいは江戸時代から現代へかけての敬語の論がとくに多く収められている。これらの辻村の研究はおおむね変遷をたどるという立場によることを特色とする。「貴様」「お……になる」「です」については、いずれも江戸時代(前期あるいは末期)から現代へかけての変遷を調べたもの。『浮世風呂』『浮世床』の敬語も、現代東京語の敬語との関連を明らかにするという立場でさぐられ、結局この化政期の庶民階級の敬語が今日の敬語と全般的には非常に近いものであることを明らかにした。また、「近世後期の待遇表現」も、今日の敬語の代表的なものが、近世末期にすでに形を整えていることを明らかにした。

なお、「です」については、中村通夫が、江戸末期から現代東京語へかけての「です」について詳しく追究している[42]が、辻村の論は、さらにこれを補説したものである。

「お……になる」については、原口裕が、その後、幕末の下級武士日記・女房日記、明治前期の小説・戯作等の資料によって、補説をしている。[43]

江戸時代の敬語については、資料の乏しいところから、とくに前期江戸語・後期上方語の研究が十分に展開されていない。そうした中で、岸田浩子「近世後期上方語の待遇表現――命令表現を中心に――」[44]は、江戸語との対比によって上方語の待遇表現の性格を明らかにしようとしたもので、注目される発表だった。

なお、岸田武夫が江戸時代の敬語の動詞・助動詞を取り上げ、音韻変化によって多様な派生形を生じるその変化の

過程を明らかにしたのは、異色の研究として注目された。[45]

現代敬語に関しては、社会関係のあり方の変化の著しいのに伴って、一般人の敬語使用法のまどいが増幅してきたため、それに応ずる規範論や実用的解説の著述の多いのを一つの特色とする。一九五二年の国語審議会の建議『これからの敬語』は、戦後の新しい社会における敬語の基本的精神と具体的用法の基準とを示したもので、そういうものの要求される時代となったのだった。

辻村敏樹の『現代の敬語』[46]は、「実践編」と「理論編」の二部立てで、「実践編」は現代の敬語における問題的な使い方への注目・批判・指示を主題としている。「理論編」は、先に紹介した分類説をはじめとして、調査や分析的考察の論文数編を収め、今後のより精細な現代敬語研究への導きの役割をつとめている。

なお、国立国語研究所の報告『敬語と敬語意識』があるが、これは社会言語学的研究に属するものと見て、後章にゆずる。

以上のところでは、方言に関する面を外してきたが、ここで、現代敬語の研究の一領域として、とくに方言の敬語の研究の状況をまとめてながめてみよう。これまで扱ってきた上方敬語、江戸―東京敬語も方言の敬語だといえばそれに相違ないが、近代以前についての研究および東京語についての研究は、便宜上、扱いを別にすることにする。

早く一九〇六年に、国語調査委員会の『口語法調査報告書』および付録の『口語法分布図』が、敬語に関する事項をも含んで、方言の敬語の一部を全国的に明らかにするところがあった。これは昭和戦後の国立国語研究所の『日本言語地図』をはじめとする言語地理学研究の先駆をなすものといえるが、方法が完全なものでなかったため、結果もいささか信頼性に欠けるところがあった。その後、大正から昭和初期にかけての方言収集ブームの時期に、各地で大小精粗の方言集が活字化され、中に敬語関係の含まれているものも少なくなかったが、本格的な方言の敬語研究とよ

べるようなものが現れたのは、ずっとおくれた。

一九三一年から一九三八年にかけて刊行された雑誌『方言』に、一、二敬語関係の論文が見られるが、これらは、方言敬語研究のはしりに属するものと言えよう。その後ぼつぼつこの種の論文が出たが、大体一九六〇年前後から、各地域の敬語に関する論文が多数現れだし、今日までに相当数を数えるようになった。しかし、それらのほとんどが限られた地域に関するものであるから、方言の敬語の研究は、まだいかほども進められていないと言わなければならない。そうした中で、『敬語講座』(47)の6『現代の敬語』の中の加藤正信「全国方言の敬語概説」は、これまでの主な研究発表物と自身の調査とを使って、敬語表現形式の全国的な分布を通観したものである。しかし、細かい点に関しては、将来補足されるべき状態にある。精密な完全に近いものができあがるまでには、まだまだ個々の地域的研究が不足している。

広戸惇『中国地方五県言語地図』(48)、藤原与一・広島方言研究所『瀬戸内海言語図巻 上巻』(49)、大橋勝男『関東地方域方言事象分布地図 第二巻 表現法篇』(50)には、それぞれ敬語関係が含まれていて、方言敬語の分布の明らかにされているところがある。

なお、方言敬語の研究も、社会言語学的立場によるものは、次章にゆずる。

各時代の敬語の研究のあとを時代順に見てきたが、なお、『敬語講座』の2『上代・中古の敬語』・3『中世の敬語』・4『近世の敬語』・5『明治大正の敬語』の各巻にも注目すべきものがある。各巻主としてその時代のおもな文学作品(あるいは作家・ジャンル)の敬語について、個別の担当者が叙述しているものだが、従来あまり敬語面に詳しい目の届いていなかった領域を開拓しているところもある。従来の敬語研究とは切り込み方の角度を変えて、新しい研究面を開こうとしているものもある。各編さまざまだが、全体として、各時代の敬語の研究を進展させているところ

ろが認められる。なお、各巻に置かれているその時代の「風俗と敬語生活」の論は、この講座の、行動・生活としての敬語をとらえようというねらいにつながるもので、概して興味深い。これは性質上、後章の社会言語学的研究に属するものともいえよう。

2　敬語の通時的研究

以上各時代の敬語の研究としてあげたものの中にも、通時的観点をもつものがあった。しかし、それらは時間的に限られた範囲に関するものだった。これに対し、いわば日本敬語史とも称すべきものは、現在までのところ現れていない。たとえば今泉忠義の『国語発達史大要』[51]には、各時代ごとに敬語の項が設けられているが、これを本格的な通時的研究とよぶことは困難である。そうした中で注目されるものに、『講座国語史　5 敬語史』[52]がある。

この書の内容は、辻村敏樹「敬語史の方法と問題」、春日和男「古代の敬語 I」(奈良時代まで)、森野宗明「古代の敬語 II」(平安時代)、桜井光昭「近代の敬語 I」(院政・鎌倉時代、室町時代)、小松寿雄「近代の敬語 II」(江戸時代)、宮地裕「現代の敬語」から成る。これまた、時代別に分担した各人が該時代の敬語についてそれぞれのやり方で述べているものだから、古代から現代までの厳密な意味での敬語通史になっているとはいえない。しかし、第一章の辻村は、概説的ながら、敬語の起源と上代敬語、絶対敬語から相対敬語へ、対話敬語の発生と発達、敬語の性格の変質、敬語使用の特殊相、敬語表現法の推移、といった敬語史上の問題点を、通時的観点から述べている。そして、以下の各時代の記述を通して、それらの問題点が具体的にされているところがある。すなわち、絶対敬語的性格は室町時代まで残っているところはあるが、平安時代にすでに相対敬語的性格が発生し、鎌倉・室町・江戸においてしだいにそれが発達し、現代は相対敬語の時代になっているという推移が明らかにされている。対者敬語については、奈良時代にその萌芽が見られ、平安時代に被支配待遇の「侍り」が盛行し、鎌倉時代にそれが「候ふ」に移行し、室町時

代には「おりゃる」「おぢゃる」「ござる」等が発生し、江戸時代には「です」「ます」等が現れる、といったぐあいである。そのほか、他時代との比較において各時代の敬語の特異性の浮かびあがっているところが多い。たとえば、古代敬語における自敬表現、平安時代における尊敬表現の等級段階的分化発達、近代敬語における男女語の差、武士言葉と町人言葉の差、江戸の都市生活の中での近代敬語的性格の形成、現代敬語の相対敬語・社交敬語・受恵敬語的性格等々。なお、ほぼ各時代とも、従来の諸説の整理の上に創見を加え、かつ通時的観点をもって叙述されている。

ところで、本書のうち、人物呼称を受ける格助詞「の」と「が」の待遇価値の問題が、「古代Ｉ」「古代Ⅱ」「近代Ｉ」でそれぞれ取り上げられているが、それらによって必ずしも通時的把握が明確に求められない。「の」「が」の待遇価値については早くから論があり、室町時代以前に関しては、小林好日・青木伶子・寿岳章子らの説[53]が見られ、また、待遇価値説に批判的な山崎久之の説[54]もあった。江戸時代に関しては、此島正年は『国語助詞の研究』[55]で、「の」「が」の尊卑が、主格では江戸前期にほぼなくなり、連体格では、中期までは明らかにあったが後期には消滅したとしているが、山崎はやはりこれと説を異にする。以上によっても、「の」「が」の待遇価値はまだ十分に総合的な解明を得ていない一課題であることが察せられる。問題の一例として取り上げてみたものである。

辻村『敬語の史的研究』の巻末の「敬語変遷一覧表」は、敬語の語形式およびその用法・性格の変遷を示したもので、敬語通史の一資料である。動作・状態を表す敬語、事物を表す敬語、人を表す言い方の三類に属する語の生滅・変化を、上代・上世(平安)・中世前期(鎌倉)・中世後期(室町)・近世・現代の時代別により、表化したものである。

次に、敬語の変化の法則に関する考究を一、二取り上げることができる。

佐久間鼎は「言語における水準転移[56]」などで、人代名詞の変遷に関する原理を述べている。

辻村の「敬語の成立と転移の原則」(『敬語の史的研究』所収)は、敬語の種類間の転移の原則を述べて、

○敬称・謙称は非待遇語から転成する。

○敬称・謙称が美称ないし対者敬語に転移する。
○関係敬称と関係謙称が相互に転移する。
○関係敬称が絶対敬称に変わり、関係謙称が絶対謙称に変わる。
○美称と対者敬語は敬称・謙称からの転移によってのみ成り立つ。
等を明らかにしている。

四　敬語の社会言語学的研究

日本で、言語生活の研究は大体一九五〇年ごろから起こっている。これは、それに数年おくれてアメリカを中心にして起こった社会言語学 sociolinguistics とほぼ同じ性格のものと見ることができよう。その領域・方法等はまだ確立されていないと言わなければならないように思うが、大まかに考えて、社会生活の上の言語行動の問題の研究、あるいは社会的機能の面からする言語の研究、あるいは、言語使用と社会構造との関係の研究などが、そのかかわるところとでも言ってよかろうか。敬語はそれ自体、とりわけ社会的関係に密着して働く言語要素だから、敬語の社会言語学的研究は、当然起こるべきものであり、また、そういう視点からの研究がなければ、結局敬語のことは明らかにならないともいえよう。そういう意味では、ここ二〇年あまり前から開かれてきている敬語の社会言語学的研究が、敬語の解明のために働いてきているといえよう。

もっとも、絶対敬語から相対敬語への推移とか、対者敬語の発生・発達とか、男女語の別とか、あるいは、敬語の階級段階、階級に応ずる敬語の使い分けとか、歴史的研究の中で扱われたことどもも、実はそういう性質の研究に属するもの、ないしつながるものとも見られるものだが、ここでは、現代敬語に関して、言語生活研究としての計画・

方法によったものに限って見ることにする。

では、そういう類の研究がどのように行われてきたか。

まず国立国語研究所の作業がいくつかひろわれる。『敬語と敬語意識』[57]『待遇表現の実態――松江24時間調査資料から――』[58]のような報告書があり、報告書とはならなかったが、『現代の敬語意識に関するアンケート調査』(一九六五年)がまとめられ、その一部を報告した田中章夫の「敬語論議はなぜ起こる」[59]がある。

『敬語と敬語意識』は、一九五二・五三年の両年度に三重県上野市・愛知県岡崎市で行った、敬語行動・敬語意識の実態についての社会的調査を中心に、全国各地で行った調査を加えて、結果を報告したものである。調査の規模・ねらい・方法等、従来に見られない画期的なものだった。まず基礎調査として、被調査者の社会的条件・心理的条件を調べ、次に、敬語行動・敬語意識の実態を調べ、その上で、場面・相手・心理的要因・社会的要因と敬語行動との関係、敬語形式・場面・社会的要因・話線等と敬語意識との関係、また、敬語についての知識・意見・内省等を調査した。客観的結果を得るための方法が種々工夫され、多量の資料の処理は統計的方法によった。結果としては、

○長い発話ほど丁寧な敬語行動と意識されている。

○方言を含む発話は、それを含まない発話より乱暴と意識されている。

○相手による敬語の使い分けは、東より西へ移るほど細かくなる。

○女はいつも丁寧な敬語を使い、男の方が場面による使い分けをよくする。

○親族について言うとき、かなり丁寧な敬語を使うにもかかわらず、丁寧な敬語を使うべきでないという意識は強い。

等々の、敬語意識や敬語行動に関する実態が、もろもろとらえられた。

『待遇表現の実態』は、島根県松江市の一市民の家庭において、一九六三年秋のある一日、午前六時から午後一〇

時までに行われた家族および来訪者の全発話について、待遇表現がどのように行われたかを調べたものである。待遇表現に関係する言語要素として、丁寧表現・尊敬表現・要求表現・呼び名に属するもの、の四種を取り上げ、それにどのようなものがあるか(方言形的のもの、標準語形的のものを合わせて)、それらが各種の条件のもとでどのように選択されているかの実態を調べたものである。ことばを「談話」という単位に分け、それに、コミュニケーション上の機能(あいさつ・用談・おしゃべり等)、ことばの調子(ふつう・あらたまり・くだけ等)、話題(事務用件・時事・うわさ等)の三重の分類を施して扱うという、特殊の方法を取った。その談話の各分類ごとに、前記四種に属する待遇表現の現れ方を見たものである。方法の斬新さと、話し言葉資料をはじめてコンピューターによって処理したこととが、研究史的に注目される。

『現代の敬語意識に関するアンケート調査』は、一九六四年に、東京・栃木県大田原市・奈良市・高松市の四地点で行われたものである。年齢・職業・性・学歴・地域の別における敬語意識のあり方を、成年男女約七〇〇名について行った。アンケートの問題は、(a)敬語についての一般的意見、(b)ある条件での敬語についての意見、(c)敬語表現についての意見、(d)ある場面での敬語表現の選択意識、の四類に属するものだったが、田中によるその結果の一部の報告を見ても、現代人の間に、かなり著しい敬語に関する意見・意識の差異のあることがとらえられた。

『敬語講座』の6『現代の敬語』に、柴田武「地域社会と敬語」、江川清「階層と敬語」、林巨樹「家庭と敬語」、吉沢典男「職場の敬語」が含まれている。

「地域社会と敬語」は、石川県の上時国(かみときくに)という地域社会における呼称・自称の使い分け・使い分けられを調べ、それによって、この地域社会内の成員間の社会関係をとらえることを試みたものである。この種の調査の一典型といえよう。

「職場の敬語」は、東京都内の一流企業六社の社員約二五〇名に対して行ったアンケート調査の報告である。敬語

に関する意識と具体的用法とをたずねて、職場内部の敬語についての実態をとらえている。

そのほか、国立国語研究所は一九七五年度から、「敬語の社会的研究」を始めている。

言語生活研究の立場からする方言の敬語研究の代表的なものの一つとして、真田信治の「越中五ケ山郷における待遇表現の実態」(60)をあげることができる。山村の一集落の中で、一つの動作を表す待遇差をもついくつかの語形式が、どのような社会的関係に規定されて、どのように使い分けられているか、また、老若間にどんな変化が見られるかを、精密に調べあげたものである。とくに、高年層の間に絶対敬語的色彩が相当色濃く残っているのが見られたが、若年層にはかなり違った様子が見られ、また、他地域からの影響も見られた。こうした調査結果から、この地域の敬語の将来がある程度予測されるのだが、おそらく似たような状況をもつ地域は少なくなく、これは一つのモデルケースとなるものだろう。

五　敬語研究の今後

辻村敏樹は一九六一年に「敬語研究の歴史」(61)の中で、敬語の研究が「まだこれからといった段階にある」「それは他の部門に比して敬語関係の著作がはなはだ少ないことをもってしてもうかがいえよう。」と述べている。しかし、以後十数年を経て、大局的には辻村と同じことを言わなければならないが、状況は今ある程度変化したとも言える。その後、世に出た、注目に値する敬語研究の著作が数種あり、斬新な内容をもつ専門の講座も出た。年々活字化される敬語研究の論文の数は決して少なくなく、質的にも見るべき進歩がある。戦後刊行された十指に余る国語関係の講座類は、ほとんどすべて敬語の論文を収め、雑誌類の敬語特集号も十数点に及ぶ。

とはいえ、すでに述べたように、まだ歴史的方面で十分にくわの入れられていないところは多く、したがって、ま

だ完全な通史も成りたちがたい。

方言の敬語にいたっては、体系なり用法なり分布なりが、精細に解明されている地域は少ないと言えよう。国語研究のうち、方言研究は近年とくに盛んな分野の一つだが、まだ残されているところは大きい。

共通語の敬語も、実際的問題として今日論議の対象になるところがすこぶる多いが、今日共通語の敬語が現実にどういう構造をもっているかは、実はきわめてあいまいだと言わなければならない。今日の共通語の敬語といっても、年齢・階層等によって、意識も用法も差異が大きい。これは、言語の他の要素と大きく相違するところと思われるが、要するに、敬語が社会意識と密着しているもので、社会意識がとくに激しく変動している今日において、それは当然のことと言えよう。そこで、年齢・階層等の間に差異・ずれがあるならあるなりに、それらを包んで、今日の共通語の敬語の全体構造がどんなものであるか、その実態を調査解明することは、重要な仕事だろう。一口に混乱と言われているものの実情の解明である。これは今後本格的に着手されるべき課題である。社会言語学的切り込みの期待されるところでもある。

歴史的研究、過去の時代の敬語研究に関してはおのずから制約があるが、こういう方向の研究の手の届く面も、ないわけではない。敬語はつねに社会的関係のあり方に基づいて成り立つ待遇表現行動であるという本質観に立って、社会構造の観察と合わせて、その具体的ありようを究明することが必要である。

実態調査を軸にした研究が綿密に進められたばあい、敬語用法の具体的現実がとらえられて、そこから、敬語の体系に関する従来の諸説が見直されることもあるだろう。従来ほとんど観念的立場でとらえられてきた敬語の体系が、実ははるかに複雑な立体的構造のものであることが、実態把握に基づいて明らかになり、その分類も根本的な組み替えを要求されるようになることも、あるかもしれない。なおその際、敬語の属性と働き、あえて言うならばラング面とパロール面は、これを切り離さず、その関連するところをとらえようとするのが、敬語研究の態度でなければなら

ないとも言えよう。敬語は、究極のところ、社会的事実・表現的事実・心理的事実としてとらえられるべき対象だと思われるからである。

また、敬語の体系は古代から現代にいたるまで共通するという巨視的見方も成り立ち、時代によって分類組織上の部分的加除や多少の変容を認めればそれで通用すると見ることもできようが、時代によって敬語の体系に相違があり、分類も異にされるべきだという見方があっても、当然よかろう。そういう立場に立っての考究も、今後の課題である。その両面からのとらえ方が必要だというのが、ほんとうだろう。

敬語を上向待遇だけのものとしてとらえず、下向待遇をも含めて、いわゆる待遇表現全体を対象とする態度は、早くからあったが、どういう範囲を待遇表現の要素として扱うかという問いかけが、比較的新しく発生している。小松寿雄は、命令形ないし命令表現、感動詞「おい・こら」「うん・ああ」など、また、感動助詞の類も待遇表現に入る、という見方を示している。[62] 宮地裕は、受身・使役の表現、「テヤル・テモラウ」などの表現(早く松下大三郎が利益態としてこの類を取り上げていたことは前述のとおり)、応答表現、命令表現が敬語にかかわる、と言っている。[63] いずれも、従来一般の敬語(待遇表現の形式として扱われていたもの)に比べて、幅を広く見ている。

『敬語講座』では、さらに敬語の幅を広く考えている。編者林四郎・南不二男連名の刊行の言葉の中に、次のように言っている。

一、敬語は、どう言ったり書いたりするかということばだけの問題ではなく、対人行動の全般に関する問題である。

一、敬語は、尊敬、謙譲、丁寧の三種に限らず、貸し方・借り方の関係、やりもらいの関係、厚遇・冷遇の関係、親疎の関係、敵身方の関係等、各種の人間関係から発する待遇の表現を広く含むものである。

具体的には、『敬語の体系』の1『敬語講座』の中の南その他による「現代敬語の体系」に、「敬語要素のいろいろ」として、言語的要素・随伴的要素・非言語的要素と分けて列挙してあるものを見ることができる。言語的要素の中には、たとえば、和語を使うか漢語を使うか外来語を使うか、文の長さ、文の成分の省略・非省略、方言音で話すか標準語音で話すか、声の高さ・大きさ、字体・書体など、さらには、話すか話さないか等々の選択がある。随伴的要素には、たとえば、話に伴う顔の表情やジェスチャー、聞手との間の空間的距離の取り方、直接の話か電話かなどの媒体、書写の手段(手書き・印刷など)・材料(用具)等々に関する選択がある。非言語的要素には、たとえば、服装、身だしなみ、態度・ものごし、客のもてなし方等々に関する選択がある。

そして、さらに南の真意は、『敬語講座』の10『敬語研究の方法』所収の「敬語研究の観点」の中の、次のような言葉に見られる。

言語的側面だけをとり出して考えようとすれば、どうしても抽象的な体系について考えるようになる。一方また、具体的な言語表現、言語行動を問題にしようとすれば、どうしても随伴的な行動、非言語的な行動との関係が問題になってくる。

……………………

言語的、非言語的両方のコミュニケーションを統一的に把握するような理論の中での敬語の位置づけを考えるべきだろう。

辻村もまた、この問題について、

確かに、敬語研究は言語の研究であり、その意味において言語内の研究が第一義的なものであるが、それを深化するためには言語外世界との関連は十分に考察されなければならないだろう。

と述べている。(64)

『敬語講座』ないし南の主張するような立場で敬語をとらえようとする発想は、敬語研究にとってはまさに革命的なものである。それをもし新しい敬語研究と名づけるとすれば、敬語研究の身がまえから方法——資料の採り方から分析法にいたるまで——は、従来と大きく変わり、結果の記述も、従来と様相の著しく変わったものになる可能性が想像される。

「敬語は確かに国語研究に於ける一つの迷路である。」(『国語学原論』)と、時枝も言っている。敬語の性格の複雑性を考えての言としてうなずける。大体、敬語は、待遇という人間関係・社会関係の表現にもっぱら働き、とりわけ行動面・生活面との直接的結びつきの強い要素なのだから、ラング面の抽象的体系についてだけ考える態度では、本物がつかめないだろう。そのためには、こうした広義の敬語研究へのアタックも、きわめて重要な意義をもつ今後の課題になるだろう。しかし、いうまでもないことながら、広義の敬語研究となれば、各種要素の扱いに、一段と手順の整理、つまり方法の秩序が大切になる。要素をどう類別して扱うか、さらに、それらをどう関連させて結果を求めるか。そういう点についての周到綿密な計画をもって進められるとき、新しい敬語研究が実りをあげるだろう。

『敬語研究の方法』の中の南「敬語研究の観点」、野元菊雄「敬語の研究——調査・分析の方法」、飯豊毅一「敬語研究の資料について」は、今後の敬語研究のために、いずれも有益な導きを含んでいる。

付　記

敬語研究の歴史を叙述した文献に、次のようなものがある。

江湖山恒明「総論」(『敬語法』三省堂、一九四三年)。
石坂正蔵「敬語研究の歴史」(『敬語史論考』大八洲出版、一九四四年)。
辻村敏樹「敬語研究の歴史」(『国語国文学研究史大成 15 国語学』三省堂、一九六一年)。
松原右樹「敬語法学説史」(『国語講座 二・三巻』白帝社、一九七〇年)。

本稿はとくに石坂・辻村の叙述に導かれたところが少なくない。

(1) 土井忠生訳註『ロドリゲス日本大文典』三省堂、一九五五年。

(2) 松下大三郎『日本俗語文典』誠之堂書店、一九〇一年。

(3) 吉岡郷甫『日本口語法』大日本図書、一九〇六年。

(4) 三矢重松『高等日本文法』明治書院、一九〇八年。増訂版、一九二六年。

(5) 三橋要也「邦文上の敬語」(『皇典講究所講演』七一・七二号、一八九二年)。

(6) 山田孝雄『日本文法講義』宝文館、一九二二年。

(7) 山田孝雄『日本口語法講義』宝文館、一九二二年。

(8) 山田孝雄『敬語法の研究』宝文館、一九二四年。訂正版、一九三一年。

(9) 松下大三郎「国語より観たる日本の国民性」(『国学院雑誌』二九巻五号、一九二三年)。

(10) 松下大三郎『標準日本文法』紀元社、一九二四年。

(11) 松下大三郎『改撰標準日本文法』紀元社、一九二八年。訂正版、一九三〇年。

(12) 松尾捨次郎『国語法論攷』文学社、一九三六年。

(13) 時枝誠記『国語学原論』岩波書店、一九四一年。

(14) 石坂正蔵『敬語史論考』大八洲出版、一九四四年。

(15) 石坂正蔵「敬語的人称の概念」(熊本大学『法文論叢』二、一九五一年)。

(16) 辻村敏樹「敬語の分類について」(『国文学言語と文芸』五巻二号、一九六三年)。

(17) 渡辺実「敬語体系」(『国語構文論』塙書房、一九七一年)。

(18) 宮地裕「現代敬語の一考察」(『国語学』七二集、一九六八年)。

(19) 森野宗明「敬語の分類」(『月刊文法』一巻二号、一九六八年)。

(20) 三尾砂『話言葉の文法』帝国教育会出版部、一九四二年。改訂版、法政大学出版局、一九五八年。三宅武郎『現代敬語法』日本語教育振興会、一九四四年。

(21) 水谷静夫『待遇表現の基礎』私家版、一九五五年。
(22) 北原保雄「敬語の構文論的考察」『佐伯梅友博士古稀記念国語学論集』表現社、一九六九年。
(23) 南不二男「敬語」(『現代日本語の構造』大修館書店、一九七四年)、「現代敬語の意味構造」(『国語学』九六集、一九七四年)等。
(24) 金田一京助『国語研究』八雲書林、一九四二年。
(25) 金田一京助『日本の敬語』角川書店、一九五九年。
(26) 穂積重遠『諱に関する疑』帝国学士院、一九一九年。のち改題『実名敬避俗の研究』刀江書院、一九二六年。
(27) 阪倉篤義「「侍り」の性格」(『国語国文』二一巻一〇号、一九五二年)。
(28) 辻村敏樹『敬語の史的研究』東京堂出版、一九六八年。
(29) 湯沢幸吉郎「自己に敬語を用ひた古代歌謡等について」(『国語と国文学』七巻五号、一九三〇年)。
(30) 穐田定樹『中古中世の敬語の研究』清文堂出版、一九七六年。
(31) 石坂正蔵「古典解釈と敬語法」(『講座解釈と文法 1』明治書院、一九六〇年)。
(32) 玉上琢弥「源氏物語の敬語法」(『講座解釈と文法 3』明治書院、一九五九年)。
(33) 桜井光昭『今昔物語集の語法の研究』明治書院、一九六六年。
(34) 和田利政「源氏物語の謙遜語——補助動詞「奉る」と「聞ゆ」について——」(『日本文学論究』一〇号、一九五二年)。伊藤和子「源氏物語にあらはれた「—奉る」と「—聞ゆ」」(『西京大学学術報告・人文』二号、一九五二年)。
(35) 山田孝雄『平家物語の語法』宝文館、一九一四年。
(36) 宮坂和江「平家物語の敬語法」(『講座解釈と文法 5』明治書院、一九五九年)。
(37) 湯沢幸吉郎『室町時代言語の研究』大岡山書店、一九二九年。土井忠生「近古の国語」(『国語科学講座 V』明治書院、一九三四年)。山崎久之『国語待遇表現体系の研究』武蔵野書院、一九六三年。
(38) 湯沢幸吉郎『徳川時代言語の研究』刀江書院、一九三六年。
(39) 湯沢幸吉郎『江戸言葉の研究』明治書院、一九五四年。
(40) 山崎久之『国語待遇表現体系の研究』武蔵野書院、一九六三年。

(41) 小島俊夫『後期江戸ことばの敬語体系』笠間書院、一九七四年。
(42) 中村通夫「「です」の語史について」(『国語と国文学』一二巻三号、一九三五年)。
(43) 原口裕「「『お――になる』考」続貂」(『国語学』九六集、一九七四年)。
(44) 岸田浩子「近世後期上方語の待遇表現――命令表現を中心に――」(『国語国文』四三巻三号、一九七四年)。
(45) 岸田武夫「近世語の系譜 (一)――ナサル・ナサレマス・ナサレャスの系譜――」(『京都学芸大学報』A一五号、一九五九年)。「近世語の系譜 (二)――ゴザリマス・ゴザリャスの系譜――」(『京都学芸大学報』A一六号、一九六〇年)。「近世語シャル・サシャルの系譜 (一)(二)」(『国文学言語と文芸』四巻二・六号、一九六二年)。
(46) 辻村敏樹『現代の敬語』共文社、一九六七年。
(47) 林四郎・南不二男編『敬語講座 1―10』明治書院、一九七三―七四年。
(48) 広戸惇『中国地方五県言語地図』風間書房、一九六五年。
(49) 藤原与一・広島方言研究所『瀬戸内海言語図巻 上巻』東大出版会、一九七四年。
(50) 大橋勝男『関東地方域方言事象分布地図 第二巻 表現法篇』桜楓社、一九七六年。
(51) 今泉忠義『国語発達史大要』白帝社、一九三九年。
(52) 辻村敏樹編『講座国語史 5 敬語史』大修館書店、一九七一年。
(53) 小林好日「助詞「が」の表現的価値」(『国語と国文学』一五巻一〇号、一九三八年)。青木伶子「奈良時代に於ける連体助詞「が」「ノ」の差異について」(『国語と国文学』二九巻七号、一九五二年)。寿岳章子「室町時代の「の・が」――その感情価値表現を中心に――」(『国語国文』二七巻七号、一九五八年)。
(54) 山崎久之「助詞「の」「が」の表現的価値――尊卑説批判――」(『群馬大学紀要 人文科学編』二巻五号、一九五三年)。
(55) 此島正年『国語助詞の研究』桜楓社、一九六六年。
(56) 佐久間鼎「言語における水準転移」(『日本語の言語理論的研究』三省堂、一九四三年)。
(57) 国立国語研究所『敬語と敬語意識』秀英出版、一九五七年。
(58) 国立国語研究所『待遇表現の実態――松江24時間調査資料から――』秀英出版、一九七一年。
(59) 田中章夫「敬語論議はなぜ起こる」(『言語生活』二一三号、一九六九年)。

(60) 真田信治「越中五ケ山郷における待遇表現の実態」(『国語学』九三集、一九七三年)。
(61) 辻村敏樹「敬語研究の歴史」(『国語国文学研究史大成 15 国語学』三省堂、一九六一年)。
(62) 小松寿雄「待遇表現の分類」(『国文学言語と文芸』五巻二号、一九六三年)。
(63) 宮地裕「敬語の解釈」(国立国語研究所論集『ことばの研究 (二)』秀英出版、一九六五年)。
(64) 辻村敏樹「敬語と非敬語――敬語研究の問題点――」(『国語と国文学』五三巻一〇号、一九七六年)。

7　朝鮮語における敬語

梅田博之

はじめに

朝鮮語が、日本語とともに、「敬語がある」言語であることはよく知られている。この場合、「敬語がある」というのは、尊敬語・謙譲語・丁寧語などと呼ばれる、話者・対者(聞き手)・素材(話題の人物)の三者の関係によって決定される、敬意表現のための言語手段が存在するという意味であろう。もちろん、広い意味で敬語を論じる場合、このような規則的な敬意表現専用の言語手段以外の、さまざまな敬意表現にも注意しなければならないが、とにかく朝鮮語や日本語の敬語を特徴づけているのは、何と言っても、敬意表現専用の言語手段とその体系が存在することであろう。

さて、日本語では、敬語はふつう尊敬語・謙譲語・丁寧語・美化語などに区別される。尊敬語は話題の動作主体に対する直接の敬意表現、謙譲語は動作主体を低めることによる話題の動作客体に対する間接的な敬意表現という違いはあっても、いずれも文を構成する名詞節の核である名詞に該当する素材に対する、話者の敬意の有無によって、それと統合関係にある述語動詞その他が特定の形をとったりとらなかったりするという、いわば文の構造の内部に関わる文法的手続きである。一方、丁寧語は文全体の丁寧さのスタイルを特徴づける言語手段である点で、前二者とは異なっている。美化語は表現を上品・優雅にする効果を与えるもので、その使用が文全体の丁寧さのスタイルを特徴づけるという意味で丁寧語に属するものと考えられる。尊敬語・謙譲語を用いるか否かの選択には、話者と素材そしてある場合には対者が関与するのに対して、丁寧語の選択、つまり丁寧体を使うか、ぞんざい体を使うかという選択に関与するのは、話者と対者の二者のみである。美化語も対者に対するよそおいの一つであるから、原則的には話者と対者が関与すると言ってよいであろう。

ところで、今まで丁寧語ということばで呼んで来た、文のスタイルに関する敬語は、朝鮮語の場合、主として対者の身分によって使い方がきまるという特徴を持っており、話者が対者に対して言語上いかなる待遇をするかという、対者に対する待遇の表現に関する言語手段と考えられ、丁寧語と呼ぶには不適当であるので、今後これを待遇法と呼びかえることにしたい。そして、朝鮮語の敬語を、素材に対する敬語と待遇法の二つに大きく分けて、論ずることにする。なお、朝鮮語は、古代語および中世語にも敬語が存在するが、ここでは現代語(ソウル方言)[(1)]についてのみ扱う。

一　素材に対する敬語

素材に対する敬語のうち、尊敬語は専用の文法手段があり広範に用いられるが、謙譲語はそれを表わすいくつかの語彙があるほかは、他の文法手段を借りて臨時的に表わされるだけである。尊敬語も謙譲語も「用言」(動詞・形容詞・存在詞・指定詞)がその主要な表現手段であるが、「助詞」や「名詞」の中にも部分的に存在する。

1　用　言

用言はそのすべてに「普通形」と「尊敬語形」(以下、簡単に「敬語形」と言う)の対立があり、発話をする際には発話者はそのどちらを用いるかを必ず選択しなければならない。

(1)　文法的形態

用言の敬語形は語幹に敬語語幹形成接辞(以下、敬語接辞と言う)-(ɯ)si-を附けることによって作られる。たとえば、bad-(受ケトル)に対して badɯsi-(オ受ケトリニナル)、ga-(行ク)に対して gasi-(イラッシャル、なお母音で終る

語幹に附く時には接辞の頭母音は落ちる）というように。そして、これに時制を表わす接辞が接合し、さらに待遇法のスタイルを表わす終止形語尾が接尾して、述語の形が完結するという仕組みである。このような規則的な敬語形の作り方のほかに、タベル、ネムルに対する召シ上ガル、オヤスミニナルのような、語幹そのものが交替する例もいくつかあるが、その場合にも敬語形の指標である -si- は必ず附加される。たとえば、mɔg-（タベル）に対して jabsusi-（召シ上ガル）、ja-（ネムル）に対して jumusi-（オヤスミニナル）のように。不規則形が、このほか言ウ、死ヌ、居ルなど人間の基本的な動作を表わす動詞に多いのは日本語と同様である。用言の尊敬語の形式が、日本語ではオ——ニナル・ゴ——ニナル、レル・ラレル、オ——ダ・ゴ——ダなどいろいろあるのに対して、朝鮮語では -si- 一つだけである。敬語形は、そのまま、連体形語尾を伴って連体修飾節として、または引用動詞によって、別の文に埋め込むことができ、あるいは接続形語尾を伴って複文を作ることもできる。

助詞のうち主格助詞にのみ敬語形があり、主節に敬語形助詞を含む場合には述語は必ず敬語形をとる。しかし、述語が敬語形であるからと言って主格助詞が必ず敬語形になるとは限らない。主格助詞に敬語形を用いると敬意表現がさらに強められるが、普通形を用いても非文法的になる訳ではないのである。なお、主格助詞の敬語形は普通形 -i~-ga に対して -ggesɔ という形であるが、主節に提題や附加の助詞（ハ、モなど）が附いた場合普通形助詞は脱落するが敬語形助詞は脱落しないとか、敬語形助詞はふつう述語に動作を表わす用言が来る場合に使われるなど、普通形と敬語形では文法的機能が若干異なる。

上述の尊敬語に対して、謙譲語は、過去においてはそれを表わす文法手段が存在したが、現代語ではいくつかの用言において語彙的な対が存在するほかは、他の文法形式を借りて臨時的に表現するだけである。謙譲語形を持つ用言の例として、ju-（ヤル・アゲル）に対して durri-（サシ上ゲル）、manna-（会ウ）に対して bwew-（オ目ニカカル）などがある。なお、ある動作を行うという恩恵を与えることを意味する表現が朝鮮語にもあり、日本語と同じように、ヤルに

あたる動詞 ju- を補助動詞とする複合動詞(V-ɔ ju-)によって表わされるが、この複合動詞の謙譲語形(V-ɔ dɯri-)が、ある場合に恩恵的動作を表わす意味がうすれて、単なる謙譲の意味で用いられることがある。たとえば、

cɛgɯn jega bonɛdɯrijo.
本ハ　私ガ　オ送リ致シマス。

sɔnsɛŋnimggenɯn doŋsigiga arryɔ dɯryɔssɔjo.
先生ニハ　東植ガ　オ知ラセシマシタ。

助詞のうち与格助詞に謙譲語形が存在し(普通形 -hante に対して謙譲語形 -gge)、間接目的節に謙譲語形助詞を含む場合には述語の用言が謙譲語形を持っている限り謙譲語形を用いるのがふつうである。しかし、述語に謙譲語を用いている場合に与格助詞が必ず謙譲語形をとる必要はない。謙譲語形を用いればそれだけ敬意表現が強められるけれども。

以上の尊敬語・謙譲語の使用に際して、動作主・動作の受け手・話者の三者の間の上下関係(この規定については後に述べる)がどのように関与するかを整理して示すと次頁の別表のようになる。(2) すなわち、動作主が話者よりも上位であるならば尊敬語が使われる(1)、(2)。動作の受け手が話者および動作主より上位であるならば謙譲語が使われる(1)、(3)。なお、動作主と動作の受け手が共に話者より上位で、かつ動作主よりも動作の受け手の方が上位である場合(1)には、日本語では場面によって話者が動作主を尊重して尊敬語を使うか、動作の受け手を尊重して謙譲語を使うかのどちらかであって、尊敬語と謙譲語を同時に使うことができないが、朝鮮語では尊敬語と謙譲語を併用して(つまり謙譲語幹に敬語接辞を附けることによって)話者よりも共に上位者である動作主と動作の受け手の双方に対して敬意表現を行う点が注意をひく。なお、動作主と動作の受け手が共に話者よりも上位で、かつ動作主と動作の受け手が同等の場合には、ふつうは動作主に対する敬意表現だけを行う(つまり尊敬語だけを使う)が、動作の受け手に対する敬意を特に表現する必要のある場合には謙譲語も併用し得る。また、主格助詞の敬語形、与格助詞の謙譲語形は動詞のそれぞれに呼応して用いられるが、その呼応は義務的ではない。

	P-S	R-S	R-P	語形の選択	例
(1)	＋	＋	＋	謙－敬	yɔjjwɔbo-si-ɔssɯbnida 〈オ尋ネシマシタ，オ尋ネニナリマシタ〉
(2)	＋	±	－	普－敬	murɔbo-si-ɔssɯbnida 〈オ尋ネニ ナリ マシタ〉
(3)	－	＋	＋	謙－普	yɔjjwɔbo-assɯbnida 〈オ尋ネ シマシタ〉
(4)	－	－	±	普－普	murɔbo-assɯbnida 〈尋ネ マシタ〉

P: 動作主，R: 動作の受け手，S: 話者，＋: 左項が右項より上位，－: 左項が右項より上位でない，謙: 謙譲語形，敬: 敬語形，普: 普通形，yɔjjwɔbo-(オ尋ネスル，謙譲語形)，murɔbo-(尋ネル，普通形)，-si-(敬語接辞)，-ɔss-～-ass-(過去時制接辞)，-ɯbnida (上称・平叙形語尾)

(2) 用法

尊敬語の形式自体の意味はその用言の動作主に対する話者の敬意表現であり、謙譲語のそれは動作の受け手に対する話者の敬意表現であるが、敬意表現の対象となり得る素材の資格は、必ず大人であること、そして話者よりも上位者であるかあるいは未知または疎遠な間柄であることである。まず、朝鮮語ではいかなる場合でも子供に対して敬語を使うことはない。次に、上位者であることを決定する要因は年齢と社会的地位であり、この両者ともに、あるいはいずれか一方が上位である場合にはふつう敬語が使われる。しかし、基本的には年齢が地位に優先し、地位が上でも年下の者に対しては敬語の使用が軽微になりがちである。また、未知の人や疎遠な人には、年齢や地位の上下に関係なく、一定の距離をおくという意味で敬語が使用される。なお、一般に同性同士の場合よりも異性同士の間の方が敬語が多用される傾向があるが、これも一定の距離をおくということであろう。

ところで、素材が上述のような資格を持っていれば自動的に直ちに敬語が使われるかというとそうではない。敬語が使われるのは、その素材が何らかの意味で話者または対者と関係がある人物である場合に限られ、無関係の第三者について言及する場合にはその素材が上述の資格を持っ

ていても敬語を用いないのがふつうである。また、発話の場面がフォーマルでなくうちとけた雰囲気であって話者が対者に対して何ら言語的によそおう必要がない場合にも、上述の資格を持っている素材に言及する際に素材に対する敬語の使用を省略することがあり得る。ただし、女性は男性に比較して一般的に敬語の使用を保つ(省略しない)傾向がある。このように、発話する場面の状況によって敬語の使用が条件づけられているという点では、朝鮮語の敬語も絶対的ではない。ただし、自分の親に関して言及する場合は、いかなる状況でも、たとえば対者をまったく意識しない独り言の中でも、敬語が使われる。この点、朝鮮語には基本的な人倫関係としての親を表わす語には必ず敬語形を用いるという一種の呼応関係が成り立っているように思われる。

素材に対する敬意表現において、朝鮮語が日本語と非常に違う点がある。朝鮮語を母国語とする人々は、文法的な枠組が類似しているためか、日本語を比較的容易に習得するが、それでも彼らにとって間違いやすい誤りの一つが敬語の用法である。たとえば、彼らが日本語で身内の上位者のことを語る時に敬語形を用いるのをよく耳にする。これと対照的に、日本人で朝鮮語を話す人だったら、自分の父や母のことを語る時に何となくそぐわない思いに耐えながら敬語形を使った経験があるに違いない。日本語と朝鮮語とでは、素材に対する敬意表現において話者・対者・素材のかかわり方が違うのである。日本語では素材が対者または話者の身内か否かによって敬語の使い方が異なる。つまり、素材が話者または対者の身内であるとどちらかの立場に引き寄せられ、結局話者対対者の関係に還元されて話者と素材との上下関係などとは関係なく敬語の使い方がきまるという特徴がある。その結果、素材が話者よりも上位者であっても話者の側に属していれば敬語を使わず、素材が話者よりも下位者——たとえ子供であっても対者の側に属していれば敬語を使うという現象が生ずる。これに対して、朝鮮語では、素材に対して敬意表現を行うかどうかは話者と素材の関係だけできまり、対者との関係は介入しない。素材が話者よりも上位者であればたとえ身内であっても、身内でない対者に敬語形を使って言及するし、また素材が子供であればたとえ対者の身内であっても敬語形は使わな

い。もっとも、あまり親密でない間柄で素材が対者の成人した息子または娘である場合には話者よりも下位であるにもかかわらず敬語形を用いるが、これは疎遠な素材に対する敬意表現に準ずるものと考えられる。敬語の使用が、素材に対する話者または対者の関係によって条件づけられないという、朝鮮語の敬語のこの特徴は、絶対敬語的であると言えよう。

2　名　詞

まず、人に属するものごとに関する名詞に普通形と敬語形を区別するものがいくつかあるが、数が極めて限られており、かつその区別を有するか否かに関する規則性も、敬語形を作る際の規則性もない。たとえば、bab(飯)に対して jinji(ォ食事)。sur(酒)に対して yagju(薬酒、ォ酒)、nai(年齢)に対して yɔnse(年歳、ォトシ)、irum(名前)に対して saŋham(姓銜、ォ名前)などのように、普通形が固有語彙であるのに対して敬語形が漢語であるいくつかの対が認められる。これらの敬語形は用言の敬語形と呼応して用いるのがふつうである。

次に、人の呼び方に関するものについて述べる。saaram(ヒト)は指示代名詞その他の規定語をともなって使われることがあり、その敬語形は saaram を bun(カタ)にかえることによって作られる。i saaram(コノヒト)に対して i bun(コノカタ)、irbon saaram(日本人)に対して irbon bbun(日本ノカタ)など。

親族名称を表わす語にも敬語形を有するものがある。これは原則的に普通形に nim を附けて作られる。abɔji(父)に対して abɔnim、ɔmɔni(母)に対して ɔmɔnim、hyɔŋ(弟から見た兄)に対して hyɔŋnim、nuuna(弟から見た姉)に対して nuunim(以上は呼びかけにも、言及する場合にも使える)、adur(息子)に対して adunim、ddar(娘)に対して ddanim など(これらは言及する場合のみ)。このうち hyɔŋnim、nuunim は自分の兄姉に対しても使えるが、他はふつう他人のそれに対する敬称である。また、春府丈(父)、慈堂(母)、伯氏(長兄)、季氏(弟)などの漢語も上位者のそれ

ぞれについて言及する際に使う敬称だが極めてフォーマルな場合にしか用いない。

姓名に附ける敬称には次のようなものがある。sɔnsɛŋnim、sɔnsɛŋ、ssi、misutə、misu、yaŋ、gun、yɔsa、nimなど。このうち、sɔnsɛŋnim(先生)はもっとも敬意の程度が高く、姓または姓名に附き、教師に限ることなく一般的に使うことのできる敬称である。sɔnsɛŋ はそれよりややくだけた感じで比較的親しい同等もしくは下位の人に対して使い、やはり姓もしくは姓名に附く。ssi(氏)は日本語のサンにあたる程度の敬称で姓・姓名および名前に附けることができるが、名前に ssi を附けた言い方は比較的親しい男女の間など使用場面が限られている。以上の三つは男女いずれにも用いることができる。misutə と misu は ssi と同程度の敬称だが事務的な感じである。姓のみに附き、前者は男性、後者は独身女性に対して用いられる。yaŋ(孃)は姓または姓名に附き親愛感があるがやや文語的である。独身女性に対して用いるのがふつうだが、新聞記事などでは女優に限り既婚者でも用いられるようである。yaŋ にあたる、青年に対する敬称は gun(君)であって姓または姓名に附く。結婚式の通知や式場での掲示、主礼(仲人)の紹介のことばの中などで新郎・新婦の姓名に附ける敬称が gun と yaŋ である。yɔsa(女史)は姓または姓名に附き、ある程度社会的地位を得た中年以上の女性に対する敬称だが、やや文語的である。nim は sajaŋnim(社長サン)、gwajaŋnim(課長サン)、gjoosunim(教授)、bagsanim(博士)、hagjaŋnim(学長)のように職名・地位などを表わす普通名詞に附く敬称である。朝鮮語では、これらの語は単に職名や地位を表わすだけで、敬意のニュアンスを含まないので、敬称の指標である nim を必要とする点、日本語と異なる。姓名に附けることもあるが社会習慣として定着したものとは言えない。以上の語はすべて呼びかけにも言及にも使える。社会的な地位を持った男性が壮年になると号を持つ習慣がある。大体四、五〇代で称すべき号を定め、五〇代後半から六〇代になって広く使い始める。同年輩の友人は互いに号で呼び合うことがあり、また大学の場合は弟子である学生たちは教授を号に sɔnsɛŋnim を附して、言及する場合に用いることも多い。

二　待遇法

朝鮮語の待遇法はかなり細分化し整然とした体系を持っている。待遇法というのは、話者が対者に対して言語上いかなる待遇をするか、つまり話者が、対者との関係をいかなるものと認識しているかを、特定の言語形式の選択によって表現するものと言えよう。この場合、特定の対者に対する発話に含まれる文は一貫して特定の待遇の形式が用いられ、その発話はある特定の待遇のスタイルによって特徴づけられる。このスタイルの選択を規定する要因は、年齢や地位の上下関係、大人か子供か、間柄の親疎の度合などさまざまなものが考えられるが、注意すべきことは、日本語の丁寧語とは異なり、朝鮮語の待遇法は話者と対者との身分関係によって選ばれるべき待遇のスタイルがほぼ絶対的にきまっていることである。たとえば、大人が子供に対して話す時には必ず「下称」と称する子供に対する待遇のスタイルを用いるのが習慣であり、また逆に、子供が未知の大人に対して話をする時はその大人の地位がどのようなものであろうとも必ず「上称」と呼ばれる丁寧なスタイルを用いなければならない。

待遇法のスタイルは、主として用言の終止形語尾において示されるが、人称代名詞や呼称などにも見られる。

1　用　言

対者に対する待遇のスタイルは基本的に四つの種類に区別される。[3] いま、仮にこれを上称・中称・等称・下称と呼ぶことにする。[4] この四つのスタイルの区別、特に等称を一つの独立したスタイルとする点に問題がない訳ではないが、[5] ここではこの四つをそれぞれ異なるスタイルとする、比較的古い世代に保持されている保守的な体系をもとにして述べることとする。[6] なお、この四つの待遇のスタイルのほかに、いわゆる「半言（パンマル）」という語法がある。これは用言の接

	平　叙　形	疑　問　形
上　称	-sɯbnida～-ɯbnida	-sɯbnigga～-ɯbnigga
中　称	-so～-o, -su～-u	-so～-o, -su～-u
等　称	(A)-ne (B)-ɯi (C)-rse	(A)-na (B, C)-ɯnga
下　称	-da	-nya, -ni

続形の一つである完了連用形を終止形として使ったものであって、日本語の連用形にテを接尾した形で終止する語法に近似している。これは、明確に語尾によって待遇区分を表わす過度の形式性を嫌い、その区分を超えて話者の意思を表現性豊かに表わす時に用いられるものである。いま、仮にこれを略待形[7]と称することにする。略待形は待遇法語尾を略した語法であるから待遇表現に関しては中立的である。同じように待遇表現に関して中立的な語尾はほかにもいくつかあるが、いずれも-yoという語尾をともなって一種の丁寧形となり得る(以下、略待丁寧形と呼ぶ)。この略待丁寧形は、上称・中称などといった基本的な待遇法体系がいわば身分の規定によってその使用が選択されるのに対して、そのような待遇関係をぼかしながら対者に対して一定の距離をおいて遇するものである。

以下に、待遇法のそれぞれのスタイルに関して文法的な特徴と具体的な用法を説明しよう[8]。なお、待遇法の語尾は、用言語幹に直接あるいは敬語接辞や時制接辞を介して附き文の述語節において示されるが、引用動詞によって埋込まれた文の中では対立を失って下称の形(ただし命令形のみは若干異なる)で現われ、連体修飾節として埋込まれている文や接続形語尾をとって複文を構成する場合には現われない。

(1) 上　称

別表に示したように平叙形語尾・疑問形語尾ともに二つの形を持っているが、前者は子音語幹に、後者は母音語幹と子音語幹の両方に附くという接尾機能の違いがあるだけで、意味の上では特に違いはない。命令および勧誘の表現

は対者の行動に関して対者に対して直接発話する場合にのみ使うわけだから、平叙形や疑問形と平行的にいかない点がある。命令表現は専用の語尾 -bsiyo(必ず敬語接辞を伴う)によって行うほかに、いろいろな間接的表現・婉曲表現を用いることも多い。勧誘表現も専用の語尾 -bsida は形の上では他の上称語尾と平行的だが敬意の度合が足りず上位者には使えない。婉曲表現によって表わすのがふつうである(二の5参照)。

さて、上称はかなり形式ばった丁重なスタイルでかたくるしい感じを伴う。子供が親しくない大人に、生徒・学生が先生に、職場の下位者が上司に、店員が顧客に、一般に疎遠な間柄の年齢的・地位的下位者が上位者に対して用いるほか、未知または疎遠な大人同士の対話などにも用いられる。また、演説や講演、放送、形式ばった書簡文(たとえば推せん状、紹介状、案内状など)や広告の文章に用いられる。ところで、前に述べたように待遇法は用言の終止形語尾において示されるから、話者および対者は一つの文が終るごとに話者が対者に対していかなる待遇をしているかを認識させられることになる。そのため、一つの発話に含まれるすべての文に一貫して同一の待遇法語尾を用いると極めて形式ばったかたくるしい感じになってしまう。演説や書簡文などの多少ともフォーマルな書きことば又はそれに近いスタイルの場合には上称の語尾が一貫して使われ得るけれども、話しことばの場合にはすべての文の述部が上称語尾をとらず部分的に略待丁寧形を併用するのがふつうである。殊に、女性や子供は極めてフォーマルな場合を除けば上称形はほとんど使わず略待丁寧形のみを用いるのがふつうである。なお、大人は子供に対して下称のスタイルを用いるのがふつうであるが、学校などで先生や来賓らが多数の生徒に対してフォーマルな雰囲気で話す場合や、放送の子供の時間などでアナウンサーや司会者は子供に対して上称又は略待丁寧形を用いることがある。

(2) 中　称

平叙・疑問・命令・勧誘の各形がすべて同形であるのが中称語尾の特徴であって、イントネーションとコンテキス

トによって区別される。語尾として、-so〜-o のほかにその弱まり語形 -su〜-u がある。-so, -su と -o, -u の違いは上称の場合と同じで、前者は子音語幹に、後者は母音語幹と子音語幹の双方に附く。

中称は成人間で軽微な敬意を表わす場合に用いられる。[9] -so〜-o は形式ばった、かたい感じを伴うのに対し、弱まり語形の -su〜-u は親密感があり、やわらかい語感を伴う。それゆえ、前者は特にそのような効果が期待されるような状況、たとえばある種の権威を示して(警官が)質問したり、しかったり、たしなめたりするような場合や、書きことばで不特定多数に対する指示など(たとえば試験問題の指示、ドアの「押・引」の指示、交通信号の「渡レ・止マレ」の指示など。これらの場合は敬語接辞を伴うのがふつうである)を表わす場合に用いられるのに対して、弱まり語形はうちとけた親しい間柄で使われる。すなわち、成長した子供が母や祖母に対して、成長した弟や妹が姉に対してなど親族間の特定の間柄で用いられるほか、[10] 女子学生の後輩が親しい先輩に対して(ふつうの先輩なら略待丁寧形を使うが、中称を使った方が親しみがある)、中年の親しい女性の友人同士または男性の比較的親しい友人同士(男性の場合、極めて親しい友人同士では等称が使われる)で使われる。また、夫は妻に対して略待語尾を併用しつつ中称を用いるが、妻は夫に対してふつうは略待丁寧形を用いつつ特に二人だけの親しみのある対話では中称を用いることがある。

なお、一般に、一つの発話に現れる文の述部が一貫して中称語尾をとるのではなく、略待もしくはその丁寧形と併用されるのがふつうである。

(3) 等　称

等称語尾は用言の種類によって細分化している。平叙形語尾の中、(A)は動詞・存在詞および時制接辞が附いたすべての語幹に、(B)は形容詞に、(C)は指定詞にそれぞれ附く形である。疑問形語尾の(A)は平叙形に同じで(B)・(C)は形容

詞・指定詞に附くのが原則である。しかしながら、このような複雑な形態は簡単化の変化をこうむり現在では大体四〇歳代を境としてそれ以下の世代では平叙形語尾は品詞による別がなくすべて -ne を用いるようである。しかも、この語尾は等称の語尾としてよりも話者の判断の独白的表現のそれとしてよく用いられ、疑問形語尾もまた本来のそれとしてよりも強調の疑問語尾として用いられるようになり、本来の等称としての用法が希薄になっているようである。この点、さらに調査してみたい。

等称は対者を下位者として遇するものだが、すでに成人しているために子供扱いできない場合に用いる。したがって、二〇歳程度以上の人が対象になる。ただし、自分の子供や弟・妹など親族関係における下位者には、いくら成年に達しても使わない(ふつう下称または略待を用いる)。また、このスタイルは壮年の親しい友人(ただし男性同士の場合に限られ、女性の場合は前述の中称が使われる)の間でも用いられるが、これも互いに壮年に達しているために子供に対するスタイルである下称が使えないためと考えられる。等称の用いられる具体的な場面としては、男性である話者が成年に達した友人の息子または弟に対して(成年に達した友人の娘または妹に対しては親しさの程度によって略待形か略待丁寧形を使うのがふつうである。また、女性である話者は同様の場合に対者が男子・女子にかかわらず略待形または略待丁寧形を使う)、大学の教授が学生や助手および弟子である助教授らに、教師が成年に達した教え子に(高校生ぐらいまでに対しては下称を使う)、雇用主が成年に達した被雇用人に対してなどである。なお、このスタイルは前にもふれたように次第に使われなくなっていく傾向にあるようで、親疎の度合によって略待形もしくは略待丁寧形の使用におきかえられて行くようである。たとえば、姻戚関係において、義母が婿に、姉や兄嫁が弟の嫁に対して用いるスタイルは従来等称であったが、現在ではほとんど等称のかわりに略待丁寧形が使われるようである。またソウル出身の五〇歳代の女性から、自分の娘婿には本来等称を使うべきなのに何となく使いにくくて略待丁寧形を使っているという話を聞いたこともある。

言うまでもなく、等称のスタイルも、一つの発話に一貫して等称語尾が使われるのではなく、略待を併用するのがふつうである。

このスタイルに呼応した第二人称代名詞は jane である。第一人称代名詞は na を使う。

(4) 下　称

疑問形語尾に -nya と -ni の二つの語尾があるが、前者はかなりの年齢差のある上位者が子供に対して(たとえば祖父が孫に対して)用いる形式であるのに対して、後者は年齢差の比較的少ない上下関係(たとえば、兄姉が弟妹に、上級生が下級生に)において用いるとともに子供同士の互いに下称を使い合う対等の関係で用いる形式である。命令形は動詞語幹に -ɔra を附して作るが、若干の基本的な特定の動詞には -gɔra (ga-「行ク」、ja-「眠ル」、iss-「居ル」に附く)、-nɔra (o-「来ル」に附く)という語尾も附き得る。これらの動詞は、-gɔra または -nɔra が附いた命令形と規則的な語尾の附いた命令形が共存する訳だが、この違いもさきの疑問形語尾の両形の違いと平行的である。

下称は対者に対する敬意がゼロのスタイルである。使用される具体的な場面としては、大人が大体中学生以下の子供に対して、子供同士の対話において(大体高校生ぐらいまでで、大学生同士は中学・高校の時代からの友だちならばひきつづき下称を使うが、大人である自覚が生ずるに従い等称に移行し、大学でできた友人は等称を使うが、現在では略待が多用されるようである)使われるほか、書きことばでは新聞や論文などの文体として使われる。なお、親子関係などにおいては、年齢に関係なく(つまり子供がいくら年をとっても)親は下称を用いる。また、師弟関係では先生は高校生程度までは下称を用い、それ以上になると次第に等称を用いるようになる。

なお、一つの発話において、一貫して下称の語尾が用いられることは少なく、略待形と併用するのがふつうである。

下称のスタイルと呼応する第二人称代名詞として nɔ がある。第一人称代名詞は na を用いる。

2　代名詞

人称代名詞は、用言の待遇法と呼応して各スタイルで使われる形式がきまっているものが多い。

第一人称代名詞には、単数形として na と jɔ、複数形として uri(dɯr) と jəəi(dɯr) とがある。na と uri とは待遇表現に関して中立的で待遇法のすべてのスタイルにおいて用いることができる。jɔ と jəəi は対者に対して話者自身を下位者として遇する謙譲的形式で上称のスタイルではふつうこれが用いられる。

第二人称代名詞には、単数形として nɔ, jane, daŋsin が、複数形として nəəi(dɯr), janedɯr, daŋsindɯr がある。nɔ と nəəi(dɯr) は下称のスタイル専用、jane は等称のスタイル専用の人称代名詞である。これらはすべて呼びかけにも使える。daŋsin は中称または上称のスタイルで用いられるが、この代名詞の用法はかなり限られている。中年以上(少なくとも四〇歳代)の男性同士で比較的親しいが等称を使うほど親しくない間柄(スタイルは中称および略待または略待丁寧形)や、中年以上の比較的親しい女性同士の間柄(スタイルは同上)や、夫婦間で互いに(スタイルは同上)、使われるほかに、ふつうは上称または中称を使う間柄でけんかなどで感情がむき出しになった場合にも使われる。以上の場合は、中称以上の丁寧なスタイルを使う間柄であるが、親しいとか逆に感情がむき出しになったとかで対者に対する話者のよそおいがないことが共通である。また学校の語学教育や映画の字幕、テレビの吹替えなどで英語などの第二人称代名詞を訳す場合にその文が中称以上の丁寧なスタイルで訳される場合にはこの代名詞も用いるし、広告などの文章で不特定の個人に話しかけるような場合(たとえば、「アナタノ大切ナオ肌ノタメノ冬ノオ化粧、私ニオマカセ下サイ(ある化粧品会社の広告)」にも daŋsin が使われる。この場合は、発話の関係上どうしても対者を直接言及する必要のある場合である。結局、daŋsin という代名詞は中称以上の丁寧なスタイルにおいて使われる第二人称

代名詞であるが、通常丁寧なスタイルでは代名詞を使って対者を直接表現することが礼を失することなので、これに言及しないか婉曲な表現を用いるのがふつうであるゆえに、その使用が上述のような場合に限定される訳であって、この代名詞自身が何か悪いニュアンスを持っている訳ではない。対者が上位者あるいはある程度距離をおいて遇する必要のある場合には人称代名詞を用いず、sɔnsɛŋnim(先生、教師に限らず一般的に使う)、dɛg(お宅)などや、hara-bɔji(おじいさん)、harmɔni(おばあさん)、ajɔssi(おじさん)、ajumɔni(おばさん)などの親族名称語を援用したり、対者の名前または職名などに敬称を附けた形式を使って言及するのがふつうである(敬称については一の2参照)。

3 呼びかけなど

名前は、呼格助詞 -a〜-ya(前者は子音、後者は母音で終わる名前に附く)が附いた形、または名前そのままの形(ただし子音で終わる名前にはiを附ける)で、呼びかけに使われる。両者とも下位者に対して用いるぞんざいな呼びかけだが、殊に前者は対者を完全に子供扱いしている。呼格助詞として iyɔ およびその敬語形 isiyɔ もあり、姓名またはそれに敬称や称号をつけたものに附いて呼格形になるが、文語として使われるだけである。姓名や地位・職名を表わす形式に敬称を附けた形もそのまま呼びかけとして用いることができる。

呼びかけの間投詞(「モシモシ」にあたる言い方)にも待遇法の各スタイルに該当する形式がある。上称では yɔbose-yo(本来略待丁寧形だが、これを用いるのがふつう)、中称では yɔbosio、または yɔbosyu が用いられ、yɔbo もこのスタイルに該当する形式だが主として夫婦間で用いられる呼称である。等称は yɔboge、下称では yɛ が用いられる(yɔbwara という形式もあるがかたくるしくかつ古くさい感じである)。また、略待に該当する呼称は yɔbwa または ibwa、その丁寧形は yɔbwayo または ibwayo である。なお、電話での呼びかけは、話相手が誰であれ、一応 yɔboseyo を用いるのが習慣である。

返答句、すなわち呼びかけまたは質問に対する返事にも待遇のスタイルによる別がある。呼びかけに対する返事および質問に対する肯定の返事は ne(丁寧形)と ŭŋ(略待形)を区別する。また、ye という形式もまれに上称のスタイルで使われ、かしこまった感じを伴う形式である一方、下称のスタイルにおいて呼びかけに対する返事として oonya という形式が年齢差の大きい下位者に対して(たとえば祖父母が孫に対して)使われる。否定の返事には、aanyo(丁寧形)と ani(略待形)がある。

このほか、あいさつのことばなどにも待遇のスタイルに応じた別がある。

4　待遇法のまとめ

朝鮮語の待遇法には上称・中称・等称・下称の四つのスタイルの区別がある。今、仮に、対者に対して何らの敬意も表わさないスタイルを普通体と呼び、対者に対して何らかの意味で敬意を表わしているスタイルを丁寧体と呼ぶことにすると、下称は普通体であり、これに対して上・中・等の三称は丁寧体ということで対立する。朝鮮語では、親族関係を除けば、対者が大人であれば何らかの丁寧体で待遇しなければならず、また対者が子供であれば必ず普通体で遇することになっているから、普通体対丁寧体の違いは対者が子供であるか大人であるかの違いであると言いかえてもよい。丁寧体に属する三つのスタイル――上称・中称・等称――は、対者の年齢や身分関係などの要素によってその使用が決定される。対者が年齢的にも身分的にも完全な上位者であると認められた場合には上称が選ばれる。また年齢や身分関係が確定できない未知の人や関係の疎遠な人に対しても一定の距離をおくという意味で上称が使われる。一方、対者が年齢的にも身分的にも完全に下位者と認められるが成年に達しているために子供扱いできない場合には等称が選ばれる。等称はまた成年男子の親しい友人同士の間でも使われる。しかし、このスタイルは、対者が大人でありながら下位者とする身分規定を特徴としているためか、階層性がうすれ横のつながりを重視する現代におい

ては次第に使われなくなりつつあり、親密さの程度により略待か略待丁寧形の使用におきかえられていくようである。中称は、対者が年齢的・身分的に明確に上または下と規定できず、上称を使うと敬意表現が過度になって違和感を感ずるような場合や、等称を使うほど対者の年齢・身分が下でもなければ、親しい同等の間柄でもないような場合に用いる軽微な敬意を表わすスタイルである。中称は今日かなり限られた場面でしか使われないが、その理由は恐らく中称のスタイル自体が身分による待遇の区別をぼかすような中間的な特徴を持っているゆえに、新しく生じた類似の用法を持つ略待や略待丁寧形の使用におきかえられていった結果であろうと思われる。

さて、これらの四つのスタイルは、それぞれ排他的で同一の発話の中に併用することはできない。ある特定の対者に対して行なわれる発話においては、その対者に応じて上述の四つの中のいずれかのスタイルが選択される訳であるが、その発話に含まれるすべての文の述部にそのスタイルに応じた語尾が用いられる訳ではない。実際には、略待または略待丁寧形が数多く併用される。概略的に言って、略待は下称・等称・中称と併用され、略待丁寧形は上称・中称と併用されるのがふつうである。ところで、略待というのは待遇法語尾の省略によって四つのスタイルの待遇区分を止揚した中立的な表現であり、略待丁寧形は略待表現でありながらも対者に対してやや距離をおいて遇するものである。このような略待表現を併用することは、文末ごとに身分的待遇関係を認識させられるかたくるしさを軽減して発話全体の感じをやわらげる効果をもたらす。また、話者が対者に対して的確な待遇のスタイルを見出しにくい場合に待遇表現をぼかすために略待表現が用いられることもある。さらに、話者が身分的待遇規範を乗り越えて感情をそのまま表現する場合にも用いられる。子供が父親にあまえる場合に略待を用いるのは、上称を用いたのでは気持の上で近寄れないからであり、また父親が子供をしかる場合に略待を用いるのは、下称を用いたのでは父と子の密接な関係が意識にのぼって気持の上でそぐわないからであろう。(11)

さて、上称・中称・等称・下称という待遇法が身分規定に基づく体系であるのに対して、略待および略待丁寧形は、

そのような待遇区分を止揚し、ただ対者に一定の距離をおいて遇するか否かという、いわば連帯的敬意表現という異なった原理に基づく待遇法であると考えられよう。略待および略待丁寧形は、今日日常の言語生活において非常によく使われており、一方、前述の待遇法体系は、中称の使用場面がかなり限定され、等称もその多様な語形の区別を失いかつその本来の用法もうすれてきていると言った状態である。現代語の待遇法システムは、かつての階層性を重んずる社会から様々な横の連帯を重視する現代社会への移行とともに変化をこうむり、身分的規定に基いた待遇の体系から連帯的関係を表わす待遇の体系に移って行く過程にある。(12)

5 いろいろな丁寧表現

最後に、上述のような待遇法専用の文法手段によらずに文のスタイルを丁寧にするいくつかの表現手段についてふれておこう。

まず、文のスタイルを丁寧にする方法の一つは文末において言い切りを避ける方法である。終止形語尾にケレドモにあたる man を付ける (gɯrɔssɯbnida-man ソウデゴザイマスガ)、終止形語尾のかわりに断定を避け言葉じりをにごす -nɯndeyo～-ɯndeyo という略待語尾を使う (gɯrɔndeyo ソウナンデスガ)、否定の疑問形 (gɯrɔci anayo? ソウジャアリマセンカ)や否定の推量の疑問形 (gɯrɔci anɯrggayo? ソウジャナイデショウカ)を使うなど。また、いわゆる未来時制接辞も断定を避けたやわらかい効果を与える場合がある (morɯgessɯbnida 存ジマセンガ)。

命令表現は各スタイルにそれぞれ専用の語尾があるが、次のようないろいろな間接的なあるいは婉曲な表現によってスタイルをやわらげ、さらに丁寧にすることができる。対者の意向または意志を尋ねる表現 (hasirggayo? ナサイマスカ、hasigessɯbnigga? ナサイマスカ)、同じ表現を依頼や否定の形で表現する (hɛjusirggayo? hɛjusigessɯbnigga? シテクダサイマスカ、hɛ jusiji ankessɯbnigga? シテクダサイマセンカ)、条件法的表現 (hɛ jusyɔssɯmyɔn

habnida～gomabgessubnida シテクダサッタラト存ジマス～アリガタイノデスガ)など。勧誘の表現も対者の意向を尋ねる表現(gaci gasirggayo? イッショニイラッシャイマスカ)や、話者の判断を提示して対者の同意を求める語尾を用いて(gaci gasijo イッショニイラッシャイマセ)、婉曲に表現することが多い。

おわりに

日本語にも朝鮮語にも敬語がある。しかし、その内容はかなり違う。朝鮮語の敬語は、身分規定に基づき階層的に細分化された体系で、日本語の敬語にくらべて、はるかに複雑である。しかしながら、一方、その用法を見ると、日本語は具体的な場面場面によって変幻自在な使い方がされていて法則性を見いだすのがむずかしいが、これに対して、朝鮮語の敬語は、絶対敬語的性格が濃く、対象や場面によってその用法をはっきりと規定しやすいという点が特徴的である。語学教育という観点からすると、日本語の敬語の方がはるかにむずかしいかも知れない。

(1) 本稿における朝鮮語に関する記述は、特にことわらない限り、金東俊氏の報告に基いている。筆者の質問に対して、終始、親切にご教示下さった金東俊氏に感謝の意を表する。金東俊氏は、一九二四年にソウル特別市永登浦区始興洞(当時、京畿道始興郡東面始興里)で生まれ、一九六一年来日された。

(2) この分析方法については、柴田武氏の助言を得た。

(3) 待遇法のスタイルの種類について論じた主なものをあげる。
崔鉉培『Uri Marbon(補訂版)』正音社(ソウル)、一九五五年、二五二―二五四頁。
河野六郎「朝鮮語」(市河三喜・服部四郎編『世界言語概説 下巻』研究社、一九五二年)四〇〇―四一二頁。
河野六郎「朝鮮語の膠着性について」(『言語学論叢』一一巻、一九七一年)五四頁以下。

以下のものは、四つのスタイルに半言とその丁寧形を加え、六つのスタイルとして体系化している。

Samuel E. Martin, Speech Levels in Japan and Korea, "Language in Culture and Society," ed. by Dell Hymes, 1964, Harper and Row, New York, pp. 407–415, p. 408.

『朝鮮語(教員大学用)』教育図書出版社、一九七〇年、一八五—一八八頁。

李翊燮「国語敬語法 ɯi 体系化問題」(『国語学』2、国語学会(ソウル)、一九七四年)五七頁以下。

Hwang, Juck-Ryoon, "Role of Sociolinguistics in Foreign Language Education with Reference to Korean and English Terms of Address and Levels of Deference," Gwang Moonsa, Seoul, 1975, p. 80ff.

(4)　この名称は、河野六郎「朝鮮語」前掲、四〇〇頁以下によっている。

(5)　Oe Takao, On the Indicative Endings in Modern Korean(『言語研究』三四号、一九五八年)三四頁以下。

(6)　金東俊の報告によれば、彼の方言では、等称が、形態上・用法上、他の三つのスタイルと異なるスタイルとして認められる。等称の平叙形語尾と自分の判断を独白的に表現する語尾(動詞・存在詞には -ne が附くが、形容詞と指定詞の場合は -unde を使って表わす)とは形態的に異なり、用法の上でも等称は下称とは違った特徴を持っている。

(7)　この名称は、金東俊『現代韓国語の待遇法』(未公刊)一九六九年、一一五頁による。

(8)　各スタイルの用法については、金東俊、前掲書、七〇頁以下、Hwang, op. cit., p. 85ff にも記述がある。なお、特定の一地域における敬語の使用状況に関しては、青山秀夫の実態調査がある。

青山秀夫「現代朝鮮語の敬語と敬語意識(一)——京畿道驪州邑における実態調査報告——」(『朝鮮学報』五一輯、一九六九年五月)一—一八頁、同(二)(同五三輯、一九六九年一〇月)一—二八頁、付図四、同(三)(同五七輯、一九七〇年一〇月)一—三四頁。

(9)　中称の用法の解釈については次の諸論文参照。

Oe, op. cit., pp. 25–29.

Martin, op. cit., pp. 409–410.

大江孝男「大邱方言における「半敬語」について」(『朝鮮学報』八一輯、一九七六年)二四頁。

(10)　親族関係における敬語の使用状況については、拙稿「朝鮮語の敬語」(『敬語講座　第八巻　世界の敬語』明治書院、一九七

四年）六四―六七頁参照。

(11) 注(10)参照。

(12) 政治体制が変った場合に、敬語がどのような変化を受けるかは、興味ある問題である。北朝鮮での日常の言語生活における敬語と敬語意識の実態はまったくわからないが、国語教育などで敬語がどのように扱われているかを示すものとして、教員大学用の文法書における敬語についての説明を一部分紹介しておく。まず、階称（本稿の待遇法にあたる）に関する説明で、「階称は国語の礼節を表わす一側面である。階称とは話し手と聞き手の間の礼儀関係を表わすことを言う」（前掲『朝鮮語（教員大学用）』一八五頁）と述べ、また尊称辞（本稿の敬語接辞にあたる）に関する説明の部分では「尊称は階称とともに国語において礼節をはっきりと表現することができるようにする一つの側面だ。われわれは、尊称辞を正しく使うことによって言葉と行動において礼節をきちんと守ることができ、それはまた国語の優秀性を輝かすことにもなる」（前掲書、一九八頁）と述べている。

8　中国語における敬語

輿水　優

一　中国語の敬語

現代の中国語においては、敬語があまり使われないといわれる。敬語に関する考察も数が少ない。[1] これは、おそらく、中国語に体系的な敬語法が存在しないためであり、また、かつて中国で用いられていた敬語が、社会体制の変化により、ほとんどその生命を失ったためでもあろう。

中国語における敬語は、古今を問わず、相手をどのように呼ぶか、あるいは自分をどのように呼ぶかという称呼の問題に、大きな比重がおかれる。たとえば旧中国では、社会における高低貴賤の別に応じ、使用人は主人に対し、平民は役人に対し、貧乏人は金持に対し、尊卑を使い分けて呼ばねばならなかった。人称代名詞を避け、第二人称のかわりに"jūn(君), xiānsheng(先生), géxià(阁下), zúxià(足下)"等々を尊称とし、第一人称のかわりに"chén(臣), pú(仆[＝僕]), qiè(妾), nú(奴)"等々を卑称としたのは、その一例である。[2] この種の称呼のほとんどは、社会から階級的差別が消えるにつれ、過去のものになってしまった。

中国語における敬語は、また、文法的によりも語彙的にあらわされ、なかでも、旧中国の貴族豪紳に使われたあいさつ語に、大きな比重が占められている。

かつて魯迅は諷刺について論じたが、でっぷりとふとった紳士が二人、たがいに腰をかがめ拱手し、油ぎった顔で、

"Guìxìng?……(贵姓？……)""(ご)尊名は？)"

"Bìxìng Qián.(敝姓钱。)""(銭と申します。)"

"Ò, jiǔyǎng jiǔyǎng! Hái méiyou qǐngjiào táifǔ……(哦，久仰久仰！还没有请教台甫……)""(あ、ご高名はかね

がねうかがっております。で、ご雅号は……)

"Cǎozì Kuòtíng.(草字闊亭。)"(闊亭と申します。)

"Gāoyǎ gāoyǎ. Guìchù shì……?(高雅高雅。貴処是……?)"(それはご高雅なこと。で、ご郷里はどちら……?)

と、初対面のあいさつをかわす情景を、すぐれた例としてあげている(『且介亭雑文二集』)。このような、上層階級や知識人にのみ通用する敬語(附点)も、いま生き残っているものは少ない。これらは、現在、ロシア語から術語を借用し、社会習慣語(社会方言)あるいは階級習慣語(階級方言)という名で呼び、ことばの専門書でも小さくあつかわれている。文学作品では、魯迅がえがいたように、否定的人物の描写に用いられるのがつねである。

敬語というものは社会の構造と密接にかかわりあった存在である。社会主義国に生まれかわった中国ではもはや敬語を使わないと見るひともいるようである。しかし、新しい社会にふさわしい新しい人間関係においても、それに見合った敬意の表現が存在し得るし、実際に存在もしている。また、文化大革命や孔子批判などに集約されるように、旧社会の残滓がすべて一気にぬぐいさられたわけではない。意識の変革にはいまなお根強い闘争がつづいている。[3] 中国のひとたちが、日常まったく敬語と縁がないということはあるまい。最近の雑誌につぎのような文章がある。

こんにち、われわれの社会主義社会において、"tóngzhì(同志)"(同志・〜さん)ということばがひとびとの間で習慣的な呼び方になったことは、われわれの時代の、ひととひとの間の、斬新な関係をはっきりとしめしている。しかし、われわれの隊列のなかには、いまだにどうも"tóngzhì"と呼ばれたのでは十分に尊敬されていないと感じるひとが若干存在する。とりわけ、一部の、みずから「お役人」になったと思っているひとたちは、ほかのひとたちがおべっかを使って、たとえばかれを「〇〇隊長」「〇〇書記」「〇〇部長」と呼ぶなど、そのひとの職名で呼びかけると、心中うれしくてうずうずする。もしもかれを"Lǎo-Wáng(老王)"(王さん)、"Xiǎo-Lǐ(小李)"(李くん)などと呼べば不愉快に感じる。こういうひとは、自分が一般大衆より、当然、地位が

「すこし高く」「すこし特殊」であると信じ、自分がすでに「お役人」であることを他人が知らないのではないかとひどく心配している。しかし、このことは、こういうひとたちの頭のなかで、いまだに階級観念、つまりブルジョア階級の権利思想が邪魔だてしていることを反映しており、「旧制度の残した古い習慣や古い風俗」を暴露している。

"tóngzhì(同志)"ということば自体は、古典にも見えるが、現在、ともに共通の目標に向かって進むこころざしをしめす称呼として、呼びかけにも敬称にも、中国では普遍的に用いられている。それにもかかわらず、この一文は、新しい人間関係において、敬意がどのようにあらわされるのか、まず、ひとの呼び方から考察する必要があることを示唆している。(4)

二　名前と敬語

中国の旧社会では相手の名を直接呼ばず、字(あざな)あるいは号を呼ぶ習慣があった。たとえば孫文は、他人からは孫逸仙先生(字)あるいは孫中山先生(号)と呼ばれる。目の前で孫文先生と呼んでは失礼であるし、自分みずから字や号を名乗ることも失礼である。現在は字や号をつけるひともまれで、直接その名を呼ぶのがふつうになっている。(5)

一般に、友人や同僚の間では、姓名をそのまま呼びすてにすることが多い。ごくしたしい関係になれば、姓をはぶき名だけを呼んでもよい。日本人には呼びすてが気になるが、中国人にとっては、この方が親近感にあふれている。ただし、一音節(一字)の姓や名は単用できない。友人や同僚などの場合、したしみをこめて、年上や先輩などには"lǎo(老)"、年下には"xiǎo(小)"を姓の前につけ、呼びあうことも多い。ただし、二音節(二字)の姓は、おそらく口調の関係で、これらの接頭辞をつけられない。

Zhāng Zǐ-píng（张子平）という親友に対しては、Zhāng Zǐ-píng, Zǐ-píng, Lǎo-Zhāng, Xiǎo-Zhāng と呼べる。

Zhāng Píng（张平）という親友に対しては、Zhāng Píng, Lǎo-Zhāng, Xiǎo-Zhāng と呼べる。

Ōuyáng Jùn（欧阳俊）という親友に対しては、Ōuyáng, Ōuyáng Jùn と呼べる。

もしも、おたがいにまだしたしくないときは、姓名の後に“tóngzhì（同志）”をそえる。この呼び方はよそゆきの感じで、尊敬の気持があらわせる。仕事で知り合ったひと、公的な関係にあるひとには、姓だけに tóngzhì をつけてもよい。その場合、一音節（一字）の姓には、接頭辞の lǎo-, xiǎo- がつくこともある。したしい友人や同僚で、ふだんは tóngzhì をつけないひとにも、注意を与えたり、あらたまってものをいうときは、姓名に tóngzhì をつけることが多い。もともと名だけで呼んでいる、ごくしたしいひとでも、その名に tóngzhì をつければ厳粛な気持があらわれる。ただし、この場合、一音節（一字）の名にはそのままつけられないので、姓名に tóngzhì をつけることになる。

tóngzhì ということばは、「共通の理想や事業のためにたたかうひと」という意味から、とくに「政治上の立場と見解がおなじであるひと」をさすに至り、現在は、共産党員にかぎらず、ひろく一般に使われている。[6]

tóngzhì は単独に呼びかけ語として、名前を知らないひとや、面識のないひとを呼びとめるとき、男女を問わず、ひろく用いられる。年配者に対しては“lǎo tóngzhì（老同志）”、中高生ぐらいには“xiǎo tóngzhì（小同志）”とも呼ぶ。小学生以下は“xiǎo péngyou（小朋友）”（小さいお友だち）が一般である。相手の職業がわかっていれば“sījī tóngzhì（司机同志）”（運転手さん）、“shòupiàoyuán tóngzhì（售票员同志）”（［バスなどの］車掌さん）などと呼べる。

tóngzhì は、政治上の立場や見解がおなじという前提によって、外国人に対しては、ふつう友好国の兄弟党（共産党）関係者にだけ用いられる。ひろく外国人に使われるのは“xiānsheng（先生）”で、呼びかけにも、名前につけて敬称にも使われる。外国人の側から、敬意をこめて、相手の中国人に xiānsheng を使うことも多い。xiānsheng は、以前、教師や医師をさしたが、いまは、かつて英語の mister にあてた名残りが見られるにすぎない。

tóngzhì が指導者に用いられた場合、したしみのこもったひびきがするというが、[7] 一般には、指導者など目上に対しては、その職名をそえて呼びかけ、敬意をあらわすことが多い。姓あるいは姓名の後に、“zhǔrèn(主任)”(主任)、“xiàozhǎng(校长)”(校長)、“zhǔxí(主席)”(主席・議長)などをおけば、公式の呼び方になる。これらのタイトルを単用してもはたらきはかわらない。

また、tóngzhì にかえ、“lǎoshī(老师)”(先生)、“shīfu(师傅)”(技能を有する労働者・職人)、“dàifu(大夫)”(医師)などを、その経験・知識・技術に敬意をはらった称呼としてひろく使っている。

lǎoshī は性別年齢を問わず、学校の先生の敬称となる。幼稚園や託児所の保母さんには、ふつう幼児が成人女性を呼ぶ“āyí(阿姨)”(おばさん)が使われる。この呼び方にも敬意はふくまれているが、最近は幼稚園でも lǎoshī を使うという。

shīfu は性別年齢を問わず、特別な技能と経験を有する現場の労働者や職人などの敬称となる。中国で規範とされている『新華字典』では「技能を伝授する師および実践の経験ある労働者に対する尊称」と説明している。年は若くても一定の経験を有する先輩に対し、後輩にあたる労働者は shīfu と呼ぶ。一般のひとたちは、ひろく労働者を、敬意をこめて shīfu と呼び、その使用範囲もしだいに大きくなっている。たとえば自動車運転手の場合、tóngzhì(同志)とか sījī tóngzhì(運転手さん)と呼ばれるより、shīfu と呼ばれるのをよろこぶという。面識のない、年配の労働者を“lǎo shīfu(老师傅)”と呼ぶことも多い。姓に接頭辞の lǎo-, xiǎo- などをつけ、さらに shīfu をそえる呼び方もある。shīfu は新しい社会で、新しい生命を与えられた敬語といえるであろう。なお、中国では現在も“bài～wéi shī(拜～为师)”(～を師と拝する)という表現で、lǎoshī や shīfu に入門する意味をあらわし、師に対する尊敬の念がつよい。“shīmǔ(师母)”、“shīniáng(师娘)”(いずれも、先生や師匠の奥さんの意。“niáng(娘)”はむすめではない)という敬語も、shīfu についてはいまも使う例がある。

dàifu は性別年齢を問わず、お医者さんの敬称となる。同義語に、南方で多く使う“yīshēng(医生)”がある。lǎoshi, shīfu, dàifu のいずれも、tóngzhì とおなじく、単独で呼びかけにも使える。

三　人称代名詞と敬語

現代中国語の二人称代名詞“nǐ(你)”は目上にあたるひと、たとえば生徒が先生に、子どもが両親に使うこともできる。また、“Lǐ lǎoshī, nǐ yě qù ma?(李老师，你也去吗？)”(李先生、あなたもいらっしゃいますか?)のように、まず目上のひとに「先生」「おかあさん」などと呼びかけてから、nǐ を使うことも少なくない。

二人称には、nǐ のほかに“nín(您)”という敬語がある。「nín はもともと北京方言で、nǐ は普通体、nín はていねい体である。北京のひとたちが話をするとき、年長者や、先生や、面識のないひとには、みな敬意をあらわして nín といい、nǐ といわない。現在、nín ということばは、すでに共通語にはいっている」という[8]。nín は、nǐ の複数形“nǐmen(你们)”を来源とするといわれる[9]。すなわち、nǐmen が早く発音されて nín となり、宋元以後、nín を単数に使うようになってから、さらに、尊敬の意味をあらわすに至ったという。フランス語をはじめ、ほかの外国語にも人称代名詞の複数形が単数の尊称に使われるようになった例があることはよく知られている。nín の複数形ともいうべき“nínmen(您们)”は、ときに書きことばで見かけるが、話しことばではまったく使われない。一般に誤用と考えられるのも nín の来源に関係があると思われる。nín の複数は、やはり nǐmen を使うか、もし二人であれば“nín èr wèi(您二位)”“nǐmen èr wèi(你们二位)”(あなたがたお二人)などのようにいわなければならない。

新しい中国では人間関係に差別がなくなり、nǐ と nín を使いわけなくなったという外国人もいる。nín はもともと北京方言なので、これを現在なお受容しない地域があり、作家の出身地によっては、たしかに、文学作品でも nín が

会話の部分にまったく使われず、目につかないことも多い。しかし、たとえば書きことばの場合、言語外の要素で敬意をしめしにくいから、“nínmen(您们)”という実際には存在しないことばをつくり出したり、nín 自体も話しことば以上に使う傾向が見られる。書簡文では、両親を nínmen、教師(単数)を nín と呼びかける例が多い。なお、したしい関係でありながら nín を使えば、かえってよそよそしい感じになることはいうまでもない。

聞き手の行為について、たとえば “Nǐ lái le.(你来了。)”(あなたは来た。――お客さんを「いらっしゃい」と迎える場合に使うことが多い)を “Nín lái le.(您来了。)”(あなたはいらっしゃった。――「いらっしゃいませ」となる場合が多い)、“Nǐ chī ba.(你吃吧。)”(たべてください。)を “Nín chī ba.(您吃吧。)”(めしあがってください。)と代名詞だけとりかえれば、動詞はそのままで敬語表現がつくれる。聞き手に所属する事物についても、たとえば “nín fùqin(您父亲)”(お父上)、“nín háiz(您孩子)”(お子さま)、“nín de màoz(您的帽子)”(お帽子)、“nín de yìjiàn(您的意见)”(ご意見)など、nín だけで敬語表現がつくれる。もちろん、代名詞にかぎらず、“Máo zhǔxí lái le.(毛主席来了。)”(毛主席がいらっしゃった。)、“Máo zhǔxí de shū(毛主席的书)”(毛主席のご本――“zhǔxí shū(主席书)”ともいう)など、尊敬の気持をこめた称呼でもおなじことがいえる。

かつてひろく使われたように、敬意をふくんだ名詞、たとえば “lǎoshī(老师)”(先生)を呼びかけとしてでなく、いわば代名詞として “Lǎoshī yě qù ma?(老师也去吗?)”(先生もいらっしゃいますか?)といえば、やはりていねいに感じられる。nín よりも、相手の身分などをしめす名詞を使う方がずっと敬意がこもっているという。[10] nín を使わない地域では、この方法で相手に対する尊敬の気持をあらわすともいう。[11]

二人称の敬語には、このほか “nǐ lǎo(你老)”、“nǐ lǎorenjia(你老人家)”(あなたさま)があり、年配者などに対して使う例を見る。nǐ lǎorenjia あるいは nín lǎorenjia は、書きことばで毛沢東主席に呼びかけるとき用いることが多い。

三人称も、“tā(他・她)”(男女の差は文字を使い分けるだけで、ことばとしてはおなじ)のほかに “tān(怹)”という

敬語がある。二人称で、nǐmen から nín が生まれたとおなじように三人称複数の tāmen から tān が生まれたという。[12]しかし、実際に用いられることはほとんどない。二人称のように、相手を直接呼ぶことばでないためであろう。紹介などの場面で、話題の人物をていねいにあらわすときは、あとで述べるように“zhè wèi (这位)”(この方)、“nà wèi (那位)”(あの方)など、別の表現をする。ほかに“tā lǎorenjia (他老人家)”(あのお方)という敬語があり、年配者などに対して使う例を見る。これも毛沢東主席に言及する場合、用いることが多い。

一人称は、性別年齢を問わず“wǒ (我)”を普遍的に使い、あらたまった場面でもかつてのように、“bǐrén (鄙人)”(わたくし、小生)などと卑下することはまったくない。ただ、書きことばで、自分の見解を婉曲に表現するため、複数形“wǒmen (我们)”を使い、謙遜の気持をしめす例はある。いわゆる editorial 'we' にあたる。[13]

四　親族名称と敬語

親族名称は、親族関係のないひとにも使われ、したしみや敬意をあらわすことができる。[14]この習慣そのものは、日本語と大差ない。たとえば中国の子どもたちは、面識のない大人に対し“shūshu (叔叔)”(おじさん――もともとは父の弟をさす)とか“āyí (阿姨)”(おばさん――もともとは母の姉妹をさす)と呼びかける。相手の職業がわかっていれば、“gōngrén shūshu (工人叔叔)”(労働者のおじさん)とか“hùshi āyí (护士阿姨)”(看護婦さん)と呼ぶこともある。shūshu, āyí は相手が一八、九歳でも使えるから、日本語訳に合わないことも起こる。『岩波中国語辞典』の shūshu の項では「まだ「おにいさん」といった方がよい年格好の人にもいうことがある」と説明している。

親族名称の用法を見ると、日本語とちがい、“bèishu (辈数)”(“bèifen (辈分)”ともいう。世代・親等などによる長幼の順序)が明確に意識されている。日本語のように、いわば無造作に年齢を基準として、若ければ「おねえさん」、年

をとっていれば「おばさん」というわけではない。

まず、‶bèishu(輩数)″の重要性を文学作品で見ることにする。現在、もっとも多くの読者があるという浩然の代表作「うららかな日」の一節である。

主人公の蕭長春は三二歳、妻に先立たれてから、六歳の一人むすこ小石頭をかかえ、老父の心配をよそに、再婚話にも耳をかたむけず、党支部書記として、村のひとの先頭に立っている。かれの家のすじ向かいに住む焦淑紅は二二歳、村の古い習慣ではもう婚期をすぎている。蕭長春が土木工事から一月半ぶりに帰宅した日、男世帯を見かねて、かの女は小石頭に夕飯を持って行く。家の外から小石頭を呼ぶと「おとうさんが帰って来たよ。淑紅おねえさん！」ととび出して来る。かの女はお茶碗を手渡して「たべなさい、いい子だね。これからはわたしをおねえさんと呼んではだめよ」という。小石頭はふしぎそうに「なんと呼ぶの」とたずねる。焦淑紅は「おばさんと呼びなさい、いいわね」と答え、早速、「おばさん」と呼ばせてみる……(傍点筆者)。

日本なら、若い女性は「おばさん」と呼ばれるより、「おねえさん」と呼ばれたいにちがいない。焦淑紅が「おばさん」と呼ばせたのはどうしてだろうか。淑紅は青年団の支部書記としてはたらくうち、蕭長春に愛情をよせるようになったが、小石頭に姉と呼ばれては蕭長春が自分の父親の世代ということになり、自分と同一の世代に属さなくなるため結婚の対象とし得ないからである。しかもここでは、赤の他人にも使う‶āyí(阿姨)″でなく、‶gūgu(姑姑)″(おばさん――もともとは父の姉妹)を使い、相手の家とのつながりをもしめしている。

おなじ小説の別の個所で、母親から蕭長春を‶biǎoshū(表叔)″(おじさん――父のいとこにあたるひとをさす)と呼ぶようにいわれて、焦淑紅はおなじ理由から「同志は世代の差をつけないのよ。それに、うちは本当の親戚ではないし。わたしはおかあさんたちとおなじには世代を数えないわ。」といって、結婚の対象たり得ることをほのめかしている。

親族名称を親族以外に使う場合、呼び方しだいで尊敬をも侮蔑をもあらわすから、話し手自身の世代から見て(あるいは、自分の両親の世代にひきくらべて)、相手の世代を正確に表現する必要がある。用いるべき名称より世代を下げれば、相手を軽蔑し、話し手自身を高める結果となる。世代を上げれば、相手を尊敬し、話し手自身を低め卑下することになる。

一八、九歳の未婚女性も、よその子どもに“jiějie(姐姐)”(おねえさん)と呼ばれるより“āyí(阿姨)”(おばさん)と呼ばれるのをよろこび、その方がなにかとくをしたような感じがするという。jiějie と呼ばれたら āyí にあらためさせるともいう。「おばさん」と呼ばれれば、その子どもより、世代が一つ上になるからである。ただし、おなじ「おばさん」でも既婚者にかぎられる“dàshěnr(大婶儿)”ではうれしくないという。また、若い女性が“nǎinai(奶奶)”(おばあさん)と呼ばれると、なにかたいへんとくをしたかのように大よろこびするという指摘もある。[15] 冗談ではあるが、年は若くても、同僚の子どもに自分を“yéye(爷爷)”(おじいさん)と呼ばせようとするひともあるという。これは、yéye と呼ばれれば、自分はその同僚より世代が一つ上になるからである。

もし世代を低めれば、相手に対する侮辱にもなる。“sūnz(孙子)”(まご)が罵語となり、“Nǐ shi wǒ de sūnz!(你是我的孙子!)”(おまえはおれのまごだ——ばかもの!)といった表現をするのも“bèishu(辈数)”(世代・親等などによる長幼の順序)が基盤にある。

古くからの家族制度を反映し、中国語の親族名称は複雑で外国人にはわかりにくい。さらに、北方と南方、都会と農村といった地域差もある。たとえば、名前を知らない年配者を呼ぶ“lǎobóbo(老伯伯)”ということばは、“lǎodàye(老大爷)”などを使う北方ではあまり耳にしないし、また、都会であればおよそ“tóngzhì(同志)”ですむところを、農村では日常生活における連帯感が強いから、親族名称を使うことが多い。

一般に、労働者や農民の習慣では、自分の両親とおなじ世代のひと(おじさん・おばさん)に対し、まだそれほど年

をとっていなければ“dàshū(大叔)”“dàshěnr(大婶儿)”、それよりすこし年をとっていれば“dàbó(大伯)”“dàmā(大妈)”と呼ぶ。もともとの親族名称では、“bó(伯)”は父親より年上、“shū(叔)”は年下のおじさんをさす。dàbó, dàshū などは、“dà”の位置に姓あるいは名をいれてもよい。さらに年をとっていれば“dàye(大爷)”“dàniáng(大娘)”と呼ぶ。以上は、単独でも姓につけてもよい。dàye, dàniáng より高齢であったり、面識のない場合は“lǎodàye(老大爷)”“lǎodàniang(老大娘)”と呼ぶ。“yéye(爷爷)”“nǎinai(奶奶)”は世代がさらに一つ上になる。面識がなければ“lǎoyéye(老爷爷)”“lǎonǎinai(老奶奶)”とも呼ぶ。これらは、くわしくいえば、呼びかけか言及かによってことなる名称にもなるが、ここでは説明を省略する。

当然のことであるが、ひとりの人間に、親族名称をふくめ、種々の呼び方が可能であり、それがおたがいの距離をしめすことになる。たとえば、農村を舞台にしたあるシナリオでは、六二歳で貧農出身の寛さんを、六七歳の貧農のおばあさんはしたしみをこめて“Lǎo-Kuān(老宽)”(寛さん)と呼び、四〇歳の党支部書記と三〇歳の生産小隊長(女性)は“Kuān shū(宽叔)”(寛おじさん)、一七歳、一八歳、二〇歳の青年たちは“Kuān yéye(宽爷爷)”(寛じいさん)と、それぞれ当を得た呼び方で呼んでいる。ところが、四五歳のもと上層中農の男は、出身階層がことなり、考え方もちがうので、相応の敬意をはらわずに“Lǎo-Kuān”と呼び、また四二歳の県委員会部長は派遣されて来た外部の人間で、関係も深くないため、多少敬遠ぎみに“Kuān dàye(宽大爷)”(寛おじさん)といんぎんに呼んでいる。

この例とは反対に、上下いくつかの世代からおなじ呼び方をされる例もある。これも浩然の小説だが、「師匠は羊の飼育係で、名前は杜俊峰といった。村のひとたちはかれを尊敬して名ざしをこのまず、数世代ほど上でも下でも、みなかれを“Dù dàshū(杜大叔)”(杜おじさん)と呼んだ」とある。五七歳の杜俊峰に対して、かれより上の世代からは呼びすてにできるし、下の世代からは相応の親族名称で呼ばなければならぬはずである。“Dù dàshū(杜大叔)”という呼び名は、いわばすでに固定した愛称として、村のひとすべての敬愛の気持がこめられているのであろう。中国

の小説には、“Yáng èrshěn(杨二婶)”(楊の二番目のおばさん)などのように本名がしめされず、親族名称がそのまま固定して通称となった人物がよく登場する。

なお親族名称について付言すると、中国では自分の妻を子どもと同様に「おかあさん」と呼んだり、他人の子どもを大人が「おにいちゃん」「おねえちゃん」と呼ぶことはしない。前者は子どもの名前を添えて、たとえば“Xiǎo-Yīng de mā(小英的妈)”(英ちゃんのおかあさん)といったり、後者は“xiǎo dìdi(小弟弟)”“xiǎo mèimei(小妹妹)”という(dìdi, mèimei はそれぞれ「弟」「妹」の意)。ただし、親が子に向かって自分のことを“bà[ba](爸〔爸〕)”(おとうさん)、“mā[ma](妈〔妈〕)”(おかあさん)といったり、小学校の教師が児童に向かって自分のことを“lǎoshī(老师)”ということはできる。

親族名称は、また、ことばに日本語とは比較にならないほど重みがある。たとえば、お年寄りに声をかける場合、年齢からのみ呼び方を選択し、親族名称ではない“lǎotóur(老头儿)”(お年寄り)と呼んだのでは、尊敬の気持を十分にあらわすことができない。以前、小学生向けの雑誌で、ボール遊びの子どもたちが、となりの工場にとびこんでしまったボールを、老人にたのんで取ってもらう場面のえがかれたシナリオを読んだことがある。(16)

子どもたちがへい越しにのぞくと、年とった労働者のすがたが見える。“Lǎotóur, bǎ qiú huángěi wǒmen! Wèi——lǎotóur, lǎotóur……(老头儿，把球还给我们！喂——老头儿，老头儿……)”(おじいさん、ボールをかえしておくれよ。おーい、おじいさん、おじいさん……。)と大声をあげるが、ふりむいてくれない。こんどは“Lǎo-bóbo,duìbuqǐ——wǒmen bù xiǎoxīn bǎ qiú shuāijìnlai le, xièxie nín, qǐng nín bāng wǒmen rēngguòlai hǎo ma?(老伯伯，对不起——我们不小心把球摔进来了，谢谢您，请您帮我们扔过来好吗？)”(おじいさん、すみません——うっかりしてボールを投げ入れてしまいました。おねがいします。わたしたちにほうっていただけませんか？)と叫ぶと、ボールが投げかえされて来る。

“lǎobóbo(老伯伯)”は“lǎodàye(老大爷)”にも匹敵し、年配者を呼ぶ、敬意のこもったことばである。ここでは、親族名称のほかにも、種々のていねい表現が併用されているが、呼びかけに使われた lǎotóur と親族名称である lǎobóbo のちがいはけっして小さくない。なお、このシナリオのテーマが、子どもたちに敬語の使い方を教える点にあることは興味深い。

五 語彙的に見た敬語

現代の中国語では、ひとの呼び方以外、言語的に敬意をあらわす手段にとぼしいといえる。しかし、そのなかからいくつかの、敬語表現をつくる上で活用される語彙をとりあげてみることにする。

(一) ひとになにかすすめたり、おねがいをしたりする場合に使う“qǐng(请)”はもっともひろく用いられる敬語要素といえよう。

qǐng はふつう「もとめる、たのむ」の意味で使う。

“qǐng yì tiān jià(请一天假)”(一日の休暇をもとめる)

“qǐng tā jiǎng huà(请他讲话)”(かれに話をするようたのむ)

“qǐng nǐ jiǎng huà(请你讲话)”(あなたに話をするようたのむ――→どうか話をしてください)

また、「まねく、よぶ」の意味でも使う。

“qǐng kè(请客)”(お客をよぶ。ごちそうする)

“qǐng yīshēng(请医生)”(お医者さんをよぶ)

敬意をあらわす作用が直接しめされるのは、qǐng を動詞(句)の前におき、その動作・行為をするようにすすめたり、

おねがいをする場合である。その一部は結合のかたいあいさつ語となっている。

"qǐng jìnlai(请进来)"(どうぞお入りください)

"qǐng hē chá(请喝茶)"(どうぞお茶をめしあがれ)

"qǐngzuò(请坐)"(どうぞおすわりください)

"qǐngjiào(请教)"(お教えいただきたい)

"qǐngshì(请示)"(ご指示をあおぎたい)

qǐng は、文語においては、「〜してください」と相手に対し動作・行為をもとめるばかりでなく、むしろ「〜させてください」と自分自身の動作・行為をゆるすよう相手にもとめる場合に使われる。あとにつづく動詞の主体が、前者では"nǐ(你)"あるいは"nín(您)"(あなた)、後者では"wǒ(我)"(わたし)となる。現在、後者に属するものは日常のあいさつ語に"qǐngwèn(请问)"(おたずねします)の例がある。

qǐng は動詞とむすぶことなく、単独でも同様のはたらきをする。

"qǐng, qǐng(请,请)"(さあどうぞ)

"nín qǐng(您请)"(さあどうぞ)

"nín xiān qǐng(您先请)"(お先にどうぞ)

(二) 人間をさししめしたり、その数量をはかったりする場合の類別詞 classifier "wèi(位)"もひろく活用できる敬語要素である。ふつう、人間に関しては"nà ge rén(那个人)"(あのひと)、"yí ge wàiguórén(一个外国人)"(ひとりの外国人)など、類別詞に"ge(个)"を使う。もし類別詞に wèi を使えば敬意があらわれる。

"láile sān ge péngyou(来了三个朋友)"(友だちが三人来た)

"láile sān wèi péngyou(来了三位朋友)"(お友だちが三人見えた)

“lǎoshi(老师)”、“kèrén(客人)”(お客さん)など、はじめから wèi とむすびつきやすい名詞もある。

通常、wèi とむすぶ習慣のない名詞に用いられれば、そのはたらきが明確になる。

“Zhǔrèn, ……háishi bǎ zhè wèi xuésheng pàidào bié de duì qù ba.(主任，……还是把这位学生派到别的队去吧。)”(主任さん、やはりこちらの学生さんをほかの隊にいれてください。)

この例は、自分のところに配属されて来た学生が幹部の子弟なので、いささか敬遠し、ていねいな表現を使ったものである。

ひとを紹介する場合、目上や外来者には wèi を使うが、目下や話し手側に使う必要はない。類別詞の ge は人間が品物あつかいになる感じで、紹介の表現には用いない。

“Zhè wèi jiùshi Cuī Jìn tóngzhì, zhè shi wǒmen dǎngwěi fù-shūji……(这位就是崔进同志，这是我们党委副书记……)”(この方が崔進さんでいらっしゃいます。こちらはうちの党委員会の副書記で……)

人数をいう場合、目の前に聞き手がいるようなときは“liǎng wèi(两位)”(お二人)をさらに“èr wèi(二位)”とすることが多い。èr は liǎng にくらべ文語的で、いっそう敬意をますのであろう。[17]

“Nǐmen èr wèi yě shì shāngyèjú de ma?(你们二位也是商业局的吗？)”(あなた方お二人も商業局の方でいらっしゃいますか？)

二人称代名詞 nín の複数形 nínmen は、書きことばでは見かけるものの、話しことばでは使われないため、“nín èr wèi(您二位)”“nǐmen èr wèi(你们二位)”などのように、wèi を活用する。“nín liǎng ge(您两个)”とはいえない。

(三)　ひとの動作・行為に“tèyì(特意)”“tèdì(特地)”(とくに、わざわざ)などの副詞をそえると、その動作・行為に専心して取り組む姿勢がしめされ、敬意につながる例も多い。

“Xièxie nǐ tèyì lái jiē wǒ.(谢谢你特意来接我。)”(わざわざ迎えに来ていただきありがとう。)

話し手自身の動作・行為にも使える。

"Wǒ tèyì lái kàn nǐ.(我特意来看你。)"(わたしはぜひあなたにお会いしたいと思って参上しました。)

"Wǒ tèyì lái qǐngjiào yíxià.(我特意来请教一下。)"(ぜひ教えていただこうと存じ参上しました。)

ところで、日本語には多く見られるが、「いう→おっしゃる」「たべる→いただく」というように動詞を選択し、敬語表現をつくる例は、中国語の場合あまり多くない。それらのいくつかをあげてみよう。

(一) 友人に会うことを"kàn péngyou(看朋友)"というが、もしも目上に会うのであれば"Nǐ xiǎng jiàn Máo zhǔxí ma?(你想见毛主席吗?)"(あなたは毛主席にお会いになりたいですか?)といい、"Máo zhǔxí kàn nǐ lái le!(毛主席看你来了!)"(毛主席がきみに会いにいらっしゃった。)とは区別する。kàn は対象に目を向けて「見る」こと。そして、その結果「見える、目にうつる」ことを jiàn という。

(二) "Qǐng chī ba.(请吃吧。)"(どうぞたべてください。)の chī という直接的表現を避け、"Lǎoshī, nín cháng yì kǒu ba.(老师，您尝一口吧。)"(先生、一口あがってみてください。)、"Qǐng duō yòng diǎnr ba.(请多用点儿吧。)"(たくさんめしあがってください。)など、cháng(味わう)や yòng(飲食物をとる→めしあがる)のような間接的表現を使う。もし、話し手自身を主体にして cháng を使えば「いただく」と謙譲の意味になる。

(三) "Qǐng nǐ jiǎng huà.(请你讲话。)"(お話をおねがいします。)といわれた場合、これをうけて"Ràng wǒ lái shuō jǐ jù huà.(让我来说几句话。)"(すこしお話させていただきます。)と謙遜するのがよい。jiǎng と shuō を区別しない方言もあるが、jiǎng は話の内容に力点をおき、「あいさつする、講演する、訓辞する」など、意味が重くなる。shuō はただ口でしゃべること自体をいうから、これを使えば謙虚に聞こえる。

(四) "Nǐ yào bàogào xiē shénme?(你要报告些什么?)"(きみはどんなことを報告するの?)と聞かれた場合、"Wǒ shì yào xiàng yìxiē tóngzhì huìbào gōngzuò, zhēngqiú yìjiàn.(我是要向一些同志汇报工作，征求意见。)"(わたしはい

く人かの方々に仕事の報告をして意見をもとめるつもりです。)などと、bàogào を huìbào にかえて答えるのがよい。前者は正式の報告にかぎられるが、後者は非公式をもふくみ、みずからは huìbào という方が謙虚に聞こえる。

(五)　中国語だけではないが、日常あまり使われない、重々しいことばで敬意をあらわせる。"shēngrì(生日)"(誕生日)を"dànchén(诞辰)"、"àiren(爱人)"(妻——夫をもさす)を"fūrén(夫人)"、また"gěi(给)"(あげる、くれる)を"jǐyǔ(给予)"など、新聞紙上で、とりわけ対外的な礼をつくした文章に多くの用例を見ることができる。極端な例で「死ぬ」という表現は、おそらく"shìshì le(逝世了)"(逝去された)、"guòqu le(过去了)"(なくなった)……と拾い出せば三、四〇は集まるだろう。中国の新聞が、毛沢東主席をはじめ指導者たちに"shìshì le(逝世了)"をえらび、一方、「中国人民の公敵」蒋介石にもっとも日常的な"sǐ le(死了)"(死んだ)をえらんだのは印象的である。

六　ていねい表現と敬語

"wèi rénmín fúwù(为人民服务)"(人民に奉仕する)ということばがしめすとおり、資本主義国と意味はちがうが、サービス業にあっては、お客に対してやはり一定の敬語表現が使われる。

(一)　トロリーバスの車掌による乗客への案内(車掌を主人公にしたシナリオによる)。

"Gāng shàng chē jǐ wèi yǒu piào ma? Méi piào de qǐng mǎi piào.(刚上车几位有票吗?没票的请买票。)"(ただいまご乗車の方、切符をお持ちですか?　お持ちでない方はおもとめください。)

"Chē yào guǎiwān le, tóngzhìmen qǐng fúhǎo, lǎodàniang, lǎodàye tèbié zhùyì.(车要拐弯了,同志们请扶好,老大娘,老大爷特别注意。)"(まがります。みなさんしっかりおつかまりください。お年寄りはとくにご注意ください。)

二例とも、附点の部分によって敬意があらわされており、それらをとり去れば愛想のない表現しかつくれない。

"Gāng shànglai de, mǎi piào.(刚上来的, 买票。)"(いま乗ったひと、切符を買いなさい。)

これは、前の例と対比される、サービスの悪い車掌のぶっきらぼうな表現としておなじシナリオに使われている。

(二) 食堂のウェイトレスがお客の注文をとることば(ウェイトレスを主人公にした小説による)。

"Chī shénme ya, tóngzhì?(吃什么呀, 同志?)"(なにをたべますか? お客さん。)——つとめはじめたころ。

"Nín chī diǎn shénme?(您吃点什么?)"(なにをあがりますか?)——修業しているころ。

"Nín yòng diǎn shénme?(您用点什么?)"(なにをめしあがりますか?)——つとめだして一年たったころ。

時間が経過するにつれて敬語表現が身についていくさまが読みとれる。

さて、第二の例には、これまでにとりあげなかった、新しい要素が一つ添加されている。それは動詞の後につけられた"diǎn[r](点[儿])"である。通常、商店の店員はお客に"Jīntiān nín yào mǎi diǎn[r] shénme?(今天您要买点[儿]什么?)"(きょうはなにをさしあげましょう?)とたずねる。"diǎn[r](点[儿])"(すこし、ちょっと)を加えるのは、語気をやわらげ、ていねいな感じを出すためである。

どの言語においてもおなじであろうが、さそいかけたり、命令したり、依頼したり、なにかたずねたりする場合には婉曲ないいまわしをえらび、相手に心理的負担をかけないよう、ていねいな表現をつくるのがふつうである。中国語も、婉曲法を人間関係の潤滑油とし、いわば消極的に敬語表現を成り立たせる傾向がある。中国語における敬語のすがたを把握するには、範囲をひろげ、中国人がていねいと感じる間接的ないいまわしの数々を考察する必要もあるであろう。

語気をゆるめるには、動詞についていうと不定数量詞をつけたり、動詞の重ね型をつくる方法がもっともよく見られる。

"Gěi wǒ jièshào yíxià.（给我介绍一下。）"（ちょっと紹介してください。）

"Nǐ děng yi děng.（你等一等。）"（ちょっと待ってください。）

"Wǒ xiǎng wènwen nǐ.（我想问问你。）"（ちょっとおたずねします。）

最後の例の場合、"Wǒ xiǎng wèn nǐ.（我想问你。）"ではごつごつとした感じだが、"wèn（问）"（たずねる）を重ね型にすることで、語気がていねいになる。

また、文末に"hǎo bu hǎo?（好不好？）"や"hǎo ma?（好吗？）"、"hǎo ba?（好吧？）"（いいでしょう？）などをつけ加え、相手に相談をもちかけるような語気にすることがある。会話では常用される。

"Bié kāi wánxiào, hǎo bu hǎo?（别开玩笑，好不好？）"（冗談はおやめになったらいかがですか？）

"Qǐng gěi wǒ nálai, hǎo ma?（请给我拿来，好吗？）"（わたしに持って来ていただけませんか？）

"Wǒ jiè diànhuà dǎ yi dǎ, hǎo ma?（我借电话打一打，好吗？）"（電話を拝借してちょっとかけてもいいでしょうか？）

以上の二つの方法を併用する例も多い。

"Wǒ qù kàn yíxià, hǎo ba?（我去看一下，好吧？）"（ちょっと見に行っていいでしょう？）

可能や当然などをあらわす助動詞を使うときには"shì bu shì?（是不是？）"（〜でしょうか？）をそえ、判断を相手にゆだねるような語気にする例がある。ていねいな感じをあたえるのでよく用いられる。

"Shì bu shì néng chóngxīn kǎolǜ yíxià?（是不是能重新考虑一下？）"（もう一度お考えいただけないでしょうか？）

助動詞だけで"néng bu néng?（能不能？）"（できますか？）とした場合は、余裕のない表現になってしまう。

"Shì bu shì yīnggāi zhèyàng zuò?（是不是应该这样做？）"（こうすべきではないでしょうか？）

"shì bu shì?"がなければ、当然このようにすべきであるときめつけてしまうことになる。

もちろん、これらの手段にかかわり、文末におかれる語気助詞の活用によっても、ある程度まではぶっきらぼうな語気が避けられる。

一方、話し手自身の行動について、使役形で間接的に意志をしめし、謙遜の気持があふれた表現をつくることも少なくない。

"Ràng wǒ lái jièshào yīxià.(让我来介绍一下。)"(わたしにひとつ紹介させてください。)

"ràng(让)"を省略すれば「わたしがひとつ紹介しよう」と直接話し手の意志をのべる表現になってしまう。

この表現はあらたまった場面でもよく用いられる。

"Ràng wǒ rèliède zhùhè nǐmen xīnnián kuàilè.(让我热烈地祝贺你们新年快乐。)"(みなさまが新年をたのしくおすごしになるよう、心からおいのりさせていただきます。)

さらに、"qǐng yǔnxǔ wǒ～(请允许我～)"(わたしが～することをおゆるしください)は、公式の場面での表現になる。

話し手が自己の意志や判断をひかえ目に表現し謙虚さをしめすには、使役形によって、第一人称が正面に出るのを避けたり[18]、たとえば"wǒ rènwéi～(我认为～)"(わたしは～と考える)を"wǒ juéde hǎoxiàng～(我觉得好象～)"(わたしは～ではないかと思います)とするように、動詞に工夫をこらしたりするのが一般である。

これらのていねい表現も、実質的に敬語とひとしい作用をすると考えられよう。

七　敬語の変化

魯迅の小説「故郷」に、作者が、少年のころ"gē di(哥弟)"(兄・弟)と呼びあった雇い人のむすこ閏土から"lǎoye

(老爷)"(だんなさま)と呼ばれ、三〇年の間に生じた二人のへだたりを実感する場面がある。

現在、lǎoye をはじめ、"tàitai(太太)"(奥さま)、"shàoye(少爷)"(若だんなさま)、"xiǎojie(小姐)"(お嬢さま)など、「封建官僚買弁階級の特権思想をうつした」敬語はすでに消滅してしまっている。[19] これらが用いられるとすれば、否定的な意味をになうか、複合語のなかにおいてか、外国人に対してのみであろう。たとえば"chéngshì lǎoye wèi-shēng-bù(城市老爷卫生部)"(都市のだんな衛生部)は農村の医療に目を向けぬお役所の批判に使い、"lǎotàitai(老太太)"(おばあさん)は老婦人に言及するとき使い、xiǎojie は英語の miss にあて外交団の未婚女性などに使う。語義の変化について、『新華字典』の xiǎojie の項は「旧時上流社会の未婚の女子を称した。いまは多く外国人と接する場合に用いる」と説明している。この種の階級的身分関係をしめす敬語は相手にこびへつらい、自己を極端にさげすむものが多く、いまや、一般的には旧社会をえがいた文芸作品のなかでしか見られなくなったといえよう。現在、辞典のなかで"jìngcí(敬词)"(敬語)、"jìngchēng(敬称)"(敬称)、"zūnchēng(尊称)"(尊称)、"qiāncí(谦词)"(謙譲語)、"qiānchēng(谦称)"(卑称)、"tàoyǔ(套语)"(慣用のあいさつ語)などと注記されていることばは、その大半に"jiùshí(旧时)"(旧時)の二字がつけ加えられている。

それらのなかに、聞き手やそれに属する事物に敬意をしめしたり、また話し手やそれに属する事物を卑下したりするときに使い、多く名詞をつくる接辞的な成分がある。わが国でも書簡文に用いられているものが少なくない。

(1) 尊　敬

guì(贵)　"guìguó(贵国)"(貴国)　"guìxiào(贵校)"(貴校)　"guìxìng(贵姓)"(ご名字)

gāo(高)　"gāojiàn(高见)"(ご高見)　"gāoshòu(高寿)"(お年――多く老人にたずねる場合)

dà(大)　"dàzuò(大作)"(貴著)　"dàmíng(大名)"(ご高名)

lìng(令)　"lìngzūn(令尊)"(お父上)　"lìngtáng(令堂)"(お母上)　"lìngláng(令郎)"(ご令息)　"lìng'ài(令

爱)”(ご令嬢)

xián(贤)　“xiándì(贤弟)”(自分の弟や自分より年下の友人に対する敬称)　“xiánqī(贤妻)”(他人の妻に対する敬称)

zūn(尊)　“zūnxìng(尊姓)”(ご名字)　“zūnfǔ(尊府)”“zūnjià(尊驾)”(お宅)

bǎo(宝)　“bǎodì(宝地)”(御地)　“bǎojuàn(宝眷)”(ご家族)

yǎ(雅)　“yǎjiào(雅教)”(ご教示)　“yǎyì(雅意)”(あなたのお考え)

tái(台)　“táifǔ(台甫)”(ご雅号)　“táijiàn(台鉴)”(ご覧にいれる)　“xiōngtái(兄台)”(貴君、貴下)

(2) 謙　譲

jiàn(贱)　“jiànxìng(贱姓)”(わたしの名字)　“jiànyàng(贱恙)”(わたしの病気)

bì(敝)　“bìxìng(敝姓)”(わたしの名字)　“bìchù(敝处)”(わたしのところ、わたしの郷里)

bǐ(鄙)　“bǐrén(鄙人)”(わたくし)　“bǐyì(鄙意)”“bǐjiàn(鄙见)”(愚見)

shè(舍)　“shèdì(舍弟)”(わたしの弟)　“shèmèi(舍妹)”(わたしの妹)　“shèzhí(舍侄)”(わたしのおい)

jiā(家)　“jiāfù(家父)”(わたしの父)　“jiāmǔ(家母)”(わたしの母)　“jiāshū(家叔)”(わたしのおじ)

xiǎo(小)　“xiǎodì(小弟)”(わたくし——同輩に対して)

yú(愚)　“yújiàn(愚见)”(愚見)　“yúxiōng(愚兄)”(わたくし——自分より年下の友人に対して)

zhuō(拙)　“zhuōjiàn(拙见)”(愚見)　“zhuōzuò(拙作)”(愚作)

これらはもともと書きことば、とくに書簡文で用いられることが多かった。現在、尊敬語では“guì(贵)”が比較的ひろく使われるだけで、ほかは個別的に若干の用例を見るのみである。謙譲語は、ほとんどすべて用いられなくなった。

gui はなお生命があるとはいえ、おおよそ人称代名詞でいれかえができる。商業文で使われる“guìfāng(贵方)”や“guì gōngsī(贵公司)”(貴社)にはそれぞれ“nǐfāng(你方)”“nǐ gōngsī(你公司)”も平行して用いられる。“bì gōngsī(敝公司)”(敝社)はすでに消え、“wǒfāng(我方)”“wǒ gōngsī(我公司)”(わが社)という。また“[Nǐ] guìxìng?([你]贵姓?)”(ご名字はなんとおっしゃいますか?)というていねいな表現も、一般には“Nǐ xìng shénme?(你姓什么?)”といっている。“Lǎo shīfu, nín guìxìng?(老师傅，您贵姓?)”と最高級の敬語で名前をたずねられた年配の労働者が、“Bié zhèyàng kèqi.(别这样客气。)”(そんなにていねいにしないでください。)とすっかり恐縮する実例がある。

相手の家族に言及する場合のlìng(令)を接辞とする敬語も、いまはすべて人称代名詞を使い“nín fùqin(您父亲)”(お父上)、“nín mǔqin(您母亲)”(お母上)のようにいう。自分の家族に言及する場合、“jiā(家)”は自分より世代が上の(あるいは年の大きい)もの、“shè(舍)”は自分より世代が下の(あるいは年の小さい)ものに使うという区別も、いまはすべて人称代名詞を使い“wǒ fùqin(我父亲)”(わたしの父)、“wǒ dìdi(我弟弟)”(わたしの弟)のようにいっている。

つぎに、話し手の動作・行為に関連し、動詞性の敬語をつくる接辞的な成分をあげる。

bài(拜)　“bàituō(拜托)”“bàiqǐng(拜请)”(おねがいする)　“bàifǎng(拜访)”“bàihuì(拜会)”“bàiwàng(拜望)”(訪問する)

fèng(奉)　“fèngpéi(奉陪)”(おともする)　“fèngquàn(奉劝)”(おすすめする)　“fènggào(奉告)”(お知らせする)　“fèngsòng(奉送)”(差し上げる)　“fènghuán(奉还)”(おかえしする)

gǎn(敢)　“gǎnwèn(敢问)”(失礼をかえりみずおたずねする)　“gǎnqǐng(敢请)”(失礼をかえりみずおねがいする)

聞き手の動作行為にかかわる例もある。

shǎng(赏)　“shǎngguāng(赏光)”(おいでくださる)　“shǎngshōu(赏收)”(お収めくださる)

これらはさきにあげた名詞性の敬語とちがい、直接のいいかえがかならずしも容易にはできないためか、bàituō, bàifǎng, bàihuì などが常用されるのをはじめ、そのほか現在も比較的使われる例が多い。ただ、ときには“wǒmen fèngquàn Sūlián zhèngfǔ～(我们奉劝苏联政府～)”(われわれはソ連政府に～するようにおすすめ申し上げる)というように、諷刺をこめて用いられる。

いわゆる“yìngchóuhuà(应酬话)”(社交用語)、“kètàohuà(客套话)”(おざなりのあいさつ語)のなかで、実質のともなわない、見せかけのことばは、“jiǔyǎng(久仰)”(ご高名はかねがね存じ上げております)、“tuōfú(托福)”(おかげさまで)、“qǐgǎn(岂敢)”(どういたしまして)などのように、社会のうつりかわりとともに消え、“láojià(劳驾)”“xīnkǔ(辛苦)”(ご苦労さま)などいまも生命を有するものと、内容的にもはっきりした対比が見られる。

なお、“xiǎojie(小姐)”(お嬢さん)のように、過去のことばとなった敬語のなかで、外国人や海外華僑に対しては、いまも使う例があることを注意しなければならない。

八　書簡文と敬語

ここで、敬意の表現に関し、用語や形式にもっとも心をくばる書簡文について、すこしふれておこう。

現在は書簡文も口語体で、文語体を用いることはない。“xī cì huíyīn(希赐回音)”(なにとぞお返事をたまわりたく存じます)、“jìng qǐng jūn'ān(敬请钧安)”(つつしんでごきげんをおうかがいします)といった類の、伝統的な尺牘用語もほとんど使われない。まわりくどい過剰表現も少なくなっている。たとえば、在来の書簡文で要求・依頼などをいいあらわす場合、“qǐng～shì xìng(请～是幸)”“wù qǐng～shì hè(务请～是荷)”“jí qǐng～wéi hè(即请～为荷)”(～していただければ幸いに存じます)などのように表現していたが、いまは“qǐng～(请～)”(どうぞ～してください)、

"xīwàng ～(希望～)"(～を希望します)など、かざりけの少ない、すっきりしたいいまわしになっている。招待状などでさえ、末尾の"jìng qǐng guānglín"(敬请光临)"(ご来臨たまわりたくつつしんでおねがい申し上げます)の部分が、いまでは"qǐng chūxí(请出席)"(ご出席ください)と明快である。書簡文らしい敬語要素は"jìng(敬)""jǐn(谨)"(つつしんで～)、"fèng(奉)""bài(拜)"(いずれも前出)などをはじめ、限定されたいくつかにかぎられる。

形式について、その標準的なスタイルをいうと、中国では左横書きを採用している。通常、まずあて名を書き、行をあらため二字分下げて、本文を書きはじめる。あて名は"～tóngzhì(～同志)"とするが、職名にすれば尊敬の気持があらわれる。さらに、"zūnjìng de ～(尊敬的～)"(尊敬する～)、"jìng'ài de ～(敬爱的～)"(敬愛する～)、"qīn'ài de ～(亲爱的～)"(親愛なる～)などの語句を姓の前につければ、なお敬意がこもる。"jìngqǐzhě(敬启者)"(拝啓)といった書き出しはせず、必要があれば"Nǐ hǎo!(你好!)""Nín hǎo!(您好!)"(こんにちは。)とあいさつをしるすだけでよい。むすびは"cǐ zhì jìnglǐ(此致敬礼)"(ここにごあいさつ申し上げます)が一般的だが、目上には"jìng wèn ānhǎo(敬问安好)"(つつしんでごきげんをおうかがいします)のような、尊敬の気持がはっきりあらわれる表現をえらぶ。これらの四字句ははじめの二字を本文につづけるか、改行し二字分下げて書き、後の二字はさらに改行して、冒頭のあて名と書き出しをそろえる。これは、相手に関する語句が使われる個所では「擡頭」(書簡文で敬意をあらわすため、改行すること)を用いる習慣の名残りである。現在は略式化しているので「空格」(書簡文で敬意をあらわすため、相手に関係したことばのところで一字分あけること)はほとんどおこなわれない。

おわりに

社会体制の変化は新しい価値観を生み出し、敬語の意識もうつりかわった。

現代の中国では、家庭における親と子、職場における上級者と下級者の関係を「おなじ塹壕のなかの戦友」にたとえることがある。〝tóngzhì(同志)〟ということばが象徴するように、持ち場とやくわりはちがっても、それぞれが革命に貢献することにかわりはない。身分の高低貴賤よりも、実践につながる知識や技術、すぐれた経験などに敬意をはらい、ともに学びあうという謙虚さが重視されている。

親族名称による世代の認識も、封建社会における長幼の序とか、「犯上」(上の者をおかす――長上をないがしろにする)ということばに直接つながるものでなく、むしろ連帯意識のつよい敬愛の表現と考えたい。年長者をうやまう、人間としての自然な感情は、老人を尊敬した〝~lǎo(~老)〟(郭沫若は郭老と呼ばれる)という称呼にもうかがえる。

中国語から日本語にことばをうつすとき、往々、行間を読み、表現をおぎなう必要を感じる。わたくし自身の経験だが、中国の国内空路で、お茶のポットを手にしたスチュアーデスから〝Yào bu yào?(要不要?)〟と声をかけられ、一瞬、「ほしいか?」といったたぐいの日本語につながってしまったため、びっくりしたことがある。日本人はことばの上に敬意をあらわそうとするので、〝Bú yào.(不要。)〟(いらない。)という簡潔な答えすら口にするのをためらってしまう。おそらく、そこでは、声の出し方、抑揚、表情、身ぶりなども重要なはたらきをするのであろう。

中国人からすると、日本人はひとの話に、〝Shì ma?(是吗?)〟(本当ですか?)を乱発するため、発言を疑われているようで不愉快に感じるらしい。日本人にとっては、話し手の発言中に「ええ」「そう」などとあいづちをうち、相手に対する尊重の表示をしているつもりなのだが、中国人は相手のことばをだまって〝xǐ ěr gōng tīng(洗耳恭听)〟(うやうやしく傾聴)する方が礼にかなっているらしい。敬意の非言語的な表現については、なお、今後の考察が必要である。

(1) 日本語で書かれた論文のうち主要なものをあげる。

太田辰夫「中国における敬語の問題」(『言語生活』二四九号、一九七二年)。
藤堂明保「中国語の敬語」(敬語講座第八巻『世界の敬語』明治書院、一九七四年)。

(2) Lǚ Shū-xiāng(吕叔湘)，中国文法要略 中巻，商务印书馆 上海，1954, pp. 50–55.
Wáng Lì(王力)，汉语史稿 中册，科学出版社 北京，1958, pp. 275–277.

(3) Chāng Huá(昌华)，"'同志'——崇高的革命称呼"，学习与批判，1975年第4期，p. 29.

(4) 称呼について論究した文献のうち主要なものをあげる。
Chao, Yuen Ren(赵元任)，"Chinese terms of address", Language 32, 1956, pp. 217–241.
大河内康憲「中国語における呼びかけ語について」(『中国語学』七九号、一九五八年)。
羅漾明・竹内実「名前について」(『中国語』一五二—一五五号、一九七二年)。
楊為夫・陳文芷「呼称」(『ＮＨＫ中国語入門』テキスト一三巻四—六号、一九七五—七六年)。

(5) 羅漾明・竹内実、前掲論文(一五五号)。

(6) Máo Chéng-dòng(毛成栋)，Fáng Yù-qìng(房玉清)，Wáng Huán(王环)，"建国以来汉语词汇的发展变化"，Journal of Chinese Linguistics 2.3, 1974, p. 249.

(7) Máo Chéng-dòng(毛成栋)ほか，前掲論文。

(8) Guō Dé-rùn(郭德润)，几组常用词的分别，北京人民出版社 北京，1973, p. 16.

(9) Lǚ Shū-xiāng(吕叔湘)，"说们"(汉语语法论文集，科学出版社 北京，1955) pp. 163–5.
Guō Dé-rùn(郭德润)，前掲書。

(10) Wáng Lì(王力)，中国现代语法 下册，中华书局 北京，1955, p. 16.
Wáng Lì(王力)，广东人怎样学习普通话，文化教育出版社 北京，1956, p. 103.

(11) Chao, Yuen Ren(赵元任)，A Grammar of Spoken Chinese, California, 1968, p. 640.

(12) Wáng Lì(王力)，前掲書(汉语史稿 中册) p. 278.

(13) Lín Xiáng-méi(林祥楣)，代词，新知识出版社 上海，1958, p. 14.

(14) 福地滋子「北京語における親族名称の一用法」(『中国語学』二一九号、一九七四年)八一—九頁。

(15) 楊為夫・陳文芷、前掲論文(一三巻六号)。

(16) 儿童时代，1966年第7期，pp. 25–29.

(17) 相原茂「èr と liǎng について」(『JIAOXUE』一号、一九七五年)二六頁。

(18) Chao, Yuen Ren(赵元任)，前掲書 p. 639.

(19) Máo Chéng-dòng(毛成栋)ほか，前掲論文。

9　英語圏における敬語

久野　暲

はじめに

よく「英語には敬語がない」と言われる。これは事実の半面しかついていないことばである。英語には、日本語の敬語体系の中核をなす特徴の大部分が欠けている半面、尊敬・謙譲・丁寧・美化を表わす言語手段がない訳ではもちろんないからである。日本語の敬語体系を特徴づけているのは、何と言っても、敬語表現専用の規則的な文法手段の存在であろう。例えば、「読ム」に対する「読マレル・オ読ミニナル・オ読ミダ」や、「美シイ」に対する「オ美シイ」に見られる尊敬体の連語・派生法、「読ム」に対する「オ読ミスル」に見られる謙譲体の連語法、さらに「読ム・美シイ・本ダ」に対する「読ミマス・美シイデス・本デス」に見られる丁寧体の派生・交代法は、すべて敬語表現専用の規則的・広範的文法手段である。ところが、英語には上記の文法手段のいずれもが欠けている。この意味で、英語には敬語表現専用の規則的な文法手段はないと言うことができる。英語文法の中で、敬語法が体系的に取り扱われることがないのはこのためである。

他方、上記の規則的な専用的文法手段が、日本語の敬語法のすべてではもちろんない。例えば目上の人に物事を依頼する場合、尊敬体の命令形「――テクダサイ(読ンデクダサイ・開ケテクダサイ)」を用いる代りに、間接的表現である疑問文(読ンデクダサイマセンカ)を用いたり、条件法的構文パターン(読ンデクダサルトアリガタイノデスガ)を用いたりするのも、日本語敬語の一部であろう。このように、敬語専用でない文法手段を用いて間接的に敬意を表わす用法をも含めて敬語を論じる場合、「英語には敬語がない」という表現は真ではあり得ない。何故なら、命令・依頼を表わす上記のような間接表現法は、恐らくどの言語にも存在するものであり、英語も例外ではないからである。[1]

一　呼称詞

1　親族関係の呼称詞

「英語にも敬語がある」と言う時、第一にその例として示されるのは、対称詞、すなわち聞き手に対する呼びかけに用いられる表現であろう。日英語の親族内部の呼称用法の違いについては、鈴木孝夫のすぐれた研究がある。(2) 日本語・英語とも、聞き手が話し手よりも上位にあるか下位にあるかによって次の規則が成立する。

㈠ 話し手が親族関係で上位の聞き手に対する場合、

(1) 対称詞は親族名称しか使えない。

(例) 子供は父親のことを「オ父サン、パパ」と呼ぶが、父親の名前を用いて「太郎さん」とは言えない。

(2) 自称詞に親族名称が使えない。

(例) 子供が父親に対して自分のことを「息子、娘」とは呼べない。

㈡ 話し手が親族関係で下位の聞き手に対する場合、

(1) 対称詞は親族名称が使えない。

(例) 父親が子供のことを通常「息子、娘」と呼べない。(3)

(2) 自称詞は親族名称が使える。

(例) 父親が子供に対して、自分のことを「オ父サン、パパ」と呼べる。(4)

日本語と英語の違いは、親族関係の上下関係の境界線がどこにあるかに存する。すなわち日本語では同世代(兄弟

姉妹関係・従兄弟姉妹関係)でも年齢によって上下がつくが、英語では、同世代なら、年齢の差が問題にならないことにある。例えば日本語では、兄弟間の会話で兄に対しては親族名称「オ兄サン」が用いられ、名前(「一郎サン」)が用いられないのに反して、弟に対しては、「弟」が用いられず、名前(「三郎」)が用いられる。これに反して英語では、話し手の兄に対して、弟に対すると同じく、"brother"が用いられず、"John"のようにファースト・ネームが用いられる。

姉妹間で、ファースト・ネームを用いる代りに、"sis"("sister"の略語)を用いて呼び合う家庭がある。ファースト・ネームよりも親愛の情が深く、"sweet"(「甘い」)な対称詞である。著者自身の家庭では、娘(八歳と七歳)は通常ファースト・ネームを用いて呼び合うが、「ままごと遊び」(架空の家族の姉妹の役割を演ずる)をする時には、"sis"を用いて呼び合う。ここで注意すべきことは、"sis"は姉妹が相互に用いることのできる対称詞で、「英語は同じ世代の親族を同格視する」という原則に反していないことである。英国では、兄弟間で"bro"("brother"の略語)が用いられることがあるが、"sis"の使用ほど一般的ではない。

英語では例外的に、親が子供に、自分を指すのにファースト・ネームを用いることを許している家族がある。これは特に若い世代の家族に多い。「親も子供も平等である」あるいは「親は子供のよき友でなければならない」という思想に由来する現象と思われる。特に、母親が自分の子供を連れて再婚した場合、新しい父親は、子供から母親の家族の一員として受け入れてもらうため、父親の権威を代償として、ファースト・ネームで呼び合う友達・兄弟関係を確立しようと努力することが多い。

子供が親を"Mother, Father"などの親族名称で呼んでいる家庭では、子供同士の会話で親を指す際、同じ親族名称が用いられる。このような家庭の子供の一人が、子供間の会話に親のファースト・ネーム(例えば"Helen")を用い始め、次第に親に対してもファースト・ネームを用いるようになったという実例がある。これは稀なケースであるが、

その子供が母親を母親として尊敬せず、自分と同格視するという意志表示であって、その意志表示が最初、兄弟姉妹に対して行なわれ、次に母親に対して直接行なわれるようになったという推移は極めて興味深いものがある。

2　非親族関係の呼称詞

よく「英語では、会話の相手が誰であろうと"you"を用いればよいが、日本語では「山田先生」「先生」「あなた」「君」「奥さん」などいろいろと使いわけをしなければならないから日本語は大変だ」と言われる。ところが、英語でもそれほど楽ではないのである。まず第一に、日本語では、人と会った時のあいさつに、「おはようございます」「今日は」と言っていれば済むが、英語では、相手の名前を知っている場合は、"Good morning, John."とか"How are you, Mr. Smith."と、名前をつけるのが一般の習慣である。相手の名前を知っているべきで忘れてしまったような場合、相手に"Hi, John."と声をかけられて返事に"Oh, hi."といっただけでは調子が悪い。日本語では相手の名前を忘れてしまっても呼称に「先生」「おたく」「奥さん」などを使っていれば十分であるが、英語ではそうはいかない。特に、会話の場に居合わせた第三人者のことを"he, she"というのは失礼になることが多い(後出)ので、名前を用いる必要が生じるが、その名前を忘れてしまった場合は大変困る。アメリカのパーティーなどで、よく"Do you remember John's wife's name?"(ジョンの奥さんの名前、覚えていますか。)などと低い声で尋ねている人を見かける。これは特に、勤め先の同僚の、たまにしか会わない夫人の名前を尋ねる場合であることが多い。同僚をファースト・ネームで呼んでいる場合には、通常その夫人もファースト・ネームで呼ばなければならない。その夫人に直接、"Hi, ——."とあいさつする前の準備である。また、他の人との会話中、その夫人が聞こえる所で、彼女のことを"John's wife"と言えば、彼女に対して失礼である。これは話し手が彼女を一個の人間としては見ず、あくまでも誰それの女房として見ていることを示す表現だからである。

名前を用いる必要は、あいさつの時とか、他の人と当人のことを話す時に限られている訳ではない。会話中、"Yes, John."とか"I don't think so, John."というように、相手の名前を時々入れる傾向がある。これは相手の話を興味を持って聞いている、あるいは相手に対して個人的関心を持っていることを示す一表現手段であって、ファースト・ネームで呼び合う間の会話に現われることが多い。このような、会話中の対称詞の使用は、特に話し手が聞き手の意見に反対したり、聞き手を批判したりする時に多く見られる。これは話し手が、反対・批判しているにもかかわらず、聞き手に対して親愛感を抱いていることを表わす表現で、反対・批判を和らげる効果を持っている。英語の会話における上記のような姓名のひんぱんな使用が、英語の対称詞の問題を、日本人が想像する以上に重要な、そして複雑な問題にしている。

さて、親族関係にない話し手聞き手の間で英語の対称詞としてファースト・ネームがよく用いられることはあまりもよく知られている事実である。同じ年配の同じグループに属する人たち(例えば学生同士、あるいは同じ会社の同じ課の課員たち)の間では、初対面でも、紹介が終るとすぐにファースト・ネームで呼び合うのが普通である。このような関係にある人たちの間で、"Mr. Johnson", "Miss Robinson"のような対称詞を用いると、逆に距離をおいた、仲間扱いをしていない表現となり、かえって相手に失礼になることがあり得る。

年齢・地位に格段の上下関係がある場合にはファースト・ネームの使用が複雑になって来る。上位の者は、紹介が終った直後に下位の者に対してファースト・ネームを用いることができるが、下位の者は上位の聞き手に対してそう簡単にファースト・ネームを用いることはできない。上位の者が"Please call me Jack."(ジャックと呼んで下さい。)と自ら進んでファースト・ネームの使用をすすめた場合には問題がないが、そのような誘いのない場合には、タイミングが微妙になって来る。もちろん下位の者Aと上位の者Bとの仕事上、あるいは社交上の関係が密接になるにつれ、AがBをファースト・ネームで呼ぶ下地が固まって来る訳であるが、ファースト・ネームに移るきっかけを作るのが

大変むつかしい。AのBに対する関係が、ファースト・ネームを使用するに値するとAが判断した場合には、AはBに"Would you mind if I called you Jack?"(ジャックとお呼びしていいでしょうか。)などと率直に尋ねることができるが、二人の年齢、地位の差が大きければ大きいほど、そのタイミングがむつかしい。例えば、大学の若い新任の助教授が、同じ学科の老教授をファースト・ネームで呼ぶのは、学科全体の雰囲気がインフォーマルであればあまり抵抗なくできるが、他学科の老教授をファースト・ネームで呼び始めるのは、かなり密接な学問上・社交上の関係が成立してからであろう。一般的に言って、地位関係が年齢関係に優先し、例えば社長と年上の社員の間では、社員が自分の側からファースト・ネームを使い出すことはできないであろう。

上に述べた複雑なファースト・ネーム使用の現実を表わす一例として、アメリカ東部の一大学のある中年の教授(仮りにJohn Smithと呼ぶ)と、大学の教職員・学生との関係を示してみる。

(一) 同じ学科内の教授(老教授もふくめて)・助教授・講師・秘書全員に対してファースト・ネームを用い、また彼らからも"John"と呼ばれている。

(二) Smith教授と同じ学科内の大学院学生。

(1) Smith教授は、全大学院生に対してファースト・ネームを用いている。[5]

(2) 同教授が直接研究指導をしている学生はすべて、同教授に対する呼称として"John"を用いる。[6]

(3) 同教授が直接個人指導していない学生は彼のことを、

(i) 大学院三年生およびそれ以上は、すべて"John"

(ii) 大学院二年生は"John"と"Professor Smith"と半々、

(iii) 大学院一年生はすべて"Professor Smith"と呼んでいる。

(三) Smith 教授と同じ学科内の学部の学生。

同教授は二、三回話したことのある学生に対してはファースト・ネームを用いることにしているが、教授が直接研究指導をしている学生でも、少数の例外を除き同教授を"Professor Smith"と呼んでいる。

(四) Smith 教授と他学科の教授。

(1) 同年配の他学科教授とは、あまり学問的・社交的交際がなくてもお互いにファースト・ネームで呼び合う。

(2) 二〇歳年上の他学科教授とは、(1)よりも交際が多いがお互いに"Professor X"と呼び合っている。

(五) Smith 教授と他学科の助教授。

教授は、何らかの学問的・社交的接触のある人に対してはすべてファースト・ネームを用いて呼びかける。助教授たちのうち特別密接な接触のある人は同教授を"John"と呼ぶが、そうでない人は"Professor Smith"と呼ぶ。

(六) Smith 教授と文理学部長。

同教授は、学科主任として学部長と直接接触することが多い。お互いにファースト・ネームで呼び合う。

(七) Smith 教授と大学総長。

同教授は大学総長と面識はあるが、直接事務的交渉をすることはない。お互いにファースト・ネームを用いない。

以上の記述からも明らかなように、ファースト・ネームの使用は、地位・年齢・交際の度合などいろいろな要因の相互関係に影響される極めて複雑な現象である。ここに記述した Smith 教授をめぐる関係は、フォーマル過ぎず、またインフォーマル過ぎぬ、平均的大学教授の人間関係を表わしていると考えてよい。

通常AがBに対してファースト・ネームを用いている場合でも、次のような状況のもとではよく"Mr. X", "Professor X"のようなフォーマルな対称詞が用いられる。

(一) 会話の場にCが存在し、CはまだBをファースト・ネームで呼べる関係にない場合——特にB対A・Cの上下

関係が大きい時——Aは自分だけがBと親しいということを得意にしているような印象をCに与えないため、わざわざCが用いるのと同じ対称詞を用いる。

(二) AがBを自分の子供に紹介するような時、"This is John." などとは普通言わない。子供がCに対して使うべき対称詞を用いて、"This is Mr. Robertson." などと紹介する。教師が学生に他の教師を紹介するような状況でも、同じことが言える。

(三) ふだんBに対してファースト・ネームを使っているAが急に "Mr. X" のような表現を使った場合には、二人の間に今までのような親しい間柄が存在しなくなったというしるしで、AがBに対して腹を立てていることを示す。(7)

二　代　名　詞

日本語の一人称、二人称、三人称代名詞が、話し手、聞き手、指示対象の関係によって異なったかたちをとることはよく知られている。また二人称代名詞が尊敬表現にはあまり現われず、代りに聞き手の名前と称号(「山田先生ハドウナサイマスカ」)あるいは称号のみ(「先生ハ……」)が用いられることもよく知られている。英語にはI—we—you—you(複数)—he—she—theyという一組の代名詞しか存在しない。(8)また、聞き手の名前と称号が二人称代名詞代りに用いられることも一般の状況では皆無である。(9)したがって、英語の代名詞体系には、尊敬・謙譲・丁寧を表わす規則的手段がないと一般的に言える。"How are you?" は聞き手の地位・年齢を問わず "you" が用いられるし、"I want to meet him." の "him" は大統領でも乞食でも同様に指し得る。

だからと言って、英語の代名詞が敬語と全く無関係であるという訳ではない。本節では、一人称複数代名詞 "we"

と三人称代名詞 "he, she" が広い意味での敬語法と関連を持っていることを示す。

1　一人称複数代名詞

一人の話し手・書き手が自分を指す代名詞として "I" の代りに "we" を用いる用法は editorial "we" と呼ばれ、元来は謙虚さ(自分一人の意見を自分一人の意見として表面に出さず、話し手・書き手を含めた複数の人の意見として出す)を示すものとして、学術論文などで一般に用いられていたが、近年その性格が少し変って来ているようである。自分の意見は自分の意見として率直に述べるという若い学者たちの傾向に従って、学術論文に "I" が自由に用いられるようになり、一人の著者の論文に "we" が用いられていると、複数の研究者の共同研究の結果を著者が代表して発表しているという印象を与えることが多くなって来ている。特に若い研究者が一人で行なった研究を口頭発表する際 "we" を用いると逆に気取った響きを持つ。同様、学生が教師に提出する研究レポートに "we" を用いるのは適当でない。学生が自分を一人前の学者と見なし、研究レポートを学術論文と見なしているような印象を与えるからである。これらの例からも明らかなように、"I" の代りに "we" を用いるのはフォーマルな学術論文に限られ、若い学者たちの用法からは姿を消し始めている。

"we" のもう一つの用法として、意味的には二人称(聞き手)を指す用法がある。たとえば、人に注意をあたえる場合、

You shouldn't do things like this.(こんなことは、すべきでない。)

と、"you" を用いる代りに "we" を用いると、その人に対する直接的注意でなく、聞き手、話し手両者に適用する注意となり、感じがやわらげられる。

"we" の上記二用法は、一人称複数代名詞の例外的な用法であるが、その通常的な用法にも、敬語法と関係して来

る部分がある。例えば、目上の人が目下の人を含めて"we"というのに問題がないが、目下の人が目上の人を含めて"we"というのは、目上の人に対して失礼になることがある。[10] 巨頭会談の後の共同記者会見で、記者の質問に対して、答弁者が"Prime Minister X and I discussed this problem at length and…"(X総理大臣閣下と私は、この問題について長時間議論致しまして……)のように、繰り返し繰り返し"X and I"を用い、"we"の使用を避ける傾向があるのも同じ理由によるものと思われる。これは、通常の用法の"we"があくまでも話し手中心の代名詞であって、それに含まれる第三者、あるいは聞き手が、話し手に対して従属的な地位を与えられることに起因しているものと思われる。ただし、目上の人、あるいは敬意を表すべき人を含んだ"we"が常にその人に対して失礼である訳ではない。どのような状況で、失礼になるか否かについては、今後の研究を待たなければならない。

2　三人称代名詞

英語には、"Who's she? The cat's mother?"という格言のような表現がある。これは、「"she"って誰のことだ。猫の母親のことか」の意味、つまり子猫には母猫の聞えるところで、"Don't bother me. Find her."(うるさいね。自分の親の処へ行け。)と言えるが、人間には、本人の聞こえる所で"he, she"を用いてはいけないという意味である。[11]

例えば、秘書A、秘書Bのいる部屋に学生が入って来てAに、

What's the deadline for scholarship applications?

(奨学金申し込みの締切りはいつですか。)

と尋ねた場合、Aが学生に、

I don't know. Ask her.

(私は知らないから、彼女に尋ねなさい。)

と言ってBを指せば、Bに対して失礼になる。Bの名前を使って"Ask Karen."と言わなければならない。

同様、買物に来たお客が店員Aに、例えばネーブルが一二個欲しいと伝え、店員Aが店員Bにネーブルが残っているかどうか尋ねる時、

He wants a dozen navel oranges. Do we have any left?

（この人、ネーブル一二個御入用。まだ残ってますか。）

とは言えない。お客の聞こえる所で"he"を用いてお客を指すのは大変失礼だからである。店員Aは、Bに、

This customer would like a dozen navel oranges.

（このお客様はネーブルを一二個お求めです。）

と言わなければならないのである。

店の場合には客を指す一般的名詞"customer"があるから良いが、もっと一般的な状況では適当な名詞がなくて困ることがある。例えば駅でSouth Stationに行くにはどうして行ったらよいかと誰か(A)に尋ねられて、誰か他の人にAを引き渡す時どうするか。

This gentleman/lady would like to go to South Station.

（この男(女)の方、South Stationにいらっしゃりたいのですが。）

が一般的な表現であろう。"this gentleman"の代りに"this man"を用いても一向構わないという人もあるし、"this man"は"this gentleman"ほど丁寧でないという人もいる。"this lady"の代りに"this woman"を用いると失礼になる。もっともこれは指示対象の社会的地位・教養にも関係して来るらしい。指示対象が、明らかに下層の無教養の女性の場合は、全然軽蔑を意図しないで"This woman wants…"と言え、"This lady…"とは言えないという人もいる。いずれにしても、今問題にしている状況で、Aを指すのに"he, she"を用いると失礼になることは注意に値す

る。

指示対象が中・高校生ぐらいの年配の時は、"this young man" とか "this young lady" とかいう表現が用いられる。同じ表現が、小学生ぐらいの小さい子供にも用いられ得る。ただしこの表現は、話し手が指示対象よりかなり年上であることを前提としているので、話し手も同じ年配(中・高校生)の時には、適当な表現がない。"this guy" というインフォーマルな表現を使うより仕方がないであろう。もちろん高校生ぐらいの年齢の店員が、高校生ぐらいの客を指して、

This guy wants a dozen navel oranges.

(この人、ネーブル一二個ほしいんだって。)

と言ったら、その客に失礼になる。"This customer..." と言わなければならない。

上に挙げた例はすべてダイクティックの "he, she" (目付きで、あるいは他のジェスチャーで指し示す時用いる "he, she") を、その指示対象の聞こえる所で用いると失礼になることを示すものであるが、文脈指示の "he, she" (すでに会話にのぼっている人を指して用いる "he, she") の場合には複雑な現象が見られる。例えば、次の会話を参照されたい。

会話 A

(1) Mr. Thomas: Mrs. Johnson, this is David Smith.
(2) Mrs. Johnson: How do you do, Mr. Smith?
(3) Mr. Smith: How do you do, Mrs. Johnson?
(4) Mr. Thomas: Mr. Smith (*He) teaches at Belmont High School.
(5) Mrs. Johnson: Does Mr. Smith (??he) teach your children?[12]

(1) トーマス氏「ジョンソンさん、この方デイヴィッド・スミスさんです。」

(2)　ジョンソン夫人「はじめまして、スミスさん。」
(3)　スミス氏「はじめまして、ジョンソンさん。」
(4)　トーマス氏「スミスさんはベルモント高校の先生です。」
(5)　ジョンソン夫人「スミスさんはお宅のお子さんを教えていらっしゃるのですか。」

会話Aは、三人がお互いに“Mr., Mrs.”を用いて呼び合っていることから明らかなように、かなりフォーマルな会話である。(4)で“he”を用いると、スミス氏に対して大変失礼となる。これは、この“he”がダイクティックな“he”であるからである。(4)で“Mr. Smith”が用いられ、(5)で“he”が用いられた場合はどうか。この“he”は(4)の“Mr. Smith”を先行詞とする文脈指示の代名詞と考えられる。しかしこの場合にも、指示対象であるスミス氏に対して、やや礼儀を欠く表現となる。したがって(5)でも、“Mr. Smith”を用いるのが普通である。

文脈指示の三人称代名詞に関する上記の制約は多分に会話がフォーマルであることに依存している。次の会話で、メアリーはビルの奥さんで、ジェインは二人の親しい友人である。

会話 **B**

(1)　Bill: Mary doesn't believe that I am a good linguist.
(2)　Jane: Maybe she doesn't even believe that Noam Chomsky is a good linguist.
(3)　Bill: You're right.
(4)　Jane: Is there any linguist that she thinks is a good linguist?
(1)　ビル「メアリーは、僕が優秀な言語学者だと思っていないんだよ。」
(2)　ジェイン「きっとメアリーは、ノーム・チョムスキーだって優秀な言語学者だと思っていないんでしょ。」
(3)　ビル「その通りだよ。」

(4) ジェイン 「メアリーが優秀な言語学者だと思っている人、一人でもいるの？」

会話Bは、メアリーが同席した場所で行なわれてもメアリーに対して失礼にならない。これは“he, she”が文脈指示の代名詞として用いられる時の制約が、スピーチのレベル(フォーマルかインフォーマルか)と、話し手・指示対象間の社会的距離によって影響されることを表わしている。ただし、会話Bのようなインフォーマルな会話でも、もしビルとジェインがメアリーのことを“she”で呼び続ければ、メアリーを会話の場から疎外したこととなり、メアリーに対して失礼となるであろう。ジェインは、時々メアリーに直接話しかけて、メアリーを会話の場に引き込むとか、メアリーにほほえみかけながら“she”の代りに“Mary”を用いたりして、メアリーに疎外感を与えないよう努力するに違いない。

次の会話Cを参照されたい。

会話 C

(1) Bill: Mary, I want you to meet John Smith.

(2) Mary: Glad to meet you, John.

(3) John: Glad to meet you, Mary.

(4) Bill: John (*He) is the Vice President of a bank in Cambridge.

(5) Mary: I didn't know that you have a friend in banking business. Do you have a large account with him?

(1) ビル 「メアリー、ジョン・スミスを紹介します。」

(2) メアリー 「はじめまして、ジョン。」

(3) ジョン 「はじめまして、メアリー。」

(4) ビル 「ジョンはケンブリッジの銀行の副頭取です。」

(5)　メアリー「あなたに銀行家のおともだちがあるとは知らなかったわ。ジョンさんの銀行に大金でも預金してあるの?」

上の会話では、ビルとメアリー、ビルとジョンは親しい間柄であるが、メアリーとジョンは初対面である。メアリーとジョンのこのあいさつで、ファースト・ネームが用いられていることは、この会話がインフォーマルな雰囲気のもとで行なわれていることを示している。ビルが(4)で"he,she"を用いることができないのは、ダイクティックの"he,she"がインフォーマルな会話でも、指示対象の聞こえる所で用いられると失礼になることを示している。他方、メアリーが(5)で"him"を用いることができるのは、文脈指示の代名詞の使用が、インフォーマルな会話では、指示対象に対して失礼にならないことを表わしている。[13]

フォーマルな会話で、社会的に上位の人が聞こえる所で、文脈指示の"he,she"を用いて指してはいけないという制約は、代名詞化に関する構文法上の規則や、冗長を避ける「経済の原則」や、その他いろいろの要因とからみ合って、極めて複雑な言語事象を作り出している。例えば、会話Aの(4)で、トーマス氏が、

(4′)　Mr. Smith(*He) teaches at Belmont High School. He lives nextdoor to us.(スミスさんは、ベルモント高校の先生で、私たちの隣りに住んでいらっしゃいます。)

と続けて言う場合、第二文に"he"の代りに"Mr. Smith"を用いれば、冗長度が高過ぎて、極めて不自然な発話となる。もし"Mr. Smith"が実際に用いられているとすれば、第一文と第二文との間に非言語的中断(例えば、話し手であるトーマス氏が、パイプにたばこをつめて火をつけるというような動作)があったものと想像される。

一体いつ"he,she"の使用を避けなければならないか、現在のところ、明らかでない。話し手が交代するたびに、姓名を用い、一人の話し手の話の中でも、パラグラフを変えて書くべきような箇所では、指示対象の姓名を再導入して、敬意を表わすというのが基本的な原則であろうが、詳細は、将来の研究を待たねばならない。[14]

三　敬語表現と構文法

「はじめに」に述べたように、英語には、敬語表現専用の規則的な文法手段がない。したがって、英語の構文法と敬語表現の関連の記述は、孤立した断片的な観察の羅列に終らざるを得ない。本節では、その中でも比較的体系的に記述できる三現象——氏名列記の語順、依頼・助言の構文法、間接表現としての無人称構文——を論ずることにする。

1　氏名列記の語順

二人、あるいはそれ以上の姓名を"A, B and C"と列記する場合、筆頭の位置はもっとも顕著な位置として、特別な価値を与えられる。例えば、先行する会話がジョンに関するものであれば、当然"John"がリストの筆頭に現われることが期待される。[15]

(1)　Tom: Is John bright?

(2)　Martha: Well, among John, Mary and Jane, John is the brightest, but…

(1)　トム「ジョンは頭がいいの?」

(2)　マーサ「そうね、ジョン、メアリー、ジェインの三人の中では、ジョンが一番頭がいいけど……。」

マーサの発話の中の"among John, Mary and Jane"を"among Mary, John and Jane"に代えるとトムの質問にぴったり合致しない答えとなってしまう。[16] 同様、

John and a girl came to see me.

(ジョンとある女の子が会いに来た。)

は自然な文であるが、

A girl and John came to see me.

は極めて不自然な文である。これは、後者において、話し手が、名前を知らない、あるいは名前を出す必要がないと判断した女性をリストの筆頭の位置におき、話し手の話の焦点であるジョンを下位に置いたからであろう。また“John and his wife” とは言うが “*John's wife and he” あるいは、“his wife and John” とは言わないのも、同じ理由によるものと思われる。すなわち、ジョンの夫人を指すのに “John's (his) wife” という表現が使われているのは、話し手がジョンに焦点を置いて記述を行なっていることを表わす。“John and his wife” は、その焦点であるジョンがリストの筆頭におかれているから文法的である。他方 “*John's wife and he” は視点の中心のジョンがリストの下位におかれ、視点の中心でないジョンの妻がリストの筆頭におかれているので非文法的であると考えられる。[17]

さて、「リストの筆頭に一番重要な項目を置け」という規則は、聞き手に対する敬意、話し手自身の謙譲の規則と関係して来る。聞き手は常にリストの筆頭の位置を、話し手は、リストの最後の位置を与えられる。

(1) you and I (*I and you)
　　you and your mother (??your mother and you)
　　you and John (??John and you)

(2) John and I (*I and John)
　　my mother and I (??I and my mother)

「一人称代名詞はリストの末尾に置け」という規則はかなり構文法化され、

I and you are good friends.
(僕と君とは良い友達だ。)

とは絶対に言えないという人が多いが、中にはこの規則を習得せずに成長してしまった人もいる。この種の人たちの多くは、"I"と"me"の区別も習得せず、"Me and John are…"などと言う人たちである。アメリカの小学校では、"I and you"は間違いで"you and I"と言わなければならないと、厳しく教えるということである。

2 依頼・助言

依頼文・助言文に関する敬語表現の原則は、依頼・助言を間接化することであろう。最初に日本語の依頼文・助言文を調べて見よう。

(1) コノ本ヲ貸シテ下サイ。
(2) コノ本ヲ貸シテ下サイマセンカ。
(3) コノ本ヲ貸シテイタダケナイデショウカ。
(4) コノ本ヲ貸シテイタダケレバアリガタイノデスガ。

(1)は尊敬語「下サイ」が用いられているにもかかわらず、直接命令形を用いた表現である。(2)は、構文法上命令文ではなく、聞き手の意志の有無を尋ねる疑問文である。(3)は(2)と同じ疑問文であるが、聞き手が否定的返事をすることを予想した構文パターンとして、(2)よりも間接的な依頼表現である。さらに(4)は聞き手に直接的な反応(本を貸す、貸さない、あるいは承諾する、承諾しない)を迫らない条件法的構文パターンとして、(1)、(2)、(3)のどれよりも間接的な依頼表現である。依頼表現が間接的であればあるほど、丁寧の度合も増すことは、(1)～(4)を較べてみれば明らかであろう。

また聞き手に、助言をする場合も、同様のことが言える。

(5) ソウナサッタ方ガイイト思イマス。

(6) ソウナサッタ方ガイイノデハアリマセンカ。

(5)は「ナサッタ」という尊敬表現が使われているにもかかわらず、話し手が自分の直接的判断を聞き手に押しつけているという点で、やや押しつけがましい響きを持っている。他方(6)は、判断を聞き手にゆだねるという点で、(5)より間接的な助言である。(5)より(6)の方が丁寧な助言文と言える。

依頼、助言の丁寧体表現として間接的表現が用いられることは、言語一般に共通な現象と思われるが、英語もその例外ではない。次にいくつかの例をあげてみよう。

(1) Please lend me this book.

(2) Will you (please) lend me this book?

(3) cf. Won't you lend me this book?

(4) Would you (please) lend me this book?

(5) cf. Wouldn't you lend me this book?

(6) Can you lend me this book?

(7) cf. Can't you lend me this book?

(8) Can you, by any chance, lend me this book?

(9) Could you lend me this book?

(10) I wonder if you could lend me this book.

(1)はもっとも直接的な依頼文である。(2)は聞き手の意志の有無を問う質問形として、(1)よりも丁寧な依頼文である。(3)は、拒否されることを予想した時、あるいはすでに一度拒否された後に用いられる、しつこい、なじる気持の入った依頼形で、「この本を貸してくれたっていいでしょう」の意味となり、丁寧さを欠く。(4)は事実に反する条件法に

現われる仮定態“would”を用いることによって「もし仮りに私がお願いしたら」という仮りの条件設定のもとでの質問として、(2)よりもさらに間接的な依頼文であり、その丁寧度も高い。(5)は(3)と同じ理由でしつこい依頼文である。(6)は相手の意志を尋ねるのではなく、相手が本を貸し得る立場にあるか否かを尋ねる質問として、さらに間接度が高く、(1)よりも丁寧な依頼文である。[18] (7)〜(9)については、(2)〜(4)と同じ説明があてはまる。[19] (10)は相手に返答を迫らない構文パターンを用いることによって、さらに間接度を高めている。(1)〜(10)の中では、最も丁寧な依頼文である。

日本語では「コノ本ヲ貸シテイタダキタイ」よりも「コノ本ヲオ借リシタイ」の方が丁寧な表現である。これは、「貸ス」という動作の行動主として聞き手に直接の責任をおわせる代りに、「借リル」という動作の行動主として、話し手自身に責任を持たせる表現だからであろう。[20]「コノ本ヲ貸シテイタダケナイデショウカ」と「コノ本ヲオ借リデキナイデショウカ」の間にも、同様の差があるように思われる。

英語において、

(11) Can you lend me this book?

(12) Can I borrow this book?

の間の、丁寧さの度合には、日本語に見られるような差がないらしい。[21] 礼儀正しい年配の話し手は、(12)の方が丁寧な表現だと言うが、若い話し手たちは、(11)の方が丁寧な依頼文であると言う。これは、敬語法における間接表現の原則と、英語一般の、話し手よりも聞き手中心の原則の相互関係に由来する現象であると思われる。[22] (11)は、聞き手に lend という動作の行動主として責任を持たせるという意味で、(12)よりも間接度の薄い依頼文であるが、聞き手を主体性ある行動主として表面に出しているという点で、聞き手に権威を与えた表現ということができる。(11)、(12)の丁寧度について英語の話し手の判断が異なるのは、この二つの相反する原則の力関係が話者によって異なっているためではないかと考えられる。

聞き手に主体性を持たせることが、英語の丁寧体表現の一つの特徴であることは、次の文を見れば明らかであろう。

(13) Do you want to sit here?

客を招待した家の女主人が、テーブルのどこに客が坐るべきかを伝える時、よく使う表現である。これは、勿論「ここに坐りたいか、坐りたくないか」を尋ねる質問ではなく、「ここにお坐り下さい」という丁寧な命令文である。表面上、聞き手の希望を尊重した質問形であり、「ここにお坐りになりたいですか。もしお坐りになりたければどうぞ」の意を経て依頼文となる訳である。聞き手に主体性を持たせた表現である。

最後に、日本の英語教育では、助言を与える英語表現 "had better." が丁寧な表現だというように教えているらしいが、これは大変な誤りである。"had better." は、父親が子供にさとすような時に用いられるか、さもなくば威嚇表現として用いられるものであって、地位・年齢の下の者が上位の者に使ってはいけないものである。例えば親が子供に "You had better do this at once." と言えば、通常「これをすぐしなかったら承知しませんよ」という威嚇を表わし、意味上、命令形の "Do this at once." (これをすぐしなさい。) よりはるかに強い表現となる。教師が学生に用いる場合も、同様である。丁寧な助言としては、次のような表現が可能である。

(14) You should do this at once.
(15) I advise you to do this at once.
(16) I suggest that you do this at once.
(17) It would be better if you did this at once.
(18) Wouldn't it be better if you did this at once?
(19) Don't you think that you should do this at once?

(14)はあまり直接的な助言で、同位・下位の者に用いるのはいいが、上位の人に用いるには少し強過ぎるであろう。(15)

も、"advise" という語が話し手に権威があることを表わしているためか、目上の人に使うのには不適当である。⒃は、自分の意見は「示唆」に過ぎないという謙譲の気持を表わした表現で、⒁、⒂よりも丁寧である。⒅、⒆は、判断を聞き手にゆだねているという点で⒄より丁寧であるが、否定疑問形を用いて肯定の答えを予想しているという点で、やや、「押しつけがましい」感じがする。⒁、⒄の前に "I wonder if" をつけると、話し手の独り言のような感じになり、押しつけがましさもない丁寧な助言文となる。[23]

3　敬語表現としての無人称構文

聞き手、あるいは第三者の責任で行なったことに対して、話し手の不同意・非難を表わす場合、その効果を和らげるため、無人称構文を用いることがよくある。例えばパーティーで、メアリーがワイングラスを床に落して割ってしまったとする。ジョンがそれを見て、ガラスの破片を集めるためにほうきはないかと、その家の女主人に尋ねる場合に、もし、

(1)　Mary broke a wine glass.

と言えば、直接メアリーに責任をおわせる表現として、メアリーに対する思いやりのない表現となる。

(2)　Someone broke a wine glass.

の方が適当な表現であろう。さらに、

(3)　A wine glass broke.

という自発的表現を用いいれば、誰にも責任のない動作を表わすものとして、もっともメアリーに対して丁寧な表現となる。

同様に、

(4) You shouldn't forget this.

と聞き手に直接的忠告を与える代りに、

(5) One shouldn't forget this.

と言えば、人一般に関するいましめとなり、忠告の効果が和らげられる。また、

(6) We shouldn't forget this.

と言えば、同じ注意が話し手にもあてはまることを表わすことによって、話し手と聞き手の距離をなくする効果を持つ。(5)も(6)も間接的には、聞き手に対する忠告として、(4)と同じ意図をもって用いられる表現であるが、聞き手が、忠告・批判の直接対象となっていないという点で、(4)よりも聞き手に対して丁寧な表現である。

自発形の使用、無人称的な"someone, one"の使用と同じ効果を持つ文法パターンとして、無人称の受身形がある。例えば、学生が書いた研究レポートを教授が批判する状況を想定してみよう。なごやかな雰囲気のもとに議論が進んでいる間は、教授は、

(7) You should have discussed this problem at the beginning of the paper.

(この問題はレポートの冒頭で論じるべきだったね。)

のように、"you"を行動主体とする直接的批判文を用いてもかまわないであろう。しかし雰囲気が険悪になって来た場合、(7)のような表現を用いると、学生に対する批判が表面に出過ぎて、ますます議論が険悪化する恐れがある。このような場合、教授は、

(8) This problem should have been discussed at the beginning of the paper.

という無人称受身文を用いて、批判の度合を和らげることができる。このような状況設定のもとで、無人称受身形がどのような現われ方をするかについては、George Calhoun の、実例に基づいた、極めて興味深い研究がある。[24]

Calhoun の研究は、学生の研究レポートに関する教授・学生間の三五分間の議論の録音に現われた能動形・受身形の文型の分析である。この三五分間のうち、合計一五分間は、比較的なごやかに意見が交換されているが、残りの二〇分間は、険悪な雰囲気のうちに議論が戦わされている。Calhoun の分析によると、前者の間には受身形が六回(平均して二分半に一回)しか現われていないのに対して、後者の間には、二九回(平均して四二秒に一回)現われている。これは、険悪な雰囲気を和らげるため、教授も学生も、直接相手方を批判する文型(能動文)を避け、無人称構文を用いることによって、意見の相違・相手に対する批判の度合を和らげようと努力していることを示すものであると解釈できる。

録音されている議論の中には、無人称受身構文のみならず、他のさまざまな言語手段を使って、批判の度合を和らげる努力が行なわれているのが随所に見られる。例えば、教授と学生の次の応答を参照されたい。

Prof. X: This, uh, this is *your* formulation of that (=Ackoff's model), by the way. I have never seen a paper where he has actually literally written these out in the choice formulation. All right, I think that should be pointed out, or is there a paper where he——

Student Y: Yes, there is. It's referred to there, Jim.

〔意訳〕

教授「これはその理論(Ackoff の選択モデル)の、君自身の公式化だろう。僕は、Ackoff 教授が、選択モデルの公式化で、実際文字通り君の言う通りに書いたのを見たことがないよ。このことは君のレポートに断っておく必要がある。それとも Ackoff 教授が実際そう書いている論文が——」

学生「ありますよ。私のレポートにちゃんと参照してありますよ。」

教授は "this is *your* formulation" と言って、学生に、Ackoff が実際言っていないことを公式化した責任をおわせて

いるが、それと同時に"that should be pointed out"という無人称受身形を用いることによって、断り書きがないことに対する批難、断り書きをすべきであるという忠告の直接性を弱めている。他方学生は、"It's referred to there."という無人称受身形を用いて、教授に対する反論を和らげている。この場合"I referred to it there."と言えば、「(ばかなことを言わないでください。) ちゃんと私は、参照しておいたではありませんか。(先生はレポートを読まなかったんですか。)」という、自己を表面に出した、戦闘的な返事になってしまう。[25]

また、研究レポートが文献調べの結果の羅列に終っていて、体系化に欠けていることを指摘するところで、教授は

There's no organization that I can see to this that suggests a research project.

(このレポートには、研究プロジェクトを示唆するような体系化がどこにも見当らない。)

と言う。もちろん、教授の意図は、"You have not organized this…"(君はこのレポートに体系化を与えていない。)であるが、無人称構文"There's no organization…"を用いることによって、直接学生を批判することを避けている。

次の教授の発話も、丁寧語法研究上、大変興味深いものである。

You read a lot of stuff and you amalgamated it…it looks like sections of literature that you got into and you got frustrated with the choice model and you went to another set of literature so we dump the whole process. It didn't really get reflected in anything…[26]

〔意訳〕「君は沢山文献を読んでそれを総合しているが、調べた文献の箇条書きみたいだ。君は選択モデルに満足できず、全く別の文献に走り、最初の文献調べの結果をすべて投げ捨てている。その結果はこのレポートのどこにも現われていないじゃないか。」

Calhoun が述べているように、ここで重要なのは、学生の比較的ポジティヴな行動("you read a lot of stuff and you amalgamated it")を表わすには"you"を主語として用い、批判の対象となっているネガティヴな行動には、"you"を

用いていないことである。"We dump the whole process."(われわれは全プロセスを投げ捨てる。)は、もちろん "You dump the whole process." の意味である。また "It didn't get reflected in anything."(それは何にも反映されていない。)は、"You didn't reflect it in anything." の意味である。ここで教授が "you" を主語とした能動文を用いれば、学生に対する批難が強く表面に現われ過ぎる。(27)

上に引用した断片的な対訳を見ても明らかなように、英語においても日本語と同様——あるいは、英語には敬語特有の特別表現・特別文法パターンがないが故に日本語以上に——聞き手に対する敬意、思いやり、丁寧に対する考慮が払われている訳である。

むすび

著者は、本論文で、英語にも広い意味での敬語用法があることを示した。日本語の敬語法と同じく、英語の敬語法も、話し手の聞き手・第三者に対する複雑な人間関係と、話し手の意図する発話効果との極めて複雑な相関関係の上に成り立っている。英語の敬語表現の分析は、呼称詞を除いては、ほとんど何も手がつけられていないと言ってよい。今後の研究が待たれる。特に構文法に現われる敬語表現の研究は、社会言語学の観点から重要なものであるばかりでなく、問題の構文パターンが持っている機能的役割を解明するためにも重要であり、文法理論の観点からも、興味のある問題である。

日本語のように敬語意識が発達している国の英語教育が、英語の敬語法に関してほとんど何も教えようとしないのは、不思議である。英語の敬語表現の研究は、日本の英語教育のレベルの向上にも、欠かすことができないものと思われる。

(1) 本稿の執筆にあたって、データ、観察、分析、記述の各面につき、Joseph Monane と Tazuko Monane から数多くの有益な助言を受けた。ここにあらためて感謝の意を表したい。また Alan Campbell, Kazue Campbell, Ruth Stevens, 横山恒子、久野揚子からも多くの貴重な示唆を受けた。

(2) 鈴木孝夫「親族名称による英語の自己表現と呼称」(『慶応義塾大学言語文化研究紀要』一号、一九七〇年)。

(3) 英語では、特別な状況で、父親が息子を“my son, sonnie”と親族名称を用いて呼ぶことができる。これはあらたまった話をする時、真剣さを表わす表現であって、父親の役割を明確にするために用いられるものと思われる。

(4) 自称詞としての日本語の「お父サン、パパ」は子供がかなりの年齢になっても用いられるが、自称詞としての英語の“father, daddy, dad”は、幼児に限られ、子供が幼稚園くらいの年齢になれば、“I”に完全に移行する。日本語の自称詞「オジイサン、オバアサン」、英語の自称詞“grandpa, grandma”は、「オ父サン、オ母サン」、“father, dad, mother, mommy”よりも寿命が長く、孫が成年に達しても用いられるようである。この観察は Tazuko Monane による。T. Monane, “The Interplay of Language and Cultural Perceptions: Universals and Specifics” in Y. Kusanagi, Ed., Japanese Linguistics and Language Teaching, Department of East Asian Languages, University of Hawaii at Manoa, Honolulu, Hawaii, 1976, pp. 73–90. の八〇頁参照。

(5) フォーマルなタイプの教授は、長い期間学生を“Mr.—, Miss—”と呼び続ける。学生とのあいだに距離をおいた対称詞であって、丁寧な対称詞というよりは、地位の上下関係を保つために用いられることが多い。

(6) 社会的・年齢的に上位にある人に対しては丁寧な表現を用いなければならないという厳しいしつけをうけた学生の中には、教師に、ファースト・ネームを用いるようにすすめられても、“Professor X”, “Dr. X”を使い続ける人がある。このような状態が長く続き過ぎると、教師の方で疎外感を感じ、腹を立てて、“Please don't call me Professor Johnson.”(どうか「ジョンソン教授」と僕を呼ぶのはかんべんしてくれ。)と頼んだりする。

(7) 英語の呼称詞については、奥津敬一郎・村木正武「英語の敬語」(『敬語講座第八巻・世界の敬語』明治書院、一九七四年、一六三―一九〇頁)参照。

(8) 第二人称複数代名詞としては、この他にくだけた調子の“you folks”(君たち)、“you all”(君たち皆)、“you guys”(あんたたち)がある。“you folks”は、田舎の人たちの間で多く用いられ、“you all”は南部米語の表現である。“you guys”は、

元来親しい男の友達に対して用いられたものであるが、女性を含んだ人たちに対して用いられるようになり、最近ではさらに一般化して女性だけの人たちに対しても用いられ始めている。

(9) 極く限られた用法として、例えばアメリカ連邦政府の議会の討論で相手の議員に "you" を用いて直接質問する代りに、"Would the gentleman from Illinois care to clarify this point?([直訳]イリノイ州出身の紳士は、この点を説明して下さいませんか。)のように、"the gentleman from X" という表現を用いて三人称に対する質問の形式を用いる。

(10) 横山恒子の指摘による。

(11) Joseph Monane によれば、子供が母親のことを "she" と言うことに対して、親が特に厳しく注意し、子供が父親のことを "he" と言うことには、母親の場合ほど強い反応がないと言うことである。事実、著者が耳にした限り、「子供の時、"he, she" を用いて親・祖父母に叱られた」という体験談のほとんどは、母親に対する場合であった。

(12) "*He" はこの文脈で "he" を用いてはいけないこと、"??he" は、"*he" ほど悪くないがやはり不適当であることを示す。

(13) ダイクティックの代名詞、文脈指示の代名詞の別にかかわらず、指示対象が会話の場に居合わせない場合には、自由に "he, she" が用いられる。

(14) 英語を母国語とする人たち自体、三人称代名詞の使用に関して、指示対象に対して失礼ではなかったかと、常に不安に感じているということである。Alan Campbell の指摘による。

(15) Kuno, S., "Three Perspectives in the Functional Approach to Syntax", Functionalism, Chicago Linguistic Society, 1975, pp. 276–336. 参照。

(16) Kuno, S., op. cit., p. 237.

(17) Kuno, S., and E. Kaburaki, "Empathy and Syntax", Harvard Studies in Syntax and Semantics, Vol. 1, 1975, Department of Linguistics, Harvard University, pp. 1–73.

(18) 与えられた文の構文パターンが表わす意味でなく、それが間接的に表わす意味——例えば(6)が聞き手の能力に対する質問ではなく、依頼文として用いられ得ること——に関する研究は、プラグマティックスと言って、意味論の一部を形成している。

(19) (8)は "by any chance" を用いることによって、否定の解答を予期した質問になっているので、(6)よりも丁寧な依頼文で

ある。

(20) この違いは「貸シテイタダケナカッタ」と「オ借リデキナカッタ」にさらに明瞭に現われていると思われる。

(21) ⑿の"Can"を"May"に代えると、⑿の方が⑾より明らかに丁寧になる。これは、聞き手を、許可を与え得る権力を持った人と見做した表現であるからであろう。

(22) この原則は、"Can I *come* to see you?"(*Can I *go* to see you?)などに見られる。

(23) 助言文として"Why don't you do this?"(この本を読んでみたまえ。)に見られる"Why don't you——"パターンがある。これは、下位か同位の者にしか使えないパターンで、上位の者に対して使うのは失礼である。

(24) G. Calhoun, "The Function of the Passive", Busch Center, The Wharton School, University of Pennsylvania, 1976.

(25) 学生は、この文の末尾に"Jim"(教授のファースト・ネーム——この教授と学生はファースト・ネームで呼び合う間柄である)を用いて、教授の間違いを指摘しながら、親愛の情を表わそうと努力している。

(26) 引用部分は、テープレコーダーによる会話録音の忠実な筆記録からなので、書かれた文章と異なり、センテンス間の連結も悪く、名文とは程遠い。かえって、こういう生のデータに話し手の聞き手に対する態度の移り変りが率直に出て来るものと思われる。

(27) 中間の二文"you got frustrated…"と"you went to another set of literature…"にも聞き手に対する批判が含まれているが、教授は、この二文の後、学生に対する直接的批判が強くなり過ぎ始めたことを自覚して、次の文で、"we dump the whole process"と"you"の使用を避けたものと思われる。

〈執筆者紹介〉

南　不二男(みなみ　ふじお)　1927年生　広島大学総合科学部教授
辻村敏樹(つじむら　としき)　1921年生　早稲田大学文学部教授
春日和男(かすが　かずお)　1915年生　九州大学文学部教授
外山映次(とやま　えいじ)　1933年生　埼玉大学教育学部助教授
宇野義方(うの　よしかた)　1919年生　立教大学文学部教授
大石初太郎(おおいし　はつたろう)　1911年生　専修大学文学部教授
梅田博之(うめだ　ひろゆき)　1931年生　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授
輿水　優(こしみず　まさる)　1935年生　東京外国語大学外国語学部教授
久野　暲(くの　すすむ)　1933年生　ハーヴァード大学言語学部教授

岩波講座　日本語4　敬　語
第6回配本　(全12巻　別巻1)　¥2000

1977年5月13日　第1刷発行

発行所：〒101　東京都千代田区一ツ橋2-5-5　株式会社　岩波書店　電話 03-265-4111　振替 東京6-26240
印刷・精興社　製本・牧製本